





監修者まえがき

まえがき

謝辞

序論

トレーダーの計画

第1章 **ACD**システムを知る

オープニングレンジ

A点

C点

時間の要素

第2章 ピボット概念

ピボットレンジとは何か

日々のピボットレンジを算出する

ピボットレンジを使う

ピボットレンジ戦略

ピボットレンジを使ったトレード

狭いピボットレンジと窓を空けた日のピボットレンジ

重要な時間枠

3日間ローリングピボット

プラス日とマイナス日

長期のピボット

第3章 **ACD**とピボットレンジを組み合わせる

A点とピボットレンジ

ピボットレンジをブレイクしたAダウン

ピボットレンジ内の届かないA点

C点ピボット

遅い時間帯でのC点ピボット

ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値

信用できないトレード

**ACD**システムのダマシのトレード

まとめ

第4章 マクロ**ACD**

ロジカルトレーダーの中間試験

問題

解答

第5章 ピボット移動平均線

ピボット移動平均線へのダマシ

移動平均線のダイバージェンストレード

移動平均線ダイバージェンスのときにナンバーライン値を使って仕掛ける

幼稚園児でもできるトレード

第6章 進化したトレーダー

ローリングピボットレンジ  
モメンタム  
リバーサルトレード  
2方向スイングエリア  
トレンドリバーサルトレード  
頭に来てこれ以上我慢できないトレード  
トレンドの変化  
手巻き寿司  
アウトサイドリバーサル週  
1929年の暴落——ほぼ完璧なトレード  
正しい時間枠を選ぶ  
第7章 ACDシステム版「ウソのような本当の話」  
配管工のライザ  
良いニュースでの悪い反応  
期待に応えてくれないマーケット  
まったく見当がつかない  
トレーダーの弱点を探す  
現実を直視する  
初めての取引  
規律  
MBFの夏休みインターンプログラム  
リスクマネジャーの仕事  
センチメントのダイバージェンス  
ブラックマンデー  
大きなトレードと巨漢トレーダー  
道に迷ってみる  
ガートマンのルール  
恐怖と強欲  
ハウス側になる  
リスクの測定と観察  
絶対に起こらない  
次！  
金銭感覚を失うことについて  
ひづめのハリー  
第8章 トレーダーへのインタビュー  
ケーシー——間違ったらすぐ手仕舞い  
RN——システムを一から学ぶ  
スキャルパーのスピーディー  
リビ——ペナルティーボックスを避けるトレーダー  
バーノン——1日のスタンスを知る



<a href="#">ドーブ——ACDを組み込む</a>
<a href="#">グラニテ——フロア外のトレーダー</a>
<a href="#">付録</a>
<a href="#">用語解説</a>



# 監修者まえがき

本書はMBFクリアリング・コープ（MBF）の創始者にしてCEOであるマーク・B・フィッシャーの著した“The Logical Trader”の邦訳である。最初に結論を書いておくと、これは日本の個人投資家、特にこれからトレードを始めようとしている人にとって間違いなく最高の教科書である。この手放しの評価は最近めったに相場書を褒めなくなった私が言うのだから確かである。本書の原書は2002年に出版されているが、これほどの秀作が長い間翻訳されずに放置されていたとはわかには信じがたい。私たち日本のトレーダーにとっては邦訳が7年間も遅れたことによる機会損失は計り知れない。逆に言えば、原書を知る人にとっては絶対に翻訳してほしくなかった書籍のひとつである。本文のなかでも触れられているがMBFはNYMEXにおける最大手のFCMで、あのポール・チューダー・ジョーンズの主宰するチューダー・インベストメントの運用担当者を含め、数多くのトレーダーにとって、そこは優れた教育の場となってきた。そしてフィッシャーが彼らを教える際に用いたのが本書で紹介されているACDシステムである。

さて、ではACDシステムとは何であろうか？ それはオープニングレンジブレイクアウト（ORB）の派生形のことである。今でこそ、ORBは知る人も多くなったし、実際に日本の市場で使っている人も少なくない。だが、10年ほど前にパンローリングの翻訳書によって紹介されるまでは、その名が一般投資家の口の端に上ることはなかったし、したがって当時は日本の市場においてORBはその単純なバージョンでも最強のトレード手法であった。そしてその後の経緯はさらに興味深い。時間がたち、多くの人が日本の市場においてORBを用いてトレードを行うようになると、当然のことながらだんだんとそれは機能しなくなっていく。そのためほとんどの人はそれを使うことをやめてしまったのである。だが、私の友人の個人投資家（彼はこの手法の日本における始祖のひとりとも言える人物である）は、日本の市場で機能しなくなったからといってORBを捨てたりせず、代わりにORBが機能する市場を世界中探してトレードし続けたのである。もちろん彼の使っているトレード手法はORBではなかったが、こうして長年慣れ親しんだ手法に特化することで彼はわずか10年ほどで数十億円を稼いだ。

ここでの教訓は2つある。その1つめは、自分がトレードするマーケットを固定してあれこれと有効な手法がないかを探して回るのではなく、特定の枯れた手堅い手法に特化して、それが有効なマーケットを探しながらトレードを続けたほうがはるかに成功に近いということである。そして2つめは、ORBは個人投資家が一生付き合っていくに足る信頼できる手法であるということだ。つまりORBが機能する市場はいつでも必ずどこかに存在し、私たちはそこに行ってトレードすればよいだけのことなのだ。

冒頭に書いたとおり、本書はORBの基礎と応用に関する理想的な教科書である。特に初心者にとっては本書があれば、それ以外の相場書は全部捨ててしまってもよいのではないか？ 少なくとも本書を何度も読み込み、実践してORBを自分のものとするまでは、ほかの書籍を手にする必要はまったくないだろう。これを著したフィッシャーの努力と英断を称えたい。

最後に、翻訳に当たっては以下の方々に心から感謝の意を表したい。翻訳者の井田京子氏は正確な翻訳を実現してくださった。阿部達郎氏にはいつもながら丁寧な編集・校正を行っていただいた。また本書が発行される機会を得たのはパンローリング社社長の後藤康徳氏のおかげである。

2009年10月

長尾慎太郎

アイデアよりも人に投資することの大切さを教えてくれた祖父のサムに捧げる

# まえがき

ポール・チューダー・ジョーンズ

私がマーク・フィッシャーに初めて会ったのは1980年代の初めで、場所は当時彼がほとんどの時間を過ごしていたCOMEX（ニューヨーク商品取引所）の銀のビットでだった。あるとき、この取引所を時折訪れる顧客が上の階の友人を通して、大引けで銀を200枚買う注文を引き受けてくれるよう私に頼んできた。このときの注文は腹をすかしたライオンのおりに何日かぶりに肉の塊を投げ入れたのも同然だった。すぐに4～5人の「ローカルズ」（自己勘定で売買するトレーダー）が私を取り囲み、早口でまくし立ててきた。そのなかで私に唯一見えたのはFSHと書いてあるバッジだった（もしかしたらFISHだったかもしれない。彼は立会場で何千人ものトレーダーからフィッシュと呼ばれていた）。彼はいつものように私が何枚買うかを正確に、そして本能的に察知していた。20枚か30枚を除いて私が買い上がるまで待っていて、引け際の最高値を私に売ったのだ。後にも先にもマーク・フィッシャーほどビットブローカーの手持ちの注文をかぎつけるのがうまいトレーダーはいなかった。

本書を読めば、フィッシャーが普通の人の世界には存在しない何らかのエネルギー源から力を得ているということがすぐに分かるだろう。それは支配欲が強いという言葉ではとても言い表せないが、もしトレードを学びたくて本書を読む時間を割く気持ちがあるならば、彼が開発した素晴らしいシステムを惜しげもなく一般に公開しようという救世主のような行動はぜひとも利用すべきだろう。彼は、マーケットに対する独自のアプローチと素晴らしい利益を上げる可能性を作り出す手法を整然と系統立てて詳しく説明している。この方法はデイトレーダーから長期投資家まで、あらゆる時間枠に応用できる。リスク・リワードの観点から見て有利なトレードをすることは、トレードで利益を上げるための基本であり、実際にこの手法を取り入れた何百人ものトレーダーたちは成功を収めている。このことに加えて、かつて私の部下だった多くのフロアトレーダーたちが実際にフィッシャーの手法を使って大きな利益を上げてきたことを、私自身も直接目していることを書き添えておきたい。

フィッシャーのトレーダーとしての経験と彼のACDシステムは、トレーダーになりたいすべての人にとって成功するための貴重な道しるべになってくれるだろう。彼のトレード手法の中核をなすものは非常に厳格な規律であり、これは長年トレーダーをやってきた彼の特徴ともなっている。彼が本書を通して強調しているのは、トレーダーにとって最も重要な要素は間違ったときに撤退するポイントを見極めることである。もし本書でそのこと以外に何も学べなかったとしても、いつ手仕舞うべきかという教えるはトレーディングに伴う肉体的・精神的・金銭的な痛みを大いに和らげてくれるだろう。

フィッシャーはマーケットに対する理論的な手法を紹介すると同時に、彼の周りのトレーダーたちの破産や成功を描いたさまざまな面白いエピソードも紹介している。さらに、第7章「ACDシステム版『ウソのような本当の話』」では、トレーディングビットでの驚くべき実話も披露している。経験を積んだトレーダーならばこれらのエピソードに自分自身の弱点を重ね合わせ、初心者ならばプロの過ちから多くのことを学ぶことができるだろう。

トレードを始めたい人には、私がトレーディングのバイブルだと考える4冊の本を勧めている。

まずはエドウィン・ルフェーブによるジェシー・リバモアの自伝風小説である『欲望と幻想の市場——伝説の投機王リバモア』（東洋経済新報社）。

次はマギーとエドワーズの共著である『マーケットのテクニカル百科 入門編・実践編』（パンローリング）で、20世紀前半に書かれているが、この本の教えるは今でも有効だ。

3冊目のロバート・ブレクターとA・J・フロスト著『エリオット波動入門』（パンローリング）は古典と言える1冊である。

最後のジャック・シュワッガー著『マーケットの魔術師』（パンローリング）は優れたトレーダーのインタビュー集となっている。

『欲望と幻想の市場』はトレーディングと株価テープを読むときの感情の起伏を描き出した非常に面白い読み物になっている。『マーケットのテクニカル百科 入門編・実践編』と『エリオット波動入門』は優れたリスク・リワー

ド比率のトレードを仕掛けるための具体的かつ体系的な方法を紹介した本で、すべてのトレードを適切で思慮深く執行するための指針となってくれる。最後に『マーケットの魔術師』は素晴らしい読み物で、この本に登場するほぼすべてのトレーダーが述べているとおり、大金を儲けるためにはまず間違ったときに失う金額を少なくするべきだという教えを学んでほしい。

この4冊を紹介したのは、本書をトレード初心者にとって5冊目の必読書に加えようと思ったからだ。チューダーグループに入ってくる何百人ものトレーダーたちを見ていると、ほぼ全員が違う方法でマーケットにアプローチして利益を上げていることにいつも驚かされている。お金を儲ける方法は何十通り、いや何百通りもある。ただ、テクニックや方法は異なっているけど、みんな何らかの方法で非常に有利なリスク・リワード比率のトレードを仕掛けていることは共通している。そして本書もそのことを非常に単刀直入に述べている。本書には、マーケットで効果的なレバレッジを掛けて素晴らしいパフォーマンスを上げるための考え抜かれた体系的な手法が紹介されている。最も成功したフロアトレーダーが公開してくれた手法をありがたく参考にしないともったいない。フィッシャーと出会ってから20年がたつが、彼はどんなときでもどんな場面でも寛大で親切だった。このことも、彼が知り合いでも知り合いでない人にも与え続けてきたもうひとつの驚くべき貴重な贈り物と言ってよいだろう。ありがとう、マーク。

(チューダー・インベストメント・コープ会長兼最高執行責任者)

# 謝辞

本書の執筆を決めたとき、安易に考えていた。楽勝だ、2カ月もあればできるだろう。当時の私は、自分がこれからやろうとしていることをほとんど理解していなかった。

ジョー・テラノバの助けがなければ、本書の刊行が実現することはなかっただろう。原稿を執筆し、読み直し、書き直し、できるだけ多くのトレーダーにとって魅力のある本にするために、私と彼は数えきれないほどの時間を費やした。また、私にとって最高のインターンで、本書のためにチャートを作成してくれたセス・コーエンにも感謝したい。ただ、最初にこのプロジェクトを勧めた友人のマイク・ウォーラックには感謝すべきなのか、絞め殺すべきなのかよく分らない。

最後に、パトリシア・クリサフリにも特別な感謝を捧げたい。彼女はもともとCME（シカゴマーカンタイル取引所）やCBOT（シカゴ商品取引所）の連中との付き合い方は心得ていたが、ニューヨークのおかしな連中と一緒に仕事をするのはまったく別次元の問題だと執筆を始めた時点で警告してあった。本書のすべてのページには、彼女の忍耐と粘りがにじんでいる。

# 序論

Introduction



# トレーダーの計画

人生と同じように、トレーディングにも計画が必要である。このなかには、ミクロレベルのこと（トレードごとの戦略）だけでなく、マクロレベルのこと、つまりトレードする理由やどのように目標を達成するかということや（望む結果を出すための手段）、うまくいかなかったときにどうすればいいのかということも含まれている。私はトレーディングを始めて20年になるが、それと同じくらいの期間、トレーディングも教えている。これらの活動を通して、計画に沿ってトレードしている人が非常に少ないことと、ミクロレベルではトレードの規律を守れない人があまりにもたくさんいるということをいつも感じていた。彼らが天井だと思って売ってもマーケットはそのまま上げ続けたり、押し目だと思って買ったらそのまま下がってしまうことがよくあるし、リスクや投資資金や自分自身を管理できていない人もいる。しかし、トレード計画を持つということは、初心者にとっても経験を積んだプロにとっても、同じくらい重要なことである。

マクロレベルでは、人生で何がしたいのかをまったく考えていない人が多すぎる。これは、私の会社で夏休みに実施しているインターンプログラムでも毎回感じている。ちなみにこのプログラムは高校生と大学生だけでなく、意欲のある人なら経歴を問わず受け入れている。毎年25〜30人のインターンが参加するが、このなかにはハーバード大学やペンシルベニア大学ウォートン校をはじめとする名門大学出身者もいれば、高校を卒業していない人もいる。私はさまざまな生い立ちの人たちが一緒に学ぶのが大事だと考えているため、毎回貧しい層や労働者階級の生徒も入れるようにしている。このプログラムを開いているのには、利他的理由と利己的理由がある。私は昔、この世界に入るチャンスのある人にもらったため、そのお返しをしたいという気持ちもあるし、才能あるトレーダーを見つけて採用したいという気持ちもある。ちなみに、本書も同じ理由で執筆している。

夏のインターンプログラムを見るかぎり、トレーディングで成功するかどうかと学歴はほとんど関係ないように思う。私自身はペンシルベニア大学ウォートン校のMBA（経営学修士）を優秀な成績で修得しているが、そういうことを踏まえて言っている。むしろ、大切なのは計画を立てておくことである。思いどおりに計画が進めば問題はないが、もしそれがうまくいかなかったらその代わりにもなるような計画も立てておくのである。

優秀なトレーダーの特性のなかには、運動選手が競技場全体を見回す能力も含まれている。これについては後述するが、まずは本書の主題である計画について見ていこう。

本書は文字どおり、私のトレーダーとしての経験と長年にわたって私を成功に導いてくれた計画が基になっている。これまで私はこの手法を約4000人に教えてきた。このなかにはNYMEX（ニューヨーク商業取引所）のフロアトレーダーになった300〜500人も含まれている。ちなみに私自身もNYMEXでトレードし、私が経営するMBFクリアリング・コープもここで営業している（MBFはNYMEX最大の先物取次業者で、世界中でトレードされている原油取引の5分の1と、天然ガス先物の4分の1を取り扱っている。詳しくは当社のサイト <http://www.mbfcc.com/> 参照）。さらに、50人以上いる当社が雇用しているトレーダーもこの手法を学んでフロアでトレードしたり、上の階にある事務所でエネルギー株や個別銘柄、その他の商品をトレードしたりするときにこのシステムを使っている。つまり、この手法はすでに広い範囲で利用され、実践され、検証されている。

私が先物取次業者を作ったとき、当然のことながらまずは顧客が必要だった。しかし、清算手数料を他社よりも安く設定して勧誘することはしなかった。トレーダーの本当の優位性はトレードのやり方を熟知しておくことだということが分かっていたからだ。これは子供のころに見習いからスタートして以来、長い年月をかけて私が学んだことでもある。古い諺に「魚の捕り方を教えれば、一生食べていける」というのがあるが、私はこれを「トレードのやり方を教えれば、忠実な顧客が一生ついてくる」と言い換えたい。そういう理由からも本書が誕生した。本書には、私が使ったり教えたりしている手法だけでなく、その手法に含まれる教えが詰め込まれている。

私がトレードを教えた4000人のうち、約半分は居眠りしたりトレード自体にまったく興味を示さなかった。つまり、約2000人が真剣に講義を聞き、何かを学び取っていったことになる。そのなかで、私の手法を実際に取り入れたのは1000人程度だと思う。この1000人という数字に先生として私が落胆したかといえば、それは違う。この手法を取り入れた1000人のうち、約100人は毎年トレーディングで75万ドル以上の利益を上げており、彼らはわが社の素晴らしい

しい顧客基盤となっているからだ。

しかし、この数字は読者にとっても意味がある。このシステムが私にとってうまくいっただけでなく、私以外の多くの人たちがやってもうまくいったからだ。そして何よりも素晴らしいのは、この手法がフロアでのトレードにも、フロア以外の商品や株のトレードにも同じようにうまく機能したことだ。このシステムは、マーケットに適度なボラティリティと流動性があれば、ネットトレードでも、デイトレード用の貸しブースでも、フロアトレードでも使える。この手法を教え始めてから約15年がたつが、今までの結果から見てトレーダーとして成功する確率を大幅に高めることは間違いない。普通のトレーダーが成功する確率はせいぜい10〜15%だろうが、私が教えたトレーダーが成功する確率は40〜50%にも達している。成功する確率が約3倍にもなっているということだ。

ただ、これをうのみにしてはならない。本書には、この手法を使っている多くのトレーダーのエピソードや実例や逸話も紹介されている。それでもまだ信じられないなら、伝説のヘッジファンドマネジャーであるポール・チューダー・ジョーンズの下で働いた最初のフロアトレーダーたちにトレードのやり方を教えたのも私だということを覚えておいてほしい。

ACDシステムと名づけた私のトレード手法は魔法ではないし、実践するために高いソフトウェアを買う必要もない。これは論理的なシステムで、悪い言い方をすれば、バカでもやれる手法で、そういうものを目指して開発してきた。ACDシステムはどこでトレードすべきかのポイントを示してくれ（A点とC点は仕掛けで、B点とD点は手仕舞いのポイント）、ある価格を上回ったら買ったり、ある価格を下回れば空売りするなど、基準となる値を簡単に算出できる。このACDシステムを基礎に、ほかの指標を重ね合わせれば、一般的な価格とマーケット動向を基としたトレード計画を立てることができる（ACDシステムに関する解説と日々の値は専用のホームページ

<http://www.thelogicaltrader.net> を参照）。

さらに、ACDシステムはトレードの規律とリスク管理にも取り入れることができる。実際、このシステムは規律を順守してリスク管理と投資資金保持に利用した場合に最もうまく機能する。私は、投資資金の大きな増加やドローダウンがあっても、大きな勝ちトレードが1つ2つあれば相殺できるだろうといったたぐいのシステムは好きではない。負けトレードはできるだけ早く損切りし（私が「次！」と呼ぶ概念）、計画と目標を持って利を伸ばす必要がある。それにはACDシステムを使ってシグナルを確認すれば、最小限の下方リスクでどれくらい有利なトレードかが分かる。私はこれを「アクセルを踏むタイミングを知ること」と呼んでいる。もしシステムがすべてゴーサインを出していれば、アクセルを踏む。もし計画に反してトレードしてしまったときは（トレーダーならだれでもそういうときがある）、このシステムがアクセルからブレーキに踏み替える手助けをしてくれるかもしれない。愚かなトレードをしたときには、少なくとも増し玉をするようなバカなまねはやめてほしい。

もし上で述べたことが単純で論理的なものとして聞こえれば、このシステムの素晴らしさに出会ったあなた自身を褒めてあげてほしい。これは  $e=mc^2$  や量子物理学などといった複雑なものではないし、代数ですらない。ここで必要なのは算数程度の簡単なもので、それこそがこのシステムの魅力でもある。

ACDシステムの全体像として、逆三角形をイメージしてほしい。頂点は下にあって、それを支点として左右バランスをとっている。このポイントがACDシステムで、これがなければ全体が崩れてしまう。ほかの指標や手法はACDシステムの上に重ねて配置してあるが、基礎となるACDシステムがなければどれも使うことはできない。

本書ではそれ以外にも、トレーディングスタイルや手法に関係なくACDシステムと組み合わせて使える非常に重要な心理面の教えについても紹介していく。そのいくつかを挙げておこう。

- 基準点を持つこと
- ギャンブル理論
- エゴ（思い入れ）を捨てる
- 「次！」の概念
- 「痛みなくして得るものなし」が良くない理由
- 枚数や株数を最大にしてリスクを最小にする

- 良いニュースでの悪い反応
- 最も難しいトレードが最高のトレードになる理由

この手法を説明する前に、その由来について説明しておきたい。**ACD**システムは、もともと私がペンシルベニア大学ウォートン校で行っていた研究の一部だった。私は在学中もフルタイムのトレーダーとして、何とか学業と両立させていたが、2カ所に同時にいることはできないため代役を雇っていた。同級生にお金を払って出席できない授業のノートをとってもらっていたのだ。このときの契約は、もし私が最優秀で卒業できれば彼女を商品取引所のフロアに招待し、トレーディングのインターンとして取引所の会員権を貸与するというものだった。当時は2つの仕事をこなすため、毎日午後2時までトレードしたあと、すぐに列車でニューヨークからフィラデルフィアに移動し、夜は大学の授業に出て、そのあと夜中から翌朝にかけてニューヨークに戻るという強行軍を繰り返していた。

それが、私が立てた人生の計画だったのだ。もちろん取引所のピットにずっといることもできたが、文字どおり未成年の13歳から証券会社のランナーとして商品先物市場で働いていた私は（この話はあとで詳しく書く）、自分の人生計画に何らかの理由でトレーディングがうまくいかないときの備えも必要だと分かっていた。そこでウォートン校に進学し、繰り上げプログラムで早めにMBAを修得することにした。この資格があれば、投資銀行や取引所の上の階で営業している証券会社に勤めることもできる。トレーディングは自分の天職だと思っていたが、現実も直視しなければならない。必要なときに頼れる専門的な資格があれば、トレーディングに集中することもできると思ったのだ。

ウォートンではランダムウォーク理論や効率的市場など、マーケットを打ち負かすことはできないという理論を学んだ。実を言うと、母校（卒業後は客員講師として何度も訪れている）の恩師を尊敬しつつも、20代のトレーダーとしては、できればこれらの理論が間違いだということを証明したかった。マーケットで育ち、18歳から（祖父名義の口座を使って）定期的にトレードしてきた私は、マーケットはたとえランダムに見えても実は違うと思っていた。マーケットの動きには識別可能なパターンがあり、それを図表にして分析すれば指針として利用できると信じていたのだ。

12歳のとき隣に住む友だちの父親に頼み込んで商品取引所のランナーの仕事をもらってからずっと、私は相場に夢中だ。ウォール・ストリート・ジャーナル紙に掲載されているさまざまな銘柄の価格（始値、高値、安値、終値）など、マーケットの統計データは何年研究しても、日々発見があって興味は尽きない。そんな私には、これらの数字はマーケットがランダムに動くという考えを否定しているように思えてならなかった。自分の観察結果を証明するため、私は金融学の教授にマーケットタイミングモデルに関する研究論文の執筆を申し出た。目的は、商品の短期トレードで儲かる手法を考案することとした。この研究のために、私は大豆と銀（私はかつて商品取引所最大のブローカーで見習いをしていたことがあり、この会社はハント兄弟の仲介をしていた）と米短期国債の値動きを観察した。

このとき統計データを集めて数字をさまざまに処理した結果が、トレーディングモデル**ACD**システムの基礎となっている。このシステムを私は今でも使っているし、本書で紹介しようとしているのだ。読んでいて理解できない概念があれば、前に戻って読み返してほしい。本書は系統立てて構成されており、**ACD**システムから始まってその上にさまざまな概念を積み重ねていく構造になっている。

ただ、この手法だけではトレードの結果は向上しない。必要なのは規律と、それを守ってシグナルを実行したり、間違ったときは素早く損切りして、次に進むための固い意志であり、それにはまず自分のエゴ（思い入れ）について知っていなければならない。このときは、頭の良さや金融市場について知識をたくさん知っているかどうかは関係ないため、**ACD**システムを学ぶときはそれらはすべて忘れてよい。長年、夏休みにインターンに教えてきた経験から言えば、高学歴かどうかはトレードするときにはまったく意味がなく、一番重要なのは持って生まれた能力だと私は確信している。そして何よりも、次のことができないといけない。

- 情報収集
- 情報分析
- 判断

## ●判断結果の実行

私の知るかぎりで、これらのことを教えてくれる大学院はどこにもない。人はもともとこのような能力を持っているか持っていないか、また自分で伸ばすことができるかできないか、でしかない。できるだけ早くこれらのことを身につけ、規律を保つことができれば、トレーダーとして成功する確率は高まるだろう。

あとは、数字に強いことも助けになる。私はこの能力を「レジの計算力」と呼んでいる。近所のコンビニや総菜店でサンドイッチとジュースとクッキーを買うと、レジ係はちらっと見て「4ドル**26**セントです」などと言う。トレーダーも、このような計算ができると大いに助かるだろう。

ここでロブという男性のエピソードを紹介しよう。ロブはもともとアイスクリームを売っていた。「オクラホマミキサー」か何かやかましい曲を繰り返し流すアイスクリームを売るトラックの窓口にロブがいて、その周りには**40**人の子供たちが大声で注文を叫び、母親たちが財布からお金を取り出している光景を想像してほしい。ロブはこれをすべて難なくさばくことができるのだ。「コーンアイスが3つで3ドル**75**セント、棒アイス2本で1ドル**50**セント、コーンアイス2つとアイスクリームバー2つで5ドル」などと1日中やっていますが、注文を間違えたり、おつりが足りなかったりすることはない。計算が違うということ自体がないのだ。

ここからもう少し想像を膨らませて、トレーディングビットにいるロブの周りを大勢のトレーダーが取り囲み、動きの速いマーケットで買い気配や売り気配を叫んでいる様子を思い描くのはそう難しくないだろう。もしロブが生まれつき持っていた情報を吸収して暗算する能力が、先物トレーダーとして大成功を収める助けになったとしたらどうだろう。実はロブのモデルは実在するのだ。

フロアでもそれ以外の場所でもトレードするときはさまざまところから情報が飛び込んでくるが、これらをすべて精査し吸収する必要がある。そのためには、一度に**10**の異なったことを処理できなければならない。視野が狭くて一度にひとつのことにしか集中できなければ、マーケットの全体像をつかむことはできないからだ。

運動選手の多くがマーケットで良い成果を上げるのは、彼らが生まれつき競争心旺盛だからではなく、種目に関係なく競技全体を見る能力があるからだ。トレードするとき、彼らの多くはこの技術を生かしてマーケット全体を視野に入れることができるし、彼らの視野は広い。読者もトレードするときは、このような能力を持つか、あるいは伸ばす必要がある。

次は、同じ時期に教えていたある2人に関する私のお気に入りのエピソードを紹介しよう。あるとき私は、ハーバード・ロー・スクールを上位5位以内の成績で卒業した素晴らしい経歴の男性と、ネジやボルトといった工具の訪問販売をしていた男性を同時期に採用したことがある。訪問販売の男性は、妻が出産間近なのでもう少しましな仕事に就きたいと応募してきた。また、「トレードについての思い入れはまったくありません。自分が無知だということも分かっています。とにかく一生懸命がんばります」と断言した。

2人は一緒にトレーニングを始めたが、そのあとどうなったと思うだろうか。ハーバード大学卒業の男性は法律事務所に戻って、おそらく今では顧客から1時間**500**ドルの相談料を取っているのだろう。彼は優秀だったが、トレーダー向きではなかった。一方、訪問販売のセールスマンのほうは必死でトレーディングを学んだ。彼は夕方から夜にかけて週末に工具を売って、昼間はトレーディングをしていたが、今ではフロアトレーダーとして年収が7桁に達している。

ハーバード卒の男性は何でも知っているという自負があり、新たに学ぶことができなかった。一方、訪問販売のセールスマンは平均的な人だったが、強い働く意欲と動機を持っていて、成功したいという強い気持ちからプライドを捨ててスポンジのように学べることをすべて吸収していった。そして、最後に笑ったのは訪問販売のセールスマンのほうだった。

ACDシステムを学ぶときには、この訪問販売のセールスマンから得られた教訓を覚えておいてほしい。**ACD**システムの手法を使って成功するためには、この手法を理解して応用しなければならない。しかし、それと同じくらい自分自身を理解し、これまでの知識をひとまず忘れることも必要となる。何かを学ぶときもそうだが、ここでもエゴ（思い入れ）を捨てて前向きに取り組まなければならない。それを**ACD**システムを学んでトレードを始めるときに計画の

一部に組み込んだり、トレードに応用したりしてほしい。自分が何かを達成したくて、どのようにそれを達成するつもりで、うまくいったりいかなかったりしたときはどうしたいのかを知っておいてほしい。計画を立ててそれを守れば、トレーディングも人生もうまくいく。

# 第1章 ACDシステムを知る

## Know Your ACDs

年に一度の健康診断を受けると、医者は血圧を測ったり心臓と肺の音を聞いたり採血したりしたうえで、すべてのデータに基づいて健康状態を判断する。しかし、もし患者が診察台の上で急死してしまったらどうだろう。患者には脈がない。そうなると、コレステロール値など関係ない。脈がないということは.....生きていないからだ。

私は、ACDシステムの手法を説明するときにもいつもこの話をする。トレーディングをするときは、ピボットや移動平均線などさまざまな要素を考慮する。しかし、その根底には患者の脈のように、これがなければほかのことは意味がなくなるようなものがある。トレーディングにおいてこの脈に当たるのがACDシステムというものだと思ってほしい。65の指標のうち64がトレードにゴーサインを出していたとしても、もし残りの1つの指標のACDシステムがゴーサインを出していなかったら、そのトレードは見送るべきだ。

しかし、このACDシステムにはどのような意味があるのだろうか。ACDシステムとは、私が自分のトレーディング手法に付けた名前で、適度なボラティリティと流動性があれば、商品・株式・通貨などあらゆる銘柄に応用できる。

ACDシステムの大前提となるのは、ある特定の価格ポイントをチャートに書き込むことである。詳細についてはオープニングレンジのところで説明する。序論に書いたように、私はもう20年近くACDシステムを使ってトレードしてきたし、今でも使っている。私がこの15年間にこのシステムを教えてきた何千人に上るトレーダーも、これをそれぞれのトレーディングスタイルやパラメーターとして使っている。つまりACDシステムは私だけでなく、ほかの多くのプロの下でも確固たる実績を残しているのだ。読者も現在使っているトレーディングシステムにACDシステムを取り入れれば、読者のトレード戦略の筋書きを描いたり、執行したりする助けになるだろう。

ただ先に進む前に、トレーディングとはそもそもリスクの高いことなので、すべての人に適したものではないということを書いておかなければならない。株やデリバティブに投資すれば、ときには最初に投資した額以上の損失を被ることもある。

本書の目的はトレーディングを勧めるものではなく、私や私が教えた人たちが使っている手法を紹介することにある。本書を読むときは筆記用具を準備しておく、トレードの実例がより理解できると思う。トレードの初心者でも経験者でも、ACDシステムは読者自身と読者の持っているトレードのやり方にとって必ずや得るものがあるだろう。

# オープニングレンジ

ACDシステムはオープニングレンジという概念から始まる。これは、株式や商品・通貨・債券・金融デリバティブ商品などの取引開始時間からある一定の時間の値動きのことである。株の場合は、通常取引開始から**20分間のレンジ**を指す。もしXという銘柄の最初の**20分間の株価が30.00～30.75ドル**で推移したのなら、この値幅がその日の**ACDシステムで使う銘柄Xのオープニングレンジ**となる。ただ、寄り付きで値が付かない場合は、値が付いてから最初の**20分間**がオープニングレンジになる。

商品先物の場合は、トレーダーがトレードで使っている時間枠によってオープニングレンジが**5～30分**の範囲で変わる。ただ商品のなかで各限月の取引が当限月から期先限月へと順次開始される制度になっている場合は、該当限月の取引が開始されてから次の限月の取引が開始されるまでの時間を私はオープニングレンジとして用いている。またその他の例としては、ある特定の銘柄をトレードしている短期トレーダーの場合はオープニングレンジを5分間にしたり（特にビットトレーダーの場合）、取引所の上の階でデイトレードをしているような場合はオープニングレンジを**10～15分**にしたり、ポジションを長めに保有するトレーダーの場合はもう少し長くして**20～30分**でもよい（付録に現在のオープニングレンジのリストを掲載してある）。重要なことはオープニングレンジの長さを決め、それを一貫して使い続けることである。

オープニングレンジでもうひとつ考えるべき重要な点としては、対象商品のマザーマーケットを確認しておくことである。例えば、天然ガスをトレードするならマザーマーケットは**NYMEX**（ニューヨーク商業取引所）で、そこでの寄り付きを採用する。しかし、日本円のトレードならアメリカの通貨市場ではなく日本市場の寄り付きを使うべきだし、北海ブレント原油など外国の銘柄にも同じことが言える。株式なら、例えばイギリス企業であるボーダフォン（VOD）のオープニングレンジは、たとえこの銘柄がアメリカでトレードされていてもロンドン市場での寄り付きを使うべきで、これはニューヨーク時間の午前3時から3時20分くらいに分かる。外国の株式をアメリカで上場している**ADR**（米国預託証券）も同じことで、真のオープニングレンジはそれぞれのマザーマーケットの株価を使う。

私はこのことを、何年も前に**ACDシステム**をある外国通貨と債券に適用しようとして失敗したときに学んだ。最初はなぜシステムがうまくいかないのか分からなかったが、しばらくしてマザーマーケットがアメリカではないことに気がついた。本来は、これらの商品や通貨や債券が発行されている国の市場の寄り付きを見なければいけなかったのだ。

オープニングレンジが決まったら、この価格レンジはトレード戦略の重要な基準となる。理由を説明しよう。

マーケットの動きはランダムでまったく予想できないとするランダムウォーク理論では、オープニングレンジとほかの時間帯の価格レンジとはその重要性に差がないことになる。本当だろうか。例えば、原油のトレードは東部標準時間の**9時45分**に始まり、**15時10分**に終わる。この取引時間を**10分**ずつに分けていくと**32個の10分間の時間枠**ができる（5分余り）。つまり、各**10分間の時間枠**はマーケット動向のほぼ**32分の1**を担っていることになる。

ランダムウォーク理論に従えば、オープニングレンジ（寄り付きから**10分**）は**32分の1**の確率で高値であり、**32分の1**の確率で安値である。つまり、オープニングレンジが高値か安値になるのは**16分の1**の確率ということになる。

それでは、もしボラティリティの高いマーケット（動きはあるが必ずしもトレンドがあるわけではない）では、オープニングレンジが高値か安値になる確率が**17～23%**だったとしたらどうだろうか。これは興味深い。この結果は、約5分の1の確率でオープニングレンジがその日の高値か安値になるということで、これは十分に統計的優位と呼べる。だれにでも分かるように言えば、オープニングレンジは取引時間に**32個**ある時間枠の**1つ**にすぎないのではなく、ほかの時間枠よりも重要性が高いということである。

別の例も見てみよう。今度は1日の取引時間を**65個の5分間の時間枠**に分けてみる。ランダムウォーク理論によれば、寄り付きから5分間のレンジは**65分の1**の確率で高値になり、**65分の1**の確率で安値になる。高値か安値になる確率は**65分の2**（約3%）となる。しかし、ボラティリティの高いマーケットで実際に最初の5分間が高値か安値になる確率は、3%ではなく**15～18%**にもなっている。そしてこれも統計的優位性がある。トレーダーとしては、**15%**の確率で高値か安値になると分かっていたら、それはぜひ心に刻んでおきたいことだろう。いいだろうか。

さらに、ほかの5分間棒や10分間棒を見ていくと、寄り付きのレンジで付けた安値や高値を同じ日に再び付けることはほとんどない。つまりオープニングレンジが確定すれば、マーケットはごくまれにしかそのレンジには戻ってこないという意味で、その確率はランダムウォーク理論で予想されるよりもはるかに低い。そこで、ACDシステムの最初の概念として次のようなことが言える。

オープニングレンジは取引時間のなかでも統計的優位性がある時間帯で、ボラティリティが高い場合は約**20%の確率**でその日の高値か安値をオープニングレンジで付ける。

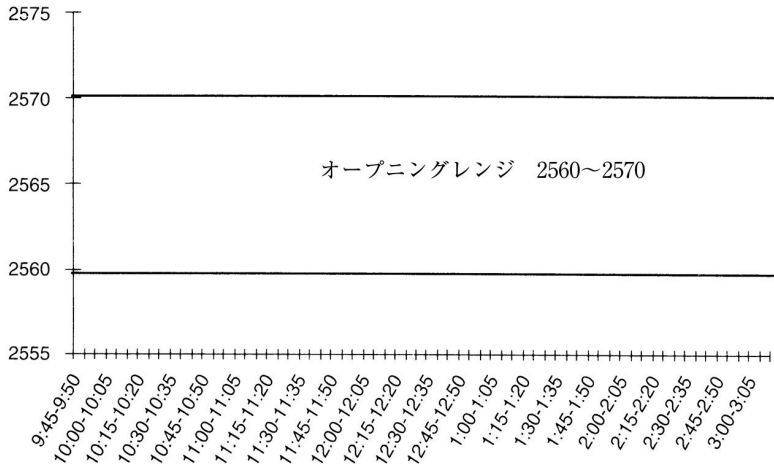
このことで何ができるのだろうか。私は、トレーダーとしてもマーケットの研究者としても、オープニングレンジは統計的優位性があると確信している。そこで、オープニングレンジをブレイクすれば、その後もマーケットはその方向に動くという考えの下、ブレイクアウト手法を使ったトレーディングモデルを構築した。そのブレイクアウトは、オープニングレンジを利用して時間と価格のフィルターにかけて判別する。本章でこれから学んでいくように、オープニングレンジを決めると、買ったり売ったりするためのA点をはじめ、B点、C点、D点が決まる。まず、最初のポイントとなるA点を見ていこう。



# A点

ここでは練習のため、原油のデイトレードをしていることにしよう。ピットトレーダーとして、オープニングレンジは取引開始後5分間と決めた。ある日の原油のオープニングレンジである25.60～25.70ドルをチャートに書き込んでみよう(図1.1)。

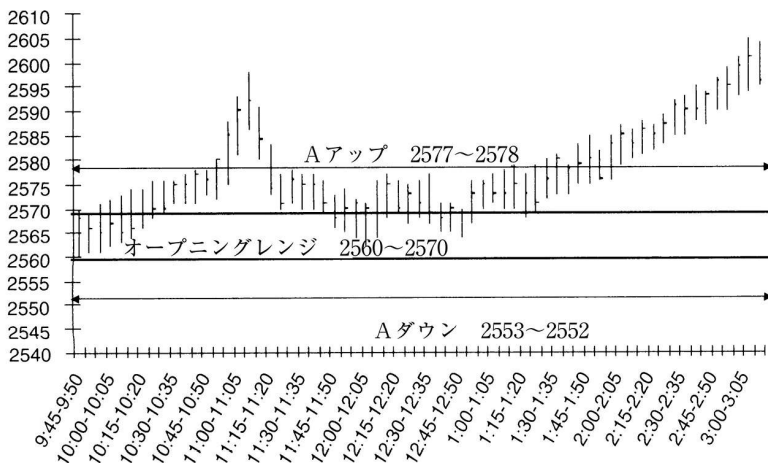
図1.1 原油のオープニングレンジ



買ったり、売ったりするためのA点は、いくつかの変数を基にしてオープニングレンジの上と下に設定する。変数は当社独自の研究から算定しており、特定の株や商品や金融デリバティブ商品のボラティリティなどに基づいて設定している(付録にはいくつかの商品や株の現在のAの値とオープニングレンジの時間枠の表を掲載してある)。

原油の場合、A点をオープニングレンジの7～8ティック上と下に描くと、図1.2のようになる。

図1.2 A点を描く



もしマーケットがすぐにオープニングレンジを上抜いて25.77～25.78ドルに達し、それから一定時間(オープニングレンジの時間枠の半分の時間)その水準にあれば、A アップが決定したことになる。つまり、もし価格が25.77～25.78ドルまで上がってから2分半(オープニングレンジが5分なのでその半分)の間、その水準が維持されれば、25.77～25.78ドルよりも上で買う。

反対に、もしマーケットがすぐにオープニングレンジを下抜いて25.53～25.52ドルに達し、その水準に2分半の間とどまれば、A ダウンが決定したことになる。この場合は、25.53～25.52ドルよりも下で売る。

A アップやA ダウンとは、オープニングレンジの上や下の一定ティック分離れた価格ポイントのことで、そこにオープニングレンジの時間枠の半分の時間とどまって初めて決定されるものである。

ただ、1日のうちにA アップとA ダウンの両方が成立することがないということは覚えておいてほしい。A 点の水準は、マーケットがオープニングレンジを上回るか下回ると決定される。もし価格が25.77ドルに達してA アップが一度決まれば、たとえそのあと反転してオープニングレンジを下回ったとしてもA ダウンの決定とはならない。

A 点は1日に1つしか決定されない。つまり、もしA アップが決定すれば、その日にA ダウンはなく、もしA ダウンが決定すれば、その日にA アップはない。

さまざまな価格の基準点をチャートに書き込みながらも、もし間違っていたらどこで損切りをするかは常に考えておかなければならない。会社を始めるとき、どのくらいの資本を投資すべきで、どのくらいのリスクにさらされるのかを事前に知っておきたいが、それはトレードでも同じだ。仕掛けたあとでマーケットが逆行したときの損切りポイントと、どれくらいの損失なら許容できるのかを決めておく必要がある。そこで登場するのがB 点だ。A 点（A アップやA ダウン）が決定したら、逆行した場合に備えて損切りポイントのB 点も決定しておく。その撤退のB の水準とは、オープニングレンジの上限と下限になる。

前の例で言い換えれば、25.77～25.78ドルよりも高いところで買ったあと、すぐにマーケットが反転して下げたら、損切りポイントはオープニングレンジの下限である25.60ドルとなる。反対に、25.53～25.52ドルよりも下で売ったあとの損切りポイントは、オープニングレンジの上限である25.70ドルとなる。

ただ、トレードを損切りするときに希望の価格で執行されないことがあることは覚えておいてほしい。スリッページ（希望価格と執行価格の差）が生じるのはマーケットの現実であり、そのときのマーケットの状態によつては小さくすむこともあれば、かなり大きくなることもある。

また、ACDシステムを学ぶときはこれらが対称になっていることも覚えておいてほしい。買いルールと売りルールはちょうど正反対になっている。

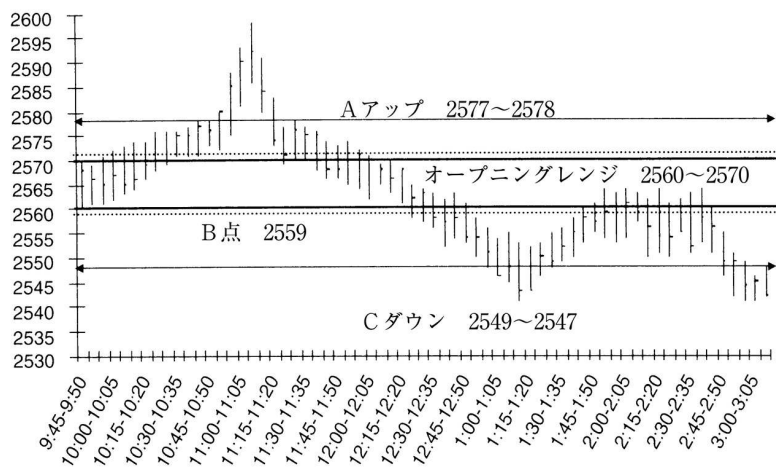
もしマーケットが上げてA の目標値に達したときは、「A アップを付けた」と言う。前の例では原油価格が25.77～25.78ドルを超えて2分半以上が経過したため25.79ドルで買い、26.10ドルになるまで保有して利食いした。もしそのあとマーケットが下げてオープニングレンジの下限である25.60ドルを下回ったらどうすればよいのだろう。答えは、「何もしない」だ。

この場合は、一度はA アップを付けたが今はオープニングレンジのB 点（方針は中立）を下回っている。こうなったときの次のステップは、次のACDシグナルが出るのを待つ。このケースでは、C 点がこれに当たる。

# C点

A点が決まると、次に有望な仕掛けポイントはC点になる。C点もA点と同様、オープニングレンジから一定のティック数だけ上と下に離れたところになる。原油の場合、A点はマーケットの7〜8ティック上と下だったのに対し、C点は11〜13ティック上と下になる（株や商品のC点を算出するための現在の値も付録のリスト参照）。これから見ていけば分かるが、商品の場合はA点とC点を算出する値幅が異なっているが、株の場合は同じ値を使う。ここで図1.3を見てみよう。

図1.3 C点

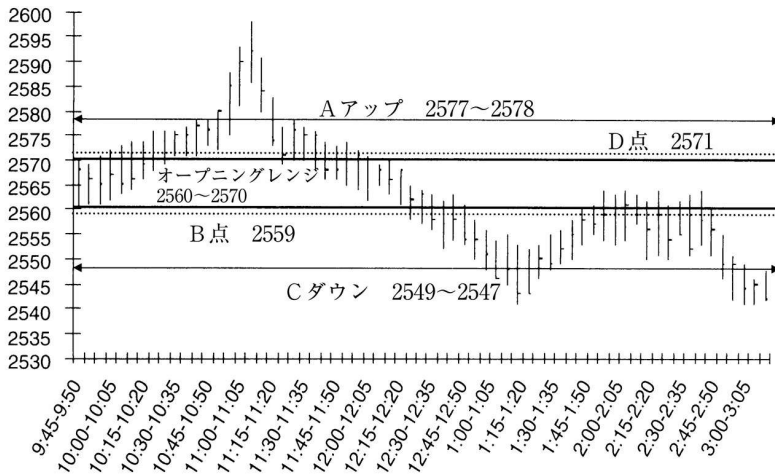


この例で、もし価格がCダウンまで下がってしまうとどうなるのだろうか。C点はトレーダーの方針が強気から弱気（またはその逆）に変わる転換点とも言える。もしマーケットが25.49〜25.47ドルまで下げてその水準に2分半以上（オープニングレンジの時間枠の半分）どとまれば、そこで売る。

C点はトレーダーの方針が強気から弱気（またはその逆）に変わる転換点である。

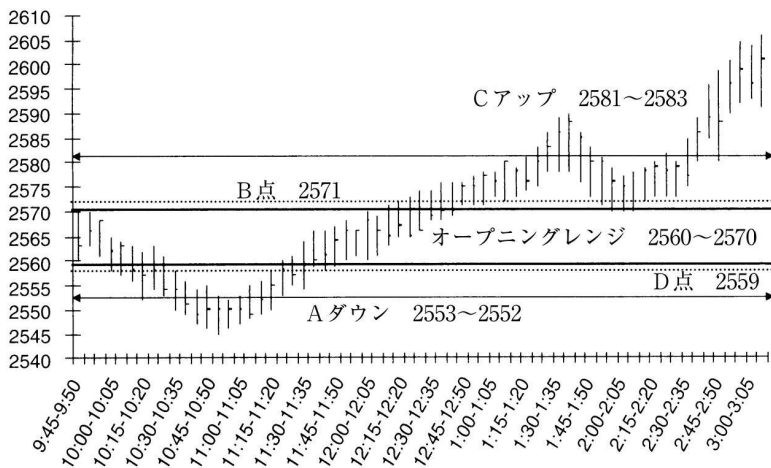
C点よりも下で売ったあとは、間違ったときにどこで損切りするかを考えておく必要がある。A点と同様、C点の損切りポイントもオープニングレンジと関係がある。もしCダウンを付けた場合の損切りポイント（D点と呼ぶ）はオープニングレンジの上限よりも1ティック上に置く（図1.4）。

図1.4 D点



次に、正反対の場合であるAダウンとCアップも図1.5に示しておく（Cアップを付けたときのD点はオープニングレンジの下限の1ティック下になる）。

図1.5 対称的なACDシステム



## 時間の要素

Aアップ、Aダウン、Cアップ、Cダウンをチャートに書き込むときには、時間の要素も考慮しなければならない。価格ばかりに集中して時間に十分な注意を払わないトレーダーが多すぎるのだ。言い換えれば、トレードのためにチャートを描くときは特定の価格水準に達したかどうかだけでなく、そこにどのくらいとどまっていたかも見ておかなければならない。知り合いのトレーダーのほとんどは、価格は見るが時間は見ないでトレードしている。ポジションを建ててから**20～30分**間動きがなければ手仕舞うと言うトレーダーに出会ったことがあるだろうか。いたとしても非常に少ないだろう。しかし、私は時間こそトレーディングにおける最も重要な要素だと思っている。一定の時間内に想定したとおりに進まなければ、次のトレードに移るべきだろう。

トレーディングにおいては、価格よりも時間のほうが実際は大事である。

それでは、どのようにして時間をトレードに組み込めばよいのだろうか。それは簡単である。あることが起こることを想定して、時間のパラメーターを決めればよい。パラメーターの最小値とはオープニングレンジの半分の時間のことで、ここでは少なくともそれだけの時間はあるレベルで値動きが推移しなければ、そのシグナルは有効にはならない。最大値とはオープニングレンジの長さのことで、この時間内にマーケットが期待した動きをしなかったときは手仕舞う。後者の時間枠については、少し先で述べることにする。今はマーケットが特定の価格ポイントに達したのに、そこに十分とどまっていなかった場合について考えてみよう。

今回はAアップが**62.125**で、マーケットはこの価格に達したあとすぐに下げたでしょう。実は、これは目標に達したとは言えない。目標値に達しても、そこに一定時間（オープニングレンジで採用した時間枠の半分）とどまっていなければ、そのシグナルは有効ではないからだ。もう少し説明しよう。もしデイトレーダーでオープニングレンジを5分に設定していれば、仕掛けるためには目標価格に達してから2分半の間、その水準を維持しなければならない。つまり、前の例では**62.125**レベルに2分半とどまっていなければ（つまりタッチしただけですぐに下げた場合）、Aアップを付けたことにはならない。

ここで、これまでの話をよく理解できているかテストしてみよう。もしAアップが決定されなければ、Aダウンはどうなるのだろうか。

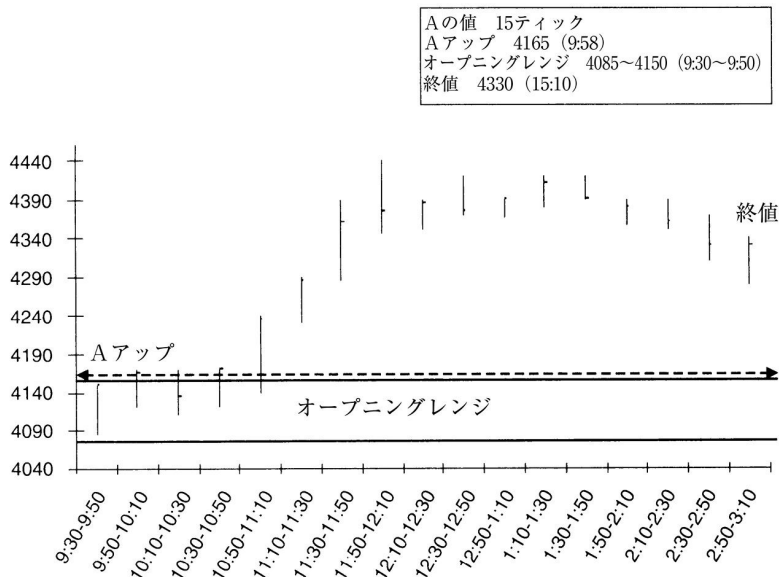
答えは、まだ候補として残っており、付ける可能性がある。Aアップはまだ付いていないが、あとで付けるかもしれないし、このまま下げ続けてAダウンを付けるかもしれない。この時点では、AアップもAダウンも付ける可能性があるのだ。繰り返しになるが、仕掛ける前にお膳立てについてよく見ておかなければならない。

次は、1日から数日しかポジションを持たない短期トレーダーの場合を考えてみよう。オープニングレンジは**20分**がよいだろう。マーケットはオープニングレンジよりも下げてAダウンを付けた。Aダウンが有効になるためにはどれくらい待つかわえているだろうか。もちろん**10分**間だ。

仮にマーケットが急上昇してオープニングレンジを上抜き、C点に達したでしょう（C点は必ずA点と反対側に位置している。AアップならC点は下方向、AダウンならC点は上方向にある）。

このとき、価格がC点よりも上にどれくらいとどまっていれば有効になるだろうか。やはり、これも**10分**である。先に進む前に、これまで説明したA点とC点の原則を使ったトレード戦略をいくつか見ておこう。今回の例は**2001年6月12日**における天然ガス先物7月限で、図1.6が示すとおりオープニングレンジは**20分**で**4.085～4.150**になった。天然ガス先物のAの値は**15**ティックなので、Aアップは**4.165**となる。図1.6の20分足のチャートを見ると、この日は4本目の足でAアップを付け、それ以降は一度もオープニングレンジまで下げることなく、はるか上の**4.330**で引けた。

図1.6 良いAアップ (天然ガス7月限——2001年6月12日)



このシステムは対称なので、上方で機能することは下方でも機能する。

図1.7の例は2001年6月27日のガソリン7月限で、20分間に設定したオープニングレンジは0.7440~0.7580になった。Aの値は25ティックである。チャートが示すとおり、マーケットはすぐに下げて2本目の20分足でAダウンを付けた。そしてそれ以降一度もオープニングレンジに戻ることもなく、最後は急落して0.7065で引けた。

図1.7 良いAダウン (ガソリン7月限——2001年6月27日)

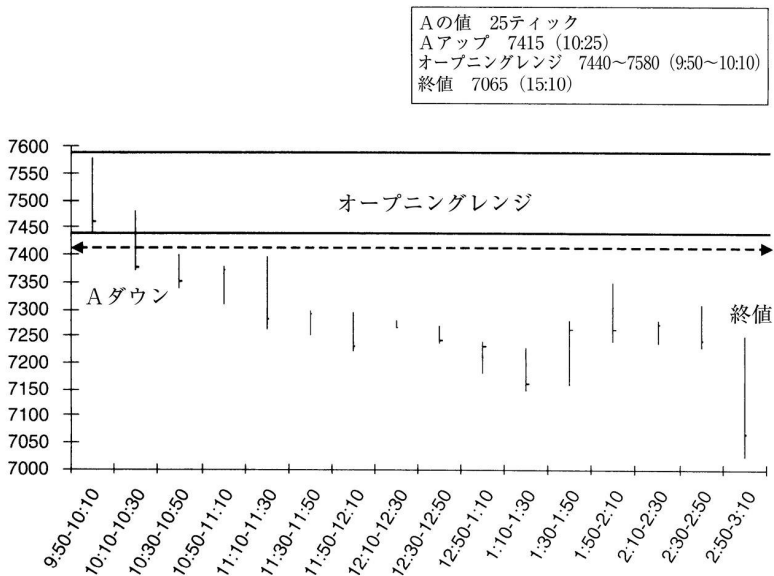
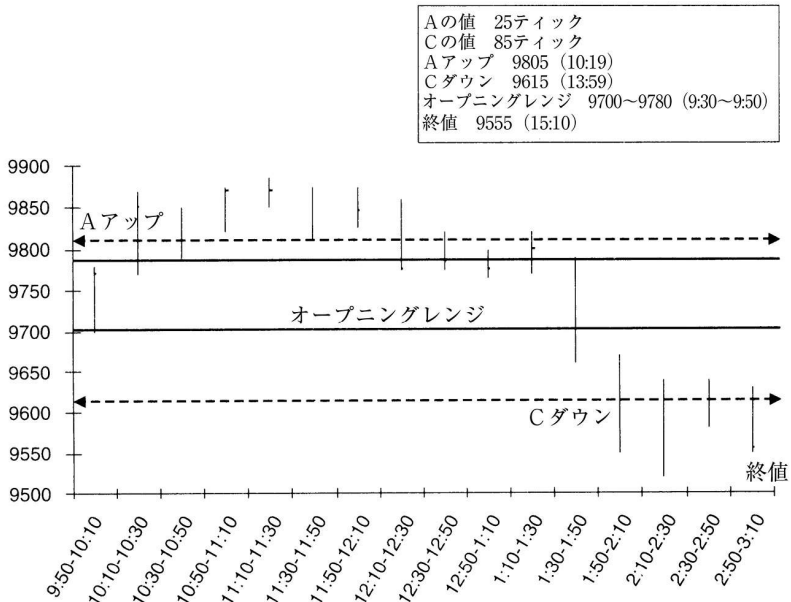


図1.6と図1.7では、ほぼ一方方向に動いた日のAアップとAダウンを見た。次はA点とC点の両方を考えなければならない場合を見ていこう。おさらいすると、いったんA点（AアップやAダウン）を付けたマーケットが反転すれ

ば、次の目標は方針が強気から弱気、または弱気から強気に変わるC点となる。

図1.8の例は、2001年5月29日のガソリン先物で、この日のオープニングレンジは0.9700～0.9780だった。Aの値は25ティックである。マーケットは寄り付きから上げ、2本目の20分足のときに0.9805でAアップを付けた。そのあと価格は上昇して5本目の足で高値を付けたあと下げに転じ、結局オープニングレンジを下回った。ただ、一度Aアップを付ければ、そのあとオープニングレンジを下回ってもすぐに売るわけではなく、次の目標であるC点が付くまで方針は中立としておく。

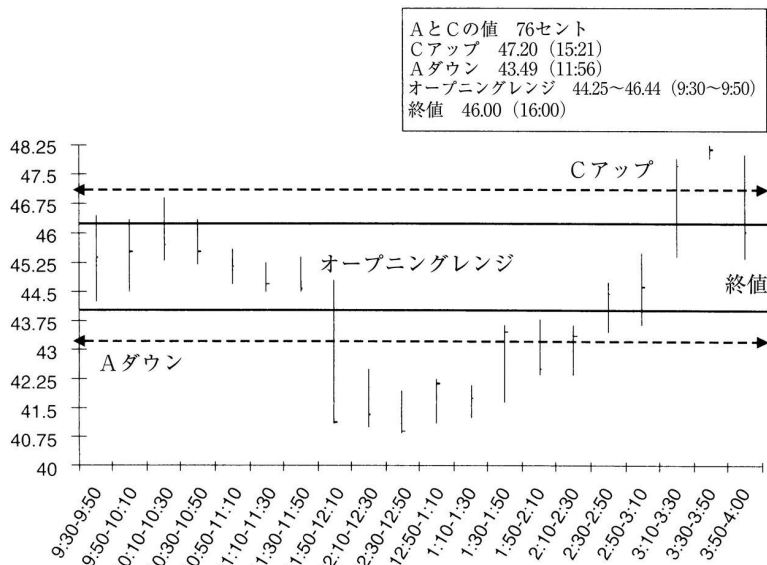
図1.8 良いCダウン（ガソリン7月限——2001年5月29日）



このマーケットのCの値は85ティックなので、オープニングレンジの下限から85ティック下の0.9615がCダウンになる。この水準で10分間（オープニングレンジの時間枠の半分）とどまれば、売りを仕掛けることができる。実際には価格はさらに下げ、0.9500手前で少し戻したが、終値はC点よりも下の0.9555だった。

次はこれと対称的なシナリオで、Aダウンを付けてから上昇に転じてCアップを付けている例である。図1.9は2001年3月1日のブロードコム（BRCM）の株価を示している（前述のとおりACDシステムは適度なボラティリティと流動性があれば株にも商品にも使える）。

図1.9 良いCアップ (BRCM—2001年3月1日)



この株もほかの株と同様、Aの値とCの値が同じで、ブロードコムの場合は76セントになっている。オープニングレンジは44.25~46.44ドルで、7本目の20分足まではこの範囲で推移していたが、8本目の20分足でオープニングレンジを下抜き、43.49ドルでAダウンを付けた。株価はそのあとも下げて40.76ドル近辺でこの日の安値を付けた。ところがここから反転すると、順調に上げてオープニングレンジ（中立エリア）を突き抜け、レンジの上限から76セント上の47.20ドルに達し、Cアップを付けた。すでに大引けが迫っていたが、株価は48ドルまで上がったあとで、結局はオープニングレンジ内の46.00ドルで引けた。

これまでの例でA点やC点が付くのは、価格がその水準に達しただけでなく、そこでオープニングレンジで採用した時間枠の半分の時間とどまっていたからだ。しかし、例えばAアップの目標値に達してもそこにとどまらず、すぐに跳ね返ってしまうようなときもある。これを私は「輪ゴムトレード」と呼んでいる。

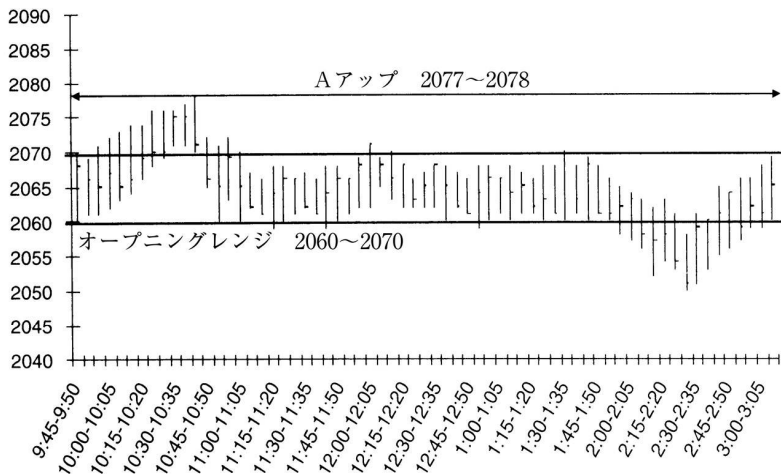
輪ゴムを両手の親指と人差し指でつまんで左右に伸ばしていき、それ以上引っ張れないところで離すと輪ゴムは元に戻る。

マーケットもこのように伸び切ってそれ以上進めなくなると、反対方向に急激に動くことが多い。輪ゴムが縮むイメージをよく覚えておき、A点（AアップやAダウン）がその限界だと想像してほしい。もしそうだとすると、価格がその点かその近くまで進んだときは素早く反転すると予想できる。

例を挙げて説明しよう。ある日の原油先物の5分間のオープニングレンジが20.60~20.70ドルだったとする。Aアップは20.78ドルだ。マーケットは揉み合いながらAアップの1ティック手前に当たる20.77ドルまで上がったあとで急落したため、Aアップは付いていない。目標値の近くまで上がっても、ゴム輪のように伸び切っていれば、それ以上は上昇できず反対方向に押し戻される（図1.10）。

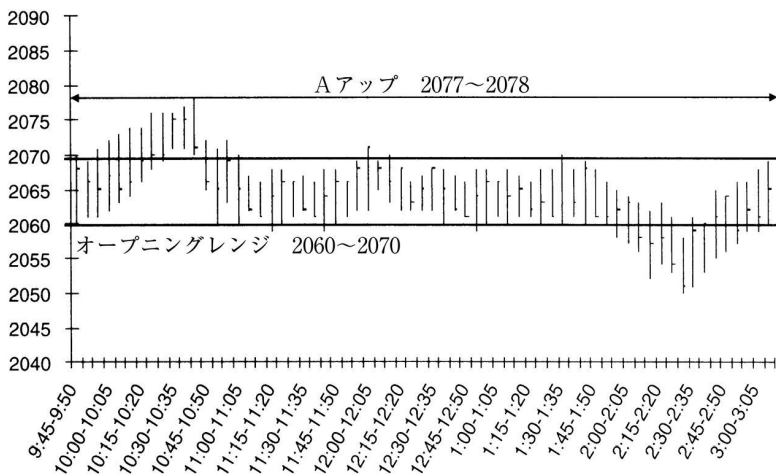


図1.10 輪ゴムトレード



もし下落が加速していると判断したら、この輪ゴムトレードではAダウンを付けるのを待たずに売ることができる。Aアップの近くで急落に転じたということはAアップを付けるのに失敗したということなので、反転したところよりも下で売ってもよい(図1.11)。

図1.11 輪ゴムトレード



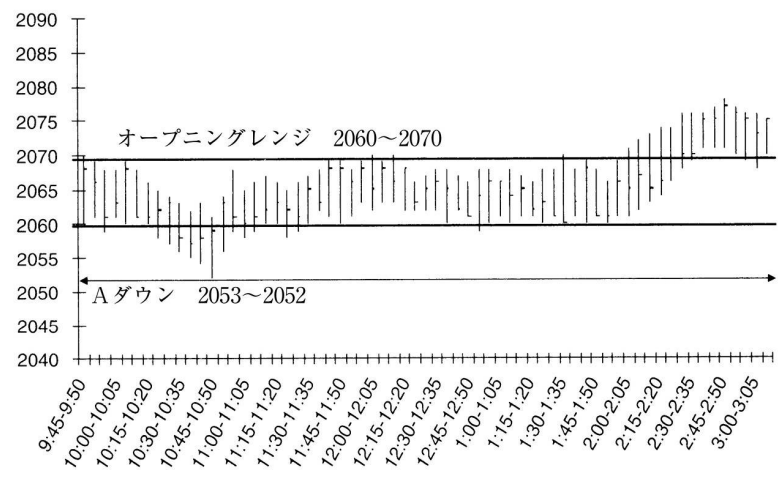
ただ、そのときのリスクは常に考え、「もし間違ったときにどこで損切りするか」ということを決めておかねばならない。この場合はオープニングレンジを超えているので、Aアップはこの時点でも有効である。Aアップは仕掛け値よりもわずかに5ティック上である。もし再び上げてAアップの20.78ドルまで上昇したら、5ティックの損失を受け入れる。あるいは、次の10分間以内に下落が加速しなければ、やはり手仕舞う(価格よりも時間のほうが大事だということを忘れないでほしい)。

次は、予想どおり下落が加速してオープニングレンジを下に突き抜け、20.60ドルを下回ったとしよう。そうなれば空売りのポジションを利用うポイントを探ることになるが、もし再びオープニングレンジに戻ればすぐに手仕舞う。繰り返しになるが、上方リスクはわずかに5ティックだが、下落する余地は大きい。20ティックの利益が狙えるときに、5ティックのリスクをとって、吹き飛ばされることはないことも覚えておいてほしい。

次は、反対の立場からA点を付けるのに失敗したトレードを見てみよう(図1.12)。今回の場合は、寄り付きから下げてAダウンの20.52ドルに近づいている。しかしAダウンを付けるためには、オープニングレンジが5分間なので

少なくとも2分半は**20.53**ドルの水準を維持しなければならない。実際のマーケットは**20.53**ドルまで下げたあと、伸びきった輪ゴムのように急上昇していくように見えた。Aダウンを付けるのに失敗したあとに買うリスクは、損切りポイント（Aダウンの値）さえ決まっていれば非常に小さい。

図1.12 付けるのを失敗したA点



A アップを付けるのに失敗したので売ったり、A ダウンを付けるのに失敗したので買ったりするのは、潜在リスクよりも潜在利益のほうがはるかに大きい。

ただ、輪ゴムトレードが機能するのは、A アップやA ダウンを付けるのに失敗したときだけだということを覚えておいてほしい。A 点が付いてしまった場合は、オープニングレンジよりも上なら強気、下なら弱気という方針を維持していかなければならない。

もちろん最高のシステムを使っているトレーダーでも、ときにはルールを守らないことがある。これは人間の性（さが）、もしくは自由意志の行使かもしれないし、それでうまくいくことだってあるかもしれない。しかし、このような筋の通らないトレードは、少ない枚数や株数のみにしておいてほしい。**ACD**システムはトレードを仕掛けるよう命令するわけではない。ただ、**ACD**システムが出したシグナルを無視した自分にイラ立って仕掛けるということはあるかもしれない。A アップが決定したのに買いのチャンスを逃してしまった。そうしているうちに、またマーケットは下げてA アップを下回った。本来ならA アップまで上昇するのを待って買う。しかし、そうはしないで、フィーリングでA 点の下で売ってしまったりする。このような訳の分からない行動はその人の頭の中だけにあり、自分自身と向き合う以外にどうにもできない。

これらは論理的な理由に基づいたトレードとは言えない。しかし、トレーダーも人間であり、そのなかでもかなり感情的になりやすいタイプにはこのような傾向がよく見られる。人はロボットのように常に理論に従って動くわけではない。**20**年のトレード経験と何千人ものトレーダーに教えてきた私には、そのことがよく分かっている。

それなら実際はどうすればよいのだろう。もしあなたが行おうとしていることと**ACD**システムのシグナルが一致しなければ、アクセルを踏んではならない。また、そのようなトレードに大きく張ってはならない。どうしてもそのトレードを実行したいのなら、枚数や株数を少なくして実行すればよい。そしてブレーキを軽く踏んでおけば、たとえこのバカげたトレードを実行したとしても（正しい理由がないトレードはたとえ利益が出たとしてもバカげたトレード）、リスクが大きくなりすぎることはない。

規律を守り、システムが発したトレードだけを実行するように延々と説くこともできるが、私自身や私の部下たちを含めてトレーダーにはシステムを無視して独自のバカげた方法でトレードしたくなるときがあるのも分かっている。

る。そういうときは、それぞれに感情的で理不尽な理由があるのだろう。もしかしたら、前の晩、奥さんと言い合いをして皿が飛んできたから、翌朝怒りに任せてマーケットでつい買ってしまったのかもしれないし、義母が突然6週間も泊まりに来ると言ってきて、絶望と怒りで思わず空売りしてしまったのかもしれない。

私にこういうトレードをやめさせることはできない。トレーダー自身にも無理だろう。ただ、ひとかけらの規律を守って枚数や株数を多くしないことはできる。リスクにさらすのは**100枚**ではなく**10枚**にしてほしい。

次の例を見よう。**ACD**システムによると、Zという商品のオープニングレンジは**14.10~14.40**、Aの値は**10**ティックとなっている。マーケットは揉み合いながらもオープニングレンジを超えて上昇し、**14.49**に達したが、そのあと急落した。どうすればよいのだろう。

もしこれが潜在的な輪ゴムトレードだと気づけば、**14.49**に達したあとすぐに反転したところの**14.46**で売ることができただろう。損切りポイントはAアップである**14.50**、上方リスクは4ポイントだ。仮にこのあとマーケットが急落してオープニングレンジを下に突き抜け、**13.20**まで下げたのでそこで手仕舞ったとする。この日はツキがあったようで、結局これがこの日の安値となり、わずか4ティックのリスクで**126**ティックの利益を上げることができた。

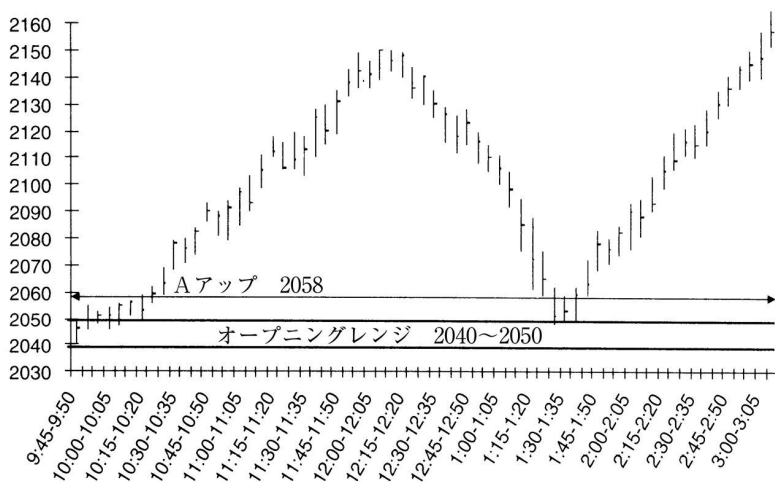
輪ゴムトレードは、マーケットが目標値に達するか近づいたあと、すぐに反転したときに仕掛ける。このとき、空売りならAアップのすぐ下、買いならAダウンのすぐ上が仕掛けポイントとなる。損切りポイントは、AアップやAダウンに置く。もしあらかじめ決めておいた時間内にマーケットが予想した方向に動かなければ、やはり手仕舞う。

これまで述べてきたことは、**ACD**システムという手法のほんの入り口でしかないが、このシステムがさまざまな基準値から成っているということは覚えておいてほしい。言い換えれば、この**ACD**システムというのは、仕掛けるときに枚数や株数を最大にしてリスクを最小にするための頼れる基準値を提供してくれるのだ。**ACD**システムのA点は、マーケットのほかの情報と同じように参考にすればよい。例えば、もしマイクロソフト**1000株**を**95.75**ドルで売ったとき、**96**ドルで**100万株**空売りする注文が出ていたらリスクに関係なく自信満々でトレードするはずだ。A点の目標値も、これと同じ感覚で使ってほしい。

**ACD**システムの基準点は、トレードを仕掛けるときに頼りになる。間違ったときにどこで手仕舞うかが常に分かっているので、自信を持ってトレードできる。

間違ったときにどこで手仕舞うかが分かっているので、**ACD**システムは押し目買いや戻り売りなどさまざまなタイプのトレードにも利用できる。このときも**ACD**システムの基準点が役に立つ（図1.13）。

図1.13 ACDの基準点を使ったトレード



ACDシステムでは、A点が決まると価格とオープニングレンジの関係によってトレーダーの方針が決まる（価格がオープニングレンジよりも上なら買い、下なら売り）。例えば、マーケットが**20.85**ドルでAアップを付けて買い、**21.50**ドルで利食ったとしよう。そのあとマーケットは下げてA点を下回ったが、オープニングレンジの下限までは達していない。この時点でもまだ上げる可能性が多少はあると思って、押し目で買うことを決める。

しかし、ここで重要なのは上昇に転じたときに買うことで、底を狙ってはならない。マーケットが底を付けて上昇するのを待ったほうがよいのだ。そのあとは、買うための基準点——この場合は直近の安値——が参考になるだろう。

繰り返しになるが、間違ったときにどこで損切りするかを常に考えておかなければならない。今回のAアップの下で買う場合の損切りポイント（強気から中立に変わる点）はオープニングレンジの下限になる。

今度は逆の場合を見てみよう。オープニングレンジが**20.50～20.40**ドルで、**20.33**ドルが2分半続いたためAダウンを付けたとしよう。まずは売って**19.85**ドルまで下げたところで利食った。そのあとマーケットは少し戻ったが、まだオープニングレンジよりは下にあり、しばらく**20.38**ドル付近で横ばいが続いたあと、また下げ始めた。このときは、**20.37**ドルで再び売って損切りポイントをオープニングレンジの上限に置く。

このようなACDシステムによる押し目買いや戻り売りが、基本ルールに反しているわけではない。AアップやAダウンを付けたあとは、オープニングレンジよりも上なら強気で、下なら弱気の方針を維持していく。ただ、それを実行するかどうかはそのときのマーケットを観察して判断してほしい。いずれにしても損切りを置く場所だけは忘れないでほしい。

このような規律を持ってトレードをしていれば、避けることのできない小さな損失には耐えることができる——例えば、押し目で買ったあと上昇の勢いがなくなったとしても——。マーケットに対して百パーセント正しいことのできる人はいない。ここは自分をボクサーだと思ってほしい。損切りポイントで自衛しておけば小さなジャブは耐えられるが、ノックアウトされそうな強力なパンチは避けなければならない。そして生き残った人だけが熟練したトレーダーになれる。ACDシステムの基準点を利用すれば、自分だけの戦略を描くことができるし、逆行したときの損切りポイントも分かるのである。

#### トレードを大いに改善させるACDシステムの5つのルール

- 1・基準となるA点とC点をチャートに描き込む
- 2・ポジションを持ったならこれらの基準点を参考にする

- 3・思ったとおりに進むようなら枚数や株数を最大にし、リスクは常に最小にする
- 4・逆行したときの損切りポイントを把握しておく
- 5・4が分かっているれば、自信を持ってトレードする

A点とC点を使った戦略をもうひとつ見ておこう。今回はC点を利用する場合である。前述のとおり、A点が決まったあと（AアップでもAダウンでも）、マーケットが反対方向に大きく動けば、C点が次の目標となる。

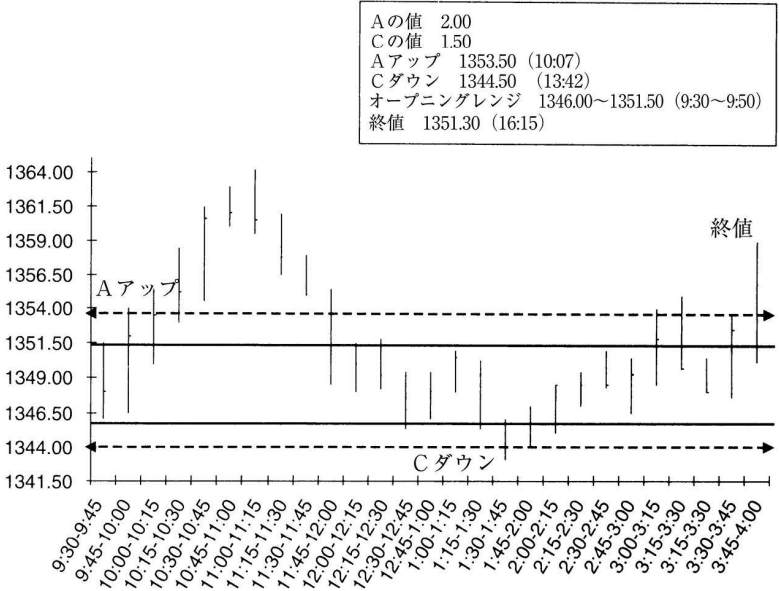
例えば原油の場合、Aの値は7～8ティックで、Cの値は11～13ティックである。つまり、オープニングレンジが20.50～20.60ドルならAアップは20.67～20.68ドルで、Cダウンは20.39～20.37ドルになる。

仮に原油がAアップを付けてさらに上げたあとと反転したとする。下落は加速してオープニングレンジを下に突き抜けると、20.39～20.37ドルのCダウンに向かっていった。しかし、それを突き抜ける代わりに20.38ドルまで下がると、今度は前の輪ゴムトレードの例のように上昇に転じた。

これは典型的なCダウンを付けることに失敗した例である。C点の水準に達してもオープニングレンジの半分の時間そこにとどまらなかったで、Cダウンにはならなかった。このようなときは、Cダウンを付けることに失敗した水準から反発したところを狙って、そのすぐ上で買えばよい。このときの損切りは強気の方針を放棄するC点に置く。潜在利益はオープニングレンジを上になく大きく超えて仕掛けのポイントからかなり離れているが、潜在リスクは比較的小さい。

この種の実例をもうひとつ紹介しよう。私はこのようなトレードを良いAアップとCダウンを付けることの失敗（または、良いAダウンとCアップを付けることの失敗）と呼んでいる。図1.14は2001年1月22日のS&P先物3月限の動きで、1353.50のAアップが3本目の15分足で付き、その後しばらくしてマーケットは急落した。そして1344.50のCダウンに達したが、その水準に規定の7分半の間とどまらずに上昇し、オープニングレンジよりかはるか上で引けた。

図1.14 良いAアップと付けるのを失敗したCダウン（S&P先物3月限  
——2001年1月22日）



時間の重要性はいくら強調しても足りないが、特にオープニングレンジの時間は重要だ。前の例では、価格がC点に達しても十分な時間そこにとどまっていなかった。もっと具体的に言えば、C点以下に7分半（オープニングレンジの時間枠の半分）とどまっていなかったため、結局はCダウンを付けることに失敗した。

それでは逆にそこにとどまっていた時間が長すぎたらどうなのだろう。本章の初めに述べたように、時間の要素には特定の水準にとどまるべき最短の時間もあれば、何かが起こるのを待つ最長の時間（限度）もある。言い換えれば、一定時間内（トレーダーの時間枠によって変わる）に予想される動きがなければ、そのトレードは手仕舞う。

例えば前の例で見てみよう。オープニングレンジとして15分の時間枠でデイトレードをしている人がC点を付けることに失敗したのを見て、**S&P**先物をそのC点よりも上で買ったが、価格は上がらずに横ばいのまま15分が経過したとする。このようなときは、一度手仕舞って次のチャンスを探したほうがよい。理由は特定の水準にとどまる時間が長ければ、同じことをしようとするトレーダーが増えるからだ。大衆はたいてい間違え、多くの人が簡単に仕掛けることのできるトレードが儲かることはあまりない。望む結果が実現するまでいつまでも待つというのは、私が「カジノバスの乗客」と呼ぶリスクが高い状態になるだけである。

ニューヨーク周辺の人たちなら、アトランティックシティ行きのカジノバスがあることを知っているだろう。これらのバスはたいていは無料で、到着すると10ドルのチップまでくれることもある。ただ、帰るころには乗客の財布のお金がカジノの懐に入っているのは間違いない。トレーディングの世界にも、このバスの乗客に当たる人たち、つまり情報も経験も持たないアマチュアが含まれている。こう書くと気を悪くする人もいるかもしれないが、それについてはあとで考えよう。大事なことは、この人たちが投資の判断に関してはほぼ100%間違っているということで、トレーダーとしてはカジノバスの乗客と同じ間違いは犯したくない。トレードを仕掛けたあとマーケットが動かなければ、多くの人があなたの売ろうとするところで売ったり、あなたの買おうとするところで買ったりして、あなたと同じことをするのでリスクが増すことになる。そして、その結果、マーケットは間違いなくあなたにとって不利に動く。

トレードするときは、時間枠を決めてそれを使い続ける。カジノバスの乗客のようにひとつのポジションを長く持ちすぎてはならない。大衆は常に間違えということを覚えておこう。

もちろんマーケットにすつかりだまされることもある。下げてAダウンを付けたあとすぐに反転してオープニングレンジに達し損切りをし、そのあとも上げてCアップを付けたので買くと、今度は再び反転して結局オープニングレンジの真ん中で引けるなどという日が実際にあるからだ。下げて上げて横ばいなどというときは、トレードしてもマーケットに嫌われたということで、ACDシステムに従ってもどうにもならなかっただろう。実際、この日の結果は2つの負けトレードに終わった。

ただ幸いなことに、基本的な条件を満たしているマーケットならば、このような日はそう多くない。

- 十分な流動性 十分なトレーダーがいて、目標値かその近くで仕掛けることができる。
- 日中のボラティリティ ユーロドルのマーケットは出来高は多いが日中ほとんど動かない。ボラティリティがなければACDシステムでトレードするチャンスはない。ボラティリティはACDシステムの必須条件。

展開が不利になったときに損切りするポイントは常に分かっている。損切りをしなければ、われわれがハブと呼んでいるトレーダーのようになってしまう。ハブはNYMEXにある私の会社で灯油先物をトレードしていた。ある日、彼はただひとりのビッダー（買い方）という残念な立場に陥っていた。彼以外のだれもが売っていたため、古参のハブはみんなから買うことになってしまったのだ。そしてもちろんマーケットは下げた（だからみんな売っていた）。

こうなった理由は分からない。もしかしたらハブは底値で買ったつもりでいざれ上げると思っていたのかもしれないし、「売り」と言うべきところを「買い」と言ってしまったのかもしれない。理由はどうであれ、ハブは買い続けた。最後に、彼はトレーディングピットのポディウムで突然叫んだ。ポディウムというのは、取引所の職員が価格をチェックしたり価格に関するアナウンスをしたりする場所だが、ハブはそこを占領すると「何でも60で買うぞ〜」と叫んだのだ。そして驚く仲間たちに向かって、注文票をポディウムに置いておくから売りたければそれに名前を書いておくようにと叫んだ。すぐに25人くらいのブローカーが走り寄って名前を書いてハブに60で売った。

言うまでもなく、このあとわれわれはハブに休暇を与えた。自制心を取り戻したハブはしばらくしてトレーディングを再開したが、そのときにはまた、規律を守れるようになっていた。

ハブが忘れてしまったルールとは何だったのだろうか。このとき彼は明らかに間違っていたのに、どこで（この場合はどうやって）損切りすべきかが分かっていなかったのだ。

## 第2章 ピボット概念

### The Pivot Concept

トレーダーは、マーケットが支持線や抵抗線を形成する可能性が高いエリアを探す。もしあるレベルで支持線ができれば、その辺りから上昇していく可能性が高く、もしあるレベルで抵抗線ができれば、その辺りから下落していく可能性が高いと考える。また、もしマーケットが支持線や抵抗線をブレイクするほど十分な「力」があれば、その方向に大きく動く可能性が高いと推測する。

次に紹介するACDシステム概念はピボットレンジで、これは支持線や抵抗線がある重要なエリアをピンポイントで示し、トレード戦略の指針となってくれる。第1章で紹介したA点やC点が買いや売りの判断をする助けとなったように、ピボットレンジもカギとなる重要な値があるエリアを見つける手助けをしてくれる。



# ピボットレンジとは何か

ピボットレンジは、私が「マーケットの身の部分」と呼んでいるエリアを教えてくれる。ある期間の高値と安値と終値から算出するこのレンジに注目することで、支持線や抵抗戦ができそうなエリアを探しやすくなり、これらの水準をブレイクすればそのあとは大きな動きが期待できる。

ピボットレンジとは、買い手が買いのお膳立てを用意するエリア（支持線）だったり、売り手が支配するエリア（抵抗線）だったりする。ただ、ほかのシステムとの違いは、ピボットレンジが高値と安値と終値だけで簡単に算出できることだ（詳細は後述する）。言い換えれば、ピボットレンジは第1章のA点やC点と同じように自分で計算できる。

オープニングレンジが高値や安値との関係やポジションを建てるためのブレイクアウトポイントを探すときに重要だったように、日々のピボットレンジも何かが起こる場所を探すのに役立つ。ピボットレンジの役割はそれだけだが、マーケットの方向性を知るうえでこれは重要な意味を持つ。もしマーケットがピボットレンジよりも下から上昇しようとしていればピボットレンジで抵抗線にぶつかるが、もしそこを上をブレイクすれば大きく上昇するだけの十分な力を持っていることになる。反対に、もしマーケットがピボットレンジよりも上から下落しようとしていればピボットレンジで支持線にぶつかるが、もしそこを下をブレイクすれば大きく下落するだけの十分な力を持っていることになる。

ピボットレンジとは、支持線や抵抗線がありそうなエリアで、そこを上か下にブレイクすればその方向に大きく動く可能性が高いレンジのことである。

ピボットレンジの概念を分かりやすくするため、太った男性が横向きに立っているシルエットを想像してほしい。彼のお腹と背中の中のエリアがピボットレンジである。次にマーケットは剣だと想像してほしい。もし男性がよろいを着ていれば、剣は男性のお腹を突き刺すことはできず、剣は跳ね返される。しかし、もしこのよろいが弱かったり、さびていたり、穴が開いていたりしたらどうだろうか。その場合は、マーケットである剣がよろいを突き刺してお腹に刺さってしまう。突き抜けるには多少の力が必要かもしれないが、柔らかいお腹は簡単に突き抜けて背中に達し、男性（ピボットレンジ）は剣（マーケット）に串刺しにされることになる。

ピボットレンジのイメージがつかめたところで、次は算出方法を説明しよう。ピボットレンジは対象となる取引期間の高値と安値と終値を基にして算出する。もしデイトレードなら前日の高値と安値と終値を使うし、長期トレードならもっと長い期間の値を使う。まずはデイトレードのピボットレンジの算出方法から見ていこう。

日々のピボットレンジは前日の高値と安値と終値を基に算出する。

# 日々のピボットレンジを算出する

日々のピボットレンジを算出するため、まずは日々のピボット価格を計算する。これは前日の高値と安値と終値を足して3で割って求める。例えば、Xという銘柄は、高値が**21.00**、安値が**20.00**、終値が**20.75**だったとすれば、その合計を3で割ると**20.58**になる（セント未満は四捨五入）。これをその日のピボット価格1と呼ぶ。

次に、高値と安値を足して2で割って、ピボット価格2を計算する。上の例なら（**21.00** + **20.00**）÷ 2 = **20.50**となる。ピボット価格1の**20.58**とピボット価格2の**20.50**の差は8ティックで、これを日々のピボット差と呼ぶ。

日々のピボットレンジとは、日々のピボット価格1 ± 日々のピボット差の範囲で、この例では**20.58 ± 8** ティックの**20.50 ~ 20.66**になる。

日々のピボットレンジは、日々のピボット価格1 ± 日々のピボット差。

次の公式を使って日々のピボット価格とピボットレンジを算出してみよう。

$(\text{高値} + \text{安値} + \text{終値}) \div 3 = \text{日々のピボット価格1}$

$(\text{高値} + \text{安値}) \div 2 = \text{日々のピボット価格2}$

$\text{日々のピボット価格1} - \text{日々のピボット価格2} = \text{日々のピボット差}$

$\text{日々のピボット価格1} \pm \text{日々のピボット差} = \text{日々のピボットレンジ}$

例

商品Yの高値は**24.50**、安値は**22.50**、終値は**23.25**だった。

$(24.50 + 22.50 + 23.25) \div 3 = 23.42$ （日々のピボット価格1）

$(24.50 + 22.50) \div 2 = 23.50$ （日々のピボット価格2）

$23.50 - 23.42 = 0.08$ （日々のピボット差）

$23.42 \pm 0.08 = 23.50 \sim 23.34$ （日々のピボットレンジ）

# ピボットレンジを使う

日々のピボットレンジを算出すると何が分かるのだろうか。まず、前日の終値と今日のピボットレンジを比較すると、マーケットの基本的な強弱やセンチメントが明らかになる。もし前日の終値が今日のピボットレンジよりも高ければ、今日のトレードは強気で臨み、もし前日の終値が今日のピボットレンジよりも低ければ、今日のトレードは売り方向で考える。

今日の高値と安値と終値が、明日のピボット価格とピボットレンジを決定する。

例えば、昨日の終値が**20.75**で今日のピボットレンジが**20.45～20.60**ならば、今日は強気で臨む。反対に、もし昨日の終値が**20.30**だったとしたらピボットレンジは**20.45～20.60**なので、今日は弱気の作戦を立てる。

次は、日々のピボットレンジを今日のトレード戦略に組み込んでいく。前日にマーケットがどこで引けたかによって、ピボットレンジが支持線（終値よりも下）になるか、抵抗線（終値よりも上）になるかが決まる。ちなみにマーケットがピボットレンジ内にある場合は、中立と考える。

この前日の動きに基づいた強気や弱気の姿勢は、今日のマーケットがどう動くかによって有効にも無効にもなる。例えば、月曜日の日中にマーケットが上げて、引けはピボットレンジよりもかなり上であれば、火曜日は明らかに強気の姿勢で臨んだほうがいいことが分かる。この強気のセンチメントは、火曜日のマーケットがピボットレンジで支持され、それを下回らないと有効になる。反対に、火曜日のマーケットがピボットレンジを下にブレイクしてしまったら、月曜日の強気の兆しは無効になる。

しかし、ピボットレンジを下にブレイクするというのは、別のことを示唆している。今回の場合は、ピボットレンジは支持線を意味しているため、ここを下にブレイクするということは強い下落が続く可能性が高いということだ（剣が男性のお腹を簡単に突き抜けたことを思い出してほしい）。そこで、支持線になるはずのピボットレンジが簡単に下にブレイクされてしまったというのは、空売りを仕掛けるべきポイントだとも推測できる。ピボットレンジを簡単に下にブレイクするということは、はるか下まで下げると考えられるからだ。

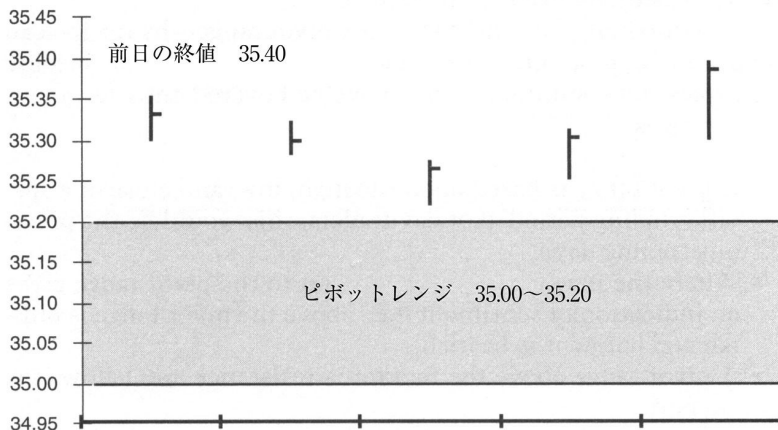
一言で言えば、日々のピボットレンジはそれ自体がトレードを仕掛ける手助けとなる。具体的な例を見る前に、ここまでピボットレンジについて学んだことをまとめておこう。

- ピボットレンジはある一定の取引期間の高値と安値と終値に基づいている（デイトレーダーなら前日）
- ピボットレンジと直近の終値の位置関係がセンチメントを示す（ピボットレンジよりも上なら強気で、下なら弱気）
- ピボットレンジがマーケットよりも上なら抵抗線で、下なら支持線になる
- マーケットがピボットレンジ（支持線や抵抗線）を上や下にブレイクしたときはその方向に大きな動きが期待できる

# ピボットレンジ戦略

次は、ピボットレンジのみを使った具体的な戦略を見ていこう。図2.1が示すように、銘柄Xのピボットレンジは35.00～35.20、終値は35.40だったので、強気であることが分かる。翌日の寄り付きは35.35だったため、ピボットレンジは支持線になる。この日、株価は下げて35.20に向かったが、35.22を下回ることなく、反転してすぐに35.25まで上昇した。これから何が分かるのだろうか。

図2.1 ピボットレンジの支持線



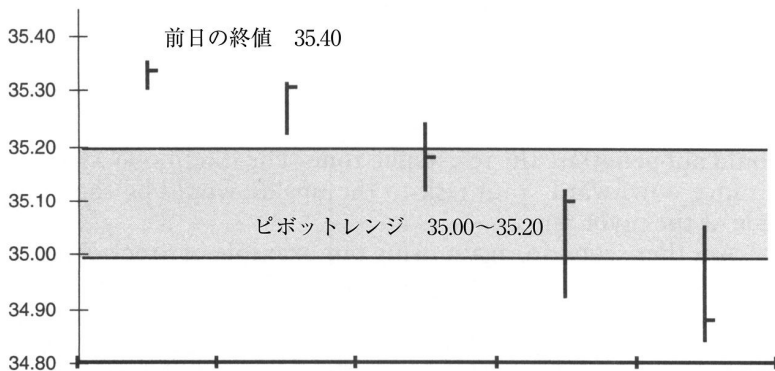
今回は、ピボットレンジ付近で上昇に転じた。これは第1章で紹介した輪ゴムトレードと似ている。マーケットはある程度下げてピボットレンジの近くに迫ったが、そこに達する前に素早く反転した。私はこのような動きをスナッピングバックと呼んでいる。このようなときは、輪ゴムトレード戦略を使って35.22で反転したあとですぐに買う。

この理論的根拠を考えてみよう。ピボットレンジが支持線になり、マーケットはその水準近くまで下げてもそれ以上は下げず、跳ね返った（スナップバックした）ということは、上昇していく可能性が高い。

どんなトレードにも言えることだが、間違ったときにどこで損切りするかを常に考えておかなければならない。第1章のオープニングレンジやA点やC点と同様、ピボットレンジも損切りを置く場所を教えてくれる。ピボットレンジの上で買いを仕掛けたこの例では、損切りをトレードが中立に変わるピボットレンジの反対側に置いてほしい。

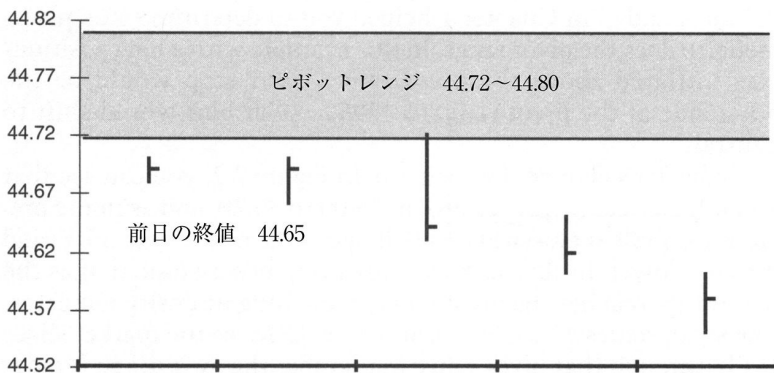
別のシナリオを見てみよう。図2.2では、銘柄Xのピボットレンジが35.00～35.20で、前日の終値は35.40だった。この日の寄り付きは35.35で、徐々に下げてきた。そして、価格がピボットレンジに近づくと、売りが激しくなってきた。価格は35.25、35.20、35.15と下げてピボットレンジを下にブレイクし、35.10まで下げた。この時点では、価格がピボットレンジを下回るかどうかに注意を払う。もし35.00を下回れば空売りを仕掛けたい。繰り返しになるが、そのときの損切りはピボットレンジ上限の35.20の上に置く。

図2.2 ブレイクされたピボットレンジの支持線



ACDシステムのシナリオに共通していることだが、すべては対称になっている。ピボットレンジよりも上であまりいくことは下でもうまくいく。例えば、図2.3の銘柄XYZは、ピボットレンジが44.72～44.80で、終値が44.65、翌日の寄り付きが44.68である。

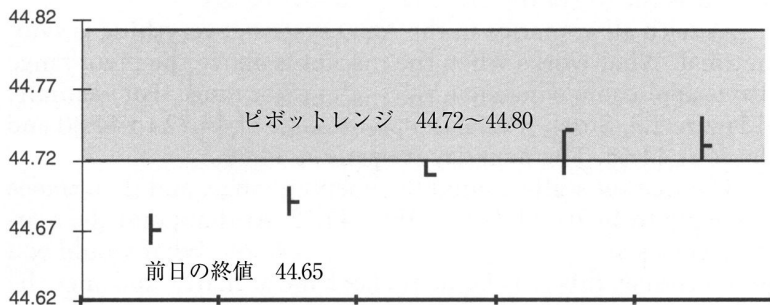
図2.3 ピボットレンジの抵抗線



マーケットはオープニングレンジ周辺で失速して44.70、44.71、44.72とゆっくりと上昇したが、そこから反転して44.71、44.70、44.69と下げてきた。その場合はどうすればよいのだろうか。もちろんこれは典型的な輪ゴムトレードどおりで、44.72で跳ね返ったところが空売りのチャンスになる。理由は、価格がピボットレンジの下側に達したが、抵抗線を上にブレイクすることができなかったからで、こうなると下落する可能性が高い。このときの上方のリスクは、ピボットレンジの上端の44.80までとなる。

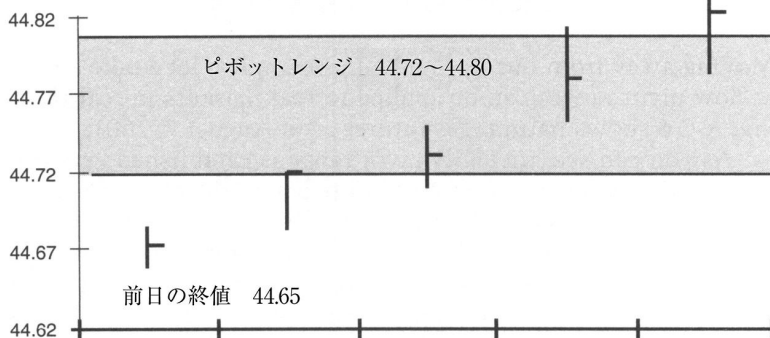
銘柄XYZを使った別の場合も見てみよう。図2.4では、ピボットレンジが44.72～44.80で、終値が44.65だった。今回は、寄り付きの44.68から安定的に上げて44.70、44.72、44.75とピボットレンジの真ん中まで達したとする。この場合はどうすればよいのだろうか。ここは待つしかない。ピボットレンジ内でトレードするのはオープニングレンジ内でトレードするようなもので、どちらかの方向に抜けるまでは中立の姿勢を維持してほしい。

図2.4 ピボットレンジ内のトレード



銘柄XYZでさらにもうひとつの例を見ておこう。ピボットレンジは44.72~44.80（図2.5）のままだが、今回は寄り付きから44.78、44.79、44.80、44.81と上昇していったとする。

図2.5 ピボットレンジよりも上で買う



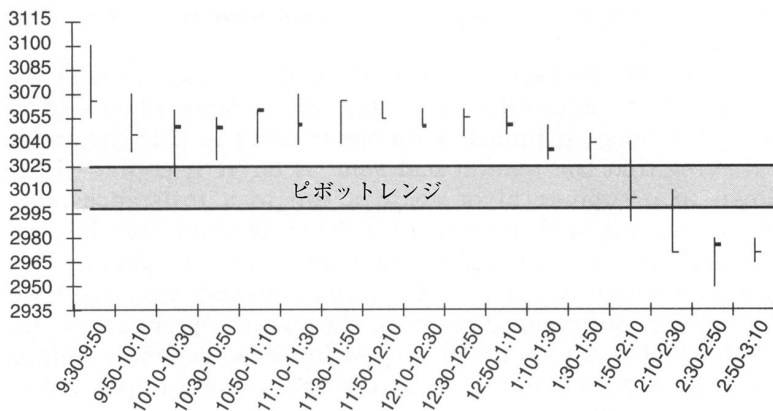
ここから分かるとおり、マーケットは抵抗線（ピボットレンジ）を簡単に上にブレイクして上端に達した。ピボットレンジ（抵抗線）を突き抜けたときの戦略は明らかに買いで、損切りはピボットレンジの下限の44.72に置く。

おさらいになるが、ここではピボットレンジ周辺の動きによって、戦略を決めている。もし価格がピボットレンジで跳ね返されれば、そのことを利用して仕掛け、マーケットが限界に達した（支持線まで下げたか抵抗線まで上げた）と確信すれば、その反対方向に仕掛ける。われわれは、価格がそれ以上もう上昇しなくなって下落したときに空売りし、それ以上もう下落しなくなって上昇したときに買う。反対に、もしも価格がピボットレンジをブレイクしたら、その方向と同じ方向で買ったり売ったりする。支持線になっていたピボットレンジを下にブレイクしたときは売り、抵抗線になっていたピボットレンジを上をブレイクしたときは買うのだ。

## ピボットレンジを使ったトレード

次の例では、ピボットレンジを実際のマーケットでリアルタイムに適用してみよう。図2.6は2001年8月7日の天然ガスの動きである。

図2.6 ピボットレンジの下で空売り（天然ガス9月限——2001年8月7日）

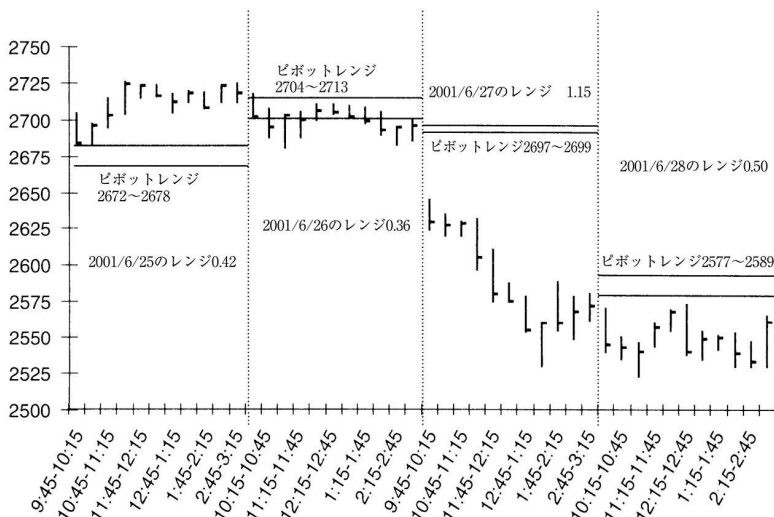


ここから分かるように、ピボットレンジは3.025～2.997で、最初の20分足は3.110にまで達したあと下げてピボットレンジ内に入ってきた。ただ、それからしばらくはピボットレンジよりも上で推移したあと、13時50分～14時10分の足がピボットレンジを下にブレイクし、そのまま下げ続けて、結局大引けはピボットレンジをかなり下回った。このように、一度ピボットレンジ（支持線）を下にブレイクすると、強い下方モメンタムで反対側に抜け、はるか下で引けることになる。

## 狭いピボットレンジと窓を開けた日のピボットレンジ

1日のピボットレンジをその日の値幅と比較すると、新しい発見がある。通常の値幅の日でも翌日のピボットレンジが狭いとその日の値幅は広くなることが多い。このことを説明するために、原油9月限の2001年6月25日～28日の推移を続けて見ていこう(図2.7)。

図2.7 狭いピボットレンジと窓を開けた日のピボット (原油9月限)



6月25日のピボットレンジは26.72～26.78ドル(6セント)で、その日の値幅は42セントだった。6月26日のピボットレンジは27.04～27.13ドル(9セント)で、その日の値幅は36セントだった。ところが6月27日のピボットレンジは、その幅がわずか2セントしかない。ピボットレンジは前日の動きを基にして算出するが、前日の値幅は36セントで普通の幅だった。これは何を示唆しているのだろうか。27日の動きを見ても分かるように、こういうお膳立てのときはその日の値幅が通常よりも大きくなることを示唆しているのだ。

6月27日は、大きく下に窓を開けて寄り付き(ピボットレンジは26.97ドルから26.99ドル)、値幅は通常よりもはるかに広い1.15ドルになった。実は、下に窓を開けた日のピボットレンジは将来重要な抵抗線になることが多い。つまり、そのあとの何日か(または何週間か)の間にピボットレンジの26.97～26.99ドルにマーケットが近づいたら、その水準に重要な抵抗線ができると予想できる。反対に、マーケットが上に窓を開けてピボットレンジを上回っていけば、そのあとの何日か(または何週間か)は窓を開けた日のピボットレンジが重要な支持線になると予想できる。

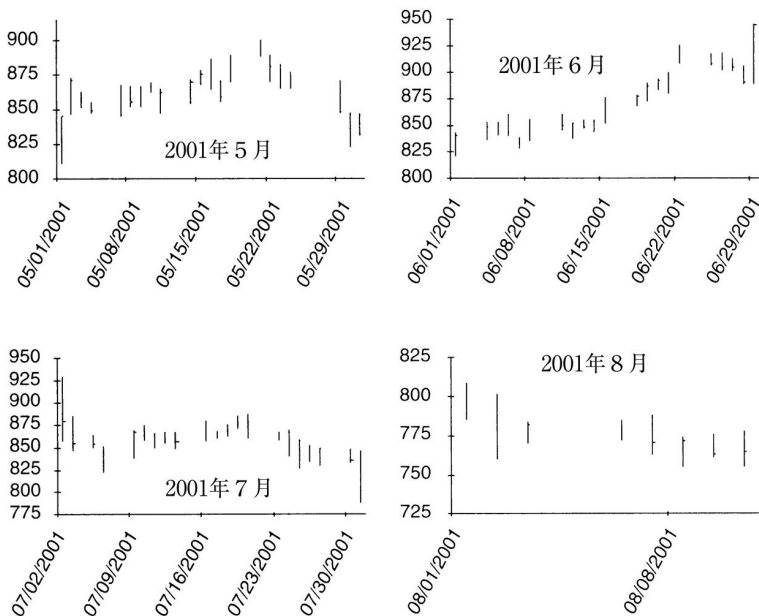


# 重要な時間枠

ここまで学んできたように、ACDシステムの大部分は特定の時間枠——オープニングレンジでもピボットレンジでも——が強気か弱気かを判断するうえで重要な役割を担っている。ただ、その姿勢を見極めるために、特に長期トレードに利用できる重要な時間枠はほかにもある。そのなかのひとつが月の最初の立会日で、月の第一営業日にその月の高値か安値を付ける確率は思いのほか高い。言い換えれば、月の第一営業日はそれ以外の日と比べて統計的優位性があるのである。これはオープニングレンジがその日のそれ以降の時間帯よりも統計的優位性があるのと似ている（第1章参照）。

このことは、図2.8に示した2001年の4カ月間の砂糖の価格推移を見るとよく分かる。5～8月の最初の立会日がその月の高値か安値になっていることに注目してほしい。

図2.8 月の第一営業日



### 3日間ローリングピボット

次は、数日からうまくいけば数週間という中期的なトレードに適した3日間ローリングピボットという概念を紹介しよう。名前のとおり、このピボットは3日間の連続した立会日の値を基にしている。計算に使うのは3日間の最高値・最安値と3日目の終値で、この3つの基準値をピボットレンジの公式（本章前半の「日々のピボットレンジを算出する」参照）に当てはめると、3日間ローリングピボットレンジが算出できる。

3日間のピボットは、さまざまなことに利用できる。例えば、これよりも上なら買いで、下なら売りを仕掛ける基準にしたり、トレイリングストップを決めたりするのに使える。

トレイリングストップは、いつも守ってくれるセーフティネットのようなもので、トレードの方向に移動させておけば（買いなら上に、売りなら下に）、ポジションの保有中はずっと守備を固めてくれる。3日間ローリングピボットは新しい日の値を足すと1日目を外すが、トレイリングストップもマーケットに合わせて毎日算出していく。

例えば、ある価格で売ったあと、マーケットが下がっていくのに合わせて3日間ローリングピボットで仕切りポイントの場所を決めていくとよい（空売りの仕切りポイントは3日間ローリングピボットレンジの上限に置き、買いの仕切りポイントは3日間ローリングピボットレンジの下限に置く）。トレイリングストップを使えば、利食うかマーケットが3日間ローリングピボットレンジをブレイクして中立に変わるまでポジションを管理していくことができる。ただ、トレイリングストップはトレードと同じ方向にしき動かしないため、仕切り注文が執行されると利益はそこで確定される。

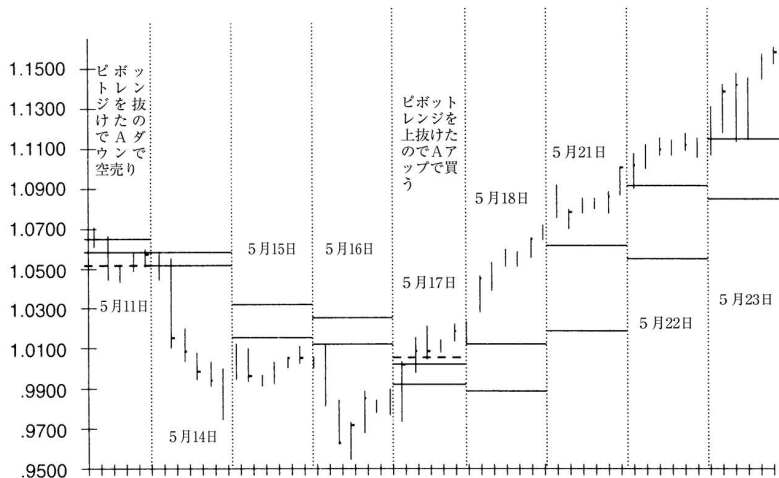
3日間ローリングピボットでトレイリングストップを決めるときにカギとなるのは一貫性で、毎回同じ時間枠で3日間ローリングピボットを計算する必要がある。もし3日間ローリングピボットで始めたときは、そのトレードを手仕舞うまで同じ時間枠を使い、トレードの途中で時間枠を2日間などに変えたりしてはならない。

ニュースによって1日だけ突然ボラティリティが上がる日があるが、ローリングピボットに長めの期間を使っていると、マーケットからはじき出されることなく、ポジションを管理できる。例えば、ブレイクアウトポイントをマーケットに近いところに置いている短期システムでトレードしている場合、マーケットを大きく動かす可能性があるGDP（国内総生産）や雇用統計の発表があると、ポジションを保有し続けるのは不可能に近いことがある。しかし長期のローリングピボットを使っていれば、マーケットがある経済指標の発表に影響を受けて1日だけ大きく逆行するようなことがあっても、仕切り注文に引っかかることはない。マーケットの動きをならしてくれる長い時間枠なら、ダマシ（継続性のない突出高や突出安）がポジションに与える影響を最小限にすることができるのだ。

ローリングピボットはピボットレンジという概念の延長線上にあるもので、期間は1日でも3日でも（それより長くてもよいが、詳しくは後述する）、考え方は同じだ。その期間の最高値と最安値と期間最終日の終値でピボットレンジを算出し、それが仕掛けポイントや防御的な仕切りポイントを決める助けになる。

図2.9のガソリン6月限では、5月11日の3日間ローリングピボットが**1.070**ドルのすぐ下に支持線としてある。マーケットがこのローリングピボットの水準を下にブレイクすれば、Aダウンの目標値である**1.051**ドルに達し、売りを仕掛けることになる。チャートを見ると、マーケットは3日間ローリングピボットよりも下で下落し続けて5月16日には**0.95**ドル近くまで達したあと、5月17日には3日間ローリングピボット（5月11日の3日間ローリングピボットよりはかなり低いところにある）を上をブレイクして**1.0010**ドルでAアップを付けた。そして、そのあとの4日間はローリングピボットを上回って上昇し続けた。

図2.9 3日間ローリングピボットレンジ (ガソリン2001年6月限の60分足)



# プラス日とマイナス日

ピボットレンジから派生するもうひとつの概念を、私は「プラス日」「マイナス日」と呼んでいる。これは特定の日のパフォーマンスをピボットレンジと比較して記録したもので、「ピボットに値を付ける」作業と呼んでいる。

- ピボットよりも始値が下で終値が上ならばプラス日。言い換えれば、始値がピボットよりも低く、終値がピボットよりも高ければ、プラス日となる。

「オープニングレンジ<ピボットレンジ<終値」は「プラス日」

- ピボットよりも始値が上で終値が下ならばマイナス日。言い換えれば、始値がピボットよりも高く、終値がピボットよりも低ければ、マイナス日となる。

「オープニングレンジ>ピボットレンジ>終値」は「マイナス日」

- それ以外はゼロ日（または中立な日）。

前日の動きに基づいて算出したピボットを将来のトレードに応用するように、この採点結果も将来の**30日**トレーディングサイクルに利用する。長年の経験から、私は、もし**30立会日前**がプラス日で（始値がピボットよりも下で終値が上）ボラティリティも高かった場合、今日もプラス日でボラティリティが高くなるという予想には統計的優位性があることを発見した。反対に、もし**30立会日前**がマイナス日で（始値がピボットよりも上で終値が下）ボラティリティも高かった場合、今日もマイナス日でボラティリティが高くなる可能性が高い。

この情報はどう使えるのだろうか。仮に**30立会日前**はプラス日だったとしよう。今日のピボットレンジは**75~85**で、今日はこれよりも下で始まってオープニングレンジは**60~70**だった。前日もプラス日だったとすれば、今日はどうトレードに臨むべきなのだろう。もし**30日**トレーディングサイクルが本当にあるのなら、今日はピボットレンジを上をブレイクして終わる可能性が高いということだ。

ここで覚えておくべきポイントが2つある。1つ目は**30立会日前**がプラス日だったのかそれともマイナス日だったのかということで、2つ目はもし今日歴史が繰り返されるのなら寄り付きの状態が同じでなければならないということだ。例えば、**30立会日前**がプラス日（始値がピボットよりも下で終値が上）なら今日もそうなる可能性は高いが、もし今日の始値がピボットよりも上だったら条件がそろっていない。たとえ終値がピボットよりも上だったとしても、寄り付きの条件がそろっていないければプラス日にはならないからだ。そこで、**30立会日**のプラス日やマイナス日の指標を使う場合は、終値を予想する前に寄り付きがどうだったかを確認してほしい（**図2.10**、**図2.11**）。

図2.10 プラス日

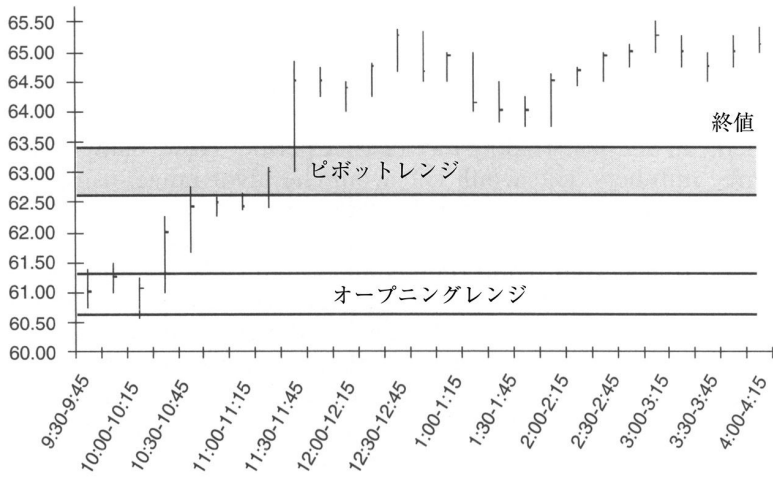
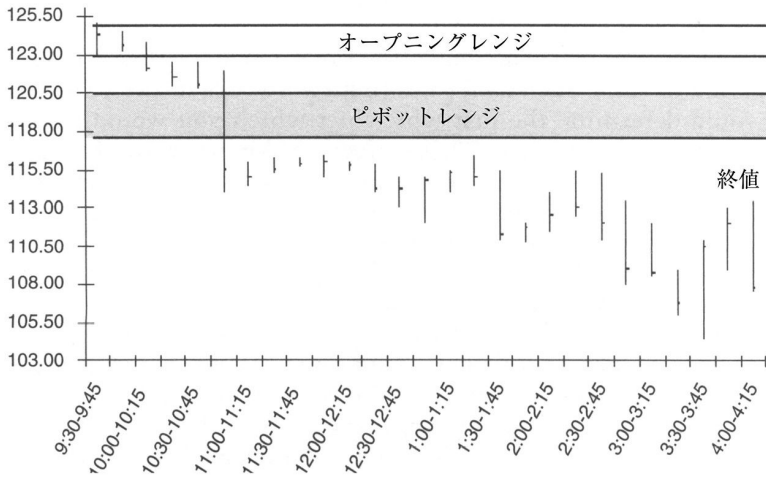


図2.11 マイナス日



# 長期のピボット

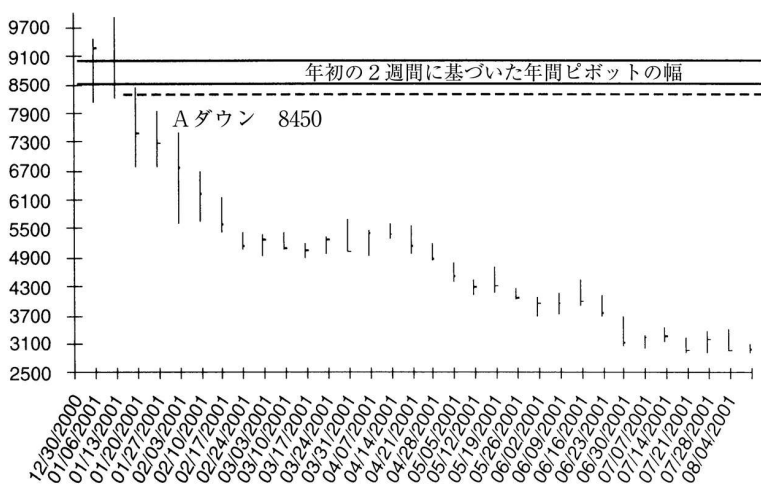
最後に、もうひとつ重要な概念であるピボットレンジの長期トレードへの応用を見ておこう。これはトレード期間が数週間で数カ月間でも使える。本章前半で述べたように、この概念はある期間の最高値と最安値と最終日の終値を使ってピボットレンジを算出するという点においては、期間は関係ない。例えば、もし観察期間が2週間なら、その期間の最高値と最安値と最終日の終値を日々のピボットの公式に当てはめてピボットレンジを計算する。

ただ、長期のピボットレンジについては特定の時間枠に統計的優位性があることが分かった。特に、1年の最初の2週間で対象として計算したピボットレンジは、その年の前半において統計的優位性があることが分かった。そして1年の中間（つまり7月の最初の2週間）のピボットレンジもやはりその年の後半において統計的優位性がある。言い換えれば、1年の最初の2週間のピボットレンジは、その年の前半の支持線や抵抗線の目安となるのだ。そして半年が過ぎると、マーケットはリセットされ、7月の最初の2週間のピボットレンジがその年の後半の支持線や抵抗線の目安となる。

1年の初めの2週間などといった長い期間のピボットレンジを算出すると、長期の買いや売りの目標値を決めることができる。これらの目標値はAアップやAダウンとして知られている。しかし、第1章でオープニングレンジを使って日々の戦略を紹介したときのA点と違い、今回のAアップとAダウンは長期の視点も組み込まれている。

例を挙げて説明しよう。図2.12は2001年1月から8月の初めまでの天然ガスの動きを示している。年初の2週間の値を使ったピボットレンジは9.005〜8.650になっている（この期間の高値は1月9日の9.870、安値は1月3日の8.140、1月12日の終値は8.472）。

図2.12 長期のピボット（天然ガスの週足チャート）



このピボットレンジに基づいて、AアップとAダウンの目標値を算出した。今回は長期なのでAの値も日々の値よりも大きい200ティックを使う（日々のA点なら15〜20ティック）。計算すると、2週間のピボットレンジに対するAアップの目標値は9.205（9.005+200ティック）、Aダウンの目標値は8.450（8.650−200ティック）になる。

次に、3本目の週足を見てほしい。マーケットは8.450のAダウンを下回っている、ここで売る。そのあとマーケットはさらに下落し、4月に少し上昇したものの、そのあとも年の半ばまでずっと下落し続けた。6月30日に半年のサイクルが終わったとき、天然ガスの価格は3.200になっていた。これはAダウンの8.450をかなり下回っている。

面白いことに、6月30日以降最初の足に目立つ動きはない。むしろここは狭いレンジで横ばいに推移しているが、これはマーケットが後半に向けてリセットしていることを意味している。ここでその年の後半のピボットレンジを7月最初の2週間の値で計算することを思い出してほしい。新しいピボットレンジは7月から12月のマーケットに適用され、そのあとマーケットは再びリセットされる。

このチャートは、ピボットレンジが利益の高い長期ポジションを教えてくれる劇的な例となっているが、ポジションを建てたあととはいつ買い戻すかが問題になる。答えは自分の時間枠が終わったときで、この例では6月末日になる。それ以外の場合は、価格が基準点であるピボットレンジを上回ったときに買い戻して手仕舞う。短期でも長期でも間違っていたときに買い戻すべき基準点、つまりピボットレンジがカギとなる。短期ポジションならマーケットがピボットレンジの上限を上抜けば手仕舞うし、買いならピボットレンジの下限を下抜けば手仕舞う。

ピボットレンジの概念は単純だが、これを算出しておけばマーケットのセンチメントを判断し、支持線や抵抗線がどこにあるかを予想できる。本章ではピボットレンジのみを使った戦略を見てきたが、序論で述べたとおり**ACD**システムにはさまざまな指標を重ね合わせていく。第3章では、ピボットレンジにA点とC点を組み合わせたトレード戦略を構築していこう。

## 第3章 **ACD**とピボットレンジを組み合わせる

Putting It Together : ACD and Pivot Ranges

ここまで**ACD**システムの基本であるA点とC点を使って買いか売りかを判断する方法を学んできた。また、第2章ではピボットレンジが支持線や抵抗線の水準や仕掛けポイントを示してくれることを学んだ。本章ではこれらの戦略を同時に使い、**ACD**システムの基準点とピボットレンジで仕掛けポイントや仕切りポイントを微調整していくことを学ぶ。2つの指標を組み合わせることで最大の枚数や株数で最小リスクのトレードを探すことで、成功確率はさらに高まる。

ちなみに、2つの指標を一緒に使うときには**ACD**システムのほうがより重要だということと、このシステムはアップサイドでも機能するし、ダウンサイドでも機能する。



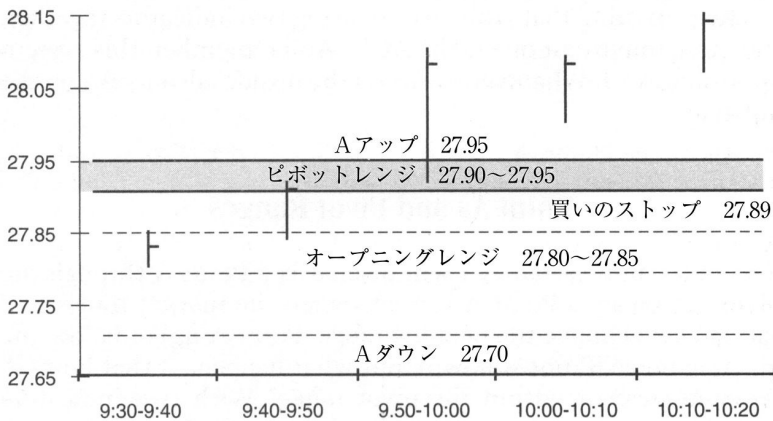
## A点とピボットレンジ

最初に紹介するコンビ戦略は、A点がピボットをブレイクするケースである。A点は、マーケットがオープニングレンジからある一定の水準を上回るか（Aアップ）下回るか（Aダウン）したところだということを思い出してほしい。ただ、A点の目標値がピボットレンジの近くだったり、ピボットレンジの内側だったりした場合はどうなるのだろうか。2つの指標がある価格水準で重なったときは、この水準がより重要だと考えられている。また、マーケットがその水準をブレイクしたときは、シグナルの強さが倍増したと考えてほしい。このような場合をわれわれは「ピボットレンジをブレイクする良いA点」と呼んでいる。

では、チャートで説明しよう。商品Xの前日の動きに基づいて計算された今日のピボットレンジは27.90～27.95で、終値は27.85だとする。ここからはまず終値がピボットレンジよりも下にあることから、翌日の姿勢として弱気で臨むということが分かる。また、今日の商品Xのオープニングレンジ（この時間枠は10分間）が27.80～27.85で、Aの値が10ティックだとすると、Aアップは27.95で、Aダウンは27.70になる。

この日、マーケットは上げて簡単にピボットレンジの下限の27.90まで上昇し、さらに上限の27.95に達し、Aアップを付けた。この時点でマーケットはAアップ（最初の指標）を付けただけでなく、ピボットレンジ（2つ目の指標）もブレイクしてしまった。2つのシグナルが一致した場合は、ピボットレンジをブレイクする良いAアップに基づいて、27.95で買う（図3.1）。

図3.1 ピボットをブレイクする良いAアップ



さらに、2つの指標が一致しているときは27.95で買うだけでなく、枚数も多くしたい。シグナルが一致したことでこのポジションはさらに自信を持って仕掛けられるからだ（枚数は可能な限り大きくしたい）。また、ACDシステムとピボットレンジと一緒に使うことで、ACDシステムのみのときよりも損切りまでの幅も縮めることができる。第1章で説明したように、Aアップの損切りはオープニングレンジの下限のすぐ下のポイントBに置く。この例では27.80の下で、これは仕掛けポイントから15ティック以上下回ったところになる。しかし、ピボットレンジをブレイクしてAアップで買う場合は、損切りはピボットレンジの下限である27.90のすぐ下になるので、これだと仕掛けポイントからわずか5ポイント程度しか離れていない（リスクは最小にしたい）。

ピボットレンジをブレイクしたAアップで買うときは、さらに自信を持って仕掛けられるうえ、ピボットレンジの下限に損切りを置くことで、リスクは最小に抑えられる。

次は2001年7月17日のS&P先物で、ピボットレンジをブレイクする良いAアップのトレード結果を見てみよう。図3.2には、最初の15分間のオープニングレンジである1203.50～1208.80が示してある。Aの値は2.00なので、Aアップの目標値は1210.80、Aダウンは1201.50、そして前日の値に基づいたピボットレンジは1212.14～1215.40で、これ

はAアップの目標値よりも上にある。

図3.2 S&P先物 (2001/7/17)

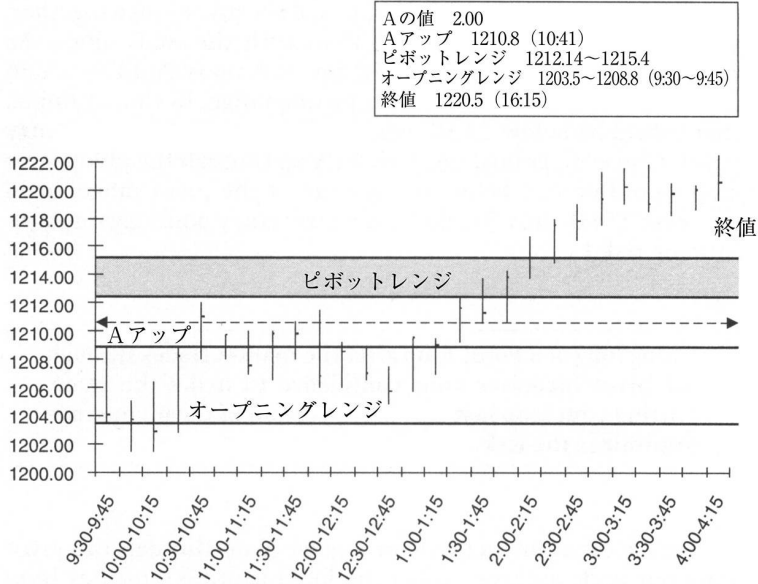


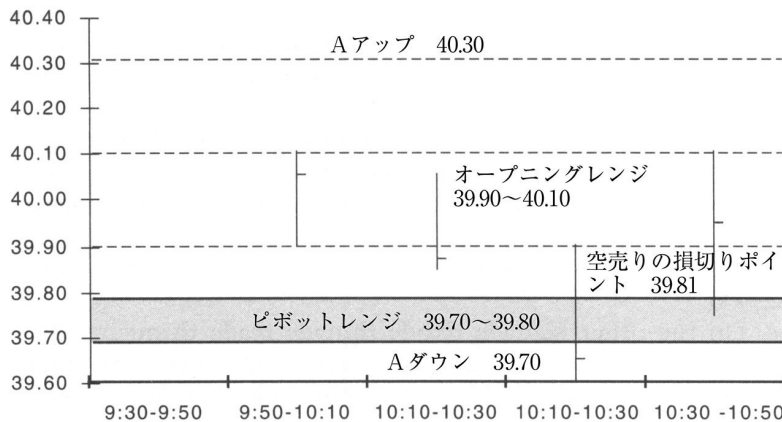
図3.2が示すように、マーケットは上げて10時30分の足でAアップを付けた。ただ、この時点でピボットレンジをブレイクしていないものの、すぐ上にあることを考慮して、すぐにAアップで買わずに様子を見ることにする。言い換えれば、もしAアップのすぐ上（またはAダウンのすぐ下）にピボットレンジがあれば、もう少し様子を見て、Aが本当に有効かどうかを確認してほしい。もしAアップの上のピボットレンジをブレイクすれば買うが、そうでなければ見送る。

マーケットはいったん下げたあと12時30分すぎに上昇に転じ、Aアップを超えると、今度はピボットレンジも上にブレイクした。この時点でマーケットははっきりとした上昇モメンタムを示したため、上がると確信できる。実際のマーケットも順調に上げ、この日の高値に近い1220.50で引けた。

## ピボットレンジをブレイクしたAダウン

次は同じ戦略の反対側に位置するピボットレンジをブレイクする良いAダウンを見てみよう。図3.3が示すとおり、商品Bのピボットレンジは39.70～39.80で、今日のオープニングレンジは39.90～40.10（この時間枠は20分）、Aの値は0.20なのでAダウンが39.70、Aアップが40.30となっている。

図3.3 ピボットレンジを使ってリスクを最小限に抑える



この日はマーケットが下げてピボットレンジをブレイクすると、39.70でAダウンに達し、そこに10分間（オープニングレンジの時間枠の半分）とどまってAダウンを付けた。この時点では、Aダウンを付け、同時にピボットレンジを簡単にブレイクした。これは2つの指標が売りを支持していることになる。このように2つの指標が一致しているときは、さらなる自信を得て枚数を最大にまで増やすことができる。

リスクに関して言えば（間違ったときにはどこで手仕舞うか常に考えておく）、ピボットレンジが基準点になる。良いAダウンだけを使った損切り（B点）は、オープニングレンジの上限で、このケースだとAダウン（39.70）から40ティック上がった40.10になる。しかし、ピボットレンジを基準にすると損切りはピボットレンジの上限（39.80）なので、Aダウンの仕掛けポイントから10ティックしか離れていない。これなら典型的なB点の損切りよりもリスクははるかに小さくなる。

ピボットレンジをブレイクしてAダウンを付けたあとは自信を持って空売りできる。このときは損切りをピボットレンジの上限に置くことで、リスクを最小に抑えることができる。

枚数を最大にしてリスクを最小にすることは、個々のトレードにおいてもトレーダーとしてのキャリアにおいても大変重要なことである。5～10ティックのリスクで破産する人はいないが、この程度のリスクで10～20ティックの利益を多くの枚数で取れば、リスクよりもはるかに大きい利益が期待できる。

もうひとつ例を挙げよう。原油が良いAアップを付けたので、10枚買ったとする。リスクはオープニングレンジの下限のB点までだが、B点は仕掛けから25ティックも離れている。仕掛け値から損切りポイントまでが25ティックで10枚買っているとすれば、損切りになれば2500ドルの損失になる。

しかし、もしその日のピボットレンジをブレイクしてAアップを付けた場合はもっと自信を持って仕掛けることができるため、トレードサイズも10枚ではなく25枚に増やせる。そしてピボットレンジを基準とすれば、損切りはピボットレンジの下限に置けばよいので、リスクは低くなる。このときの損切りは仕掛け値から10ティックしか離れていないため、25枚分でも損失は2500ドルである。言い換えれば、素晴らしい仕掛けのポイントがあれば全体のリスクを増やさずに、枚数を2.5倍にしても自信を持ってトレードを仕掛けることができる。

新しい指標を加えていくことは、マーケットの新しい意見に耳を傾けるようなもので、コンセンサスが多く得られ

るほど自信を持って仕掛けることができる。例えば、ピボットレンジをブレイクしてAアップを付けたときは買いを示す2つのシグナルが一致するため、自信を持って枚数を多くすることができる。これに30日トレーディングサイクルを加えてみよう。第2章で学んだように、立会日はピボットレンジに対する始値と終値の位置でプラス日やマイナス日に分類される（始値がピボットレンジよりも下で終値が上ならばプラス日、始値がピボットレンジよりも上で終値が下ならばマイナス日）。そしてマーケットは30日トレーディングサイクルで動く傾向があるため、思惑どおりに事が運べば今日がプラス日になる可能性は高い。

つまり、もし30立会日前がプラス日で始値の条件もそろっていれば、今日もプラス日になる可能性は高い。これはマーケットがピボットレンジよりも下で寄り付いて上で引けるということだが、すでに寄り付きはピボットレンジよりも下でそのあとAアップを付けてピボットレンジも上にブレイクしている。そこに3つ目の買いの条件を足せば、マーケットがピボットレンジよりも上で引ける可能性はさらに高まる。ピボットレンジを上をブレイクして、Aアップで買ったときに利益が出る可能性は非常に高いということだ。マーケットはすでに2つのハードル（Aアップを付け、ピボットレンジを上をブレイク）を越え、終値がピボットレンジよりも上になる可能性も高ければ（プラス日）、さらに自信が持てる。このようなときは、通常の10枚ではなく20〜30枚仕掛けてもよいと考えてほしい。シグナルが一致したら、リスクはすでに最小になっているため、枚数を最大にすべき時期と言えるだろう。

ここで使う指標は自信を積み重ねていくようなものだ。例えば、もしマーケットがAアップを付け、ピボットレンジをブレイクし、30立会日前がプラス日ならば、上昇する可能性は非常に高い。

しかし、反対に自信が崩れかけたときは時間の要素を用いる。第1章で述べたように、ある程度の時間内にマーケットが予想した方向に動かなければ、手仕舞って次に進まなければならない。動きがない状態が長引けば、不利な展開になる可能性も高くなる（カジノバスの乗客が同じトレードに殺到してくるのはこういうときだが、彼らはほぼ必ず間違う）。この時間の概念はピボットレンジを使ったトレードでも同じことで、もし価格がピボットレンジ内に入り（買いでも売りでも）、反対側に抜けないでそこで止まってしまった場合は手仕舞ったほうがよい。ピボットレンジ内にオープニングレンジの時間帯の3倍以上とどまっているときは（オープニングレンジが10分なら30分）、その日のピボットレンジは意味がなくなるため、そのトレードは手仕舞って別のチャンスを探したほうがよい。価格がこれらのエリアに達すると何か起こると期待してしまうが、もし起こらなければ手仕舞うしかない。

マーケットがピボットレンジに長くとりすぎると、その概念は無効になる。マーケットがカギとなる基準価格に達しても、それ以上動かなければ、その日のその水準は意味がない。

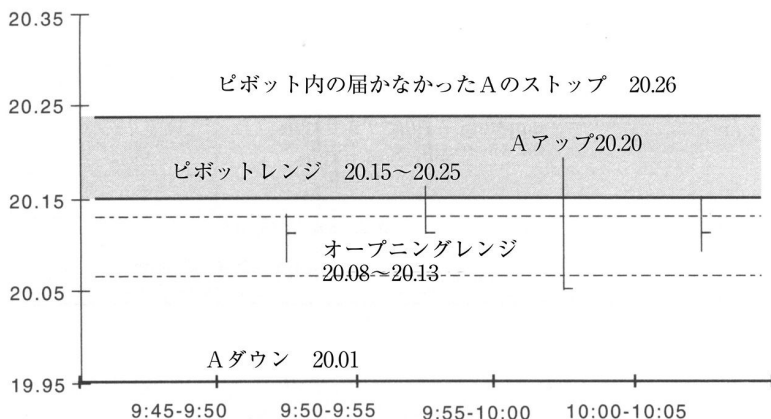
## ピボットレンジ内の届かないA点

ただ、もしマーケットがAアップやAダウンの目標値に必要な時間だけとどまっていなかったらどうか。あるいは、マーケットがピボットレンジをブレイクしてもAアップやAダウンに達しないときはどうなるのだろうか。仮にピボットレンジが価格の動きを止めるほど強力な支持線か抵抗線であれば、マーケットはA点に達する前にモメンタムが衰えてしまうのだろうか。その場合はどうなるのだろうか。答えは、ピボットレンジ内に届かないA点を利用することだ。

これらの概念はひとつずつ積み重なっていく。少しおさらいしておこう。第1章で紹介したように、A点を付けることに失敗したということは、マーケットがAアップやAダウンに近づいたり達したりしても、そこに十分な時間（オープニングレンジの時間枠の半分）とどまっていなかったり、AアップやAダウンに近づいてもすぐに跳ね返ってしまったとき（輪ゴムトレード）に起こる。もし同じように、ピボットレンジ内のA点を付けることに失敗したら（つまりマーケットがピボットレンジに達してもA点かその手前で跳ね返ってしまったら）、そのときは自信を持ってその失敗したというシグナルに従ってトレードをするということだ。

例を挙げておこう。図3.4では商品Cのピボットレンジが20.15～20.25、オープニングレンジが20.08～20.13になっている。A点の値は7ティックなのでAアップは20.20だが、これはピボットレンジ内にある。

図3.4 届かなかったAアップとピボット

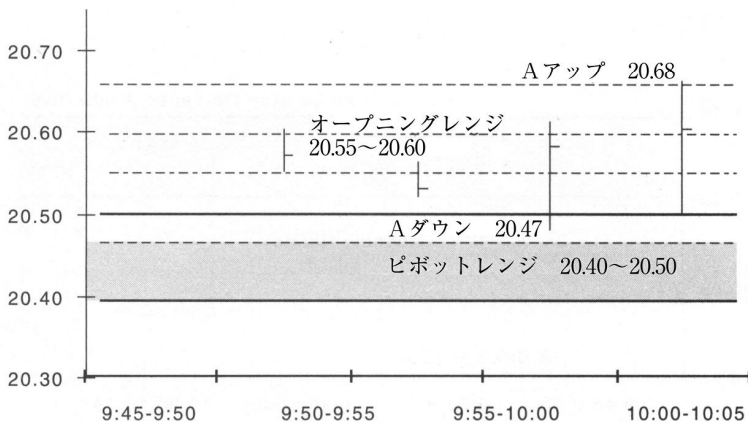


仮に、今回のピボットレンジが実際に重要な抵抗線だったとしよう。マーケットは揉み合いながらもピボットレンジまで達したが、Aアップまでは届かず、20.19で跳ね返ってピボットレンジ内の届かない典型的なAアップとなった。つまり、20.20を付けることに失敗したということはピボットレンジがより重要な抵抗線だったことになる。そしてこの2つの事実を組み合わせると、20.19で空売りするリスクは非常に小さいという結論になる。Aアップを付けることに失敗し、ピボットレンジ内にとどまってしまったということを考え合わせれば、マーケットが下落に転じる可能性が高く、逆にここでまた反転してピボットレンジを上をブレイクする可能性は非常に低い。ただ、もしそうなった場合に備えてピボットレンジの1ティック上の20.26に損切りを置いておく。

ピボットレンジ内の届かないAアップは、その周辺に抵抗線があることの確認となり、その水準で売れば成功する可能性は高い。

次は、反対にピボットレンジ内の届かないAダウンを見てみよう。図3.5の商品Dはピボットレンジが20.40～20.50、オープニングレンジが20.55～20.60、Aダウンは20.47（オープニングレンジの下限から8ティック下）になっている。

図3.5 ピボットレンジ内にある付けることを失敗したAダウン



マーケットはピボットレンジの下限の20.50から20.49に下げたが、20.47のAダウンまでは下げずに反転して、20.50、20.51と上げていった。これは、ピボットレンジ内の届かないAダウンの例である。これ以上もう下げないということは、この水準に支持線があるということで、マーケットは上昇していく可能性が高い。つまり、反転したところで買う輪ゴムトレードを行えば、最小のリスクで潜在利益は大変大きくなる。ただいつものように、間違っただけの場合はどこで仕舞うかを考えておく必要があり、この場合はピボットレンジの下限になる。

ピボットレンジ内の届かないAダウンは、その周辺に支持線があることの確認となり、その水準で買えば成功する可能性は高い。

取引時間の早い段階で、ピボットレンジ内にあるA点に届かなかったときはよく注目しておいたほうがよい——特にトレンドがあるマーケットのときはなおさら注意しなければならない。例えば、マーケットが大きく上昇しているとき、ある日の早い時間帯に価格がオープニングレンジを下回ってきたとする。その後、この弱含みの展開が消えて反転し、Aダウンを付けることを失敗して上昇すると、ピボットレンジ内の届かないAダウンは非常に低リスクの仕掛けポイントになる。このとき、買いを示すシグナルは2つになった。ピボットレンジが支持線だと証明され、かつマーケットはAダウンの水準で跳ね返った。そのうえ、反転して上昇したこの日の動きと同じ方向にすでにトレンドが形成されていたのだ。このときのリスクは付けることに失敗したAダウンまでのわずかなティックの一方で、潜在利益はかなり大きい。

考慮すべきことはまだある（ACDシステムは指標を層のようにひとつひとつ積み重ねていく）。例えば、マーケットが上昇トレンドにあるなかで今日付けることに失敗したAダウンがあり、かつピボットレンジがオープニングレンジの上にある。そのうえ、30立会日前はプラス日だったとしよう（始値がピボットレンジよりも下で終値が上）。もし歴史が繰り返すとすれば、終値がピボットレンジを上回る可能性は非常に高く、これなら付けることに失敗したAダウンの直後に買う理由は十分ある。

先に進む前に、A点とピボットレンジを使ったシナリオをおさらいしておこう。

- ピボットレンジをブレイクする良いAアップ ピボットレンジを上をブレイクしたあとのAアップでの買い。枚数を増やすことも検討する。リスクを最小に抑えるため、損切りはピボットレンジの下限に置くか、時間を使う（一定時間内に予想した動きにならなければ仕舞う）。
- ピボットレンジをブレイクする良いAダウン ピボットレンジを下をブレイクしたあとのAダウンでの売り。枚数を増やすことも検討する。リスクを最小に抑えるため、損切りはピボットレンジの上限に置くか、時間を使う（一定

時間内に予想した動きにならなければ手仕舞う)。

- ピボットレンジ内の届かないAダウン ピボットレンジ内にある付けることに失敗したAダウンから跳ね返ったところで買う。損切りはピボットレンジの下限に置くか、時間を使う。
- ピボットレンジ内の届かないAアップ ピボットレンジ内にある付けることに失敗したAアップから跳ね返ったところで売る。損切りはピボットレンジの上限に置くか、時間を使う。

# C点ピボット

これまでピボットレンジとA点の組み合わせについて説明してきた。次はピボットレンジともうひとつのACDシステムの仕掛けポイントであるC点との組み合わせを見ていこう。前述のとおり、C点はそれまでの強気や弱気の姿勢やセンチメントが変わる価格水準で、Aアップを付けたあと下落すれば、強気（Aアップ）から中立（オープニングレンジ内）を経て、C点で弱気へと変わっていく。また、ACDシステムは対称なので、Aダウンを付けてから上昇すれば、弱気（Aダウン）から中立（オープニングレンジ内）を経て、C点で強気へと変わっていく。

この動きをピボットレンジと合わせて分析すると、強力な反転戦略となり得る。これを私は「C点ピボットトレード」と呼んでいる。これはそう頻繁に起こるシナリオではないが、起こったときには大きな動きに発展することが多い。

まず、C点ピボットになるためにはいくつかの要素がそろう必要がある。

- オープニングレンジがピボットレンジよりも上にある
- Aアップを付ける
- オープニングレンジを下抜いたあとさらに下げてC点ピボットレンジもブレイクする

または

- オープニングレンジがピボットレンジよりも下にある
- Aダウンを付ける
- オープニングレンジを上抜いたあとさらに上げてC点ピボットレンジもブレイクする

このように劇的な反転は結果的に大きな動きにつながることが多い。繰り返しになるが、このようなトレードはそう頻繁には起こらないため、私はこれをブルームーン級（めったに起こらないこと）のトレードと呼んでいる。ただ、ACDシステムを使ってマーケットを観察していると何らかのお膳立てを採すようになり、もしC点ピボットトレードが出来上がりつつあれば、そのときはなすべきことは決まっている。

C点ピボットの長所とは、マーケットの要素を取り入れることで枚数（株数）を最大にしつつ、リスクを最小にできるエリアや状況を判断できることにある。例えて言えば、典型的なC点ピボットトレードとは、高利益のトレードに向かう道路にまったく障害物がない状態で、アクセルを踏む完璧なタイミングだと思ってほしい。

まずは通常のC点をおさらいしておこう。最初にAアップが付くと買いの姿勢になるが、そのあと反転してオープニングレンジを下に抜けて、C点に達すると姿勢が変わる。そこで売りを仕掛け、反転したときのために損切りをD点（オープニングレンジの上限）に置く。

反対に、もしマーケットが最初にAダウンを付けると売りの姿勢になるが、反転してオープニングレンジを上を抜けてC点まで達すると、姿勢は買いに変わる。もしC点で買ったなら、反転したときのために備えて損切りはD点（オープニングレンジの下限）に置く。

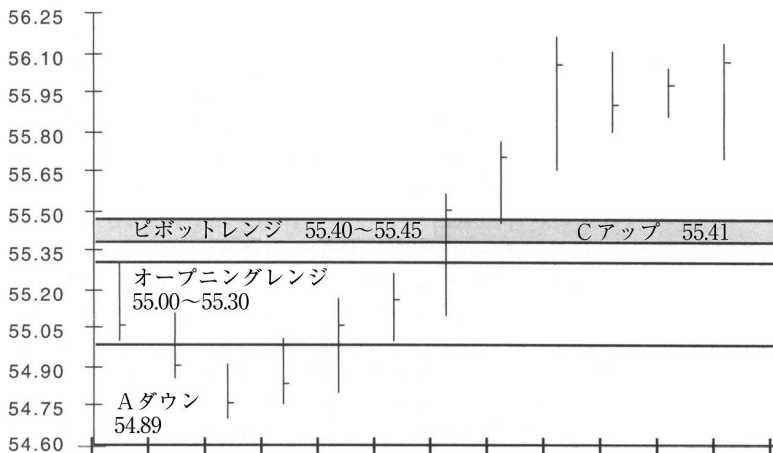
次はここにピボットレンジを重ねてみよう。例えば最初にAダウンを付けたあとで力強く上昇し、オープニングレンジとピボットレンジを上抜いてC点を付けた日は、そこで買いを仕掛ける理由が2倍になる。C点を付けただけでなく、ピボットレンジを抜けてC点に達しているからだ。強気の指標が重なれば、自信も枚数を増やせる可能性も劇的に増す。さらに、損切りをいつものD点（オープニングレンジの下限）ではなく、ピボットレンジの下限に置くことでリスクも最小に抑えることができる。

例えば、図3.6の銘柄XYZはオープニングレンジが55.00～55.30で、前日の動きを基にしたピボットレンジは55.40～55.45である。この日は最初下げて54.89でAダウン（オープニングレンジの下限から11セント下）を付けたが、そのあと大きく上昇してオープニングレンジ（中立）を上を抜けると55.41でC点（オープニングレンジの上限から11



セント上)を付けた。この時点で姿勢は強気に変わる。

図3.6 Cアップのピボットトレード

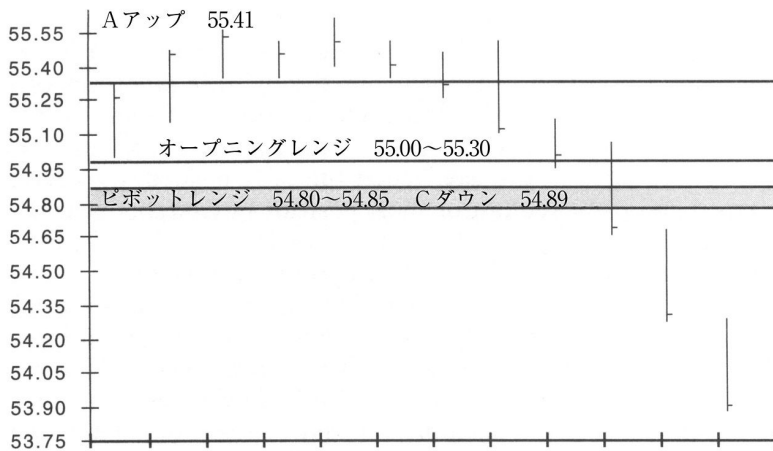


さらに重要なことは、C点がピボットレンジの中に入っているということで、もしこのまま上げて上限の55.45を超えれば強気のセンチメントはさらに強まる。そこで、C点とピボットレンジの抵抗線を上抜いたという2つの指標に基づいて、55.45かそれよりも上で買う。これは枚数を多くしてよい場合と言える。損切りは通常のD点（オープニングレンジの下限の55.00）ではなく、ピボットレンジ下限の55.40に置く。

ピボットレンジを上抜いたC点は自信を持って買える。そしてピボットレンジの下限に損切り注文を置けばリスクを最小に抑えられる。

反対のシナリオも見ておこう。図3.7の銘柄XYZはオープニングレンジが55.00~55.30、ピボットレンジは54.80~54.85になっている。マーケットは最初は上昇して55.41（オープニングレンジの上限よりも11セント上）でAアップを付け、姿勢は強気に変わった。

図3.7 Cダウンのピボットトレード



ただ、午後になるとマーケットは下落し始め、さらに売り圧力が高まるとオープニングレンジ（中立）を下に突き抜けて54.89（オープニングレンジの下限から11セント下）でCダウンを付けた。この時点で姿勢は弱気になり、すぐ下には54.80~54.85のピボットレンジが控えている。マーケットはさらに下げ、ピボットレンジの支持線を簡単

に下にブレイクするともう自信を持って多くの枚数で空売りを仕掛けられる。損切りを通常のD点（オープニングレンジ上限の**55.30**）ではなく、ピボットレンジの上限の**54.85**に置けば、リスクも最小に抑えることができる。

ピボットレンジを下抜いたC点なら自信を持って空売りを仕掛けることができる。そしてピボットレンジの上限に損切り注文を置いておけば、リスクを最小に抑えられる。

# 遅い時間帯でのC点ピボット

このシナリオにはいろんな形があり、これが起こると、確信を持って枚数や株数を多くできるだけでなく、大きな利益になりそうなきは自信を持ってポジションを翌日に持ち越すこともできる。それが「遅い時間帯でのC点ピボット」だ。

これは通常のC点ピボットトレードの場合と同じで、最初にAアップかAダウンを付けたあとに、反転してピボットレンジ内かその近くでC点を付け、さらにピボットレンジも抜けると有望なシナリオが完成する。

もし1日の遅い時間帯にC点ピボットが起こったらどうなるのだろうか。まず、C点ばかりかピボットレンジまで抜けるほどの大きな反転が意味することは通常ひとつしかない。マーケットの全体的なセンチメントが間違っていたということだ。トレーダーと投機家の大部分がその日の早い時間帯に空売りしたが、上昇が現実になって追込まれた彼らはパニックを起こし、いくらでもいいから買い戻そうとした。その結果、マーケットはC点やピボットレンジまで押し上げられたのだ。

遅い時間帯でのC点ピボットになるときは、多くのプレーヤーがマーケットの間違った側で身動きがとれなくなっていることが多い。マーケットは彼らが売れば上げ、買えば下げたが、時間が遅いために手仕舞うため時間が限られている。例えば、トレーディングピットのブローカーが午前11時に先物を5000枚買う注文を受けたとすれば、取引終了までの3～4時間をかけて良い価格だと思えるところで執行していく。しかし、もし同じ注文が取引終了3分前に入ってきたらどうなるだろうか。彼は必死でこの注文を処理しようとするが、時間が短いため通常よりも条件はずっと悪くなる。取引最後の3分間で5000枚の注文を処理するのは、ほとんどの場合どんなことをしても無理で、特にマーケットが激しく動いていればなおさらである。この悲惨なシナリオは、混んだ映画館で「火事だ」という叫び声が上がって200人の観客が一斉に出口に押しかけた状態に似ている。

トレーディングでは、このような買い戻しのパニックがあると、処理しなければならない注文が翌日まで残ってしまう。つまり、取引終了間際に処理できなかった注文と、自分が間違っていることを理解する羽目になる規律のないトレーダーの翌日に持ち越したポジションである。彼らは引けにかけて急騰したマーケットで空売りポジションを持ち越してしまうが、翌朝には我慢して寄り付きで買い戻すことになる。これらのことから、遅い時間にC点ピボットが付くと翌朝は同じ方向（上昇でも下落でも）に窓を空けて寄り付くと考えられる。

前述のとおり、C点ピボットが付くのは、多くのトレーダーがマーケットの間違った方向に捕まり、身動きがとれなくなっているときに起こる。C点ピボットは、彼らが自分たちに何が起きているのかを理解する前に彼らが間違っていることをいち早く教えてくれる。どの方向であれ、みんなが逃げ出そうとすることでマーケットが強く反転することを早めに警告してくれるのだ。そうすれば、彼らが踏んで価格を競り上げてくれる前に買ったり、彼らが投げる前に売ったりすることができる。

このようにしてパニックを伴う遅い時間帯にC点ピボットを付けたときには、低リスクで高勝率のトレードを翌日に持ち越すことができる。遅い時間にピボットレンジを抜けてC点が付いたときは、現在のポジション（買いでも空売りでも）を持ち越せば、翌朝は同じ方向に大きな窓が空くことが期待できる。もし現在空売りしているのならば、みんなが必死で売ってマーケットを押し下げて翌朝は下に窓を空けての寄り付きが期待できる。また、もし現在買っているのならば、みんなが必死で買い戻してマーケットを押し上げて翌朝は上に窓を空けての寄り付きが期待できる。

遅い時間帯でのC点ピボットを付けたときのトレードシナリオは、マーケットがピボットレンジとC点よりも上で引けた場合のみポジションを翌日に持ち越してもよい。

# ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値

本章で紹介する最後のピボットは短期のトレーディング概念で、私はこれを「ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値」と呼んでいる。トレーディングでみんなが知りたいことのひとつに、今日はトレンドがあるかどうか、つまりどちらか一方に安定的に向かうかどうかということがある。実は短期トレードに限って言えば、最初の1時間の高値や安値がトレンド日かどうかを早めに教えてくれるのだ。

そのためには、A点と前日のマーケットに基づいたピボットレンジにかかわるいくつかの条件がそろう必要がある。

- 最初の1時間の高値か安値がピボットレンジ内にある
- 最初の1時間が終わった時点でAアップかAダウンが付いている
- 最初の1時間が終わったときの価格がその日のそれまでの値幅の極端な値（高値か安値）から15%以内にある
- 上の条件がすべてそろったら、トレンド日の可能性が高い

ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値のお膳立ての例を見てみよう。原油の最初の1時間の値幅が25.10～25.60ドル、ピボットレンジが25.05～25.15ドルだとすると、最初の1時間の安値である25.10ドルがピボットレンジ内にある。また、オープニングレンジは25.15～25.30ドルで、マーケットは最初の1時間で25.38ドルのAアップを付けた。

最初の1時間が終わったときの価格は25.56ドルで、これはそれまでの極端な値から15%以内（25.56ドルは高値から8%の位置にある—— $(25.60 - 25.56) \div (25.60 - 25.10) = 8\%$ ）にある。要するに、マーケットはそれまでの高値近くで推移していることになる。

この日は、マーケットが25.38ドルでAアップを付けたので、そこで買う。最初の1時間の安値がピボットレンジ内にあったので、上昇トレンド日になることを期待して、25.56ドルで買いポジションを増やす。このとき損切りはAアップの25.38ドルに置くか、オープニングレンジの時間枠の2倍の時間の時間ストップを設定しておく。つまり、もしマーケットがこの時間内に期待した方向に動かなければ、手仕舞うことにする。

ピボットレンジ内における最初の1時間の高値か安値かどうかを判断するためには、まず取引開始から最初の1時間でAアップかAダウンを付け、1時間たった時点での価格がそれまでの極端な値の15%以内にあるかどうかを調べる。

いつものようにすべては対称なので、反対のシナリオも見ておこう。今回も原油で、最初の1時間の値幅は25.00～25.35ドル、ピボットレンジは25.30～25.40ドルなので、このピボットレンジ内に最初の1時間の高値がある。オープニングレンジは25.15～25.25で取引開始から1時間以内に25.07でAダウンを付け（Aの値は8ティック）、寄り付きから1時間後の価格は25.03となった。最初の1時間の高値がピボットレンジ内にあるので、下降トレンドの確かなサインと言える。Aダウンで空売りをする。最初の1時間が終わったときの価格はそれまでの安値から15%以内にあるため、そのときに増し玉をしてもよい。おさらいとして、いくつかのシナリオを挙げておく。以下のシナリオがピボットレンジ内における最初の1時間の高値か安値に当たるかどうかを判断してほしい。

## シナリオ1

- 天然ガスの最初の1時間の値幅は4.000～4.060
- オープニングレンジは4.015～4.030
- Aの値が0.020なので、最初の1時間に4.050でAアップを付けた

- ピボットレンジは**4.010～4.015**
- 最初の1時間が終わった時点での価格は**4.055**

これはピボットレンジ内における最初の1時間の安値なのだろうか。条件を検証してみると、最初の1時間でAアップを付けており、1時間が経過した時点の価格は極端な値の高値から15%以内にある。高値からわずか1ティック下である。しかし、安値の**4.000**はピボットレンジの**4.010～4.015**に入っていないため、これはピボットレンジ内における最初の1時間の安値ではない。

## シナリオ2

- 原油の最初の1時間の値幅は**24.50～25.10**ドル
- オープニングレンジは**24.95～25.05**ドルで、**24.87**ドルでAダウンを付けた（Aの値は8ティック）
- ピボットレンジは**24.90～25.20**ドル
- 最初の1時間が終わった時点での価格は**24.55**ドル

このシナリオはピボットレンジ内における最初の1時間の高値だろうか。今回のお膳立てはAダウンを1時間以内に付け、最初の1時間の高値はピボットレンジ内にある。1時間後の価格の**24.55**ドルも極端な値の安値から15%以内にある。つまり、これはピボットレンジ内における最初の1時間の高値であり、トレンド日であることを示唆している。

## シナリオ3

- 原油の最初の1時間の値幅は**27.10～28.20**ドル
- オープニングレンジは**27.16～27.22**ドルで、**27.30**ドルでAアップを付けた（Aの値は8ティック）
- ピボットレンジは**27.09～27.11**ドル
- 最初の1時間が終わった時点での価格は**28.00**ドル

このシナリオはピボットレンジ内における最初の1時間の安値だろうか。ここでも条件をひとつひとつ検証していこう。Aアップは最初の1時間以内に付け、この時間帯の安値である**27.10**ドルはピボットレンジ内に入っている。1時間後の価格は**28.00**ドルで高値の**28.20**ドルの15%以内なので、これはピボットレンジ内における最初の1時間の安値でトレンド日だということを示唆している。このシナリオでは、最初の1時間の値幅が比較的大きいことに注目してほしい。第2章で紹介した通常よりも狭いピボットレンジ（**27.09～27.11**ドル）から考えて、この日の値幅は幅広くなることが予想できる。

# 信用できないトレード

ピボットの概念のなかで、もしかしたら信用できないトレードがあるので注意を喚起しておきたい。これはピボットレンジに対してC点を付けることに失敗したのを利用するトレードである。マーケットのボラティリティが異常に高く、A点とC点の間で大きく上下しているようなときに起こる。ボラティリティが高いと簡単に逆行してしまうため、トレードするのは非常に難しい。お膳立てを見てみよう。

マーケットが良いAアップを付けると、この強い上昇相場でみんなが買うが、しばらくしてマーケットは大きく崩れ、中立のオープニングレンジを下にブレイクするとB点も超えてC点に向かった。しかし、価格はピボットレンジを通して素晴らしいC点を付ける代わりに、その付近で反転してC点から2〜3ティック離れてしまう。これがC点を付けることに失敗した例である。

このようなときはC点寸前で反転したところで買えば、この動きを利用できる。ただ、この場合はまた簡単に反転して逆行するかもしれないため、利益が出たらすぐに手仕舞う必要がある。

# ACDシステムのダマシのトレード

次は、ACDシステムのダマシのトレードを紹介しよう。このトレードは、ボラティリティが低くてちゃぶついたマーケットに向いている。例えば、2001年1～7月のマーケットは、この戦略を用いる素晴らしいチャンスをもたらしてくれた。ちゃぶついたマーケットでは、良いA点やC点が付いても反転して、損切りして手仕舞うことになる。つまり、ちゃぶついたマーケットでは動きが不安定ではっきりとした方向が分からないため、ピボットレンジをブレイクする良いA点などに基づいて仕掛けてもうまくいかないことがある。これはちゃぶついたマーケットだとACDシステムでとらえる方向に十分なモメンタムがないことが多いからで、むしろ逆行して反対方向に行ってしまう可能性が高い。

そこで、このシナリオではマーケットがAアップの上で失速してピボットレンジを下回るのを待ち、ピボットレンジのすぐ下で空売りする。こうすれば、ピボットレンジをブレイクする良いAアップで仕掛けたときには損切りするところで空売りするのと同じ効果がある。反対に、もしマーケットがAダウンの下で失速したときは、ピボットレンジの上まで上昇するのを待って買う。このときの仕掛けのポイントはピボットレンジのすぐ上で、ピボットレンジを抜けたAダウンのトレードが損切りする場所になっている。

ただ、このトレードには損切りを置く基準点が定義されていないため、リスクの高いトレードだということを知っておいてほしい。このトレードを執行するときは十分な注意が必要で、うまくいったら素早く利食ってほしい。

## まとめ

これまで述べてきたように、ACDシステムの指標（A点、C点、ピボットレンジ、ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値など）の前提を理解すれば、これらの基準でマーケットをチェックできる。マーケットはシナリオどおりのときもあれば、シナリオどおりに進んでくれないときもある。もし何らかの出来事、例えばピボットレンジを抜けてAアップを付けたり、ピボットレンジ内における最初の1時間の高値や安値の条件を満たしたりしたら、ある特定の結果が予想できるため、それに合わせて仕掛けることができる。もしそのように進まなければ、その日はトレードしなればよい。ACDシステムの良い点は、指標を1つつ積み重ねていく単純さにある。言い換えれば、これは論理を積み重ねていくシステムなのだ。

本章を終える前に、これまでの原則をよく示している注目すべきトレードをいくつか紹介したい。これらが実際にあったトレードだということは保証する。

最初に思い浮かぶのは、大変遅い時間帯でのC点ピボットトレードだ。このシナリオでは、1日の遅い時間に劇的な反転が起こるということを思い出してほしい。こうなると、買いでも売りでも翌朝は望む方向に窓を空けて寄り付くことを期待し、ポジションを持ち越したまま帰宅することになる。

以前、私の友人がNYMEX（ニューヨーク商業取引所）のトレーディングビットで原油ブローカーをしていた。名前はグリースとしておこう。彼は世界最大の石油貿易会社の中心的なブローカーで、相当量のトレードを行っていた。

1990年8月1日水曜日、原油のオープニングレンジは**20.95～21.05**ドル、前日の動きに基づいたピボットレンジは**21.20～21.26**ドルだった。マーケットは寄り付きから棒下げで**20.78**ドルに達し、その途中の**20.87**ドルでAダウンを付けた。

それまでのシナリオとAダウンを付けたことから、この時点では弱気の姿勢で臨んだと思うだろうが、このとき私は2つのことを知っていた。1つ目は**30**立会日前がプラス日だったということで、これは始値がピボットレンジの下で終値がその上だったことを意味している。8月1日も始値はピボットレンジよりも下だったため、その後上昇して終値はピボットレンジを超える可能性があることは分かっていた。また、ナンバーライン値の**30**日間の合計（詳しくは第4章で紹介する）が弱気の値から強気の値に変わりつつあり、この先徐々に強気になることが示唆されていた。

この日の午後、取引終了の約1時間前にマーケットはぐんぐん上昇し始めた。私にはこのとき何が起きているのかが分かっていた。ピボットレンジをブレイクして、それよりも上で引けるのだ。プラス日になることを予想しながらペプシ2本とヨーデル4本という栄養満点の昼食をすませ、私はビットに行って**21.15～21.25**ドルで大きな買いのポジションを建てた。トレーディングビットではみんな買い気配値や売り気配値を大声で叫ぶため、実質的な公開オークション会場のようにほかの連中の手の内は分かっている。そのため、私は友人でブローカーのグリースが**21.10**ドルから空売りしていることも分かっていた。そしてさらに強力な上昇が始まっていたことも、その先でさらに上げ圧力がかかることも知っていた。

5分後、マーケットは**21.20～21.26**ドルのピボットレンジを抜けて**21.30**ドルまで達した。ここでACDシステムの基本に戻ると、オープニングレンジが**20.95～21.05**ドルですでにAダウンが付いていれば、Cアップはどこになるのだろう。このころのCの値は**16～18**ティックなので、今回は**17**ティックとすればセンチメントが反転するC点は**21.22**ドルで、これはピボットレンジ内にある。

これはめったに起こらない遅い時間帯でのC点ピボットのお膳立てになっていた。オープニングレンジの上限近くで買ったのは、すでにこうなることを予想していたからだだった。そしてピボットレンジを抜けてC点を付けたところで、その後も大幅に上昇するであろうことを私は確信した。

C点ピボットのシナリオは、みんなが間違っていくらでもいいから逃げ出したいときに起こる。パニックを伴った踏みが取引終了直前の**10～15**分で価格を**21.30**ドルから**21.60**ドルに押し上げ、結局この日は**21.55**ドルで引けた。

正直に言えば、このときの私の買いポジションは巨大で、私の資金量を考えれば買いすぎていた。この日の感情と、遅い時間帯でのC点ピボットだと分かっていたことで調子に乗ってしまったのだ。多分このとき買った分を合計すれば**500～600**枚になり、途中で約**200**枚売ったと思う。



場が引けてから私はポジションを見直し、一部を売ったほうが良いと判断した。そこで友人のグリースに50枚売りたいともちかけた。その日、彼が大量に空売りしていたことを知っていたからだ。しかし、彼はこれをきっぱり断った。

「まあいいさ、せっかくチャンスをあげたのに」と私は思った。それなら全部翌日まで持ち越すだけだ。私は木曜日の朝に大きな窓を上にかけての寄り付きを期待して約400枚のポジションを持ち越した（なにしろ遅い時間帯でのC点ピボットなのだ）。

木曜の午前2時に電話が鳴った。掛けてきたのはグリースのようだった。

「まだ50枚売ってくれるかい」という声が聞こえたような気がするが、もうろうとしていた私はよく理解できないまま電話を切ってしまった。

しばらくして頭がはつきりしてくると、本当にグリースが電話してきたのか、それとも悪い夢でも見たのかが気になった。しかしすでに午前3時になっていて、彼にまだ50枚買いたいかとは電話できなかった。

すっかり目が覚めてしまった私は、何か食べようと台所に行きテレビを付けた。すると、イラクがクウェートに侵攻して、海外の原油市場ではすでに2ドルも上げていた。

21.15～21.25ドルで原油の買いポジションを建てたとき、私はイラクとクウェートの関係については何も知らず、純粹にACDシステムに従ってトレードしただけだった。Aダウンを付けたが、マーケットは上昇し、その30立会日前がプラス日で終値がピボットレンジよりも上だったということが分かっていた。これらのことから買いのリスクは小さくて利益はかなり大きくなる可能性が高いうえに、遅い時間帯でのC点ピボットが起こったため、買いポジションを翌日（木曜日の朝）まで持ち越せば、さらに大きな利益が上がりと判断しただけだった。

もちろん木曜日の朝の原油価格は大幅に値上がりしていた。私は21.15～21.25ドルで買っていたが、21.10ドルで空売りしていたグリースの立場は良いとは言い難い。しかし、水曜日の引け後に21.55ドルで50枚買わないかともちかけたとき断ったのは彼のほうだ。

私にとっては、これがC点ピボットの究極のトレードとなった。映画館の火事のシナリオと同様、みんなが出口に押しかければパニックになるということ覚えておいてほしい。マーケットの言葉で言えば、このパニックは一方向への強い動きにつながる（空売りの踏みなら上昇だし、買いの投げなら下落）。そしてこのパニックが取引時間の遅い時間帯に起これば、グリースのように身動きがとれなくなって翌朝に逃げ出そうとしているトレーダーが残っていることも分かっている。

C点トレードの例をもうひとつ見ておこう。1989年12月29日は大納会で、この日は通常よりも早い13時に取引が終了する（東部標準時間）。この日は灯油1月限が納会を迎える日でもある。1年最後の取引であることや取引時間が短いことや納会であることなどから、この日はみんなあまり積極的にトレードしない。それに、トレーダーの多くは受け渡しを心配する。灯油などのトレードは、売りでも買いでもポジションをマルにしておかなければならない。それをしていないと、納会日には灯油の現物を受け渡ししなければならなくなるからだ。投機的なトレーダーならそのような事態は避けたい。

この日のオープニングレンジは0.9700～0.9750だった。このときの灯油は25ポイント単位で取引されているため、灯油先物1枚で1セント動けば420ドルの差が出る。当時の灯油の史上最高値は1.02だったことを覚えておいてほしい。このときの背景にもうひとつ付け加えると、この日が大納会で、灯油という銘柄が産業にも一般消費者にも影響のある商品だったこともあり、アメリカの先物取引を監督する政府機関のCTFC（商品先物取引委員会）や取引所のコンプライアンス部門の面々が10人ほどピットの周りに立って、トレーディングが秩序正しく行われているかどうかを見守っていた。

取引が開始されると、価格はすぐ0.9350に急落して途中でAダウンを付けた。しかし、その日の遅くに（ただしこの日は取引終了が早い）上昇が始まった。オープニングレンジ（0.9700～0.9750）を上をブレイクすると0.9875まで上がり、0.9950のC点に近づいたあと下げに転じたため、が最初はCアップで売るチャンスに見えたが、マーケットは再度上昇したのだ。

私は灯油1月限を0.9950で27枚買い、そのままこの年最後の午後を迎えた。このとき、灯油ビットのブローカーが

「灯油1月限はないか」と叫び出した。彼の名前をオーノーとしよう（彼のバッジの名前とは違うが、この状況ではこの名前が合っていると思う）。

灯油の価格は**0.9950**、**1.00**と上がり、商品取引ブローカー大手のフィブロが**1.02**で買い注文を出した。史上最高値だ。そのあとも価格は上げ続け、**1.03**のあと**1.04**を付けた。オーノーも買い注文を出して**200**枚買おうとしていた。

彼の顔を見たとき、彼の目にパニックが見てとれた。どんどん上がっていくマーケットで大量に買わなければならない、**1.06**から**1.10**に上がったのにまだ3枚しか買えていない。あと**197**枚も買わなければならないのだ。

オーノーは大声で**1.15**、**1.20**と叫んでさらに5枚買った。取引所でビットの取引金額を記録するリングレポーターは、この殺気立った動きにてんでこ舞いしている。**NYMEX**の価格掲示板は**1.02**だが、オーノーはすでに**1.20**で買い注文を出してそれで買っている。

オーノーの注文は**1.30**に上がり、まだ上げようとしている。そして**1.50**になったところで私は**27**枚を彼に売った。仕掛けたのが**0.9950**なので**51%**の利益が出たことになる。マーケットが私の思いどおりに展開した結果、**10**分間で**57**万ドルの利益をC点ピボットトレードで上げたのだ。

トレーディングビットが大混乱に陥る様子は想像を絶している。**CFTC**の面々や**NYMEX**社長のパット・トムブソンや監視部門の責任者もその場にいたが、とにかく大混乱だった。取引所の価格表示はトレードに追いつけず、私は**1.50**でオーノーに売った**27**枚が間違いなく処理されるか確認しなければならないと思ったほどだ。

最後に、取引所の幹部が決断を下した。トレード自体は**1.60**まで行われていたが、取引所はこの日の高値を**1.10**と決定したのだ。その価格よりも**40**セントも高い**1.50**でオーノーに合法的に売っていた私にとって、これは信じられない出来事だった。

私は取引所の社長のところに飛んで行き、「この決定で私は大きな損害を受ける。あなたは私の資金を奪っているのと同じだ」と文句を言った。

しかし、彼は「これが取引所の決定だ」と言っただけだった。

そこで私は、オーノーとのトレード価格を**1.50**から**1.10**に修正しないで**27**枚をそのまま保有し、必要なら現物を受けようと決心した。

そしてその日の取引、というよりもその年の取引が終了した。怒りが収まらないまま取引所の上の階にある事務所に戻ると、トムブソン社長とコンプライアンス部門や事務処理部門の責任者などの幹部がそろってやってきた。「少し話したいことがある」と言うのだ。

手短かに言えば、彼らは**27**枚をオーノーに**1.10**で売るよう私を説得しにきたのだった。「取引所のために頼む。どうしても彼に**27**枚を売ってほしい」と彼らは言った（そのすぐあとで、彼らは私以外にオーノーの注文に応じられる人を見つけられなかったことを知った）。

利他主義は別としても、取引所のためにそうすれば、私は自分の利益を**45**万ドルも減らすことになる。

最後に私は言った。「はっきり言っておく。私は取引所のミスによって**45**万ドルもの損害を受け入れるんだからな」

その日の灯油市場の調査では、取引所のコンプライアンス部門から、主要なローカルズで独立系のトレーダーの私がなぜ積極的にビットで買っていたのかとわざわざ聞かれた。大納会の日みんなが積極的なトレードを控えるなかで、私は**0.9950**で買い、活発に買い気配が付くなかでずっと保有していたからだ。

彼らは、なぜこのようなトレードをするのかと理由を知りたがった。

理由は簡単で、良いC点ピボットだったからだ。

ただ、公正を期してこのエピソードの結末を書いておく。新年を迎えて灯油1月限は納会を迎え、新たに始まった2月限のトレード初日は**0.8500**で寄り付いた。つまり、**0.9950**で保有し続けなくてよかったのだ。結局のところ、**1.10**で売る決断は私にとっても取引所にとっても正しい判断だった。

# 第4章 マクロACD

## Macro ACD

第1章ではマイクロACD、つまりその日のオープニングレンジに基づいてA点やC点を探す方法を紹介した。しかし、良いAアップやCダウンをもっと大きな流れのなかで見た場合にはどのような意味があるのだろうか。ミクロ的な視点では、Aダウンは空売りを仕掛けるところで、Aアップは買いを仕掛けるところだが、その日の取引が終了したあとと振り返って、これらのポイントは一体何を意味するのだろうか。そこでマクロACDの概念が登場する。簡単に言えば、マクロACDでは連続する30立会日の出来事を見ていく。そして1日ごとにAアップが付いたとか、Cダウンが付いたなどと確認しながら、出来事に応じて立会日ごとに-4～+4の値（ナンバーライン値）を付けていく。

マクロACDでは、立会日ごとにAアップやAダウンが付いたか、CアップやCダウンが付いたか、終値はどうだったかなど、起こった出来事に応じて値を付けていく。

図4.1～図4.26は、想定できるさまざまなマーケットの動きやシナリオとそれに対応するナンバーライン値を示している。

図4.1 天然ガス7月限（2001/6/12）

マーケットは4本目の20分足でAアップを付け、それ以降取引終了まで一度もオープニングレンジを下回ることなく引けた。この日のナンバーライン値は+2。

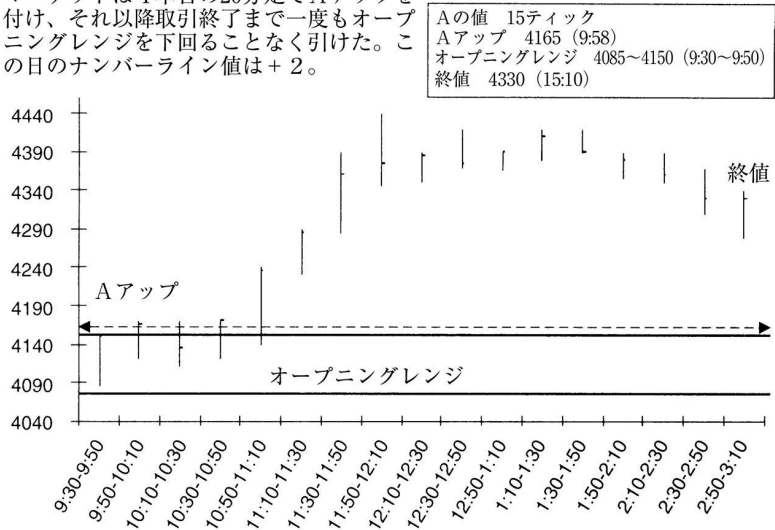


図4.2 ガソリン7月限 (2001/6/27)

マーケットは2本目の20分足でAダウンを付け、それ以降取引終了まで一度もオープニングレンジを上回ることなくオープニングレンジより下で引けた。この日のナンバーライン値は-2。

Aの値 25ティック  
Aダウン 7415 (10:25)  
オープニングレンジ 7440~7580 (9:50~10:10)  
終値 7065 (15:10)

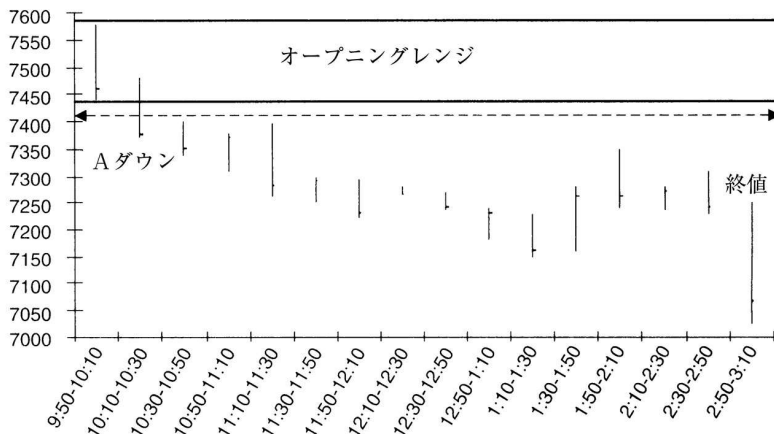


図4.3 ナスダック先物9月限 (2001/6/28)

マーケットは3本目の15分足でAアップを付けたが、終値はオープニングレンジよりも上ではなかった。この日のナンバーライン値は0。

Aの値 17.5ティック  
Aアップ 1832.5 (10:10)  
オープニングレンジ 1799~1815 (9:30~9:45)  
終値 1801 (16:15)

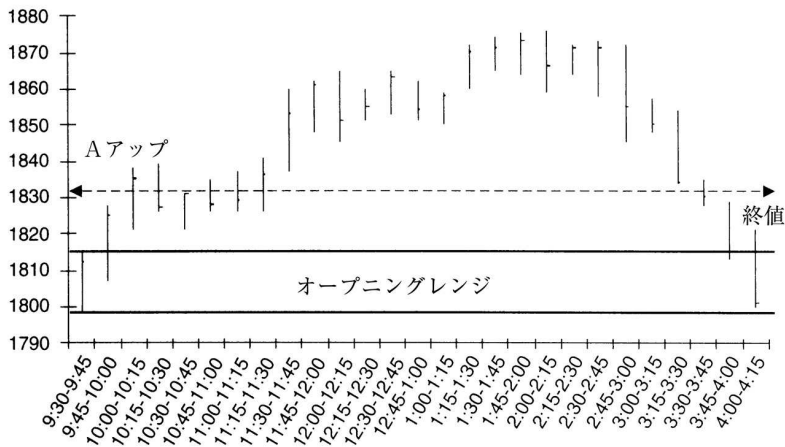


図4.4 JPM (2001/6/7)

マーケットは3本目の20分足でAダウンを付けたが、終値はオープニングレンジよりも下ではなかった。この日のナンバーライン値は0。

Aの値	33セント
Aダウン	45.52 (10:15)
オープニングレンジ	45.85~46.09 (9:30~9:50)
終値	45.94 (16:00)

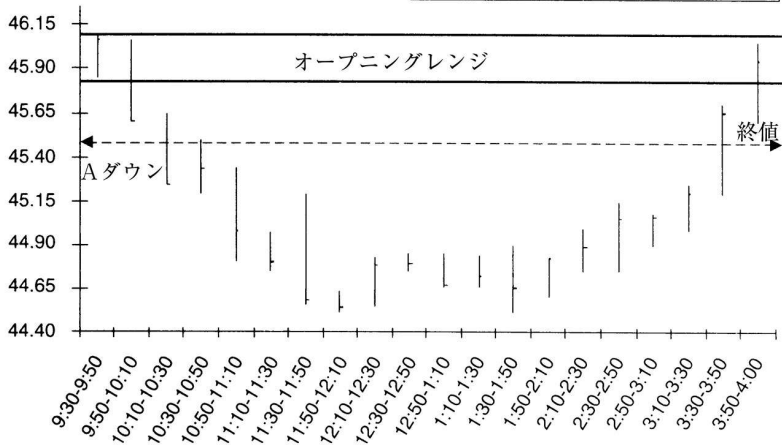


図4.5 YAHOO (2001/3/22)

マーケットはオープニングレンジの両側で売買されながらもAアップもAダウンも付けずにいたが、この日最後の足でAアップを付けてそれよりも上で引けた。この日のナンバーライン値は+2。

Aの値	27セント
Aアップ	14.595 (15:52)
Aダウン	13.29
オープニングレンジ	13.56~14.325 (9:30~9:50)
終値	14.93 (16:00)

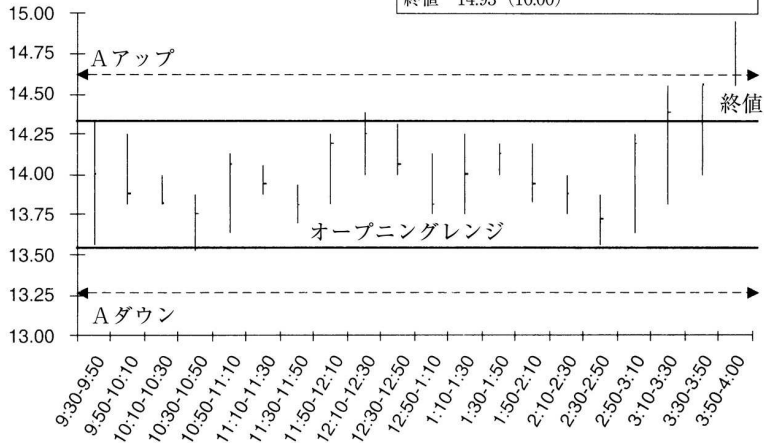


図4.6 金8月限 (2001/6/27)

マーケットはオープニングレンジの両側で売買されながらもAアップもAダウンも付けずにいたが、取引終了から3本前の足でAダウンを付けてそれよりも下で引けた。この日のナンバーライン値は-2。

Aの値 1.20  
Aダウン 274.8 (14:07)  
オープニングレンジ 276.0~276.5 (8:20~8:30)  
終値 272.6 (14:30)

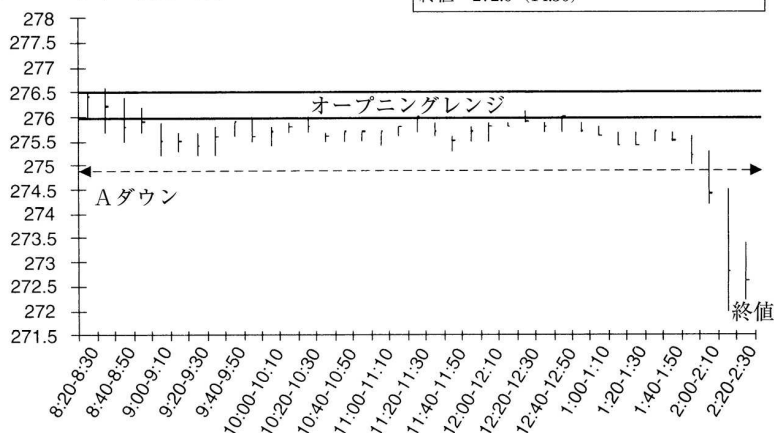


図4.7 砂糖7月限 (2001/6/29)

マーケットは11:30の足でAダウンを付けたあと、取引終了から2本前の足 (12:30) でオープニングレンジを超えてCアップを付けたあと、オープニングレンジを上回ったまま引けた。この日のナンバーライン値は+4。

Aの値 4ティック  
Cの値 13ティック  
Cアップ 922 (12:48)  
Aダウン 899 (11:42)  
オープニングレンジ 903~909 (9:30~10:00)  
終値 958 (13:20)

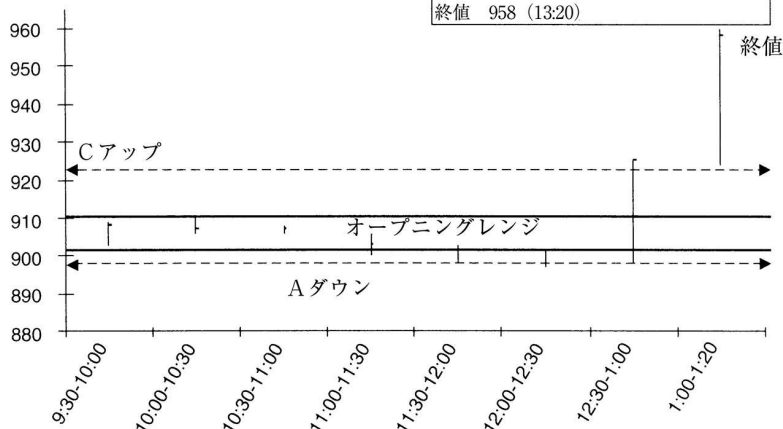


図4.8 GLW (2000/10/18)

マーケットは4本目の20分足でAアップを付け、この日最後の足でオープニングレンジを下回ってCダウンを付けた。この日のナンバーライン値は-4。

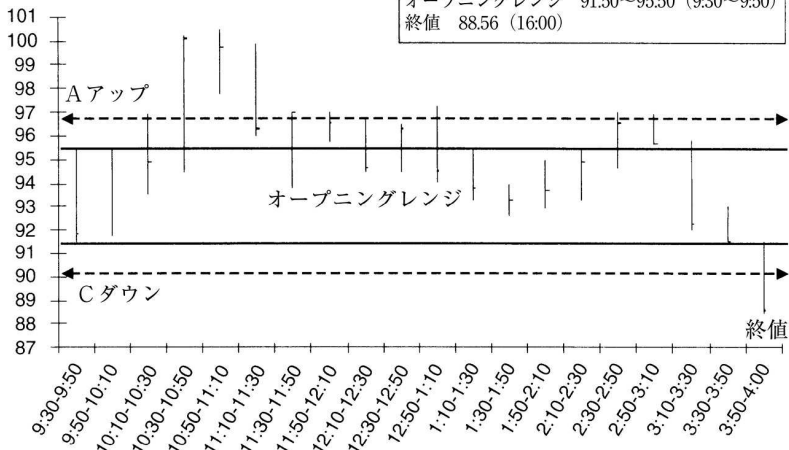


図4.9 ENE (2001/6/19)

マーケットは2本目の20分足でAダウンを付け、15:30の足でCアップを付けたあとそのままオープニングレンジよりも上で引けた。この日のナンバーライン値は+4。

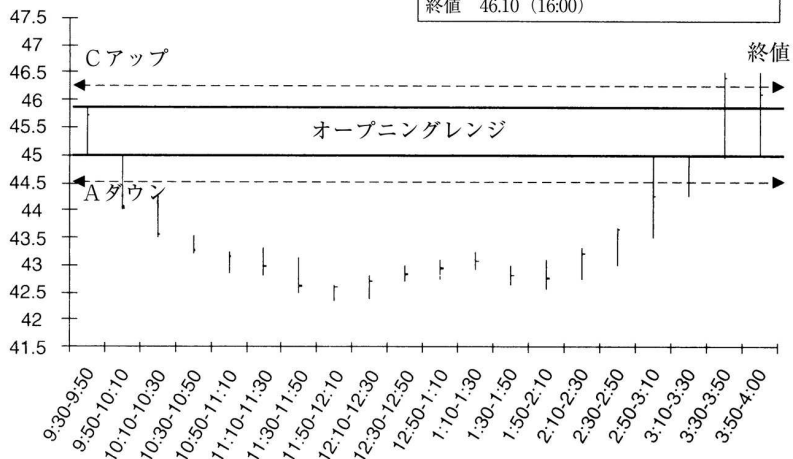


図4.10 ガソリン7月限 (2001/5/29)

マーケットは2本目の20分足でAアップを付け、13:30にオープニングレンジを下回ると13:50の足でCダウンを付けたあとそのままオープニングレンジの下で引けた。この日のナンバーライン値は-4。

Aの値	25ティック
Cの値	85ティック
Aアップ	9805 (10:19)
Cダウン	9615 (13:59)
オープニングレンジ	9700~9780 (9:30~9:50)
終値	9555 (15:10)

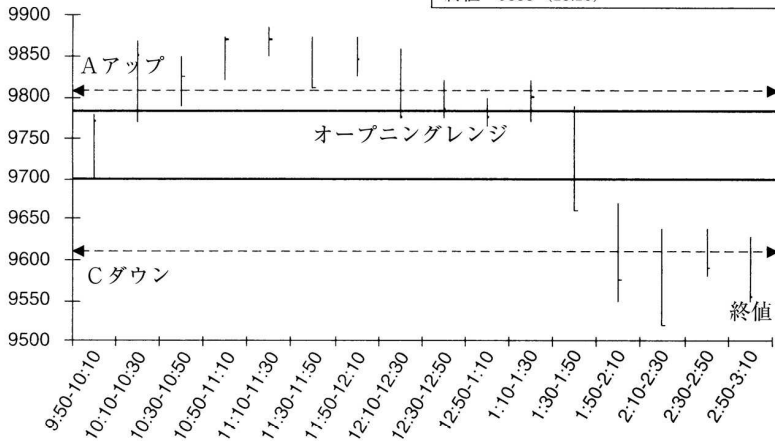


図4.11 QLGC (2001/6/22)

マーケットは2本目の20分足でAアップを付け、14:50の足でオープニングレンジを下回ってCダウンを付けたあと再び上げてオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は0。

AとCの値	55セント
Aアップ	54.95 (10:08)
Cダウン	52.05 (14:55)
オープニングレンジ	52.60~54.50 (9:30~9:50)
終値	53.46 (16:00)

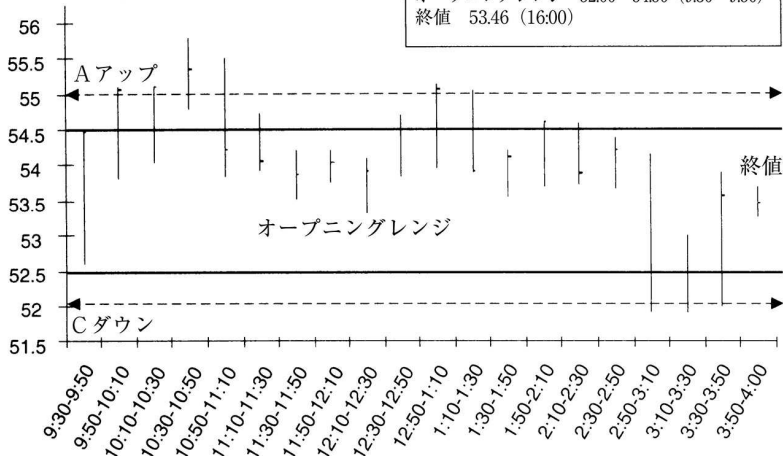




図4.12 BRCM (2001/3/1)

マーケットは11:50の足でAダウンを付け、15:10の足でオープニングレンジを超えてCアップを付けたあと再び下げてオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は0。

AとCの値 76セント  
Cアップ 47.20 (15:21)  
Aダウン 43.49 (11:56)  
オープニングレンジ 44.25~46.44 (9:30~9:50)  
終値 46.00 (16:00)

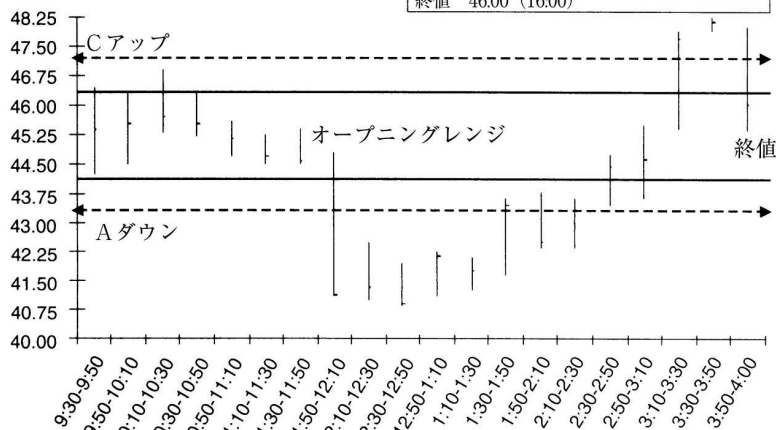


図4.13 綿花7月限 (2001/6/22)

マーケットは2本目の5分足でAアップを付け、11:50の足でCダウンを付けたあと13:50にオープニングレンジを上回った。この日のナンバーライン値は0。

Aの値 25ティック  
Cの値 50ティック  
Aアップ 40.20 (10:38)  
Cダウン 39.30 (11:52)  
オープニングレンジ 39.80~39.95 (10:30~10:35)  
終値 38.85 (14:40)

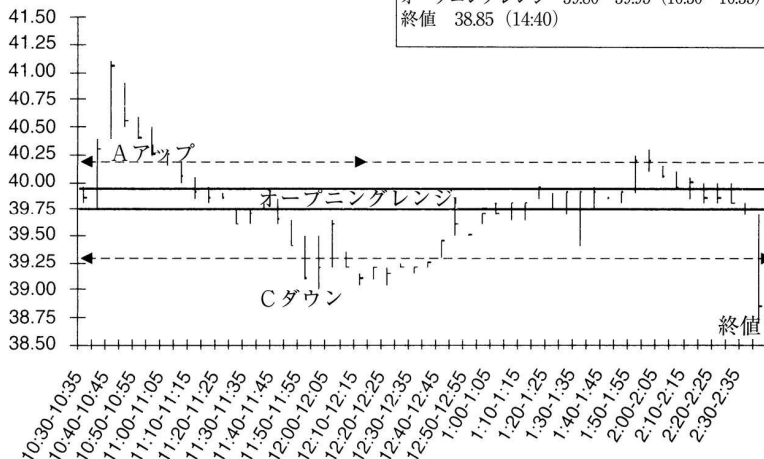


図4.14 原油9月限 (2001/7/9)

マーケットは3本目の20分足でAダウンを付け、12:15の足でCアップを付けたあと14:30の足でオープニングレンジを下回った。この日のナンバーライン値は0。

Aの値	8ティック
Cの値	13ティック
Cアップ	2765 (10:17)
Aダウン	2727 (12:22)
オープニングレンジ	2735~2752 (9:45~10:00)
終値	2719 (15:30)

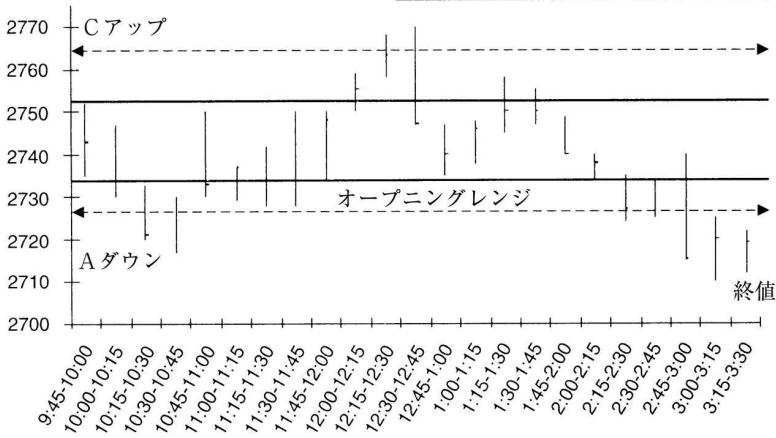


図4.15 S&P先物3月限 (2001/1/22)

マーケットは3本目の15分足でAアップを付け、13:30の足でオープニングレンジを下回ったあとCダウンを付けたが、その水準にとどまる時間が足りずCダウンを付けることに失敗し、オープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は+3。

Aの値	2.00
Cの値	1.50
Aアップ	1353.50 (10:07)
Cダウン	1344.50 (13:42)
オープニングレンジ	1346.00~1351.50 (9:30~9:50)
終値	1351.30 (16:15)

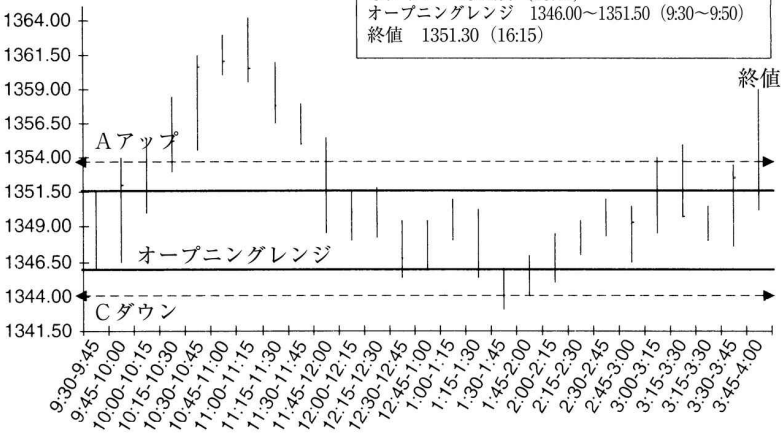


図4.16 ARBA (2000/3/31)

マーケットは2本目の20分足でAダウンを付けたあと13:50の足でCアップの目標値に達したが、その水準を上回ることができずCアップを付けることに失敗したあとオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は-3。

AとCの値	3.05ドル
Cアップ	110.675
Aダウン	99.95 (9:55)
オープニングレンジ	103.00~107.625 (9:30~9:50)
終値	104.00 (16:00)

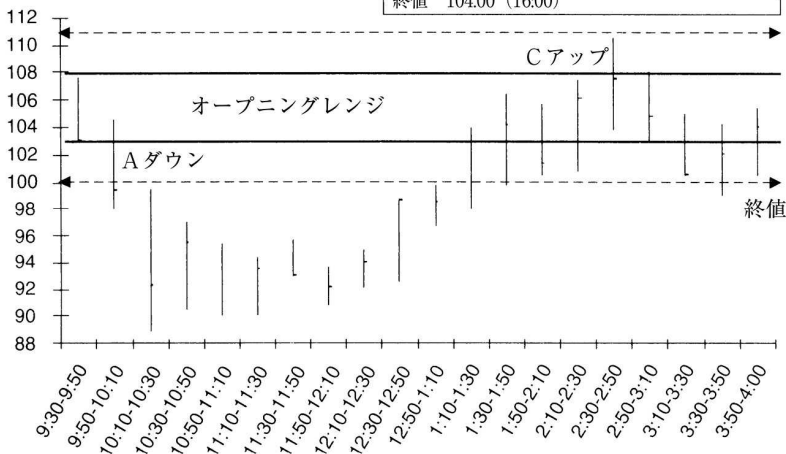


図4.17 MSFT (2001/7/2)

マーケットは6本目の20分足でAアップに達したが、その水準を上回ることができずAアップを付けることに失敗したあと、13:50の足でAダウンを付けてから、オープニングレンジを下回って引けた。この日のナンバーライン値は-3。

Aの値	47セント
Aアップ	73.12
Aダウン	71.21 (10:30)
オープニングレンジ	71.68~72.65 (9:30~9:50)
終値	96

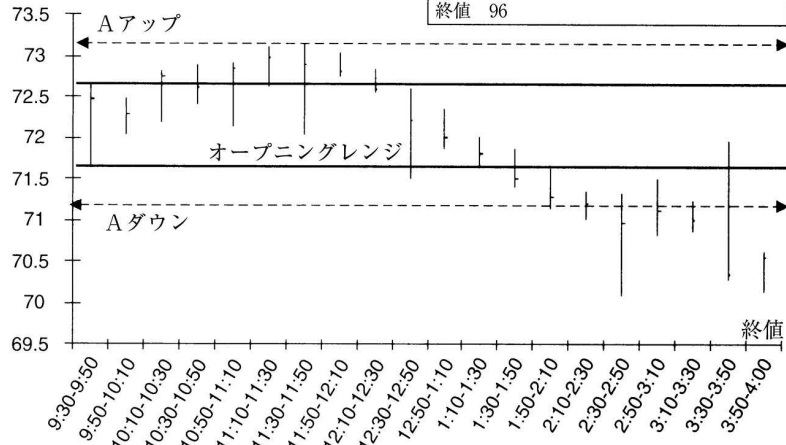


図4.18 YHOO (2000/3/22)

マーケットは4本目の20分足でAダウンに達したが、その水準にとどまる時間が足りずAダウンを付けることに失敗したあと、14:10の足でAアップを付け、そのままオープニングレンジよりも上で引けた。この日のナンバーライン値は+3。

Aの値	1.79ティック
Aアップ	122.353 (14:11)
Aダウン	113.523 (10:46)
オープニングレンジ	115.313~120.563 (9:30~9:50)
終値	127.25 (16:00)

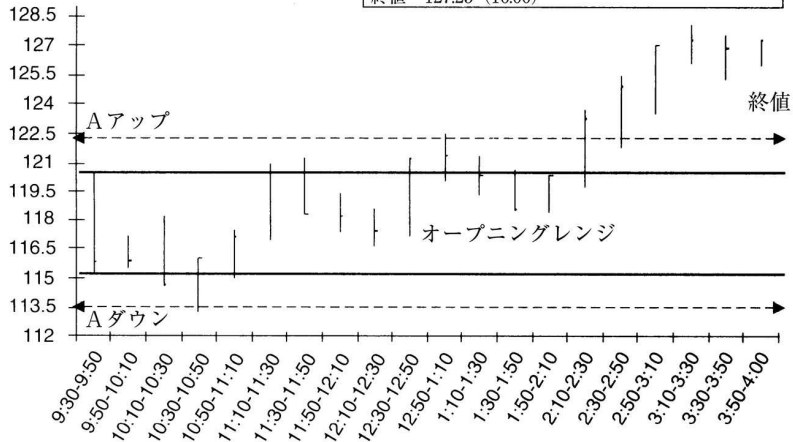
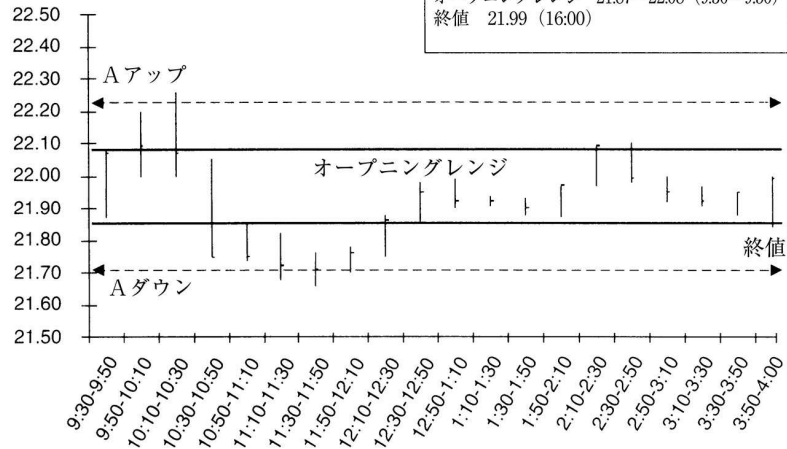


図4.19 T (2001/7/5)

マーケットは3本目の20分足でAアップに達したが、その水準にとどまる時間が足りずAアップを付けることに失敗したあと、11:10の足でAダウンを付け、最後はオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は-1。

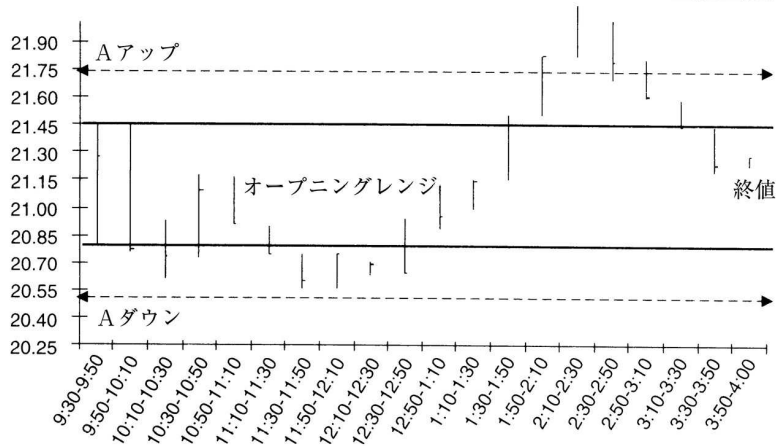
Aの値	14ティック
Aアップ	22.22 (11:17)
Aダウン	21.73
オープニングレンジ	21.87~22.08 (9:30~9:50)
終値	21.99 (16:00)



## 図4.20 RDC (2001/7/10)

マーケットは11:30の足でAダウンに達したが、その水準にとどまる時間が足りずAダウンを付けることに失敗したあと、13:50の足でオープニングレンジを上回ってAアップを付け、最後はオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は+1。

Aの値 26ティック  
Aアップ 21.71 (13:56)  
Aダウン 20.54  
オープニングレンジ 20.80~21.45 (9:30~9:50)  
終値 21.28 (16:00)



## 図4.21 CSCO (2001/6/22)

マーケットは4本目の20分足でAアップに達したがその水準を上回ることができずAアップを付けることに失敗し、その後はAダウンまでは下げなかったがオープニングレンジよりも下で引けた。この日のナンバーライン値は-1。

Aの値 31ティック  
Aアップ 18.54  
Aダウン 17.28  
オープニングレンジ 17.59~18.23 (9:30~9:50)  
終値 17.52 (16:00)

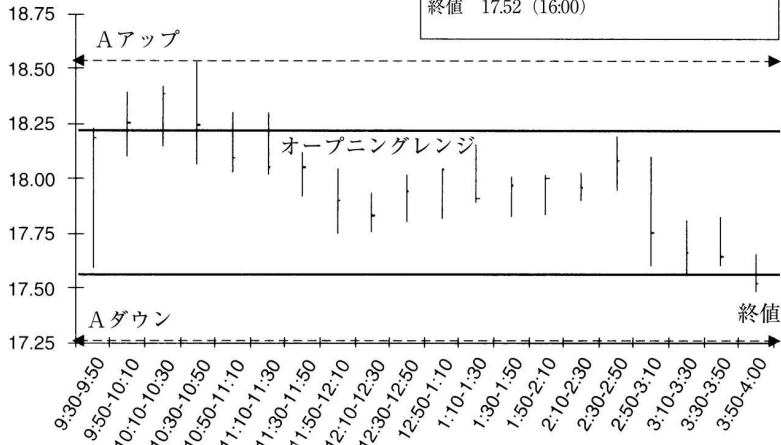


図4.22 EBAY (2001/6/7)

マーケットは11:50の足でAダウンに達したが、その水準にとどまる時間が足りずAダウンを付けることに失敗し、そのあとはAアップの水準まで戻ることなくオープニングレンジ内か上で引けた。この日のナンバーライン値は+1。

Aの値 73ティック  
Aアップ 65.88  
Aダウン 63.33 (11:55)  
オープニングレンジ 64.06~65.15 (9:30~9:50)  
終値 64.96 (16:00)

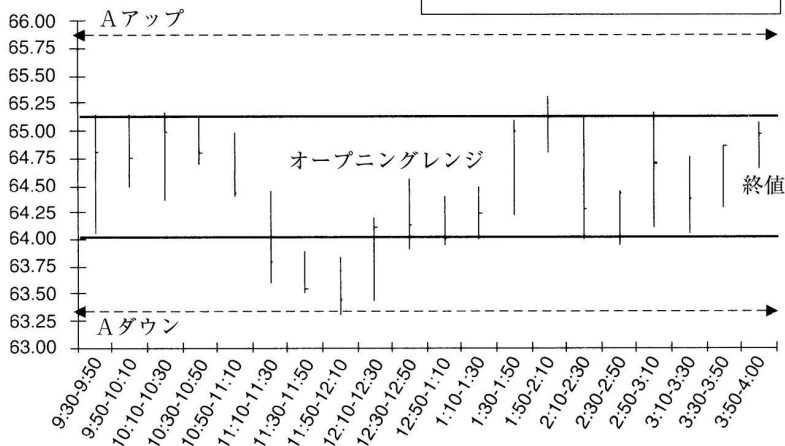


図4.23 銅7月限 (2001/6/15)

マーケットは10:55の足でAアップに達したが、その水準にとどまることができずAアップを付けることに失敗したあと11:55にオープニングレンジを下回ってAダウンの目標値に達し、ここでもその水準を維持できずにAダウンを付けることに失敗した。最後はオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は0。

Aの値 35ティック  
Aアップ 7265 (11:08)  
Aダウン 7160 (12:07)  
オープニングレンジ 7195~7230 (8:10~8:25)  
終値 7200 (14:10)

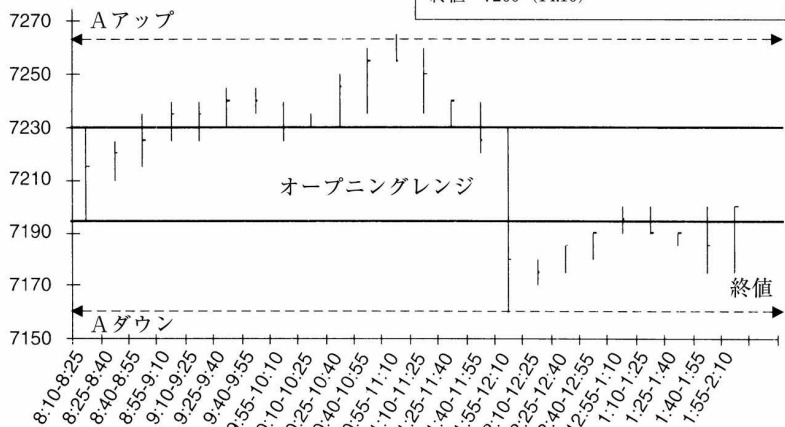


図4.24 カナダドル (2001/6/11)

マーケットは4本目の20分足でAダウンに達したが、その水準にとどまることができずAダウンを付けることに失敗したあと12:20にAアップの水準に達し、ここでもその水準を維持できずにAアップを付けることに失敗した。最後はオープニングレンジ内で引けた。この日のナンバーライン値は0。

Aの値 7ティック  
Aアップ 6590  
Aダウン 6569  
オープニングレンジ 6576~6583 (8:20~8:50)  
終値 6581 (16:00)

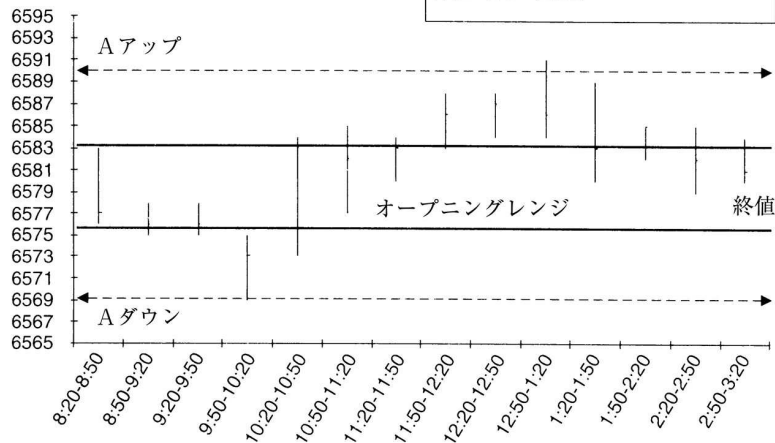


図4.25 BBY (2001/6/1)

マーケットは11:30の足でAアップを付けたあと12:10の足でオープニングレンジを下回ってCダウンに達したが、その水準にとどまる時間が足りずCダウンを付けることに失敗した。最後はオープニングレンジの上で引けた。この日のナンバーライン値は+2。

Aの値 17セント  
Aアップ 53.82 (11:41)  
Cダウン 53.08 (12:24)  
オープニングレンジ 53.25~53.65 (9:30~9:50)  
終値 54.04 (16:00)

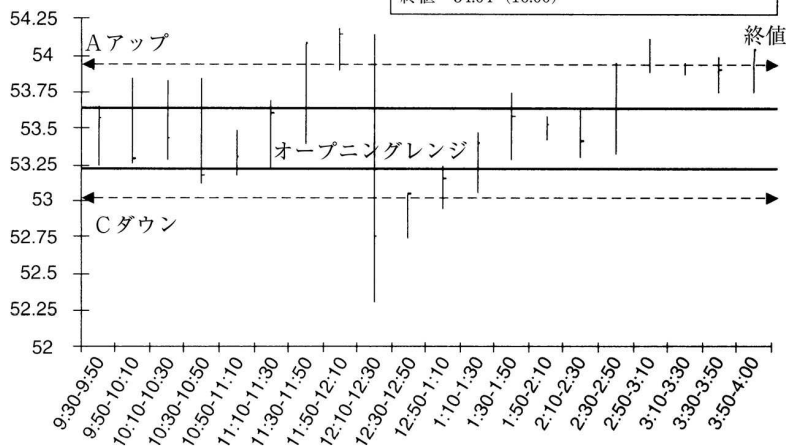
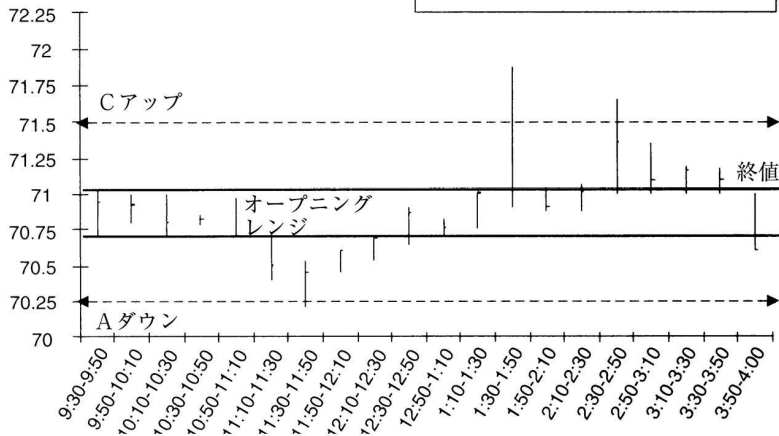


図4.26 FRX (2001/6/14)

マーケットは7本目の20分足でAダウンを付けたあと、13:30の足でオープニングレンジを超えてCアップに達したが、その水準にとどまる時間が足りずCアップを付けることに失敗した。最後はオープニングレンジの下で引けた。この日のナンバーライン値は-2。

Aの値 34ティック  
Cアップ 71.47 (13:50)  
Aダウン 70.26 (10:10)  
オープニングレンジ 70.70~71.03 (9:30~9:50)  
終値 70.60 (16:00)



毎日ナンバーライン値を検証していくと、過去30立会日の動きを反映した合計値が算出できる。この場合、30日は暦日ではなく立会日で、祝日や週末は除く。また主要な祝日の前日などマーケットが半日しか開いていない日も1立会日と考える。直近30立会日の合計値なので、31日目には直近の値を足して最初の値を外す。

ナンバーライン値の主な目的は、発達しかけている潜在的なトレンドを探すことにある。トレンドが形成されつつあると判断するためには、合計が0から-9や+9以上に進み、それが2日以上連続して続く必要がある（ACDシステム全体に言えることだが、これは株式にも商品にも応用できる）。合計値の±9は重要な値で、過去30日間の合計が2日以上連続してこれを上回れば統計的優位性があり、これが0から始まっていれば特にそうなる。言い換えれば、±9に達することだけが重要なのではなく、合計値が0から始まって数日間でその水準に達することが不可欠な条件となる。

**30立会日の合計値が0から-9や+9に達して、それが2日間以上続けば、統計的優位性がある。**

詳しく説明していこう。まず、このナンバーライン値とは、30立会日間の値をすべて合計した現在の値である。もし30立会日目が終わった時点で、それまでの+1や-1や+2や-2をすべて足してナンバーライン値が+5ならば、31日目はその日の値を足すと同時に最も古い1日目の値を引いて、現在の値を算出する。もしその翌日のマーケットがAアップを付ければ、前の図のようにその日の値は+2となる。このときに除外する30日前の値が-2なら、前日との差は+4となり（-2を除外して+2を足す）、ナンバーライン値の直近30日の合計値は、+9になる。そして翌日の合計値が+9以上なら、統計的優位性のある出来事としてトレード戦略に応用できる。

マクロACDナンバーラインの概念は、長期のシステムトレーダーにもデイトレーダーにも便利な指標となっている。第1章にも書いたが、まず何よりもACDシステムはボラティリティを利用している。言い換えれば、上昇でも下落でも適度な動きがなければAアップやAダウンで利益を出すことはできない。マーケットがオープニングレンジをある程度上回ってAアップを付ければ買い、オープニングレンジを下回ってAダウンを付ければ売る。ACDポイントは毎日、買うべきか、それとも売るべきかの手掛かりを与えてくれるのだ。



それでは、もっと長い期間ではどうだろうか。全体的なトレンドはどうすれば分かるのだろうか。トレンドが確認できるのはいつで、反転するのはいつなのだろうか。これらのことを知る助けになるのが、**ACD**ナンバーライン値だ。例えば、3日間マーケットから離れていても、その間のマクロ**ACD**さえ確認すればマーケットの動きが分かる。例えば、もし原油（または読者が観察しているマーケット）の3立会日の値が+2、0、+2だったとしたら、3日前のマーケットはAアップを付け（+2）、2日前は中立日（0）、そして前日はもう一度Aアップを付けた（+2）ということが分かる。もっと大きな流れで見ると、Aアップの日が2日あってその間が中立日なら、3日間で2日は強気の日で残りが中立だったということも分かる。そこで、この**ACD**の情報を基にして今日のトレードに臨めばよい。

仮に、過去3立会日の値が-3、-2、+2だったとしよう。これを1日ずつ見れば、最初の日にはAアップを付けることに失敗したあとAダウン（-3）を付け、2日目はAダウンを付け（-2）、3日目はAアップを付けた（+2）。しかし、大きな流れで見れば、最初の2日に2つの売りシグナル（1日目のAアップを付けることに失敗したあとAダウンを付け、2日目にもう一度Aダウンを付ける）があったあと、3日目に今度は強気のシグナルが出た。このようにシグナルに強弱が混じっているときは、**ACD**では翌日のトレードにおいてある特定の姿勢を取ることはないと考える。

過去2～3立会日のナンバーライン値を検証すれば、翌立会日の姿勢を強気か弱気か中立にするかが分かる。

本章の冒頭で触れたが、過去**30**立会日の合計値が2日連続で-9や+9ならば、マーケットはどちらかの方向に大きなモメンタムがある可能性が高い。実際、**30**立会日の合計値に基づいて、マーケットが大きく動く可能性のある重要な数字がある。それは、合計値が-9、0、+9などを付けたときだ。これらの数字を付ければ、マーケットが大きく動く可能性があるということである。逆に言えば、もし合計値がそれらの数値に達していないならば（-8～+8の間）、マーケットが大きく動くまでには時間がかかると判断できるのである。

**30**立会日の合計が0から-9や+9になってそれを2日連続で付ければ、ボラティリティが非常に上昇している可能性が高い。オプショントレーダーにとって、ボラティリティが高まると予想できればトレード戦略が立てやすくなる。さらに、-9や+9のナンバーライン値は、大きなトレンドができつつあることを知らせてくれるシグナルにもなっている。ただ、これは私が「目先の喜びルール」と呼んでいる条件が同時にそろわなければ、有効にはならない。このルールは、探している動きが素早く展開しなければシグナルは有効ではないということで、その場合は**ACD**システムのダマシのトレードになる可能性もある。

通常、マーケットが-9や+9の水準をブレイクすると、即座にナンバーライン値の方向に大きく動く場合が多い（もし合計値が-9なら下落、+9なら上昇）。ここで即座というのは、2～3立会日を意味している。第1章でも似た概念を紹介したが、トレードの成功において重要なのは価格よりも時間であり、もし展開に時間がかかりすぎると、カジノバスの乗客のようにみんなが同じ価格で仕掛けてしまう。このようなトレードにどれほどの意味があるのだろうか。第1章で見てきたとおり、良いAアップやAダウンが付くのはある特定の価格水準に一定時間とどまっていた場合だけで、それができなければ有効ではない。マクロ**ACD**ナンバーライン値も、-9や+9に達して翌日もそれが続いたのに予想した動きがすぐに起こらなければ、**ACD**システムのダマシのトレードになる可能性が高い。

時間とチャンスの概念を説明するためのたとえ話をしよう。アメフトファンならよく知っているように、タッチダウンを決めようとするランニングバックは一瞬のチャンスを狙っている。相手を突破するためにディフェンスの穴を探すのだ。もし穴があったとしてもそれはほんの一瞬で、もし彼が躊躇したり行く手を阻まれたりしたら、その穴、つまりチャンスは消えてしまう。しかし、もし彼がその穴を突破すれば、タッチダウンは目前だ。

マクロ**ACD**トレードも同じで、トレーダーも2日連続で-9や+9を付けた銘柄はないか探す（ディフェンスラインに穴を探すように）。そういうことが起こっている銘柄が見つければ、理論的には素晴らしいトレードチャンスがある。同様に、もしマクロ**ACD**シグナルが有効ならばランニングバックがゴールラインに向かって突っ込むように、

その銘柄も大きな動きに飛び立つだろう。しかし、もしその銘柄がちゃぶついたりあまり動かなかつたりしたら、そのチャンスは消えてしまう。ディフェンスが穴を閉じてしまうように。

これは目先の報酬をつかめということだ。もしマーケットがマクロACDラインナンバーシグナルの方向に動くなら、それはすぐか最長でも2～3立会日の間に起こるはずだ。逆に、そうならなければ、ACDシステムのダマシのトレードに転換するだろう。

マクロACDシグナルが有効になるためには、マーケットが予想した方向にすぐ（最長でも2～3立会日のうち）に動く必要がある。

長期トレーダーにとって、ナンバーライン値はほかにも意味がある。これは、マーケットに参入すべきかどうかを教えてくれる優れた指標にもなっているのだ。仮に、30立会日のナンバーライン値が過去10立会日は、ピンボールのように-4～+4の間を上下しながら動いていたとしよう。Aアップが付いても次にAダウンが付いて相殺されるような状態だ。3立会日のナンバーライン値が0の上下で揺れているような、上下を繰り返す方向感のないトレードは長期トレード戦略には向いていない。+2の日（Aアップが付いた日）か-2の日（Aダウンが付いた日）なら日中にトレードチャンスはあるかもしれないが、持続するトレンドはいずれの方向にもない。実際、30立会日のナンバーライン値が-8と+8の間なら、ちゃぶついたマーケットになることが多い。

このように、ナンバーライン値はデイトレーダーがACDシステムのダマシやACDシグナルを使ったチャンスを探す手助けもしてくれる。マーケットが統計的優位性のある-9や+9に何度も近づいたのに、2日連続して付けないときはACDシグナルを利用するチャンスと言える。例えば、ある日の30日合計値が+7で、翌日が+9、そのあとは+7、+8、+9、+7と推移すれば、これはデイトレーダーにとって合計値が2日連続で+9（あるいは-9）になるまで、日中のシグナルを逆張り用のシグナルとして利用する好機となるかもしれない。

ここでも、目先の報酬をつかむことがかなわなければ、ACDシステムのダマシのトレードのお膳立てになる。もしナンバーライン値の合計値が2日連続で-9や+9になったあと、2～3立会日以内にマーケットが予想した方向に動かなければ、ACDシステムのダマシが起りかけていると分かる。そしてその場合は、マクロACDシグナルに従って手仕舞い、もしかしたらこのダマシのブレイクアウトを利用して反対のポジションを仕掛けるポイントを特定できるかもしれない。

マクロACDのナンバーライン値にはいくつかの利用価値がある。長期トレーダーならちゃぶついたマーケットを見極めることができるし、オプショントレーダーならボラティリティが高まるのが分かるし、デイトレーダーならACDシグナルを利用したり、ACDシステムのダマシのトレードを見つけたりすることができる。

ACDシステムのダマシのトレードやそのほかのチャンスを利用できることもあるが、マクロACDナンバーライン値の主要な目的はやはりトレンドが形成されつつある可能性を探ることにある。トレンドが形成されつつあることが分かる最も重要なことは、ナンバーライン値の合計が0（ベース）から-9や+9に動いたときである。そしてこの重要な数字に達したら、次は確認を待つ。例えば、もし30立会日のナンバーライン値が+9に達したら、翌日の値は+9以上になる必要がある。もし2日目の合計値が+10ならば、トレンドの形成が確認されたことになるが、+7ならば確認はされない（ここではACDシステムのダマシのトレードに注意を向ける）。

ただ、2日連続で-9や+9を付けた日より大事なのが、そうなるまでの期間だ。例えば、ある商品の合計値が1月に2日連続で+9を付けたが、2月にはいったん0に戻ったあと3月に再び2日連続で+9を付けたとしよう。このように1カ月空けて+9が確認されるようなパターンは目につきやすい。しかし、もつと頻度が低いケース、例えば3月に2日連続で-9や+9を付けたのが前年の9月以来であれば、前のケースよりも重要だと考えられる。マーケットの出来事はそれ自体も重要だが、それがまれにしか起こらない場合はさらに意味がある。

頻度が低い重要な出来事（例えば、短期間で0から2日連続して-9や+9の日を付ける）はより重要。私はこのようなチャンスを、第3章で紹介した1990年8月限の原油のトレードのようにあまり起こらない「ブルームーン級のチャンス」と呼んでいる。

それまでのマーケットの動き（分かっていること）と今日の動きを考えたマクロACDナンバーライン値は、今日のトレードの計画を立てるのと、実行するのに役立つ。例えば、前日の終値の時点で30立会日の合計値が+9なら、どのようなことが想定できるのだろうか。まずは再度+9になって上昇トレンドが確認されるのか、そうはならずにACDシステムのダマシのトレードになるのかを見極める必要がある。

もし今日の合計値から除外する値が+1なら、それはどういう意味なのだろうか。今日の取引が始まる前から合計値はすでに+8になっている（前日の+9から今日除外する+1を引く）。+8からスタートして今日の合計値が+9になるためには（つまり上昇トレンドができつつあることを確認するためには）、今日のトレード結果で最低でも+1が必要となる。

もし今日、Aアップを付ければナンバーライン値は+2なので合計値は+10になり、昨日までの値が+9だったことと合わせて上昇トレンドが確認される。そうなれば、低リスク・高収益のトレーディングチャンスが見つかったことになる。

ただAアップはすでに付いているが（+2）、オープニングレンジよりも下で引けると、この値は下がってしまう（0になる）。つまり、価格リスクは価格がオープニングレンジを下回る場合だけで、それを上回っていればどんな動きでも有利になる。

このシナリオに基づいてポジションを（最大に）増やす機会を探す、現在のマーケット状況でリスクはすでに最小化されている。つまり、通常5枚で先物のデイトレードをしているなら、状況が優位にある間は枚数と期間を増やすことができる。例えば枚数を10枚に増やしてもよいし、この日の取引終了時にマーケットがまだオープニングレンジよりも上ならば、10枚全部を手仕舞わないで2〜3枚は翌日に持ち越して、大きな上昇トレンドができるのを待つてもよい。

マーケットがマクロACDナンバーライン値で-9や+9を確認したら、枚数や株数を増やすことと、現在の方向が続くという予想の下、翌日に持ち越すことも考えてほしい。

ここで、実際の例を使って30立会日の合計値が長期展望とポジション管理にも使えることを見ておこう。表4.1は、1997年1〜6月のコーヒーの終値と合計値を示したもので、1月16日を見ると30立会日の合計値が初めて+9になっている。これが上昇トレンドの形成の可能性を示す最初の兆候だが、それを証明するためには翌日も最低+9の水準を維持しなければならない。



	日付	合計値	終値		日付	合計値	終値
5月	12	14	22965	5月	30	18	27640
5月	13	12	24115	6月	2	14	25395
5月	14	12	24060	6月	3	18	26420
5月	15	16	25520	6月	4	19	25155
5月	16	14	25315	6月	5	15	23050
5月	19	10	24625	6月	6	13	23725
5月	20	8	24025	6月	9	15	25330
5月	21	8	25310	6月	10	10	21795
5月	22	10	26030	6月	11	6	20765
5月	23	14	25685	6月	12	1	19240
5月	27	13	27430	6月	13	-3	18275
5月	28	18	29555	6月	16	0	18160
5月	29	20	31480	6月	17	0	19070

1月17日に30立会日前のナンバーライン値の-1を外すと、合計は+10になる。つまり、ナンバーライン値の概念を使う長期トレーダーは、マーケットが現在の水準を維持すると期待する。例えば、もし1月17日がAダウンの日（値は-2）だったらトレンドは確認できないが、中立（値は0）か上昇を示す+1か+2ならばトレンドを確認できる。言い換えれば、もし1月17日の値が-1以上なら、それは買いシグナルと考えてよい。結局、このときの30立会日の合計値は+10に上がって上昇トレンドが確認された。

もう分かったと思うが、この情報は短期のデイトレーダーにも長期のトレーダーにも役に立つ。翌立会日の1月20日は、合計値から+3が除外されるため暫定的な合計は+7に下がる。長期トレーダーは1月17日の引けで建てたポジションを保有し続けるが、デイトレーダーは良いAアップ（値は+2）を待つことになる。

1月20日、コーヒーは前日の124.00と同じ水準で寄り付いた。当時のAの値は100ティック（現在のAの値は付録参照）なので、目標値はAアップが125.00、Aダウンが123.00となる。

この日のオープニングレンジは123.35~124.00で、安値が123.35、高値が129.50、終値が129.25だった。このデータからは、マーケットが実際にAアップ（125.00）を付け、オープニングレンジよりも上の高値近くで引けたことが分かる。そこで、これらのことから1月20日の値を当てられるだろうか。+2と答えられたら正解だ。

この日の値が+2なら合計値は+9になる。このシナリオならコーヒー5枚を買ったデイトレーダーは引けで全部売らないで、2~3枚を翌日まで持ち越してもよい。含み益が出ていればなおさらだ。

このシナリオにおけるデイトレーダーのトレードリスクをおさらいしておこう。Aアップが付いたあとのリスクはオープニングレンジを下抜けることだけで、これはコーヒー1枚当たり619ドルになる（1997年1月20日の価格）。その一方で、終値が129.25ドルだったことを考えれば、利益はこの日だけで1枚当たり1600ドルに上っている。

次は長期的な視点で考えて、1月末から3月のコーヒーを見てみよう。コーヒーは1月20日に129.25で引けたあと前例のない高騰によって3月には一度200.00を超え、3月31日は191.15で引けた。デイトレーダーにとってこの2カ月間は日中のボラティリティに恵まれて何度も良いAアップが付いたため、短期トレードで勝つチャンスが豊富にあった。

一方、1月17日に買いポジションを建てた長期のシステムトレーダーは、30立会日の合計値が2日連続で0を下回るまで自動的に保有し続ける。ただ、合計値が急落した場合は、このポジションを手仕舞う場合もある。例えば、5月29日の合計値は+20で、価格は314.80だった。この時点で、1月17日に長期ポジションを建てたシステムトレーダーは1枚当たり7万2000ドルの利益になっている。また、デイトレーダーなら1月20日から2枚保有していた分だけでも12万5000~13万ドルで、それに加えて日々のデイトレードでも利益を上げているはずだ。

表4.1の6カ月間で30立会日の合計値の最高は+20だが、それからわずか9立会日の6月11日に合計値は+9を下回って+6に下がってしまった。このとき、マクロACDを利用する熟練の長期トレーダーならば、合計値が減っていくのを見て利食うタイミングを探すだろう。前述のとおり、累積値が0から-9や+9に変わるのは重要だが、それと同じように反対の動きも重要で、値が急激に減ったときは特に気をつけてほしい。

この例では6月2日の合計値が+14になっている。これは単独では重要ではないが、わずか2日前の5月29日に合

計値が**20**だったことを考えると注意しなければならない。マクロ**ACD**ナンバーライン値が3立会日で**20**から**14**と急激に減るのは、このシステムを利用する熟練の長期トレーダーにとって最低でもポジションの一部は手仕舞って利益を確定しろというシグナルになる。

# ロジカルトレーダーの中間試験

Logical Trader : Midterm

第1章～第4章で、**ACD**システムのカギとなる概念のいくつかを学んできた。このなかには、A点やC点、ピボットとピボットレンジの計算方法、マーケットの値、マクロ**ACD**ナンバーライン値の利用法などが含まれている。そこで少し復習をしておこう。この中間試験はこれまで学んできたことを試すだけでなく（試験結果は公表しないので心配無用）、これまで学んだ概念を再確認するのに利用してほしい。

答えは別紙に記入すること。解答は問題の最後に載せてある。

# 問題

- 1・マーケットがA点を付けた。損切りを置く場所は。
- 2・D点とはオープニングレンジの反対側にある\_\_\_\_に対して置く。
- 3・C点とは\_\_\_\_と反対の姿勢を示す。
- 4・ACDシステムで統計的優位性が最も高い時間帯（または足）はどれか。
- 5・オープニングレンジを調べるにはチャートのどの足を見るか。
- 6・すべてのトレードには基準点が必要だということの意味を説明せよ。
- 7・良いAダウンのマクロACDナンバーライン値は何か。
- 8・良いCアップのマクロACDナンバーライン値は何か。
- 9・ACDシステムでD点は何の損切りになるか。
- 10・ACDシステムではA点やC点を計算するための値があるが、これに関して株式と商品の主な違いは何か。
- 11・もし天然ガスのオープニングレンジが4345～4360で、ピボットレンジが4405～4430、終値が4490ならば、この日はどんな日か。
- 12・1年の前半で統計的優位性が最も高い2週間はいつか。
- 13・AアップもAダウンも付けることに失敗した日のマクロACDナンバーライン値は何か。
- 14・ACDシステムでマイナス日の定義を述べよ。
- 15・オープニングレンジの時間枠の半分の時間を使って確認するのは何か。
- 16・「マーケットの身の部分」と考えられるのはどのレンジか。
- 17・ピボットレンジを抜けて良いAアップを付けたところで買ったとき、損切りはどこに置けばよいか。
- 18・ピボットレンジ内の届かなかったAアップのトレードは、\_\_\_\_リスクである。
- 19・ピボットレンジ内における最初の1時間の高値が安値のトレードでは、取引開始から1時間後の価格がその1時間の極端な値（高値や安値のこと）から\_\_\_\_%以内になくしてはならない。
- 20・C点を付けることに失敗したときに仕掛けるのは\_\_\_\_トレードと呼ばれている。
- 21・マクロACDナンバーライン値の合計値を計算するときの日数は。
- 22・マクロACDの合計値が0から-9や+9に達して、それが2立会日連続すれば、統計的にはどうなるか。
- 23・マクロACDナンバーライン値が長期トレーダーにとって避けるよう示唆するのはどのようなマーケットか。
- 24・ACDシステムの手法は適度な\_\_\_\_と流動性があれば商品にも株式にも通貨にも適用できる。
- 25・人生と同様、トレーディングにも\_\_\_\_が必要である。

ここまで正解できたら、次の17の問題にも挑戦してみよう。

- 1・B点を付けなければ\_\_\_\_も存在しない。
- 2・マーケットはAアップの上で50秒とどまっていた。オープニングレンジの時間枠が15分だとすると、これは良いAアップか、それともAアップを付けることに失敗しているのか。
- 3・ACDシステムを使っている場合、付けることに失敗したAダウンとピボットレンジをブレイクした良いCアップは、どちらが良いトレードになるか。
- 4・高値29.00、安値28.15、終値28.65の日のピボットとピボットレンジを計算せよ。
- 5・1日のなかで良いAアップが付いたあと、Cダウンを付けることに失敗した。この日のマクロACDナンバーライン値は何か。
- 6・Aの値が15ティックで、オープニングレンジが35.00～35.20、ピボットレンジが35.30～35.45、高値37.10、安値34.95、終値36.25ならば、この日のタイプは何か。
- 7・含み損を抱えたトレーダーを恐怖に陥れ、大引け近くで起こると最高のACDトレードとなるのは何トレードか。



- 8・ボードフォン（VOD）のような銘柄のオープニングレンジを計算する場合、どこのマーケットの株価を使うべきか。
- 9・ポジションを建てたあと**40分**以内に想定した方向に価格が動かなければ、トレーダーはそのポジションをどうすべきか。
- 10・通常の値幅で翌日のピボットレンジが非常に狭いとき、翌日の値幅はとなると予想されるか。
- 11・月の第一営業日は重要な\_\_\_\_\_の一例とみなされている。
- 12・遅い時間帯でのC点ピボットでのトレードでは、終値が\_\_\_\_\_と\_\_\_\_\_を上回っている場合のみポジションを翌日に持ち越してよい。
- 13・マーケットがちゃぶついてもボラティリティが低ければ、ACDシステムの\_\_\_\_\_のトレードのチャンスを探すとよい。
- 14・マクロACDシグナルが出てもマーケットがシグナルの方向に\_\_\_\_\_立会日以内に動かなければ有効にはならない。
- 15・マクロACDナンバーライン値が0から+9になり、翌日の+9でトレンドが確認されたとする。このシグナルがより強力だとみなされるのは、起こる頻度が非常に\_\_\_\_\_とき。
- 16・もしある日のマクロACDの値が奇数なら、その日は何が起こったと考えられるか。
- 17・ACDの値が+3になるケースを2つ述べよ。

# 解答

- 1・B点
- 2・B点
- 3・A点
- 4・オープニングレンジ
- 5・1本目
- 6・基準点は、仕掛けるポイントを示すだけでなく、低リスクの損切りを置く場所を教えるという重要な役割もある。
- 7・ $-2$
- 8・ $+4$
- 9・C点
- 10・株式の場合はAとCの値が同じだが、商品の場合はAとCの値は違う。
- 11・プラス日
- 12・1月の最初の2週間
- 13・0
- 14・オープニングレンジの下にピボットレンジがあり、その下に終値がある。つまり、オープニングレンジ>ピボットレンジ>終値。
- 15・「良い」Aアップや「良い」Aダウン（あるいは、AアップやAダウンを付けることに失敗したかどうか）
- 16・ピボットレンジ
- 17・ピボットレンジの下限
- 18・低
- 19・15
- 20・信用できない
- 21・30日
- 22・優位
- 23・ちゃぶついたマーケット
- 24・ボラティリティ
- 25・計画

## 後半の17の問題の解答

- 1・C点
- 2・Aアップを付けることに失敗
- 3・ピボットレンジをブレイクした良いCアップ
- 4・ピボット=**28.60**、ピボットレンジ=**28.57**～**28.63**
- 5・ $+3$
- 6・ピボットレンジをブレイクした良いAアップ
- 7・C点ピボットトレード
- 8・マザーマーケット（この場合はロンドン）
- 9・手仕舞う
- 10・広くなる
- 11・時間枠

12・C点とピボットレンジ

13・ダマシ

14・2～3

15・少ない

16・日中に失敗したシグナルがあった

17・付けることに失敗したAダウンと良いAアップか、付けることに失敗したCダウンとオープニングレンジの上限よりも上の終値

# 第5章 ピボット移動平均線

## Pivot Moving Averages

移動平均線を利用するトレーディングシステムは数多くある。移動平均線は、株や商品の特定期間の平均価格をずらしながら算出していく概念で、例えば**200日移動平均線**なら過去**200日**、**50日移動平均線**なら過去**50日**分をずらししていく。また、短い時間枠でも可能で、**5分足**や**30分足**、**60分足**などの移動平均線もある。移動平均線の計算は、新しい日（または直近の足）を追加すると、一番古い値を除外するという方法で更新していく。

ただ、私は従来の移動平均線の多くが終値に基づいていることがいつも気になっている。時間枠が5ティックでも5分でも1日でも、計算に使われるのは時間枠の終値なのだ。私にとって終値はその時間枠の単なる価格のひとつでしかない。さらに言えば、株でも商品でも翌日に持ち越すと、終値という概念は無効になってしまう。もし銘柄Xの終値が**34**で、夜間の間に**35**に上がった場合、**34**を使って移動平均線を計算することにどんな意味があるのだろうか。

そこで、私は移動平均線にピボットレンジを使うことにしている。第4章で紹介したように、ピボットは1日の高値と安値と終値を使って計算するため、結果はその日のマーケットの身の部分を反映している。つまり、ピボット移動平均線のほうが終値のみの移動平均線よりもはるかに適切で意味があるものになる。

**ピボット移動平均線は、一定期間のマーケットの身の部分であるピボットを使って算出する。そのため、ピボット移動平均線のほうがあまり意味のない終値を使った移動平均線よりもはるかに意味がある。**

移動平均線についてもうひとつ書いておきたいことがある。多くのトレーダーはこの指標を超えなければならない壁のようにとらえているが、私は違う。例えば、株価が**50日移動平均線**を下回れば弱気の兆候で、**200日移動平均線**を上回れば強気の兆候などというのが、いわゆる常識となっている。しかし、私はこれが移動平均線という指標の最高の使い方だとは思っていないし、短期トレーダーにとっては特にそう思っている。

移動平均線を壁のように扱う代わりに、私はピボット移動平均線の線自体に注目している。特に、この線の傾斜、もっと具体的に言えば、傾斜の変化を見ている。価格の大きな動きを伴わない傾斜の変化はマーケット自体が変化したことを示唆しているため、ぜひ重視してほしい。

**私は移動平均線を超えるべき壁として見るのではなく、ピボット移動平均線の傾斜を見ている。傾斜の変化は、マーケット自体が変化したことを示す重要な指標となる。**

学生時代にグラフや線について学んだことを思い出してほしい。線の傾きは、X（グラフの横軸）の変化に伴うYの変化（グラフの縦軸）を表しており、XかYに対する相対的な変化が傾き（急だとか平らだとか、上がっているとか下がっているとかなど）を決める。

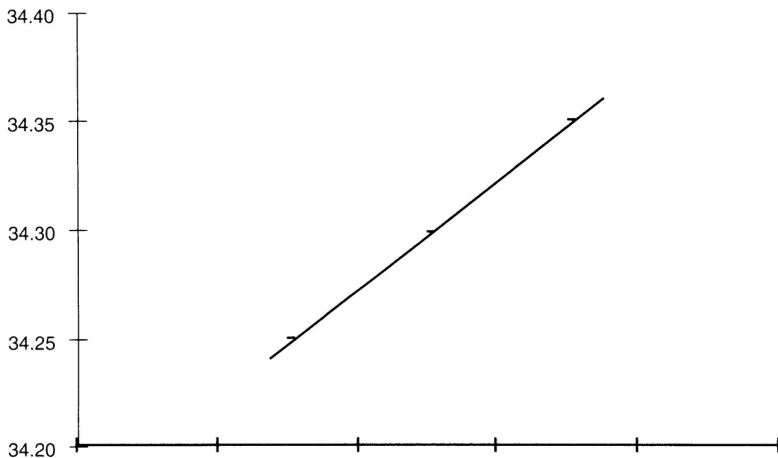
そこでこの傾きの概念をピボット移動平均線に応用して、グラフの横軸を時間（単位は日、分など）、縦軸を価格の上昇や下落の度合いとしてみよう。一方向への変化が大きいほど傾斜は急になるし、変化が小さいほど傾斜は水平に近づいていく。

例えば、1日目のピボットが**34.20**、2日目が**34.25**、3日目が**34.30**だとすると、3日ピボット移動平均線は**34.25**になる。もし4日目のピボットが**34.35**なら、この値に足して一番古い値を除外すれば、新しい移動平均線は**34.30**に

なる。そして、5日目のピボットは34.40で、移動平均線は34.35になった。

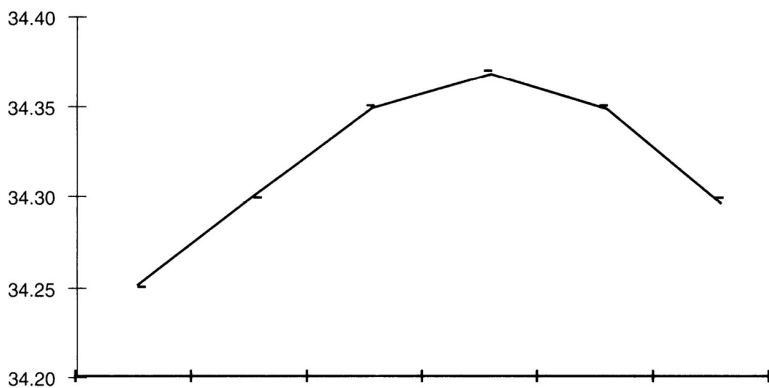
3つの移動平均線の値（34.25、34.30、34.35）がそろったところで、グラフを描いてみよう。この単純な例ならば、移動平均線を見ただけで上昇していることが分かる。そしてグラフにしてみると、図5.1のようになる。

図5.1 ピボット移動平均線——傾きの増加



3つの点で描かれた線にはある特定の傾斜が見られる。この例は安定的に上昇していて、典型的な上昇トレンドのグラフになっている。この例をさらに進めて、6～8日目のピボットが34.35、34.30、34.25、移動平均線（四捨五入）は34.37、34.35、34.30になったとしよう。これらをグラフに描き足すと、今度はまったく違う線が現れる（図5.2）。

図5.2 ピボット移動平均線——傾きの変化



このグラフは明らかにカーブして下降し、マーケット自体に変化があったことを示している。ピボット移動平均線の傾きは上昇から下降に変わり、マーケットもグラフのとおり下落に転じた。この簡単な例は、ピボット移動平均線の傾きがマーケット全体のトレンドやマーケット自体の変化を判断するのに役立つことを示している。

ACDシステムでは、14日と30日と50日という3種類のピボット移動平均線を用いている（短期の時間枠なら、5分足、10分足、30分足などで14本、30本、50本などの移動平均線を用いる）。前の3日ピボット移動平均線の例と同じように、14日（または14期間）や30日（または30期間）や50日（または50期間）のピボット移動平均線を計算していけば、短期（14日または14期間）から中期（30日または30期間）、長期（50日または50期間）のマーケットのセンチメントを見ることが出来る。たった1つの時間枠からの判断ではなく、3種類のピボット移動平均線を使って、3つの時間枠から総合的にとらえていくのだ。

前の例と同様、ここでも線の傾きが上昇か下降か横ばいかを見ていく。傾きは変化率を示していて、急な傾斜ほど

変化率が高い。ピボット移動平均線の傾斜は、みんなのマーケットに対する見方の変化の速さを測っているため、もし傾きが上昇から下降（またはその逆）に急変したら、マーケット自体も急変したと考えられる。また急な上昇だった傾きが緩くなり、水平になったあとで再び緩やかに下がっていけば、マーケット自体も少しずつ変わっていったことが分かる。

グラフの傾きは変化率を示す。ピボット移動平均線の傾きは、マーケット参加者のマーケットに対する見方の変化の度合いを反映している。

ここでは、このピボット移動平均線を使ってマーケット全体のセンチメントを判断し、マーケットが実際に大きく動く前に変化をつかむことを目指していく。

ピボット移動平均線の傾きを見る方法のひとつとして、これを意見のコンセンサスとしてとらえることができる。もしすべてのピボット移動平均線が同じ方向に向かっていれば（上でも下でもよい）、その方向にトレンドができているのは間違いないだろう。また、移動平均線の傾きが変わり始めたら（水平になったり急に反対方向になったりするなど）、マーケット自体が変わったことが分かる。

それぞれのピボット移動平均線が同じ方向に向かっていないときは（ひとつが上昇、ひとつが水平、ひとつが下降など）、コンセンサスがないと判断できる。言い換えれば、マーケットは——少なくともピボット移動平均線が示していることは——混乱していて、はっきりとしたトレンドの兆しはないと考えられる。

このとき重要なのは、混乱したマーケットと中立的なマーケットを示すピボット移動平均線を分けて考えることである。先述のとおり、混乱したマーケットではピボット移動平均線は別々の動きをする（それぞれが上昇したり、水平に移動したり、下降したりする）。一方、中立なマーケットではグラフはみんな水平になり、平行に動く。グラフが横ばいのときは簡単に強気や弱気に転じたりするため、中立のマーケットには仕掛けのチャンスがすぐ目の前まで迫ってきている可能性がある。しかし、混乱したマーケットがいきなり強気や弱気に転じることはなく、まず別々の動きをしていた線が同じ方向にそろったあとに、上方か下方の方向にトレンドができていく。

ピボット移動平均線は、最初に紹介したACDシステムの概念と組み合わせると新たな指標になる。これらの指標はACDシステムの概念を基礎として、そのうえに層のように積み重ねていく。例えば、マーケットがAアップを付けて、強気の姿勢を取ったとする（第1章）。マクロACDナンバーライン値は+9でマーケットが大きく動くことを示唆している（第4章）。これらの事実にはピボット移動平均線の傾きが上向きで強気のセンチメントを示していることが重なると、3つの指標が強気で一致する。そうなれば、その日の強気のサインだけでなく、ピボット移動平均線が急上昇して大きな動きが起こる可能性を示唆していることで、さらに自信が深まる。そこで、この例のように指標が同じ方向で一致したときは、枚数や株数を多くすることを考えてほしい。こういうときこそ、アクセルを思いっきり踏み込むのである。

一方、Aアップが付いて強気になったときに、ACDナンバーライン値が-2なら、+9や-9の目標値に達するにはまだ時間がかかる。この間にピボット移動平均線の傾きが下向きで弱気だとすれば、これらの矛盾するシグナルからトレードはしないという判断もできる。反対に、ほかの指標が弱気や中立のセンチメントを示していても、Aアップを利用して買うと判断した場合は、自信があるわけではないので少ない枚数や株数で仕掛けするという方法もある。言い換えれば、こういうときはアクセルを踏むのではなく、ブレーキに足を置いて安全運転を心掛けるのである。

別の場合も見ておこう。マーケットがAダウンを付けて弱気のシグナルを出したあと、ACDナンバーライン値が-9に達したとする。このとき、もしピボット移動平均線もそろって下降していれば、これは飛び乗るチャンスなので自信を持って多めの枚数や株数で仕掛けてほしい（図5.3a～図5.3h）。

図5.3a 移動平均線のスロープ——中立から強気

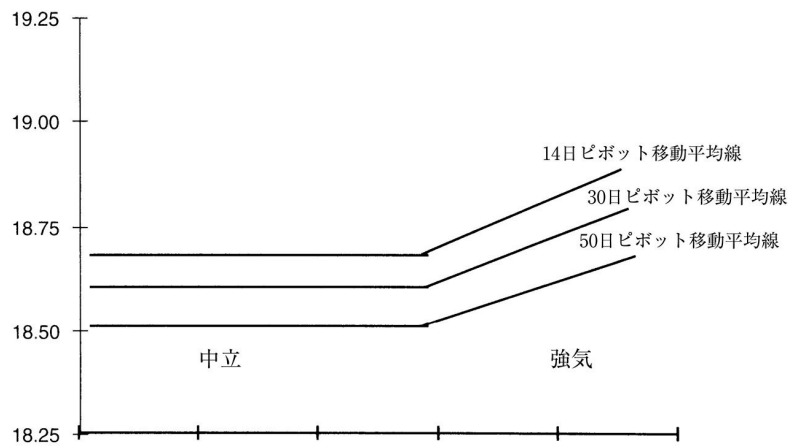


図5.3b 移動平均線のスロープ——混乱から強気

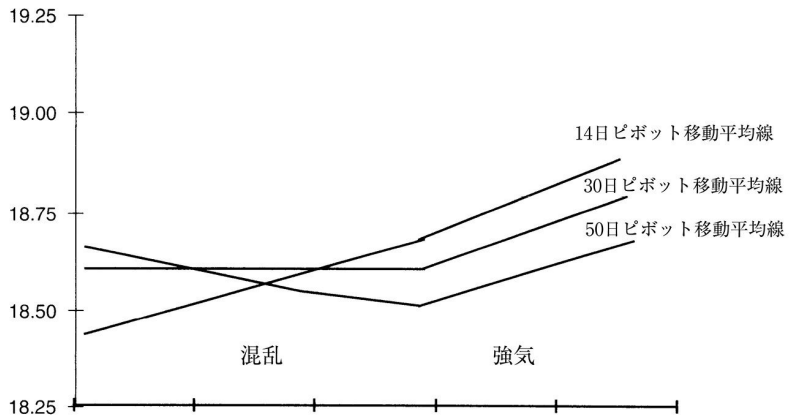


図5.3c 移動平均線のスロープ——強気から中立

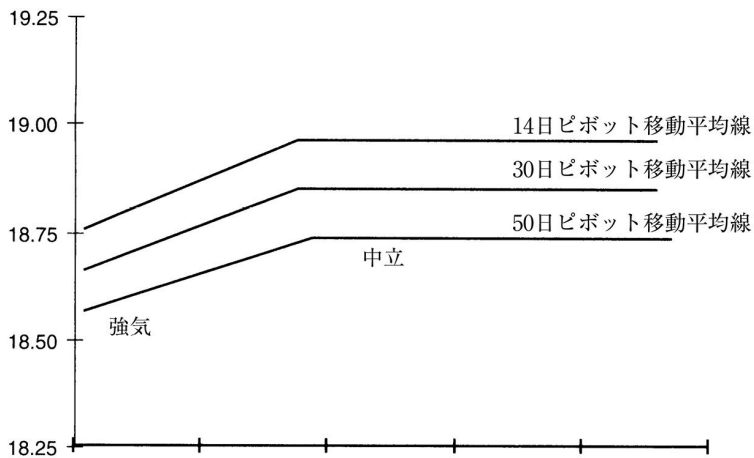


図5.3d 移動平均線のスロープ——強気から混乱

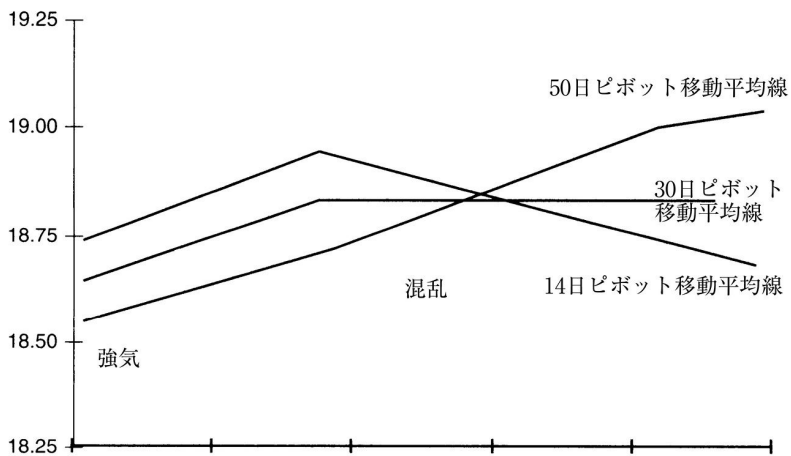




図5.3e 移動平均線のスロープ——中立から弱気

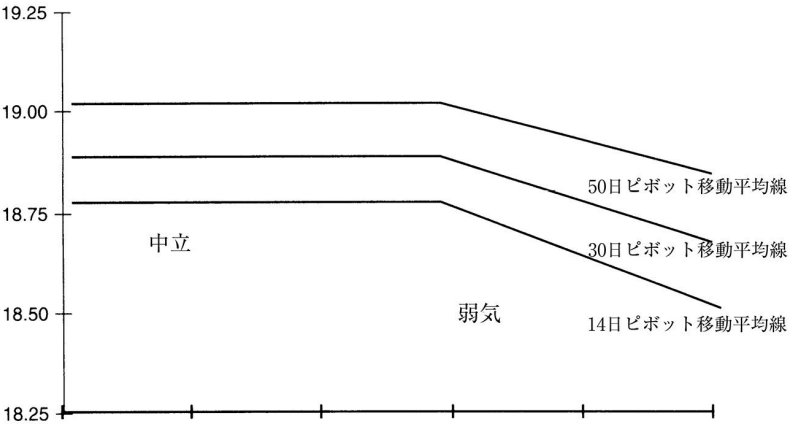


図5.3f 移動平均線のスロープ——混乱から弱気

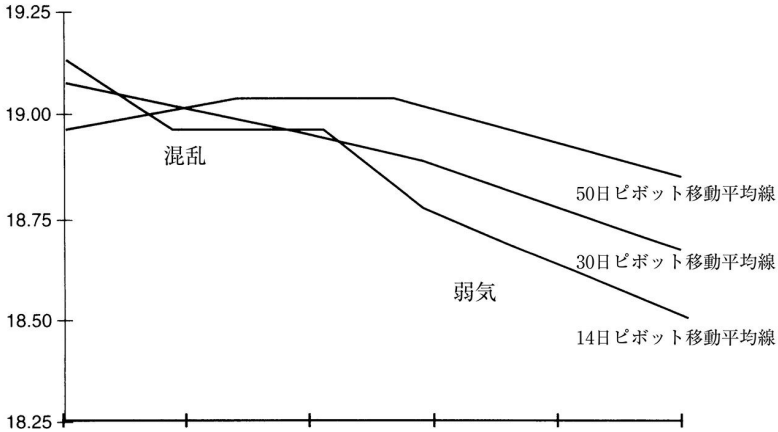


図5.3g 移動平均線のスロープ——弱気から中立

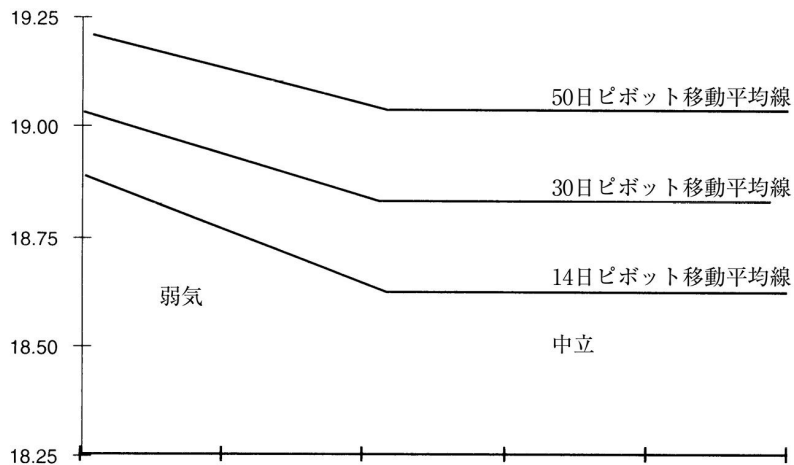
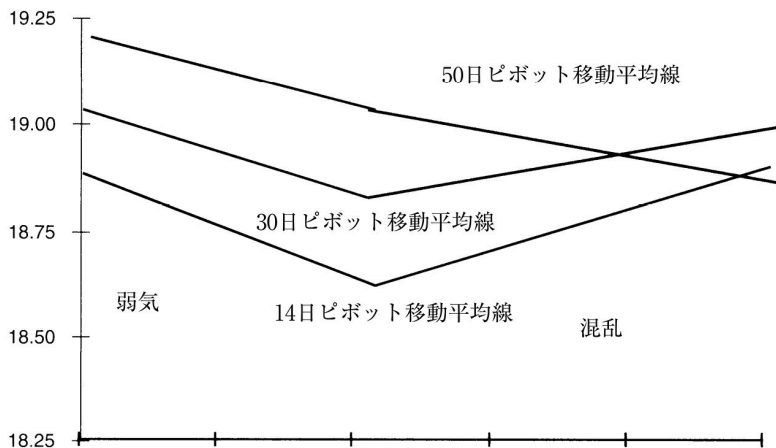


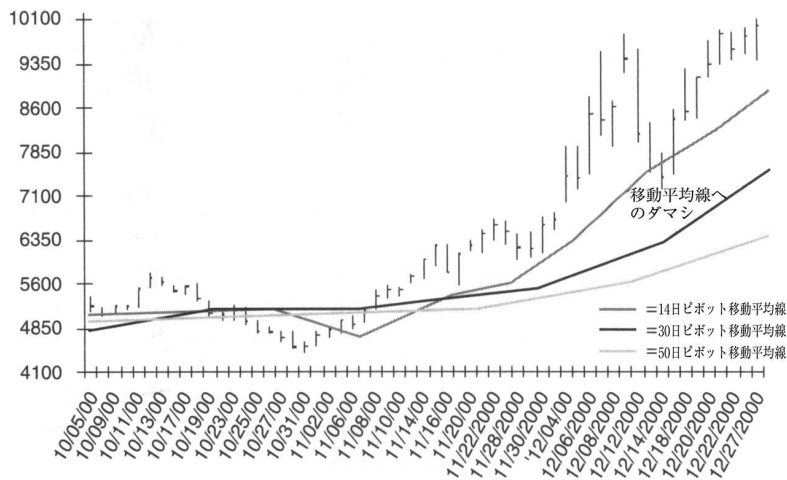
図5.3h 移動平均線のスロープ——弱気から混乱



## ピボット移動平均線へのダマシ

ピボット移動平均線を使った2つ目の戦略は移動平均線へのダマシを利用したトレードである。これは図5.4を使って説明していく。このチャートでは3本のピボット移動平均線の傾きがすべて上を向いている。日足を見ると、価格は最初は安定的に上げて50日と30日と14日のピボット移動平均線を上回っている。しかし、そのあとの押し目を付けて価格は14日ピボット移動平均線を下回るが、それでも30日ピボット移動平均線よりは上にある（このとき30日ピボット移動平均線も下回れば、ピボット移動平均線へのダマシのお膳立てにはならない）。

図5.4 移動平均線へのダマシ（天然ガス2000年1月限、2000/10/5～2000/12/27納会）



ここでは、たとえピボット移動平均線が上に傾いていたとしても買う理由にはならない。それよりも、価格が反転して14日ピボット移動平均線を上抜き、再び上昇するのを待ったほうがよい。14日ピボット移動平均線を超えれば買う。このときの損切り位置は直近の安値になる。

反対に、ピボット移動平均線が下に傾き、価格も下落しているときに、戻りを見せて価格が上昇して、14日ピボット移動平均線を上回ったとする（でも30日ピボット移動平均線は上回っていない）。このようなときにピボット移動平均線が全体として下方に向かっていても売る理由はなく、むしろ価格が14日ピボット移動平均線を再び下抜くまで待てば、弱気がより明らかになる。このときの損切り位置は直近の高値になる。

もちろんここでもこれまでと同様、間違っていたときにどこで手仕舞うかは考えておかなければならない。今回のケースでは、損切りは押し目を付けた足の安値に置く。もし価格がいったん押したときの足の安値を下回れば、買いのポジションは損切りする。あるいは、もし価格がいったん戻ったときの足の高値を上回れば、空売りポジションは損切りする。

このようなピボット移動平均線へのダマシのシナリオでは、仕掛けるときに次のような条件がそろうことが重要になる。

- 3本のピボット移動平均線の傾きがすべて上に向いているか、またはすべて下に向いている。
- マーケットが上昇したあと押しで14日ピボット移動平均線を下回る。またはマーケットが下落したあと戻って14日ピボット移動平均線を上回る。
- ただ、押ししたり戻ったりしても30日ピボット移動平均線は超えてはならない。もしこれを超えてしまうと移動平均線へのダマシのお膳立てとはならない。
- マーケットが再び14日ピボット移動平均線を超えて元のトレンドの方向に戻ったときに仕掛ける。

## 移動平均線のダイバージェンストレード

多くのトレーダーは天井や底付近で逆バリして、天井や底をとらえたいと思っている。しかし、そのようなことをするよりも、移動平均線ダイバージェンスパターンで特定の動きを利用したチャンスを探すほうが戦略として優れている。

移動平均線ダイバージェンストレードの最も重要なお膳立ては、3本の移動平均線がすべて中立（水平で傾きがない）か混乱（1本が上向き、1本が下向き、1本が水平）していなければならない。この混乱のケースが移動平均線ダイバージェンストレードには最も適しているのだ。先述のとおり、移動平均線が中立のときは、マーケットがいきなり強気や弱気に移行することがあるが、混乱しているときに素早くトレンドが形成されることはあまりない。

移動平均線ダイバージェンストレードの2つ目の条件は、基準点（図5.5a～図5.5d）があることで、仕掛けるときにはマーケットの状態に応じて良いA点、付けるのに失敗したA点、良いC点、付けるのに失敗したC点のいずれかを利用する。

図5.5a 混乱した移動平均線——基準点がないため仕掛けない

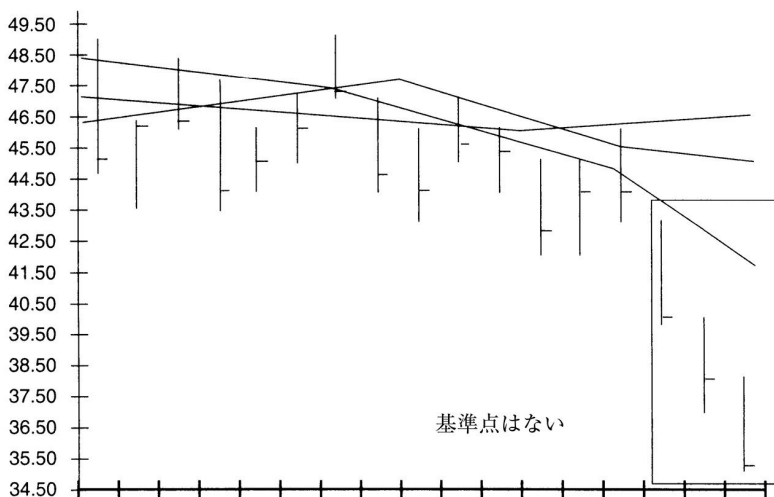


図5.5b 中立の移動平均線——基準点がないため仕掛けない

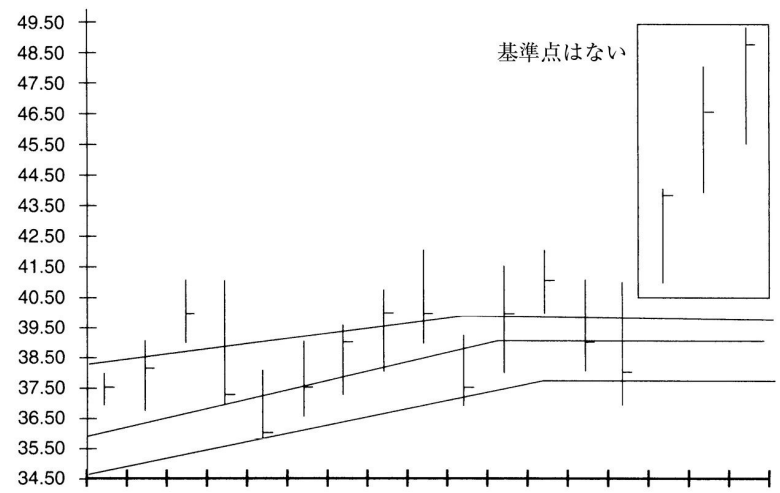


図5.5c 中立の移動平均線——基準点を使った良い仕掛けポイント

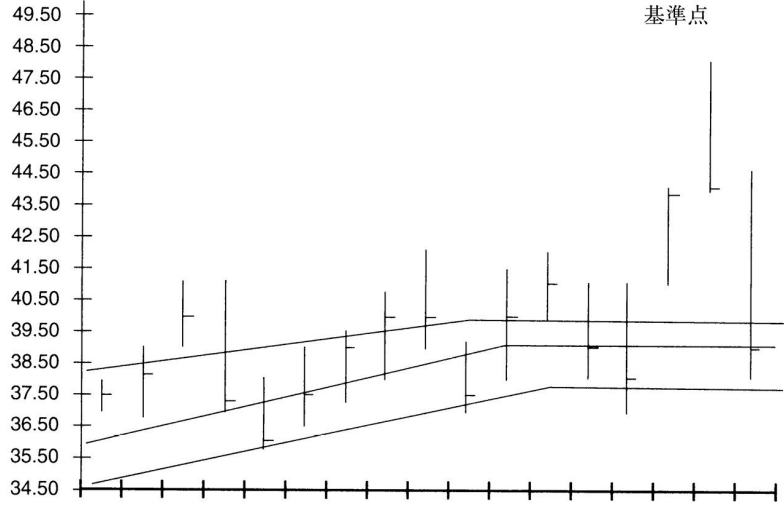
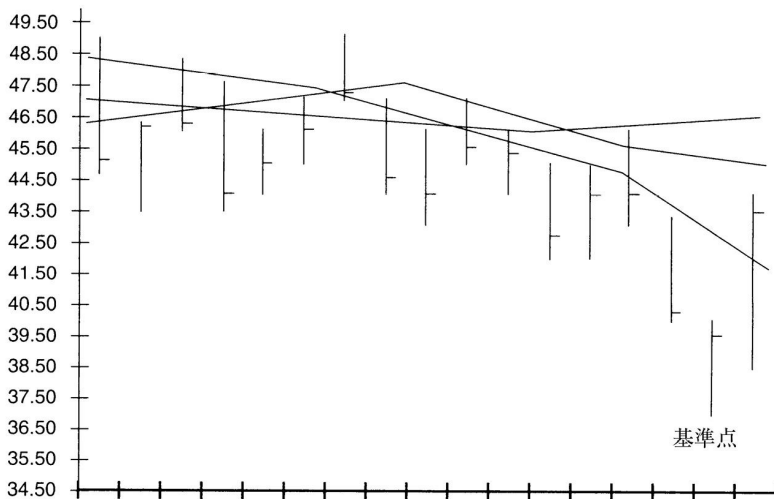


図5.5d 混乱した移動平均線——基準点を使った最高の仕掛けポイント

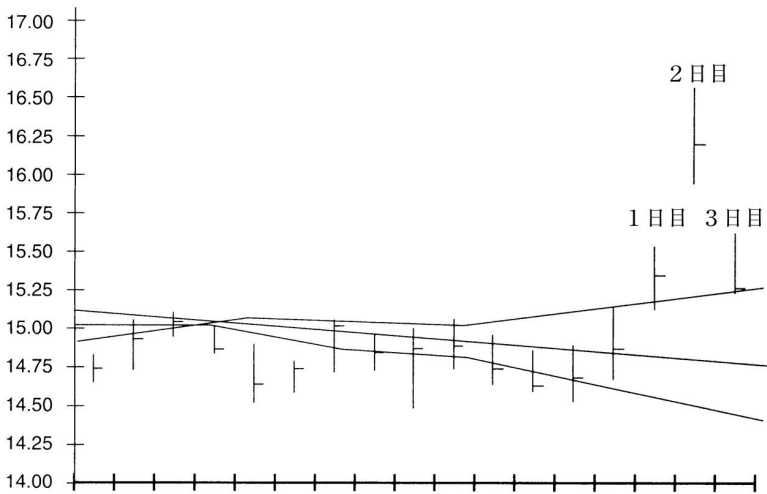


このとき、30日のマクロACDナンバーライン値が混乱していると、トレードの成功率はさらに高くなる。言い換えれば、もしマーケットが0周辺（ $-2 \sim +2$ とか、 $-4 \sim +4$ など）をさまよっているときはマーケットが過渡期にあり、はっきりとしたトレンドは始まっていない。

移動平均線ダイバージェンストレードでは、移動平均線から離れたところで急激な上昇や下落が起こることがよくある。ピボット移動平均線が混乱していても持続するトレンドがなければ、どのような動きも長続きはせず、いずれは調整される。移動平均線ダイバージェンストレードは、トレーダーがダマシと基準点をはっきり確認したときが仕掛けるタイミングとなる。

テクニカルアナリストやチャートストによく知られているマーケットパターンのひとつにアイランドリバーサルというのがあるが、この概念はこのアイランド・リバーサルで説明しようと思う。アイランドリバーサルは、突出高や突出安の足があり、その前後に2つの窓を空けたときに形成される。例えば、商品Xの1日目の安値が15.10、高値が15.50で、2日目は上方に窓を空けて15.90で寄り付いたあと16.50まで上昇し、3日目は下方に窓を空けて15.70で寄り付いたあと15.20まで下落したとしよう。こうなると2日目はダマシで、みんなそのまま上昇すると思いきやその動きは持続せず、3日目には下方に窓を空けて再び1日目の水準まで下げてしまった。このような下方に空を空けた3日目には、前日に上昇すると思いついて買い、含み損を抱えて身動きがとれなくなっている多くのトレーダーがいることが明らかになる（図5.6）。

図5.6 アイランドリバーサルと混乱した移動平均線ダイバージェンス



ピボット移動平均線が中立か混乱しているときにアイランドリバーサルが形成されると、マーケットは移動平均線ダイバージェンストレードに対して勝率が高く、低リスクの基準点を示してくれる。アイランドリバーサルを利用して移動平均線ダイバージェンストレードをするのはピボット移動平均線が混乱しているときで、これはある特定の方向への持続した動きがない、つまりトレンドがないことを示している。これは上昇しても下落しても、一時的な動きと考えられるため、その天井や底で仕掛ければ成功確率は高くなるのだ。

ACDシステムは対称なので、下方へのアイランドリバーサルでも同じようにトレードできる。ここでも、ピボット移動平均線が中立か混乱していて（混乱のほうがより良い）、下落したあとと急激に上昇すれば底で買うための基準点に分かる。

## 移動平均線ダイバージェンスのときにナンバーライン値を使って仕掛ける

ピボット移動平均線は、仕掛けるためのさらなる基準点を提供してくれる。この概念がマイクロACDやナンバーライン値の代わりになるわけではないが、むしろそれらと組み合わせることでより完全に近いお膳立てになることが予想される。例えば、30日マクロACDナンバーライン値が+7でピボット移動平均線が上方に傾いていれば、たとえ価格が14日ピボット移動平均線を下回っても、今日、14日ピボット移動平均線を超えてAアップが付けば、+2が加算されて合計値は+9になる。さらにピボット移動平均線は上方に傾いているうえ、価格も14日ピボット移動平均線を再び上回ってAアップを付けている。これらを合わせて考えれば、「買って、思いっきりアクセルを踏み」ということになる。



# 幼稚園児でもできるトレード

ピボット移動平均線という概念の利点は目に見えるので、見るだけでマーケットの状態が分かる。もし3本の線がすべて上向きなら強気で、3本の線がすべて下向きなら弱気、水平なら中立となる。また、1本が上、1本が下、もう1本が水平なら混乱しているなど、5歳児でも分かる。実際に幼稚園で試したこともあるが、みんな上向きや下向きだと見分けることができた。彼らにできるなら、大人である読者の方々にもできるだろう。あまり複雑に考えず、簡単な概念は簡単なままにしておこう（図5.7a～図5.7d）。

価格データや日足チャートがなくても、実際の商品に関する知識がなくても、3本のピボット移動平均線の傾きさえ分かればトレードチャンスはいつでも見つかるものだ（図5.7e～図5.7f）。

**図5.7a 幼稚園児でもできるトレード（14日、30日、50日のピボット移動平均線、2001/4/2～5/14）**

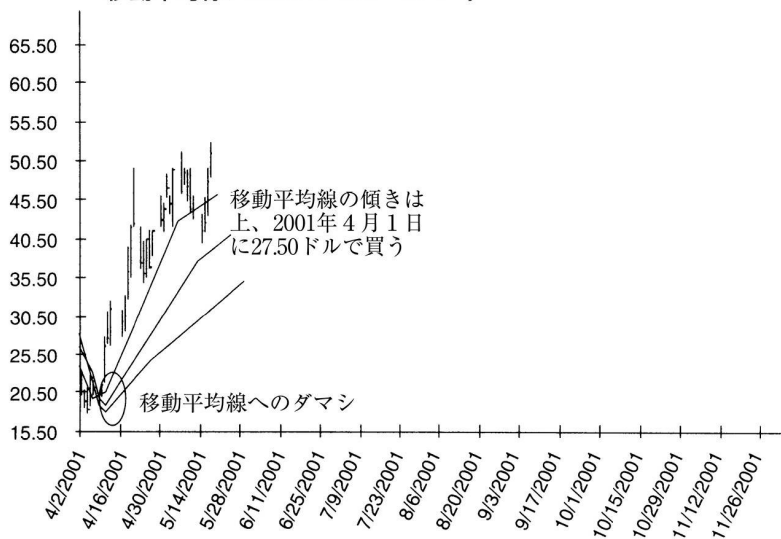


図5.7b 幼稚園児でもできるトレード（14日、30日、50日のピボット  
移動平均線、2001/4/2～7/23）

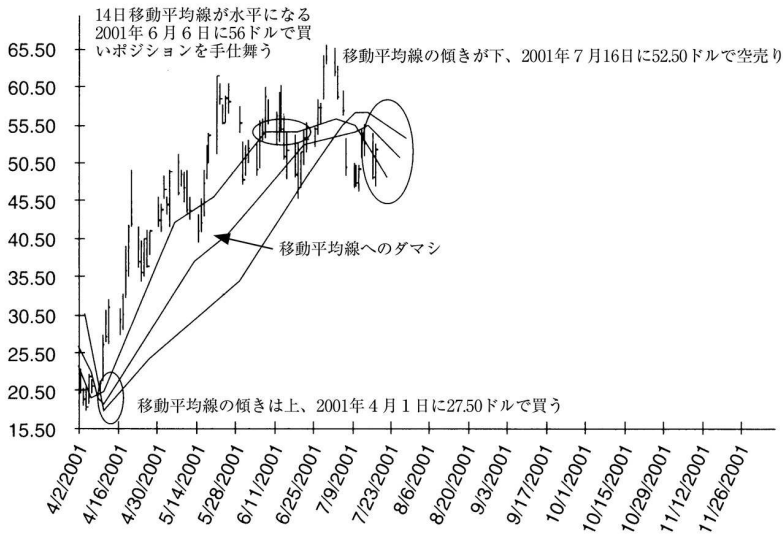


図5.7c 幼稚園児でもできるトレード（14日、30日、50日のピボット  
移動平均線、2001/4/2～10/15）

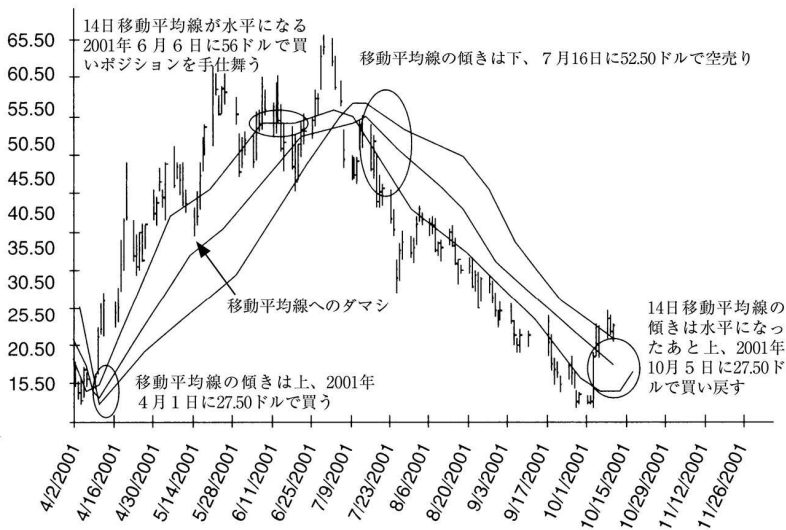


図5.7d 幼稚園児でもできるトレード（14日、30日、50日のピボット  
移動平均線、2001/4/2～11/26）

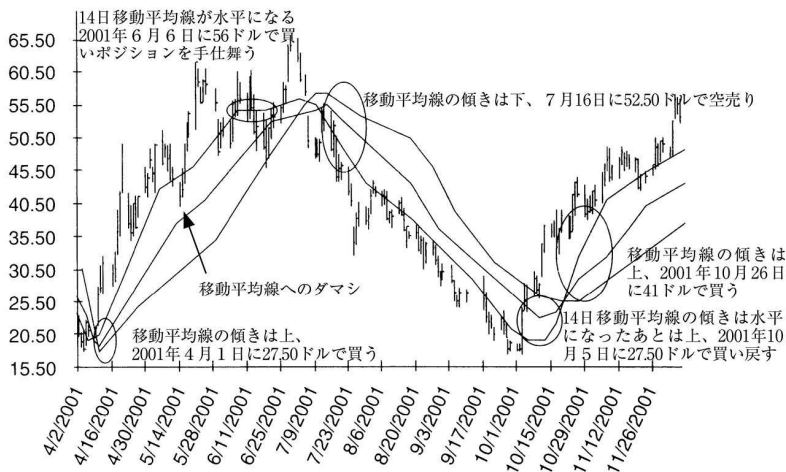


図5.7e 幼稚園児でもできるトレード（価格目盛りも日足表示もともになし、2000/9/29～2001/11/29）

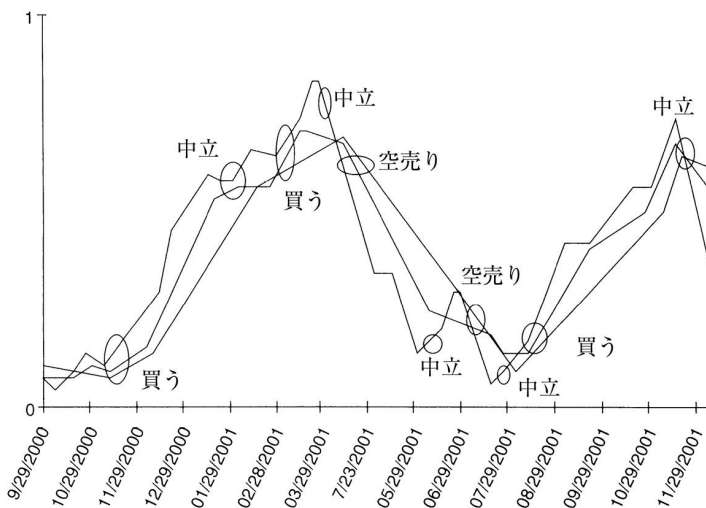
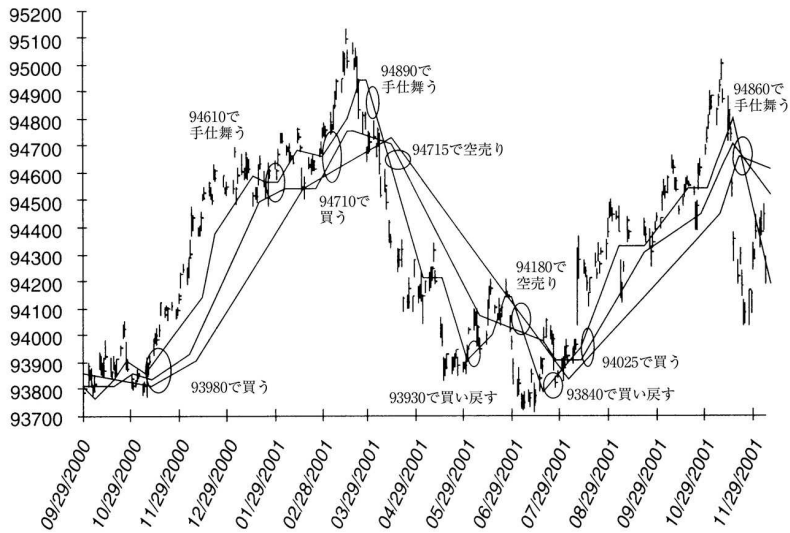


図5.7f 幼稚園児でもできるトレード（オーストラリアの債券先物、  
2000/9/29～2001/11/29）



## 第6章 進化したトレーダー

### The Advanced Trader

多くのトレーダーは仕掛けるための良い戦略を持っている。しかし、うまい仕切り戦略を持っていないので失敗する。原因は彼らの多くが、含み益が含み損に変わる前に手仕舞うための一貫した戦略を持っていないことにある。

**ACD**システムはトレーダーに良い仕掛けのポイントを知らせてくれるだけでなく、いつ手仕舞うべきかを早期に知らせしてくれる。さらに、**ACD**システムを使えば、トレーダーの感情的なぶれを排除して、分析のみに基づいたトレードが可能になる。本章では、最適なタイミングで手仕舞うためのさまざまなトレード戦略を紹介していく。

# ローリングピボットレンジ

ローリングピボットレンジは通常3～6立会日の範囲で仕掛けと手仕舞いの基準点を示してくれる。ローリングピボットレンジの最も重要な点は、何をすればよいのかではなく、何をしてはならないかということを見せてくれることである。具体的に言えば、ローリングピボットレンジはマーケットと関係のない理由（例えば前夜に義母のことで配偶者とケンカをした）で、必要以上に早く利食いをすることを押しとどめてくれる。また、ローリングピボットレンジはポジション管理を助けてくれるだけでなく、通常はすぐに利食って小さな利益を積み上げていく短期トレーダーの利益と利益率を上昇させる手助けもしてくれる。またローリングピボットレンジは、ポジションを長く抱え込むトレーダーが含み益の大部分をマーケットに返してしまう前に手仕舞うことも教えてくれる。

ローリングピボットレンジは、通常ポジションを長く持たない短期トレーダーにはもう少し保有するための見方を示し、つい長めに抱え込んでしまうトレーダーには通常よりも早めに手仕舞わせることを教えてくれる。

ローリングピボットレンジの正確な定義は、第2章を読み返してほしい。ここでは、ローリングピボットレンジを使ったさまざまなトレーディング戦略を紹介していく。日々のピボットレンジは短期的には仕掛けるべきポイントを教えてくれるが（例えばピボットレンジを上をブレイクしてAアップを付けたときとか、ピボットレンジを下をブレイクしてAダウンを付けたときなど）、ローリングピボットレンジのほうは最適な手仕舞いポイントを教えてくれる。ちなみに、短期トレーダーで1～2日の長めにトレードしたい場合は6日ローリングピボットレンジではなく、2～3日のローリングピボットレンジを使うのが理にかなっている。それよりも長いトレードの場合は2～3日のローリングピボットレンジだと必要以上に早く手仕舞うことになるため、5～6日のローリングピボットレンジが適している。ただ、この戦略では一貫して同じ期間のローリングピボットレンジを使う必要がある。例えば、ある条件で仕掛けて3日ローリングピボットレンジで手仕舞い戦略を立てているとしたら、その期間を途中で変えることは許されない。途中でローリングピボットレンジの期間を6日に変えるのは、もう少し保有するための言い訳でしかない。

ローリングピボットレンジは正しく使えば、思いもかけなかった経済指標が発表されたとしてもポジションを持続することができる。例えば、失業率（通常、毎月第1金曜日に発表される非農業部門雇用者数）やAPI（米国石油協会）の統計（火曜日のエネルギー先物市場終了後に発表）などが発表されると、マーケットでは短期で見てランダムな動きが起ることが多く、それによって短期トレーダーは損切りに引っかかってしまう。

ローリングピボットレンジは、これらの発表による短期的な影響を和らげる傾向を持っており、マーケット全体にこの新しいデータが行き渡るまでの間、ポジションを保有しておくことができる。例外は、これらの発表のあとでマーケットに劇的な動きがあったときで（通常レンジから1～2標準偏差外れるのが典型的なパターン）、そのときは手仕舞うことになる。

ローリングピボットレンジは基準となる期間が長いほど、損切りに達するまでの余裕はかなりある。逆に期間が短ければ、ちょっとした上下動ですぐに損切りに引っかかってしまう。

ローリングピボットレンジは、マーケットがモメンタムを失ったり、動かなければ手仕舞うよう警告を発してくれる。この警告は、特に一方に長期間動いていたあとは役に立つ。例えば、原油が取引開始後に4日ローリングピボットレンジの下限を下回ってAダウンを付けたら、これとほかのACDシステムのシグナルから空売りし、マーケットが反転して4日ローリングピボットレンジの上限を超えたら、手仕舞うことにすればよい。

また、この概念を使っているときに、マーケットが一方への動きが続いたあとに横ばいの状態が続くことがあ

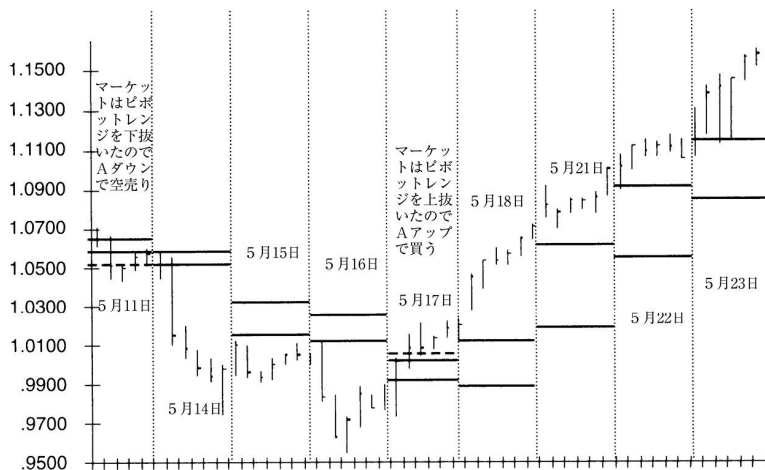
る。トレンドがなくなったあとは、動きがなくなる。しかし、このとき価格よりも上にあるローリングピボットレンジはいずれ現在の価格まで下げてそれを下回ったり（それまで下降トレンドだった場合）、現在の価格まで上げてそれを上回ったり（それまで上昇トレンドだった場合）する。マーケット自体は動いていないが、ローリングピボットレンジは現在の価格に追いついて、すでに反対側に抜けている。これはマーケットのモメンタムがなくなったという絶対的なサインであり、そのときは絶対に手仕舞うべきだろう。通常、マーケットが劇的に動く前にはローリングピボットレンジが示すサインはすでに変わっている。ローリングピボットレンジが価格を上回ったあと再び現在の価格の水準まで下げたり下回ったりしたときは、手仕舞うときだと考えてほしい。また、価格を下回っていたローリングピボットレンジが現在の価格の水準かそれよりも上に動いたときも、手仕舞うときである。

もしマーケットがある方向に大きく動いたあと止まったときに、ローリングピボットレンジが価格に追いついてそれを上回ったり下回ったりしたときは、たとえまだマーケットが不利な方向に動いていなくてもトレードを手仕舞う時期と考える。

ときには運良く商品先物やS&Pや株式などで短期トレードをしていたにもかかわらず、少し長め（1～2週間かもしれない）に保有することもあるかもしれない。言い換えれば、これはマーケットの放物線状の動きをとらえたことになる。それまでのマーケットの動きが大きいと、ローリングピボットレンジは最初マーケットからかなり離れているため、すぐに警戒すべき要因にはならない。しかし、いずれマーケットの勢いがなくなるとローリングピボットレンジは現在の価格に追い付くだけでなく、上や下にブレイクする。この初めてのブレイクができるかぎり早く手仕舞うことを教えてくれるサインとなる。

2001年5月のガソリンチャート（図6.1）では、マーケットが動きを止めたのでローリングピボットレンジが現在の価格に追いついてきた。そして5月17日の早い時間に価格はローリングピボットレンジを上抜いた。これによって含み益の出ていた空売りポジションを手仕舞っただけでなく、底値に近い価格で利食えた。その後は、反転したら確実な上昇相場の早い段階で買うチャンスまで示唆してくれていた。

図6.1 3日ローリングピボットレンジ（ガソリン2001年6月限の60分足）



# モメンタム

モメンタムを見るとき、私は今日の終値と一定期間前の終値を比べることにしている。期間は8立会日を使うことが多い。ただ、これは一貫していれば6日でも、8日でも10日でもかまわない（ローリングピボットレンジと同じこと）。自分の都合で期間を変えることだけはしないでほしい。

簡単に言えば、モメンタムは一定期間において、だれが勝者でだれが敗者かを教えてくれる。今日、原油が24ドルで引け、8日前の引けが25ドルなら、結果は100ティック（1ドル）のマイナスのモメンタムになる。この期間に空売りしていれば100ティックの利益になり、買っていれば100ティックの損失になった。

ただ、モメンタムは、マーケットが大きく動いたあと小さな動きに変わってしまったときが一番役に立つ。もしこのモメンタム指標が変化すれば、たとえばほんのわずかでも手仕舞うべきときだと分かる。例を挙げておこう。

今日の終値	24.65
1 日前の終値	24.75
2 日前の終値	24.50
3 日前の終値	24.55
4 日前の終値	24.45
5 日前の終値	25.00
6 日前の終値	25.75
7 日前の終値	25.55
8 日前の終値	26.00

今日の終値の24.65ドルと8立会日前の26.00ドルを比べると、今日のほうが安いことからマーケットはマイナスのモメンタムだということが分かる。それから3日間は大きな動きがなく、終値が24.51ドル、24.58ドル、24.52ドルだとすると、どう見ても終値ベースで見るとマーケットは横ばいということになる。そして翌日、マーケットは24.65ドルで引けた。この日から8日間の終値チャートは次のようになる。

今日の終値	24.65
1 日前の終値	24.52
2 日前の終値	24.58
3 日前の終値	24.51
4 日前の終値	24.65
5 日前の終値	24.75
6 日前の終値	24.50
7 日前の終値	24.55
8 日前の終値	24.45

今回は、現在の終値は8日前の終値と比べてモメンタムが0.20ドル分プラスになっている。つまり、マーケットは大きく動いていなくても（実際3日間はほとんど動いていない）、モメンタムがマイナスからプラスに変わったことで、手仕舞うべきときだと分かる。

今日の終値と一定期間前の終値を比較したモメンタムの変化は、マーケットが自分のポジションに不利な動きをしていなくても手仕舞うべきことを示唆してくれる。



さまざまなマーケットのモメンタムの値は毎日ピボットシートに記録されている。巻末の付録に一例を載せてある。

# リバーサルトレード

エネルギー先物のような立会場取引であれ、店頭株のようなオンライン市場であれ、私がこの2～3年に使った最高のシステムはリバーサルトレードだった。これは、ほかのトレード本に載っているような種類のものとは違い、マーケットの急変を見つけようとするものである。別の言い方をすれば、ダマシをとらえようとするものだ。ダマシだと分かったときは、**ACD**システムを使って仕掛ける。ここでも目的は、みんながパニックに陥って一斉に仕掛けてくる前に最初に逃げ出す人になることである。

リバーサルトレードでは次のようなことを探していく。まず、同じ方向のA点を2回続けて付けるのを探す。もちろん最速の場合は連続した2立会日だが、これから説明していくように、同じ方向のA点を何日か空けて2回付けることもある。ただ、この場合はその間にほかの**ACD**シグナルが入ってはならない。言い換えれば、1日目にAアップが付いて3日目に再度Aアップが付けば有効なお膳立ての完成とすることができるが、これは2日目にほかの**ACD**シグナルが付いていない場合に限る。

そのお膳立ての例を挙げておこう。仮に今日、**IBM**が100ドルでAダウンを付けて翌日に**100.50**ドルで再びAダウンを付ければ、この2日間の終値に関係なく、連続してAダウンを付けたことになる（最初が100ドルで次が**100.50**ドル）。

そして、次の**ACD**システムのシグナルがAアップで、そのAアップの値が前の2つのAダウンの価格よりも高い場合を探す（最初にAアップを2回付けたときは、その両方のAアップよりも低いAダウンを探す）。今回の例では、3日目に**IBM**が**101.50**ドルでAアップを付ければ、リバーサルトレードが完成する。

ここで何が起こったのか考えてみよう。最初に100ドルでAダウンを付けて、マーケットが下げたときに空売りしたトレーダーがいた。**100.50**ドルで2回目のAダウンを付けたのでさらに空売りが続いた。ところが今日は**101.50**ドルでAアップを付けたため、みんな資金不足に陥って含み損を抱えたまま買い戻すしかなくなっている。もう一度復習してみよう。上の事態がリバーサルトレードだと分かれば、みんなは負けポジションを抱えて身動きが取れなくなっていて、まもなく逃げ出そうとする。そして、いち早くリバーサルシグナルを得ることによって、みんなが買い戻す前に仕掛けて、踏みによる上昇を利用したい。

ただ、ここで注意すべき大事なことがある。このトレードは、A点を2回連続で付けたあとで反対のA点を付けた場合のみ実行する。例えば、2日前に100ドルでAダウンを付け、1日前にも**100.50**ドルでAダウンを付けたとしても、今日も**100.25**ドルでAダウンを付ければ、リバーサルトレードは無効になる。同じ3つのAシグナルが出た場合は、リセットして別のお膳立ての可能性を探したほうがよい。短期トレーダーのポジションの保有期間は、短ければ4時間くらいから長いときは2日くらいまで、もし同じシグナルが3回出れば、1日目に仕掛けた人は3日目にはもう利食っているし、2日目に仕掛けた人の一部も利食っているだろう。これは、多くのトレーダーがうまく利食ったあとにはリバーサルトレードのチャンスはもう残っていないということだ。

また、連続して2回Aダウンを付けたあとで、2日目にCアップも付けたとすればこれも無効になるし、AアップとAダウンを付けるのもリバーサルトレードのお膳立てにはならない。繰り返しになるが、リバーサルトレードでは同じシグナルが連続して点灯しなければならない（Aアップが2回とか、Aダウンが2回など）。

少し前に書いたように、2つのAシグナルの間に中立日があるのはかまわないが、A点、B点、C点、D点を付ければ無効になる。また、Aシグナルの間に1～2日の中立日があるケースはよいが、シグナルの点灯する間が長すぎても、お膳立ては無効になる。

前の**IBM**の例に戻って、2日前に100ドルでAダウンを付け、1日前が**100.50**ドルでAダウン、今日は**101.25**ドルでAアップが付いたとする。これはAダウンが2回続いて次にAアップが付いているため、リバーサルトレードのお膳立てになっている。しかし、もし2日前の100ドルのAダウンと1日前の**100.50**ドルのAダウンのあとに、今日は**104**ドルでAアップが付いたとすれば、どちらが良いトレードになるのだろう。

これは言うまでもなく、後者のほうが良い。**100**ドルや**100.50**ドルで空売りした連中は、窓を空けて**104**ドルを付けたところで急いで手仕舞おうとパニックに陥っている。また、マーケットがこのように急騰したときは、買うのを躊躇

躊躇するトレーダーが多くいることも覚えておいてほしい。この例では、マーケットが3〜4ドル上がったときに買いたい人はほとんどいないが、トレード心理から言えば、みんなのやりたくないことが最高の選択になることはよくあることだ。2つのAダウンとその次のAアップ（または2つのAアップと次のAダウン）の差が大きいほど、このトレードの成功率は高くなる。これは急な動きに身動きがとれなくなった人たちを利用したトレードで、特に窓を空けて寄り付いたときや、意地を張って損切りしないトレーダーが多いときはさらに有利になる。もしIBMがAダウンを2回続けて付けたあと8ドルも上に窓を空けたとすれば、多くのトレーダーがここで買うのを躊躇する。しかし、このような状況が20〜30ドルの利益をもたらす場合も多い。

リバーサルトレードは2回連続したAシグナル（Aアップが2回か、Aダウンが2回）のあと反対方向のAシグナルが付いて身動きが取れなくなった人たちがいるマーケットを探し出す。2つのAアップとAダウンの差（または2つのAダウンとAアップの差）が大きければ、トレードの成功率は高い。

次は、リバーサルトレードを手仕舞うことについて見ていこう。Aシグナルで仕掛けたトレードは、手仕舞いの戦略も含めてACDシステムで管理する。これは、反対のシグナルが点灯するまでポジションを保有するということを意味している。もしAアップで仕掛けたならば、その日にCダウンが付くか次にAダウンが付くまで保有することになる。

私は、リバーサルトレードで2週間保有したことがある。このトレードを仕掛けたとき、マーケットはずっと順行していた。リバーサルトレードは、洗練されていない投機家やトレーダーが多い未熟な市場でうまくいくことが多い。私はリバーサルトレードの概念を使ってアメリカの株式や商品からドイツの債券市場、ロンドンの金融市場、遠いところではオーストラリアなど、世界中でトレードしてきた。ただ、ACDシステムの基本教義にあるように、株式でも商品でもトレードを可能にする十分な流動性と、価値あるトレードにするためのボラティリティがなければならない。

簡単に言えば、このリバーサルトレード戦略は人間の心理をうまく利用することで機能している。ここで探するのは、みんなが追い込まれて泣く泣く手仕舞うはめになるような状態である。図6.2〜図6.7は、さまざまなお膳立てを示しているが、このなかでリバーサルトレードの条件に見合うものはほんの一部しかない。

図6.2 リバーサルではないケース——2つ目のシグナルがAアップではなくCアップになっている

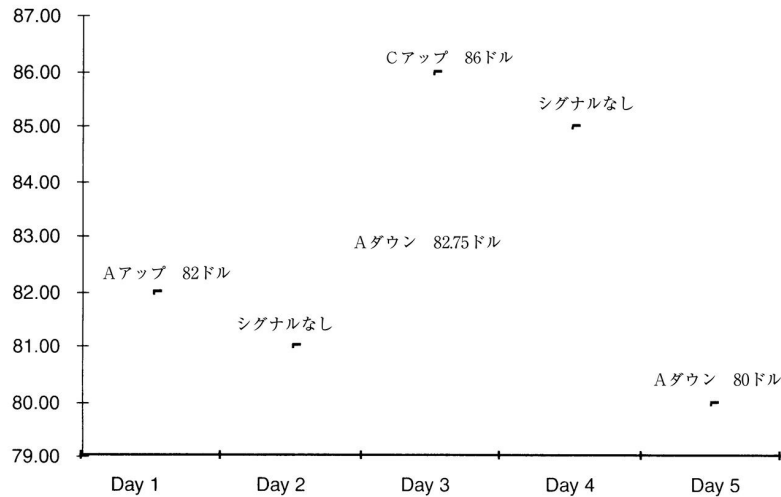


図6.3 リバーサルではないケース——3回連続のAアップ

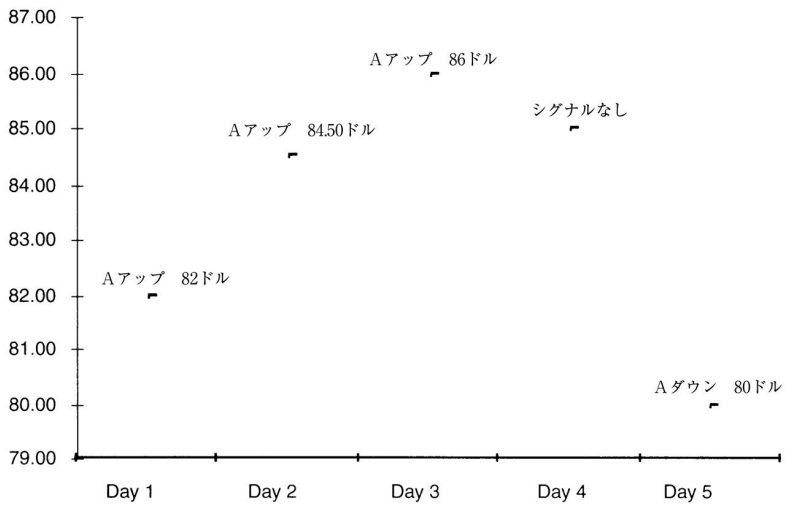


図6.4 リバーサルではないケース——Aダウンが82ドルよりも下ではない

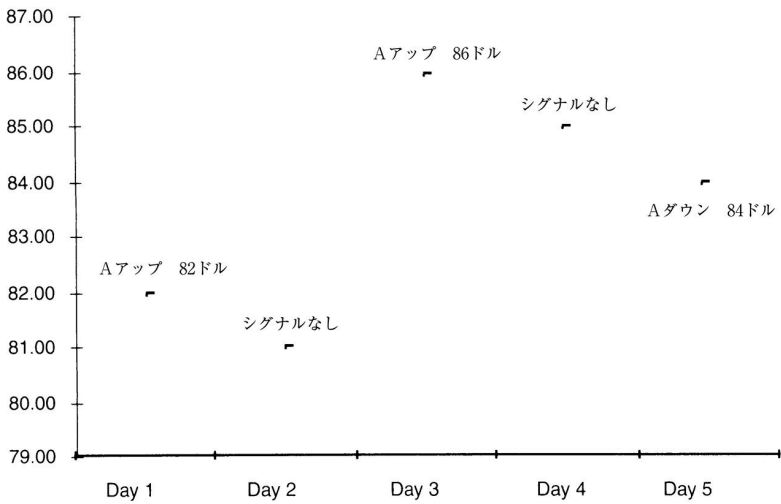


図6.5 リバーサルケース

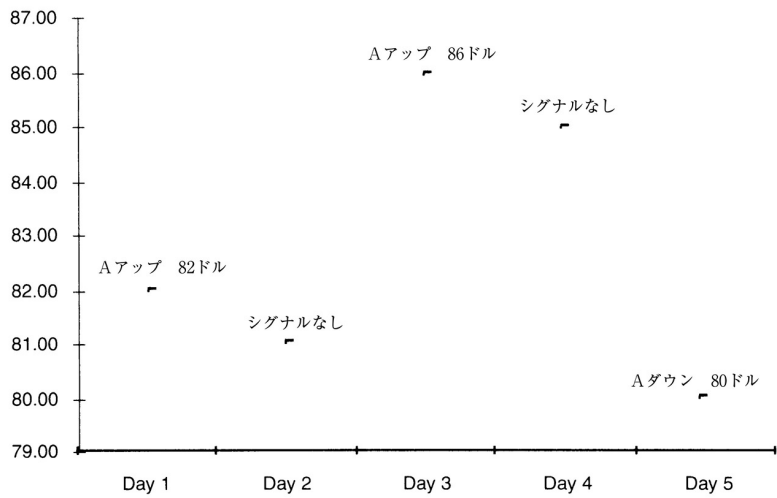


図6.6 図6.7よりも劣るリバーサルケース

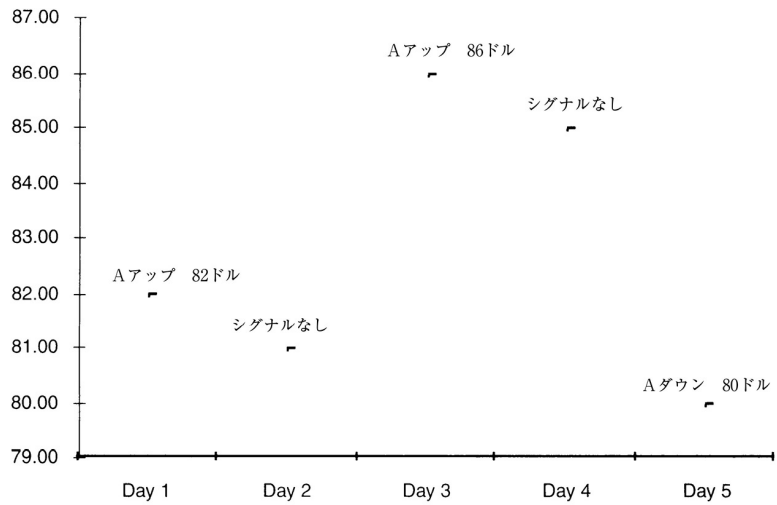
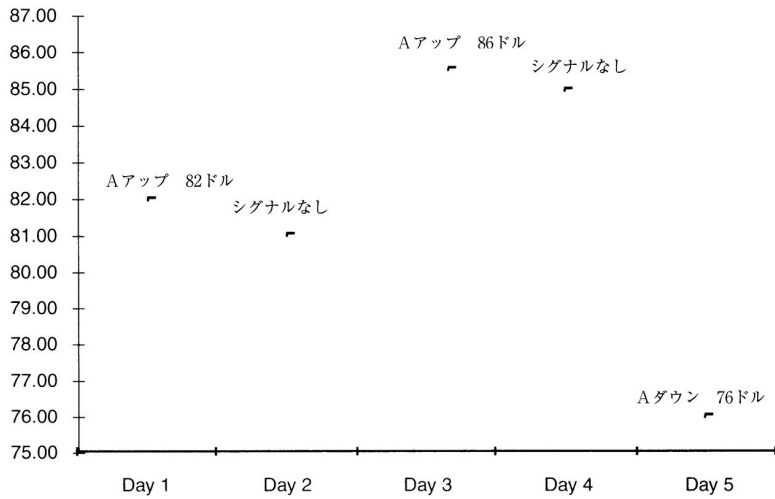


図6.7 図6.6よりも優れたリバーサルのケース——図6.7のAダウンの価格が図6.6のAダウンよりも安い

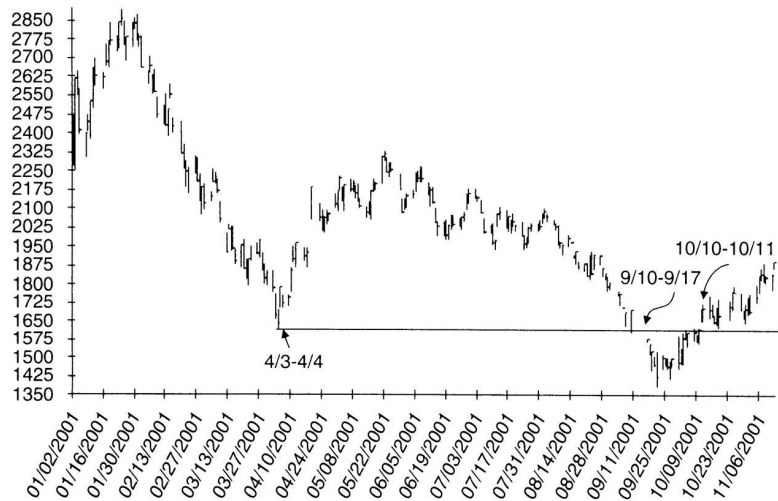


## 2 方向スイングエリア

次に、2方向スイングエリアの概念を紹介する。原油が24ドルの支持線と25ドルの抵抗線の間を上下しているときに、何かの出来事によって窓を空けて23ドルに下げ、それまでの安値である24ドルを下回ったとする。しばらくしてマーケットが24ドル近辺を試し始めると、前は安値だった24ドルが今では抵抗線になっている。このような場合、24ドル周辺を2方向スイングエリアという。窓を空けて23ドルに下げる前は24ドルが支持線だったからだ。

図6.8はナスダック総合指数で、2001年4月の安値から1620～1660近辺に支持線を引いてある。ところが、2001年9月11日に同時多発テロが起けるとナスダック総合指数は窓を空けて1620を下回り、それによって翌月は1620～1660の水準が現在価格よりも上にある抵抗線に変わってしまった。そして、マーケットがこのエリアを上抜けると、1620～1660は再び支持線になった。

図6.8 ナスダック総合指数——1620～1660のスイングエリア  
(2001/4/30～11/6)



# トレンドリバーサルトレード

トレーダーは天井や底を狙いたがる。しかし、私はそれは不可能に近いことだと思っているので、あえてやろうとも思わない。しかし、もしマーケットの極端な値を見極めようとするなら、最善策はトレンドリバーサルトレードだと思っている。トレンドリバーサルトレードのお膳立ては短期のシグナルにもなるが、長期的にはマーケットの方向が変わることも示唆してくれている。

トレンドリバーサルトレードのお膳立ては、マーケットにある程度の期間メジャーな上昇トレンドかメジャーな下降トレンドがあることが最初の条件となる。これは2～3日では短すぎるが、2～3週間なら十分で、1カ月あればとても良いし6カ月ならさらに良い。10～12年間強気相場にある株式市場は、持続するトレンドの究極の例かもしれない。長期の時間枠ほど、トレンドリバーサルトレードもうまく機能する。

持続するトレンドのあるマーケットが見つかったら、まずはトレンドの方向に窓を空けて寄り付くのを待つ。このとき、連休になった週末や祝祭日のあとならさらに良い（これについてはさらに後述する）。つまり、もしマーケットが持続する上昇トレンドであれば、上に窓を空けて寄り付いて新高値を付けるのを待ち、下降トレンドが続いているのであれば、下に窓を空けて寄り付いて新安値を付けるのを待つ。

上昇トレンド途上で上に窓を空けて寄り付いて新高値を更新した前の例を続ければ、次は良いAダウンが付くのを待つ。これは単にAダウンまで下げて上昇するのではなく、しっかりとAダウンの水準を下回って、しばらくそこにとどまっていなければならない。

先に進む前に、舞台裏を検証しておこう。マーケットが上に窓を空けて寄り付いたのは、空売りした連中が負けを認めたからで、彼らはいくらでもいいから取引開始後10～15分間で手仕舞おうとすることから、窓を空けた。この時点で、プロのトレーダーが売り手として参入してくる。彼らはそれまでこのトレンドに乗っていたが、ここで負けている連中の反対サイドに回り、買いポジションを手仕舞うだけでなく、一部は空売りも始める。寄り付きに窓を上空けたのは明らかに空売りした連中が負けを認めたためだが、普通と違う動きになるのはプロが買いのポジションを手仕舞って空売りを仕掛けるからで、これによってマーケットはそのあとすぐに下げる。

通常、最初の売りの波が過ぎると、マーケットは落ち着く。そして少し回復すると、長く続いてきた強気の上昇トレンドに慣れてしまったフロアトレーダーやオフィスのデイトレーダーたちは再び買いを仕掛けるか、少なくとも空売りのポジションを手仕舞う。それまでの上昇トレンドがみんなの頭のなかに染み付いていて、空売りポジションを長く持つ気になれないのだ。

そして、この買い戻しによる上昇がマーケットをオープニングレンジかその上まで押し上げる。ただ、このときはCアップの水準までは達しないし、達したとしても失敗に終わる。そして再びオープニングレンジの半ばまで下げたときにトレンドリバーサルトレードで空売りする最高のタイミングになる。

ここでもう一度を確認してみよう。最初の下げで空売りしたトレーダーはもうマーケットには残っていないし、付けることに失敗したCアップで再び空売りするとは考えにくい。ただ、オープニングレンジで空売りした場合は、リスクはCまでに限定されている。うまくいけば天井で仕掛けたいのに、この日はそのあと崩壊して最安値近くで引けるはずなので、莫大な利益チャンスが期待できる。ただ長期的に見れば、上のような姿勢はこれまで形成されてきたトレンドの反転やマーケットはどうなるかという意味では問題かもしれない。

しかし、Cアップを付けることに失敗したあと、オープニングレンジに戻ってそこで止まってしまったらどうなるのだろう。そうなれば、カジノバスの乗客がみんな同じ水準に押し寄せてくるため、前述のとおり、時間が価格よりも重要な損切りの要因となる。ある時間内で予想した方向に動かなければ効果はなく、どのような場合でもオープニングレンジの長さの2倍以上は待てない。その時間内で動きがなければ、展開に時間がかかりすぎているため手仕舞ったほうがよい。

私は、このようなケースを「近所の散歩」トレードと呼んでいる。私が原油のビットトレーダーだったころは、もしCアップやCダウンを付けることに失敗したあと再びオープニングレンジに戻ればそのチャンスを利用して逆バリをし、反対のC点に損切りを置いてから20分間の散歩に出かけていた。そしてビットに戻ったときにマーケットが有



利に動いていなければ手仕舞うし、もし予想どおりに動いていればそのまま保有して様子を見ながら枚数を増やすこともあった。

もし運良く正しいトレンドリバーサルトレードのお膳立てが見つかったときは、短期のACDシステムのシグナルでトレードを管理するだけでなく、長期の指標（例えばローリングピボットレンジ）も使ってうまくいっているデイトレードを少し長めに保有することを考える。トレンドリバーサルトレードで天井や底を見つけて、大きな反転のチャンスをとらえることも珍しくはない。

また、運良くトレンドリバーサルトレードを仕掛けられたときは、わずか2～3ティックで手仕舞うのはもったいない。せめてその日の安値を付けるまでは保有してほしい。例えば、金曜日に原油が32.00ドルで引け、月曜日に過去3カ月の高値となる32.50ドルで寄り付いたあと、32.25ドルでAダウンを付けたとする。そのあとは32.60ドルまで上がったがCアップには届かず、オープニングレンジ内の32.50ドルに下げてしまった。このとき、もし32.50ドルで空売りして、その時点におけるその日の安値が32.10ドルならば、10回中9回は前日の安値よりも安く引けると考えられるため、最低でも32.10ドルに達するまでは空売りポジションを保持しておきたい。さらに、手仕舞うときも一部を残してローリングピボットレンジなど長期のACDシステムの概念に従って、管理していくとよいだろう。

繰り返しになるが、トレンドリバーサルトレードのカギとなる概念のひとつはその時点でのマーケットの心理を理解することにある。マーケットが上に窓を空けて始まって新高値を更新したあと下落してAダウンを付け、反転してCアップを付けるのに失敗してからオープニングレンジまで下げたら、その時点で売ろうというトレーダーはほとんどいない。それまでにすでに儲けていたとしても（例えば、上に窓を空けた寄り付きで空売りしてAダウンで買い戻すなどしていたとしても）、やはり仕掛けるのは躊躇するだろう。彼らは最初に利益を出せたことで満足しており、あえてもう一度売ろうとは思っていない。しかし、トレンドリバーサルトレードのお膳立てを理解していれば、これが低リスクで、高勝率のトレードだということは分かるはずだ（この場合はオープニングレンジでの空売り）。仕掛けるのが難しいときは最高のトレードになることが多いということを覚えておいてほしい。

上に窓を空けて寄り付いたあと良いAダウンを付け、再度上がってCアップを付けるのに失敗したあとオープニングレンジまで下げれば、ここで空売りを仕掛けようというトレーダーはあまりいない。しかし、仕掛けるのが難しいときは最高のトレードになることが多い（もちろんトレンドリバーサルトレードも対称なので、下降トレンドで下に窓を空けて寄り付いたあと良いAアップを付け、再度下がつてCダウンを付けるのに失敗した状態を探し、その後オープニングレンジまで戻したところで買う）。

今回のトレードをおさらいしておこう。

- 1・上昇（または下降）トレンドが続いたあと、上に（または下に）窓を空けて寄り付いて新高値（または新安値）を付ける。この時点で、長い間、含み損を抱えていたトレーダーは手仕舞う。
- 2・良いAダウン（またはAアップ）を付ける。これは、スマートマネーと呼ばれる連中が長期で安定していた上昇トレンド（または下降トレンド）で得た利益を利食いついたため。
- 3・一息ついたマーケットが再び上昇（または下落）し始める。日中、Aダウン（Aアップ）の近くで空売りした（買った）短期トレーダーは損切りにつっかかる。そこでポジションを買い戻して（売って）新たに買う（空売りする）と、マーケットは一気にC点まで上げる（下げる）が、これは付けるのに失敗する。
- 4・この日の新高値（新安値）で付けることに失敗したCアップ（Cダウン）は、売り（買い）の引き金となってマーケットはオープニングレンジに戻る。
- 5・ここからは荒っぽい展開になる。少し前にスマートマネーが売った（買った）あとで空売りした（買った）連中は、マーケットが次の新高値（新安値）まで急騰して（急落して）損切りにつっかかる。そのあとは、Cアップを付けることに失敗し、彼らはすべてを失う前に手仕舞うだけで幸せだと感じることになる。
- 6・普通のトレーダーは、次にマーケットがオープニングレンジまで戻ったときに新たには仕掛けない。しかし、こ

れがトレーディングに関する最大の教訓のひとつをもたらしてくれる。

繰り返しになるが、仕掛けるのが最も難しいときは常に最高のトレードになる。

トレンドリバーサルトレードのお膳立ての素晴らしい例が、2000年3月10日にあった。2000年3月9日木曜日、ナスダック総合指数は**5046**で引けたが、そのあと高値のドット・コム企業やハイテク企業などの黒字の決算発表があったことで、10日の金曜日は**5080～5100**と上に窓を開けて寄り付いた。その後、マーケットは下げて**5063**でAダウンを付けてから、その日はそれまでの安値となる**5055**を付けた。しかし、その後は反転してオープニングレンジを抜けると**5135**のCアップ近くまで達したが、上げたのは**5132.52**まででCアップを付けることに失敗した。このあと価格はオープニングレンジも抜けてそのまま下げ、この日の安値である**5039**を付けたあと、**5048**で引けた。

もしこれがトレンドリバーサルトレードだと気がつけば、Cアップを付けるのを失敗したあと、新安値を付けることを期待してオープニングレンジの**5080～5100**で空売りしただけでなく、一部は長めに保有することができたかもしれない。もしかしたら、今日でもまだ空売りポジションを持っていたかもしれない。

# 頭にきてこれ以上我慢できないトレード

「頭にきた」トレードは、トレンドリバーサルトレードの概念に連休になった週末や祝祭日（戦没者追悼記念日、感謝祭、労働者の日など）を組み合わせる方法で、トレンドリバーサルトレードと同様に長く続いているトレンドがあることが条件になる。そして、トレンドリバーサルトレードの心理から分かっているとおり、マーケットに長く続いたトレンドがあれば、天井（弱気相場なら底）を狙って何度も打ちのめされたトレーダーがたくさんいる。そんなときに連休を迎え、せっかくの戦没者追悼記念日や独立記念日なのに、彼らは間違ったポジションを抱えてきたことや含み損のことを考えて、惨めな気持ちのまま家で過ごしていた。もしかしたらパートナーはそんな状態に我慢できず、「もう降参して、マーケットが開いたらすぐに負けポジションは損切って」などと言っているかもしれない。彼らは週末が終わるころには、上昇相場で空売りをしていたのなら寄り付きで買い戻し、下落相場で買っていたのなら朝一番で投げることを決心している。

みんなが降伏する気分になっているこの時点では、それまでのトレンドと同じ方向に窓を空ける。必死で気持ちを静めようとしているトレーダーたちがこの窓を生み出しているのだ。ところが、彼らがついに降参すると驚くなかれ、マーケットは前日のトレーディングレンジに戻る。ただ、長いこと追い求めた天井や底がやっと見つかったときには、彼らはもうポジションを手仕舞ってしまっている。

例えば2000年のある連休前の金曜日、クアルコム（QCOM）の値幅は640～660ドルだった。そして週末に入ると、一部のアナリストがこの会社の株価はいずれ1000ドルになるという予想を発表した。連休が明けるとクアルコムは上に窓を開けて寄り付き、しばらく680～685ドルで推移していたが、その日の後半になると株価は金曜日の値幅と同じ640～660ドルに下げた。そしてこれ以上もう上がることはなかった。

トレンドリバーサルトレードの概念と「頭にきた」トレードを組み合わせるときは、窓を空けて高値を更新したあとAダウンを付け、Cアップを付けるのに失敗し、最後に前日の値幅に引き返すというパターンを探すことになる。そして前日の値幅に入ったところで空売りしていなければ、すぐにでも仕掛けてほしい。

マーケットでは歴史が繰り返すため、「頭にきた」トレードとトレンドリバーサルトレードのお膳立ても非常に効率がよい。人は何度もパニックに陥っては同じ間違いを犯す。つまり、このようなお膳立ては起こるタイミングを見極めることができれば、マーケットの方向転換を予想して、みんなの苦難を自分の利益に変えることができるのだ。

# トレンドの変化

私の会社では、これまで見てきた指標とトレンドリバーサルトレードや「頭に来た」トレードを組み合わせることでトレンドの変化を予測するコンピュータプログラムを作っている。当社のデータベースには個別の商品や株式に関する15年以上の価格データが蓄積しており、その分析から特定のトレンドの平均期間を推定できるようになっている。われわれは、そのトレンドがどれほど強いかどうかに関係なく平均的にどの程度の期間持続するのかを統計的に判断しようとしている。そして、パターン認識ができれば、翌月以降の予測を立てていく。例えば、毎月月末にはこの分析を使って翌月にトレンドの変化があるかどうかの見通しを立てている。それまでのトレンドが簡単に反転する可能性がある2～3日の期間が翌月のどの辺りにあるかを探しておけば、この当社独自のレーダーが変化をとらえたときは素早くポジションを手仕舞うことができるからだ（このトレンド変化を判断するプログラムの統計値は付録資料を参照してほしい）。

# 手巻き寿司

次は手巻き寿司という名前の指標だが、日本や刺身などの寿司とは何の関係もない。ただ、このことを初めて話し合ったのがたまたま日本料理店で、そのとき寿司を注文していた人がいたので、マーケットの方向の変化を早期に予測する指標にこの名前を付けた。

まずはこの指標が何を示唆してくれるかを書いておこう。まず反転日の定義をおさらいしておく、これはマーケットが前日の高値を更新したあと、前日の安値を下回ってそのまま引けることだった。反対に、前日の安値を更新してから前日の高値を超えて、そのまま引けるのもよい。この種の反転トレードの重要な点は、これがだれの目にも明らかなことで、トレード画面を見ればだれでも分かる。しかし、明白でみんなが簡単に見つけられることに価値はない（みんなが同じトレードをしていたり、同じ情報を見ていたりすることには意味がないことを覚えておこう）。

そこで手巻き寿司が登場する。われわれは1日の動きではなく5日連続で見ることにした。短期トレードの場合は10分足を5本でもよい。時間枠は一定であれば何でもよく、目的は直近の5本の足とそれより前の5本の足と比較することにある。空売りしているときに、直近の5本の足のなかでその前の5本の足の安値よりも下で売買されたものがあり、引けがその前の5本の足の高値を上回っていれば、空売りしている手巻き寿司トレードは手仕舞ったほうがよい。

手巻き寿司の概念を原油の10分足チャートで見てみよう。買いを仕掛けたあと原油の価格が20.70ドルから21.20ドルに上昇し、有利な展開になっている。次の50分間（10本足5本分）は、21.20～21.36ドルとわずか16ポイントのレンジで推移した。そして、その次の50分間は前のレンジの高値である21.36ドルを上回ったあと安値の21.20ドルも下回り、5本目の足は21.10ドルで引けた（繰り返しになるが、安値を更新するだけでは不十分で最後の足が前の5本の足の安値を下回って引ける必要がある）。この時点で空売りすべきかどうかは断定できないが、20.70ドルで建てた買いのポジションは絶対に手仕舞う必要がある。

図6.9～図6.11には、手巻き寿司のお膳立てのさまざまな例を紹介してある。

図6.9 手巻き寿司トレード（10分足でのお膳立て）

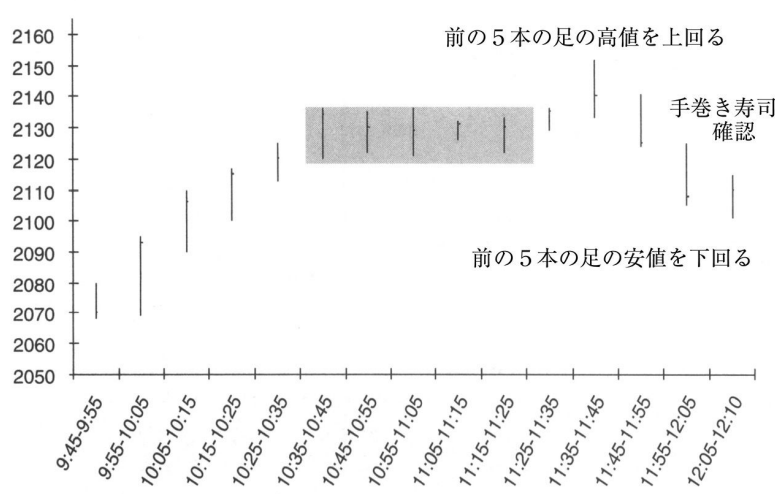


図6.10 1日の安値付近での手巻き寿司トレード (S&P先物12月限、2001/11/6)

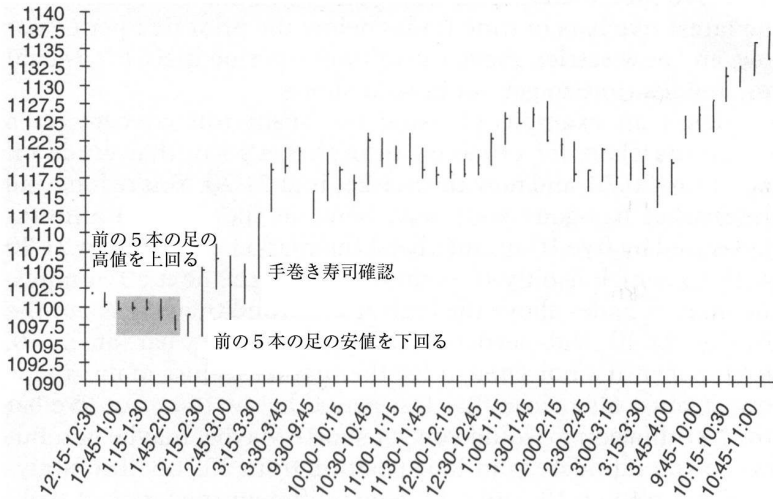
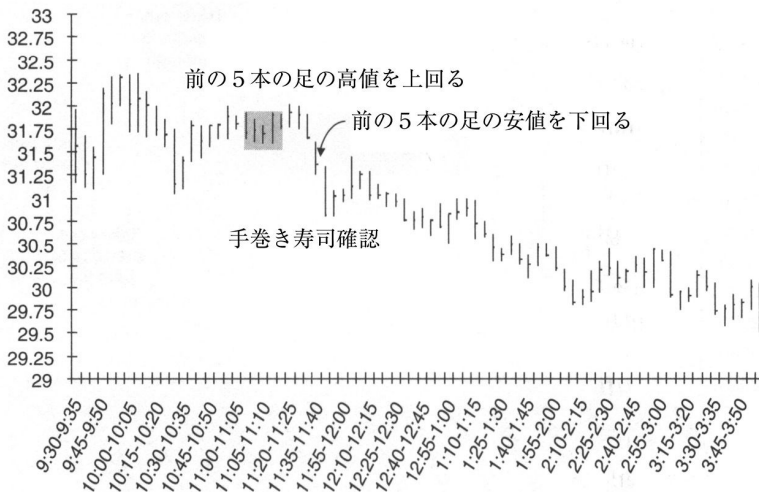


図6.11 日中での手巻き寿司トレード (VRTS、2001/10/29)



# アウトサイドリバーサル週

「アウトサイドリバーサル週」は手巻き寿司の概念を月曜日から金曜日という期間に応用したものである。この週間のリバーサルはうまく機能するが、これが1カ月だとさらに良い。1年に応用したケースは見たことがないが、もしできたときには信じられないくらい素晴らしい結果が出るかもしれない。アウトサイドリバーサル週は、前週の月～金曜日の5立会日を第1週、今週の月～金曜日を第2週と考える。そして、この第2週が第1週の安値を下回ったあと第1週の高値を上回り、第1週の高値を上回ったまま金曜日に引けるとお膳立てが整う（または、最初に第1週の高値を超えてから安値を下回り、安値を下回ったまま引ける）。

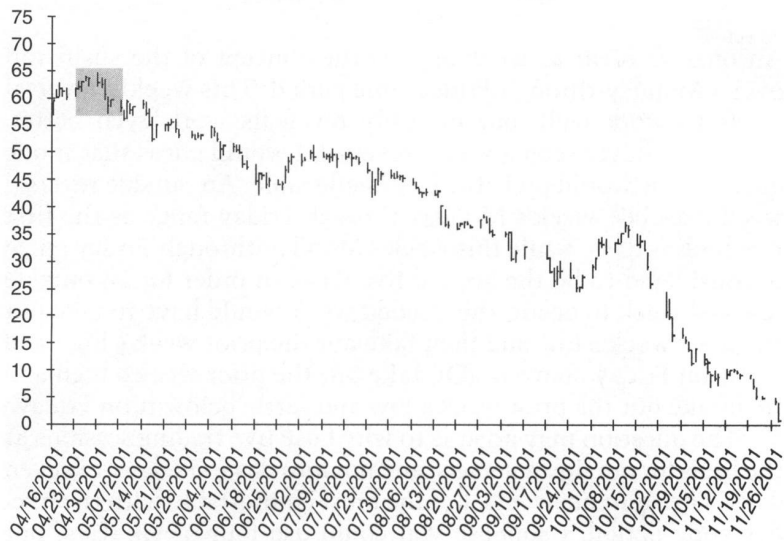
私がアウトサイドリバーサルのペースに4日でも6日でも7日でもなく、なぜ5立会日を使うのか疑問に思っただろうか。簡単に言えば、5日という期間が最も楽だからで、6日でも特に問題はないと思う。ただ、期間がどうであれ、それを一貫して使い続けなければならない。アウトサイドリバーサル週が起これば、マーケットの重要な天井と底を見極めて、高勝率・低リスクのトレードが可能になる。

アウトサイドリバーサル週の例を見ておこう。下の表には2001年春のエンロン（ENE）の始値、高値、安値、終値を2週間分示してある。

日付	始値	高値	安値	終値
第1週				
4月23日	60.77	61.70	60.32④	61.65
4月24日	61.95	62.95	61.60	61.87
4月25日	61.62	62.99	61.18	62.88
4月26日	63.01	63.99②	63.01	63.66
4月27日	62.80	63.61	62.18	63.50
第2週				
4月30日	63.20	64.75①	62.26	62.72
5月1日	63.60	63.60	61.80	62.41
5月2日	63.40	63.40	59.50③	60.50
5月3日	59.60	60.20	57.05	58.35
5月4日	58.54	59.70	58.46	59.48⑤

表の4本値をよく見て際立つ点を探すと、まずは第2週の高値**64.75①**が第1週の高値**63.99②**を超えていることが分かる。そのあとマーケットは上方のモメンタムを失って下落し、5月2日に付けた安値**59.50③**は前週の安値**60.32④**を下回った。そして最後に、5月4日に前週の安値を下回る**59.48⑤**で引けてアウトサイドリバーサル週のお膳立てが完了した。これは典型的なアウトサイドリバーサル週の例で、それから数カ月間、株価は順調に下がっていった。そして2001年12月、株価は1株当たり50セント未満まで落ち込んでエンロンは破産した（図6.12）。

図6.12 エンロンのアウトサイドリバーサル週 (2001/4/30~5/4)

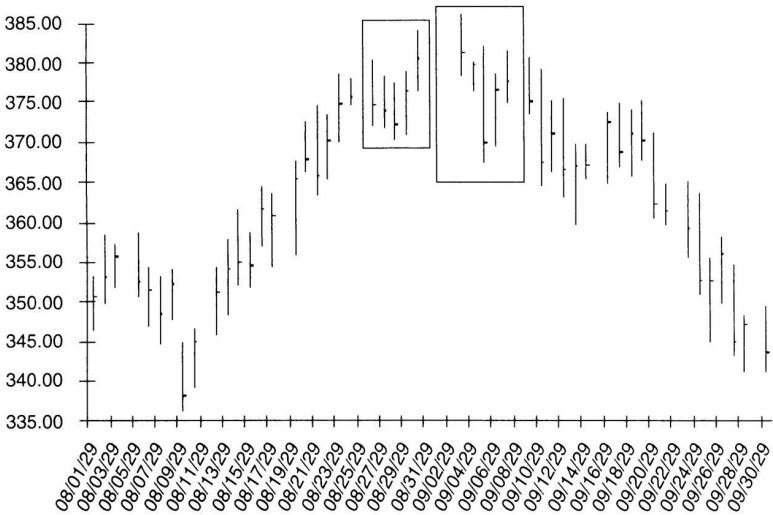




# 1929年の暴落——ほぼ完璧なトレード

次は、ACDシステムを1929年のマーケットに当てはめてみようと思う。株式市場で1925～1929年という長期間持続した上昇トレンドは、1929年8月に史上最高値を付けた（当時は株の取引が週6日行われていて休みは日曜と祝日だけだった、図6.13参照）。

図6.13 1929年のダウ工業株平均



ダウ工業株平均（1929年）

日付	高値	安値	終値
8月26日	380.18	372.09	374.46
8月27日	378.16	371.76	373.79
8月28日	377.56	370.34②	372.06
8月29日	378.76	370.79	376.18
8月30日	383.96①	376.16	380.33③
8月31日	祝日		
9月1日	日曜日		
9月2日	祝日		
9月3日	386.10④	378.23⑤	381.17⑥
9月4日	380.12	376.33	379.61
9月5日	382.01	367.35⑦	369.77
9月6日	378.71	369.46	376.20
9月7日	381.44	374.94	377.56⑧

表を見ると、1929年8月の最終週の高値は383.96ドル①、安値は370.34ドル②、そして金曜日の終値は380.33ドル③で、この週は史上最高値で引けた。この週末は労働者の日が入って連休だったため、それまで空売りの含み損が膨らんでいた連中はついに降伏した（「頭にきた」トレード）。翌立会日の9月3日は上に窓を開けて寄り付き、385.20ドルで高値を更新したあと、382.80ドル近辺でAダウンを付け、再び反発すると史上最高値の386.10ドル④で

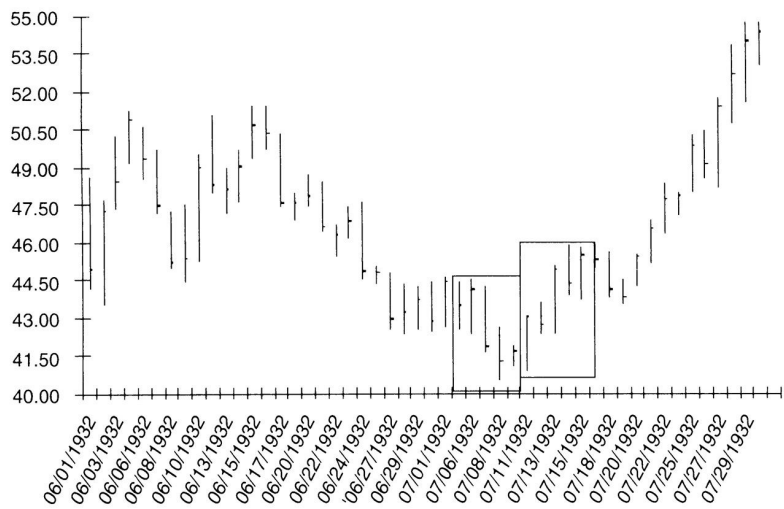
Cアップを付けることに失敗し、その後は急落してこの日の最安値の378.23ドル⑤のあと、381.17ドル⑥で引けた。完璧なトレンドリバーサルトレードのお膳立てである。

その後の展開を見ていこう。先述のとおり9月3～7日の週の高値は386.10ドル④で、その前の週の高値383.96ドル①を超えていた。また、9月5日に付けた安値の367.35ドル⑦は前週の安値370.34ドル②を下回り、週の終値の377.56ドル⑧は前週最高の終値だった380.33ドル③を下回っていた。ただ、この週の終値は前週の安値370.34ドル②を下回っていないため完璧なリバーサル週にはならないが、かなり近い状態にはなっている。そして9月7日の週が終わると、マーケットは本格的に崩壊し始めた。ダウ平均の終値は9月14日土曜日が367.01ドル、21日土曜日が361.16ドル、28日土曜日が347.17ドルだった。実際、このお膳立てが1929年のマーケットの終わりの始まりで、大暴落の前兆となった。

もしわれわれが当時ACDシステムの知識を持ってトレードしていれば、買いポジションをすべて手仕舞って暴落を避けることができただろうし、うまくいけば空売りだってできたかもしれない。

何度も書いているようにACDシステムは対称なので、1929年の天井でできたことは1932年7月4日の底でもおそらく同じように機能しただろう。1932年のアウトサイドリバーサル週のお膳立ては7月の独立記念日の週末直後ではなくその1週間後だったが、それでも重要な例なので検証しておこう(図6.14)。

図6.14 1932年のダウ工業株平均



マーケットは明らかに下降トレンドが続いていて、ここで底をつかもうとしたトレーダーはみんな負け試合を強いられている。1929年8月に380ドルを付けたダウ平均が、この時点では約90%の価値を失い、40ドル台まで下げてしまった。

ダウ工業株平均（1932年）

日付	高値	安値	終値
7月5日	44.43	42.53	43.47
7月6日	44.50①	42.31	44.08
7月7日	44.26	41.63	41.81
7月8日	42.61	40.56②	41.22
7月9日	41.89	41.08	41.63③
7月10日	日曜日		
7月11日	43.03	40.92④	42.99
7月12日	43.65	42.36	42.68
7月13日	45.05	42.35	44.88
7月14日	45.85	43.91	44.34
7月15日	45.98⑤	45.09	45.29⑥

7月5～9日の週の高値は**44.50ドル①**、安値は**40.56ドル②**、終値は9日に付けた史上最安値の**41.63ドル③**だった。翌週の11日、マーケットはその週の最安値となる**40.92ドル④**で寄り付いた。これは前週の安値である**40.56ドル②**を下回ってはいないがかなり近い。しかし、そのあと15日には前週の高値**44.50ドル①**をはるかに超える**45.98ドル⑤**を付け、終値も前週の**41.63ドル③**をはるかに上回る**45.29ドル⑥**となった。

これは完璧な手巻き寿司なのだろうか、それとも完璧なアウトサイドリバーサル週なのだろうか。違う。ただ、マーケットが反転する可能性を示唆しているのは間違いない。実際にもマーケットはその後まっすぐ上昇し、1932年7月末の終値は**54.26ドル**に達していた。ちなみに、このアウトサイドリバーサル週パターンが次に現れたのは1990年代半ばになってからだった。もしこの戦略のみでトレードしていたとしたら、1932年から1990年代までの間は……。

希望的観測はさておき、ここで紹介した1929年8月と1932年7月のダウ平均の例で重要なのは、歴史は繰り返すということだ。われわれの祖父母が犯したトレードの間違いを、われわれも今日同じように犯している。過去の例は完璧なACDシステムのお膳立てではなかったかもしれないが、人生に完璧なお膳立てなどない。それよりもよく見れば、これらはかなり完璧に近いということに気づいてほしい。

## 正しい時間枠を選ぶ

短期トレーダーにとって、長期トレード用の指標はほとんど意味がない。一方、長期トレーダーは1日の出来事（例えばピボットレンジをブレイクしたAアップ）に基づいて仕掛けるようなことはしない。そこで、日中のACDシステムと長期の指標の違いを述べてみよう。

短期トレーダーはAアップで買ったり、Aダウンで空売りしたり、オープニングレンジの上や下にあるB点で中立になったりする。またCダウンで弱気になったり、D点で中立になったりもする。しかし、これらはすべて日中の指標や指針だ。

一方、長期的な視点に立てば、日中の動きはさほど重視しない。むしろ気になるのは1日の最後の結果やナンバーライン値のほうで、日中の動きのほうはほとんど意味を持たない。例えば、マーケットが0から-9や+9に変わったから仕掛けて、値が0になるまで保有していくことにした場合、日中の動きは重要ではなく、その日の最終的なACDシステムの値だけが気になる。例えば、マーケットがAアップを付けてオープニングレンジよりも上で引けた場合、たとえその間にオープニングレンジを下にブレイクしてB点に達して、損切りに引っかかったデイトレーダーがいたとしても、そのあと上昇してオープニングレンジを再度上抜いて、そこで引ければそのあとの大きなスイングとは関係なくその日の値は+2となる（Cダウンに達しないかぎり）。

つまり、自分のトレードスタイルに合う時間枠を決め、その時間枠に最も大きく影響する指標を選び、それを一貫して使っていかなければならない。

## 第7章 **ACDシステム版「ウソのような本当の話」**

The ACD Version of "Ripley's Believe It Or Not"

本書の執筆を始めて間もないころは、リスク管理とトレーディングのエピソードにそれぞれ1章ずつを割り、ここに私が現在使っている補助的なトレーディングテクニックを織り込もうと思っていた。しかし、書き進めていくうちに、記憶に残っているおかしなエピソードはみんなリスク管理に関するものだという事に気がついた。そこで、この2つは1章にまとめてしまうことにした。

これらのエピソードを楽しみながら、何かしらを学んでほしい。なかには信じ難い話もあるが、すべて実話である。昔、流行したテレビ番組（「リブリーズ・ビリーブ・イット・オア・ノット」——ウソのような本当の話を集めた番組）と同様、潔白な人や後ろめたい人を守るために一部の名前は変えてある。本章を読んでタイトルどおりだと思ってもらえればうれしい。

# 配管工のライザ

昨今のマーケットでは天才でなくてもトレーディングはできる。むしろ情報が多すぎて、本当に重要なことを正しく整理分析したりするのが難しいほどだ。そのため私の友人のなかには、1つか2つの単純な概念だけを用いて大成功しているトレーダーたちがたくさんいる。

ここで親しい友人の例を紹介しよう。名前はライザとしておく。彼は、トレーダーになる前は東海岸のある大リーグの球場で熟練の配管工として働いていたが、どういうわけかNYMEX（ニューヨーク商業取引所）のトレーディングフロアに来ることになり、そこで大成功を収めた。彼の成功や独自のトレードスタイルとは関係ないが、彼はMBA（経営学修士）は持っていないし、お決まりの経営学部と法学部の二つの学部を卒業したということもないばかりか、大学に行ってもいない。彼にあるのは、自分の周りの出来事を素早く把握する持つて生まれた能力と、ものすごい自制心と、自分の判断力に対する自信だった。

ある日、彼がサンドイッチをおごってくれるというので、ついでに彼の成功の秘訣を聞いてみた。答えは単純明快で、取引開始から最初の1時間はトレードしないというものだった。この時間帯はランダムな動きが多すぎて、マーケットをうまく把握できないということだった。そこで彼は昼休みのあとトレーディングビットにやって来て少し周りを見渡し、笑顔のトレーダーたちをチェックする。それからさらに見回して不機嫌な顔をしている連中も探す。そして、そのあとは単純に笑顔の連中にちょうちんを付け、不機嫌な連中に向かったりしてトレードしていくのだという。

もちろんライザにはビットでの優れた技術があり、これが彼のトレード能力のすべてではないが、この手法には一理ある。トレーディングフロアには、グラフやチャートやテクニカル分析の小道具などを大層に抱え込んで1日中フロアに張りついていても食べていくのがやつとというトレーダーが数多くいる。取引時間が終わると彼らは決まって頭を抱えていたが、ライザはいつも笑みをたたえていた。

# 良いニュースでの悪い反応

トレーディングにおける「良いニュースでの悪い反応」という概念は、単純だが少し直感に反する考えが必要となる。まずは、私が母校のペンシルベニア大学ウォートン校で客員講師として熱意あふれる1年生を前に講義を行ったときの経験談を紹介しよう。アメリカの将来のリーダーとなる彼らはSAT（大学進学適性試験）で高得点を上げ、大変な自信を持っている。簡単に言えば、彼らの多くはたかが18歳で自分は何でも分かっていると思っているのだ。私の講義はたいいていトレーディングに関する架空のエピソードから始まる。まずはダン・ラザーが司会を務める「CBS イブニングニュース」を見てると想像してもらう。ラザーは中西部のどこかのトウモロコシ畑にヒザまで水に漬かりながら、ミシシッピ川の洪水でトウモロコシが壊滅的な被害を受けたと報告し、そのあと多大な金銭的被害を被った農民の何人かにインタビューしている。

さらなる情報として、翌日のトウモロコシ先物が取引されるCBOT（シカゴ商品取引所）ではトウモロコシがストップ高、つまり1ブッシェル当たり10セント上がると予想されていることも話す。しかし、取引が始まってみると価格はストップ高ではなく6セントしか上がらなかったうえ、1時間たつても状況はまったく変わらない。そこで私は学生たちにどう対処するかを質問する。どうしたらこの状況を利用できるのだろうか。さて、トウモロコシ先物は買うべきなのか、それとも売るべきなのか。

すると、だれもが買うべきだと答える。若い天才たちはマーケットが素晴らしい買いのチャンスを与えてくれると考えたためだが、洪水がトウモロコシの供給に与える影響にまでは考えが及ばない。彼らは需要と供給という視点でしか見ていないが、これは間違っている。この架空のエピソードは、良いニュースでの悪い反応の完璧な例と言っていだろう。良いニュース（少なくともマーケットの価格においては）は、洪水が起こって特定の作物の収穫量が減るということで、悪い反応は、価格が取引開始直後の上昇期待に応えられず、すぐに前日の水準まで下落したことだ。理由は何であれ、マーケットは活力を失い、買い手は弾がなくなったため、ここは売らなければならない。

通常、この良いはずのニュースを聞いて買った連中は、弱含む最初の兆しですぐ損切りに達してしまう。このような場合、マーケットはたいいてい2～3日程度下げ続けるが、彼らはどこで間違ったのかがまったく理解できない。彼らは、作物の被害がすでに価格に織り込まれていたとか、洪水で作付面積が減少するとの事前予測から価格はすでに上がっていたということを見落としていたのだ。また、被害を受けたトウモロコシはCBOTで受け渡す限月の分ではなかったのかもしれない。理由は何であれ、これは明らかに良いニュースでの悪い反応の好例と言える。

# 期待に応えてくれないマーケット

抜け目のないトレーダーは、**CME**（シカゴ・マーカントایل取引所）や**NYMEX**の夜間取引システムで夜間のトレードも観察している。彼らは、夜間で大きく動いても、それが翌日の日中取引に引き継がれないような場合を探している。例えば、天然ガスが夜間に**10セント**上げて直近**20日間**の高値を付けたのに、翌朝の日中取引にその影響は見えず、わずか**6セント**高いだけだった場合などがそれに当たる。マーケットが予想された動きにならないときは、問題が起っていて、マーケットが転換する早期のシグナルになっていることが多い。

別の例も見てみよう。仮に夜間取引のグローベックスで**9時15分**（東部標準時）に**S&P**が**10ティック**高く引けて直近**9日間**で新値圏を付けたのに、**9時30分**の日中取引の開始では**5～6ポイント**高く寄り付いたもののすぐに下落に転じたとすれば、これもマーケットが期待に応えてくれないケースとなる。ただ、もし夜間取引が終了したとき（**9時15分**）から日中取引が始まる（**9時30分**）までの間に経済指標の発表や臨時ニュースがあったときは、当然ながらこの期待に応えてくれないというシナリオは無効になる。

**1991年8月**にクーデターで当時のゴルバチョフ・ソ連大統領が別荘に軟禁されたとき、ロンドンのブレント原油はこのニュースに反応して**4ポイント**上げたが、その後ニューヨークで原油の取引が始まると、価格は**2セント**しか上げなかった。ニューヨークとロンドンでこれほど大きな差があるということは、どこかに問題があるという早期のシグナルだと考えられる。結局、この日の引けにかけて原油先物は大きく下落し、以前と変わらない水準で引けた。

トレーダーは翌朝、マーケットが期待に答えられなかった理由を事後になってから知ることが多い。そこで、特定のある出来事の些細なことを心配したり、何がマーケットに影響を与え、何を与えなかったという理由を考えるよりも、商品や株のそのときの値動きに反応するほうがずっと簡単である。もし**XYZ**という企業が素晴らしい決算を公表したのに、寄り付きの上昇が**2ドル**ではなく**0.50ドル**だけだったら、そのときは売ったほうがよい。あとになって知り合いのアナリストが**XYZ**の収益が事前の予想よりも低かったと教えてくれるだろう。また、もし**OPEC**（石油輸出国機構）が減産に合意したことを受けて原油が高く寄り付くと予想されていたのに、翌朝に安く始まったときも売る。きつと午後になれば、**CNBC**テレビで有名な評論家が一部の産油国に割当量のごまかしがあったと説明していることだろう。



## まったく見当がつかない

かなり長期にわたってある方向のトレンドが続いているとき、その理由を尊敬するトレーダーに尋ねたとする。もしかしたら長引く寒波のせいで天然ガスの価格が上がっているのかもしれないし、OPEC首脳会議を前に原油価格が上がっているのかもしれない。あるいは、FRB（連邦準備制度理事会）のグリーンズパン議長がどこかの昼食会で講演する予定なので、S&P先物がそれを見越して下落しているのかもしれない。もしマーケットが大きく動いてもトレーダーたちがその理由をはっきりと分かっているようならば、そのトレンドはそう長くは続かない。反対に、もしマーケットがある方向に動いているのにだれにもその理由が分からないときは、そのトレンドは長く続く傾向がある。マーケットが明らかな理由もないまま上下するときは、みんなが想像する以上にその流れが続く可能性が高い。

# トレーダーの弱点を探す

トレーディングにおいてマーケットを理解することは、戦いのほんの一部を理解することではない。それよりも自分自身を知ったり、自分の性格の特徴的な面を理解したり、激しい感情の起伏に対処することのほうがはるかに難しい。トレーダーの多くは、トレーディングにおけるエゴをどう抑えるのかに苦慮している。天然ガスで最高のトレーダー（名前は**MVP**としておこう）がたまたま私の会社にて、彼とは兄弟のような付き合いをしている。彼はカジノでブラックジャックをするときは**50～100**ドル以上はけっして賭けない性格で、もしアトランティックシティやラスベガスで**500～1000**ドルも負けたら自殺してしまうのではないかとさえ思える。しかしその彼が天然ガスならば一度に何百枚もトレードし、1時間ごとに6桁の利益と損失が交互に襲ってきてもまばたきひとつしない。

そしてリスクをとることになると、彼はまるでジキルとハイドのようになる。クラブス（カジノのサイコロを使った賭け）ならば絶対に**50**ドル以上賭けないのに、トレーディングとなれば涼しい顔で**500**枚でもトレードする。このような性格の人とはどう付き合っていけばよいのだろうか。**MVP**は私の会社の社員なので、私は何とかして彼を落ち着かせる方法を見つける必要があった。最初は穏やかな口調で、ビットで自制心を保つためには現実の世界で浪費したほうが楽しいし、理にかなっていると言ってみた。マーケットが君のポジションを必要としているときにトレードしろとか、習慣でトレードするのではなくボラティリティのあるときだけにしてくれなどと、繰り返し説得してきた。また、彼がビットで暴走したときの大げさな振る舞いは、肉体的にも精神的にも深刻な影響があることをできるかぎり冷静に話して聞かせる努力もした。

しかし、これらがうまくいかないことが分かって、ゲリラ戦に戦略を転換した。それには彼の弱みを探さなければならなかった。ある日の午後、私は**MVP**と彼の父親の3人で過ごすことがあった。話をしているうちに、**MVP**の人生で最も大事な人はこの父親だということが分かってきた。もちろん彼が妻や息子を愛していないというわけではないが、父親に対する愛情やあこがれや尊敬が特別であることがはつきりと分かった。**MVP**はもう**30**歳代の大人だが、それでも彼が一番喜ばせたい相手というのは父親だったのだ。

そこで私はあることがひらめいた。次に彼が短時間で**25**万ドルを失いかけていたとき、私は彼を事務所に呼んで、シカゴで悠々自適の引退生活を送っている父親に電話を掛けるように言った。電話がつながると、私はまず父親に「あなたの息子さんが暴走気味なんですが」と言った。

**MVP**は真っ青になった。ついに彼の弱点が見つかったと思った。今でも彼は毎日自分自身を自制できているわけではないし、損失の限度を超えてトレードすることもあるが、そういうときは「お父さんに電話するよ」と一言言えば、彼の暴走を抑えられるようになった。

心理的な問題を抱えていたトレーダーをもうひとり紹介しよう。彼は業界の人気者で、名前はノット I としておこう。いつも笑みをたたえている彼も、自分を律することに関しては大きな問題を抱えていた。私は彼の息子の写真を注文用紙の裏に貼り付けさせた。自分を見失ったときにどれほどの大金を失っているのかを説明したが、それでも大きな含み損をため込む癖は直らなかった。ある日、彼が通りがかりに別れた妻に毎月支払っている慰謝料が高すぎると文句を言っているのを耳にした。「何で彼女は仕事をしないんだ。アメリカは離婚した男にとってむちゃくちゃ不公平だよ」

彼の不満を聞いているうちに、私にはあるアイデアがひらめいた。ノット I を含めて私の下で働くトレーダーには守らなければならない損失の限度がある。そこで私は、次に彼がその限度を超えたときは、私が彼の口座から**500**ドルを引き出し、彼の別れた奥さんに「このお金は買い物などにご自由にお使いください」という手紙を添えて送金すると伝えた。また、損失限度額を超えるたびにその送金金額は倍になるとも脅した。

ノット I は私が本当にそれを実行するとは思っていなかったようだが、私は実際に**500**ドルを送金した。そしてその2日後には**1000**ドル、その次は**2000**ドルと送金し、彼の預金は減っていった。そして**4000**ドルを送金したところで、彼は白旗を揚げた。そのあとも彼が損失限度額を超えることが完全になくなったわけではないが、彼自身を管理する効果的な方法が見つかったことだけは間違いない。

損失限度額に達したときに一度休みを取れという助言は、どんなトレーダーにとっても一定の効果がある。ワール

ドトレードセンターの悲劇が起こるまで、私の会社は**16**のスクリーンを備えた映画館のすぐ隣にあった。そして私の会社のリスクマネジャーたちは、損失限度額を連続して超えたトレーダーに映画館の入場パスを手渡すと言われていた。このわずか**10**ドルのパスが当社の決算をどれほど向上させてくれたかは、読者の想像をはるかに超えていると思う。

長年にわたってトレーダーを管理してきた経験からすれば、トレーダーの私生活が彼らのトレードの損益に大きな影響を及ぼすことは間違いない。そういうときは、話し相手を見つけてやったり、新鮮な空気を吸わせて頭を冷やしたりさせるのがよい。これは、ラッキーというトレーダーのときもうまくいった。陽気で社交的な彼がある日突然内向的になり、トレーディングにも明らかに集中できなくなっていた。そこで時間をとって話を聞いてみると、最近5人目の子供が生まれて、家庭での生活が大変だということを彼が打ち明けてくれた。「上は高校生から下は2カ月の赤ちゃんまでいると、マリファナの心配から赤ちゃんの腹痛まであらゆることに気を配っていなければならないんです」

私がラッキーの家庭での問題を完全に解決することはできないが、話を聞くだけで、彼の集中力を再びトレーディングに戻すことはできたように思う。

# 現実を直視する

人生には必ず、私生活や仕事での葛藤が付き物である。そして、われわれトレーダーはマーケットとトレード結果に夢中になるあまり、人生の見通しを見失う危険をはらんでいる。トレードチャンスがあることがどれほど幸運なことなのかを忘れてしまっているのだ。トレーディングフロアでも、パソコンからでもトレーダーは自分で時間を決めて仕事をすることができる。ただ、はっきり言ってこのようなチャンスに恵まれている人は限られている。

負けトレードが続いたとき、自分を責めてはならない。そうすると内向的になり、おそらく沈んだ気分になってしまう。ときには現実を直視して、平常心を取り戻すことも必要となる。

負け越しが何カ月も続いて自己嫌悪に陥ってしまったトレーダーもいた。普段のやるべきことを見失い、朝はわざわざ電話をかけて起こさなければならなくなった彼を、平常の状態に戻す方法を見つける必要に迫られていた。彼に言うべきことを伝えるのは私の責任だったので、ある日、私の運転手を彼のアパートに抜き打ちで行かせた。この運転手は**145**キロの大男で、その彼が押しかけてきたのだから、トレーダーは財布からクレジットカード、部屋の鍵まですべてを言われるまま差し出すしかなかった。実力行使とでも誘拐とでも、何と呼んでもらってもよい。しかしそうすることによって、このトレーダーは目を覚まし、再びやるべき普段の生活に戻ってきてくれた。

私は彼に内緒でハーレムにワンルームを1カ月間借りておいた。そしてそこからトレーディングの代わりに、ホームレス施設とエイズ患者の小児病棟にボランティアとして半日ずつ通わせることにした。生活費は毎日、運転手が届ける**25**ドルだけ。これは彼に対する愛のムチだった。彼は、幸運に恵まれず、まったく何の手助けもないまま生きている人がたくさんいることを知る必要があった。このトレーダーは新しい環境に順応し、それを受け入れた。ただ、残念ながらシラミがわいたため、坊主にしたところで十分苦しんだと判断して、トレーディングビットと元のアパートに戻ることを許した。フロアに戻った彼は別人になっていた。彼は今でもホームレス施設で定期的にボランティア活動を行い、私生活も仕事であるトレーディングの成績も好転した。簡単に言えば、彼は生まれ変わったのだ。

# 初めての取引

成功の秘訣は何かと周りからよく聞かれるが、私には何の秘密もない。正しい場所に正しいタイミングでいたことと規律を守ったことくらいで、あとは一緒に問題に対処してきた人たちが私を今の地位に押し上げてくれた。

人生におけるあらゆる出来事は、運とタイミングにある程度かかっている。私は**12歳**のとき、隣の住人が車を次々と高級車に買い替えていることに気がついた。何にでも興味があり、欲張りで好奇心の強い子供だった私は、この隣人が何の仕事をしているのかが知りたくてたまらなかった。そしてついに勇気を出して聞きに行くと、彼は**COMEX**（ニューヨーク商品取引所）で銀のブローカーをしていると教えてくれた。彼には3人の息子がおり、そのうちのひとりとは友だちだった。彼は公立の学校に通い、私は私立の学校に通っていた。彼は素晴らしいスポーツマンだったが、勉強ができるタイプではなかった。

そこで私は勉強があまり好きではない友だちを利用することにした。ある日の午後、当時私はまだ**13歳**だったが、生まれて初めて、そして最も思いがけない契約をその友だちの父親と交わした。もしブローカー会社に事務員兼インターンとして雇ってくれるならば、友だちを私と同じ私立の高校に転校させたうえで、どんなことがあっても彼を卒業させると約束したのだ。

友だちの父親と契約成立の握手を交わしたとき、私は自分が働くことになるのが世界最大の銀のブローカーで、ハント兄弟のトレードのほとんどを執行している会社であることなどまったく知らなかった（ハント兄弟が銀の買い占めをしようとして悪名をとどろかせたのはそれよりもずっとあとのことだった）。好奇心が旺盛なのも時には役に立つことがあるものだ。

ある大雪の日で感謝祭のために学校が休みの日に、彼のお父さんが人手が足りないので会社を手伝ってくれないかと声をかけてきてくれた。もちろん私はこのチャンスに飛びついた。それまでは取引所でブローカー用のトレードカードを書いたり、雑用やランナーをしていただけだったが、この日は仕事らしい仕事をせざるを得なかった。なぜならいつもは**30人以上**がひしめく部屋に、大雪のため6人しか座っていなかったからだ。中央の銀のブースには3台の色の違う電話（青とベージュと赤）が置いてあった。友だちのお父さんは「もしこの1台が鳴ったら絶対に出ないで、私を呼びに来てくれ」と言うのとビットのほうに行ってしまった。

取引開始**15分前**にそのうちの1台が鳴った。みんなほかの電話に出て注文を取ったり、報告書を書いたりしている。私は狼狽したがビットの横に走っていき、ボスに「青い電話が鳴っています」と叫んだ。彼は私の目をじっと見て言った。「分かった。電話に出て質問に答えるんだ。もしお前が**14**の子供だと相手に気づかれたらクビだぞ」

ブースに戻ると電話はまだ鳴っていた。受話器を取ると、力強い声でボスがいるかどうか聞いてきた。私は「今はビットのほうで手が離せません」と答えたが、あとから考えれば最高の受け答えとは言い難かった。ハント兄弟に対して、一介のブローカーが忙しすぎるなどと言えるわけがない。

「君はだれかな」とその紳士は聞いてきた。

「マークです」と、この受け答えは問題ないだろうと思った。

「これまで君とは一度も話したことがないが、どうしてかな」

私は必死で考えをめぐらせ、「今日は大雪で人手が足りないので銀のデスクを手伝っています。いつもは金のデスクにいます」と答えた。

これなら大丈夫だと思ったし、相手も納得したようだ。なぜならそのあと彼は、「それなら今日の銀相場についてどう思うかね」と聞いてきたのだ。

これにはびっくり仰天してしまった。世界の銀市場を牛耳るハント兄弟のひとりが**14歳**のガキに銀相場について意見を求めているのだ。こんなことは普通なら絶対にあり得ない。

# 規律

規律に関して言えば、私は厳しいユダヤ教の環境の下で育ったことが、のちにトレーディングをするうえで大いに役立ったと思っている。ユダヤ教では、食べてはならない食材があったり肉類と乳製品を混ぜてはいけなかったりするため、友人とマクドナルドに行ってもチーズバーガーが注文できず、いつもフィレオ・フィッシュしか食べられなかった。現在、この食事規定は少し緩和されているが、約22年間ユダヤ教徒として教え込まれた規律は体の一部となっており、それが今ではトレーディングの教義に従うための規律としてもうまく機能している。

私だつてうまくいかなくて平静を失うことは、もちろんある。感情のないロボットではないのだから仕方がない。しかし、私をいつも冷静に保ってくれたのは、個人的な欲だった。**ACD**システムはずっとうまく機能してきたのだから、この計画を守ってずっとカジノのハウス側にいれば（この概念については本章後半で述べる）、きっと儲かるに違いないと考えたのだ。

規律という概念の重要性についてはいくら書いても書き切れない。自分を冷静に保つための手段がなければ、本書で紹介した概念やアイデアや手法も放棄されてしまうかもしれない。

最後にもうひとつ、多くの人は今ある自分と違うものになりたがるが、私は自分自身を理解している。私が本当に愛しているのはバスケットボールで、ニューヨーク・ニックスの監督になれば最高だと思っている。そして親友の何人かは実際にNBAや大学の有力チームで監督をしている。しかし、私にそれはできない。同じように、私はジョージ・ソロスでもない。私はトレーダーとして自分の限界を知り、自分が得意なことだけをして、まったく知らないことには手を出さないことで成功を勝ち取ってきた。多くの人が自分に合っていないことをやろうとして、トラブルに巻き込まれているのだと私は思う。それは、トレードでもトレード以外の分野でも同じである。

# MBFの夏休みインターンプログラム

本書の冒頭の話に戻そう。私は、隣に住む友だちに勉強を教えるのと引き換えにトレーディングをするチャンスを得た。そして、今では自分が経営するMBFのトレーダーと、本書の読者にトレーディングを教えている。昔から「名選手、必ずしも名監督にあらず」と言うが、できれば私は両方ができるようになりたい。

何年も教えてきたトレーダーの卵が成功すると、私は大きな達成感を覚える。自分が彼らひとりひとりの人生を生きているような気持ちになるのかもしれないし、これが与えられたチャンスに感謝する私なりの方法なのかもしれない（もし私があればどうずうしい13歳でなければ、今は何をやっていたのだろうか）。MBFの夏休みインターンプログラムはウォール街最高のプログラムのひとつと自負しており、マーケット理論と実践的なトレーディングと事務処理を組み合わせで教えている（プログラムの詳細については、当社のウェブサイト <http://www.mbfcc.com/> を参照してほしい）。

このプログラムでは、さまざまな学歴や社会・経済的背景を持った高校生と大学生を集めるようにしている。参加者には、プリンストン大学、エール大学、ペンシルベニア大学といったエリート校の学生もいれば、スラム街でチャンスを狙っている子もいる。ところが実際に始めてみると、恵まれない生徒の多くは自分が何も知らないことを自覚し、マーケットへの先入観を持たずに取り組むため、結果的に非常に教えやすい。ほかに、高校や大学でスポーツのコーチをしている私の友人のついでで毎年数人の体育会系の学生を参加させているが、それがトレーディングにおいても人生においても非常に面白い教訓をもたらしてくれる。

ペンシルベニア大学ウォートン校で金融を専攻している学生とバージニア大学でバスケットボールのポイントガードになったばかりの学生を組ませたり、ジョン・ホプキンス大学の学生とノートルダム大学でクォーターバックになったばかりの学生を組ませたりすると独特の雰囲気が生まれる。身長170センチの金融専攻の大学生と2メートルを超えるバスケットボール選手のチームはマイケル・ジョーダンにあこがれるパートナーが自分勝手に振る舞えば、小さいほうが困る。そしてこれがこっけいな対立を生み、ときには170センチが2メートルのパートナーを羽交い絞めにしているのを引き離しにいくような場面もある。しかし、彼らの多くはプログラムが終わったあとも交流を続けているようだ。

彼らのような人材をこのプログラムに投入していけば、いつの日か次のRNが見つかるかもしれない。RNは約15年前に最初の夏休みインターンプログラムに参加した学生で、現在では原油先物のトレーダーとして、ウォール街で最大の商品先物会社の1週間分の売買量よりも多い売買量を1日でこなし、原油先物では最大のビットトレーダーとして世界中に知られている。彼の成功は私にも大きな誇りと喜びをもたらしてくれた。毎年夏の終わりに、われわれは取引終了後のビットを使ってインターンのために模擬トレードの機会を設けている。このトレードが終わると、RNはその日の自分の結果が良くても悪くても必ず時間を見つけて顔を出し、学生たちの相談に乗ってくれている。

# リスクマネジャーの仕事

私は長年トレーダーに教えたり訓練したりしてきたなかで、自己管理ができないという理由だけではこの仕事に向いていないとは一概には言えないことに気がついた。私の会社のリスク管理責任者は、**65人**の専属トレーダーと、内容は極秘だが、さまざまなトレードシステムを管理している。ところが彼は私的にトレードするときは自己管理ができず、自分で設定した損失限度額を何度も破っている。彼は自分自身に対してできないことでも、他人に対しては実にうまくやっつけてのけるのだ。このリスク管理責任者は、自分がかつて犯した間違いをトレーダーたちが犯せばすぐにそれに気がつくだけでなく、彼らが自分を忘れそうになる前にその兆しをつかんで落ち着かせることもできるのだ。要するに、彼は完璧なリスクマネジャーなのである。このリスク管理責任者は、個人的なトレードで失敗したことをMBFの仕事として見事に昇華させた好例と言ってよい。



# センチメントのダイバージェンス

特定のマーケットのセンチメントを測定するため、いくつかの指標が公表されている。これらは通常、数値が高いほど根底のセンチメントは強気の傾向が強いと考えられている。実際にはあり得ないが、もしこれらの指標が0の極値に達すれば全員が弱気だということだし、反対に100なら全員が強気ということになる。

MBFでもこれらのひとつであるDSI指数（デイリー・センチメント・インデックス。詳細は、<http://www.trade-futures.com/> 参照）のサービスを受けていたことがあった。長年マーケットを観察しているうちに、私はセンチメント指数が高い値や低い値をかなり長期間にわたって付けることに気がついた。つまり、極端な値のみに反応してトレードするのはほとんどうまくいかない。ただ、日々のセンチメント指数のダイバージェンスはかなり利用できる。もし取引時間に強気の参加者のパフォーマンスがプラスならば、強気の参加者の割合が増加するのは理にかなっている。同様に、もし取引時間に相場が下げれば、強気の参加者の割合は減る。そして、このことは米国債でも原油でも、ボーイング株でもS&P先物でも同じである。すべての場合において、人間は本質的に他人と同じ行動や反応をするからだ。

もし原油の昨日の終値が23.50ドルで今日の終値が24.00ドルのときにセンチメント指数が30から42に上がれば、当然の動きなので驚きはしない。しかし、もし原油が同じように50セント上がってもセンチメントが30から20に下がれば注意しなければならない。センチメント指数の下落は、たとえマーケットが上昇したとしても参加者は何らかの理由でマーケットの上昇を信じていないということを示しているからだ。今日の動きで天井を付けたと考えたのかもしれないし、50セントも上昇したのは例外的な出来事だと受け止めたのかもしれない。ここにさらに情報を追加してみる。翌朝のマーケットが上に40セントの窓を空けて、24.40ドルで寄り付いたとしよう（前日の終値は24.00ドルだった）。そうなれば、前日の上昇が一時的なものだと思っていたトレーダーたちは空売りのポジションをあわてて買い戻そうとする。

もし翌朝のマーケットが前日と同じ24.00ドルか、それよりも下げて23.75ドルで寄り付いたとすれば、仕掛ける必要はない。ここで利用できるのは、マーケットがある方向に大きく動いたのに参加者の多くがそれを信じなかったような状況である。そのために翌朝は上方に窓を空けて始まって、前日に空売りした連中が追い詰められなくてはならない。この場合は、彼らが買い戻すよりも早く、上に窓を空けて寄り付いたらすぐに買う。もちろん下に窓を開けたときも同じことで、みんなが底だと思って買ったポジションを投げるよりも前に空売りを仕掛ける。

窓の空け方が大きければ、このトレードが成功する確率はより高くなる。もし上げたのが40セントではなくて1ドルならば、さらに良いトレードになるだろう。さらに、上に窓を空けて寄り付いたマーケットが今までの一代の値幅の真ん中辺りではなくて、一代の高値を付けていれば、勝率はさらに高まるだろう。

# ブラックマンデー

何年も前のことだが、トレーディングフロアの事務を担当していた大変有能な女性社員がいた。彼女はきちんとしていて教養があり、プレッシャーの下でもよく働いた。ただ、ひとつだけお金のかかる悪い習慣があった。ショッピングに出かけると、クレジットカードの限度額いっぱいまで買わずにはられないのだ。

大暴落の日はオプションの満期日だった。暴落前の金曜日の夜、マーケット参加者の多くは最悪の事態が過ぎて、翌週はマーケットも安定するだろうと思いながら家路に着いた。そして、ブラックマンデーの日（1987年の大暴落）を迎えた。この日、私は銀先物のビットでトレードをしていたが、大変調子が悪かった。しかし、S&P先物は下に史上最大の窓を空けて寄り付いていた。幸運にも、金曜日にS&P先物の空売りを仕掛けてから帰宅していた私は、銀で負けていた分をS&Pを利食って相殺しようと思っていた。それ以外にS&Pのポジションを手仕舞うまっとうな理由などなく、このときの私は銀のトレードでの愚かな損を埋め合わせることしか頭になかった。要するに、DS指数が目の前で示していた史上最大の大ダイバージェンスをすっかり見逃していたのだ。

そこで、私は例の買い物依存症の女性社員に言った。「お願いがあるんだ。S&Pのポジションを今すぐ買い戻してくれ」

彼女は戸惑った顔で私を見ると、「マーク、S&PのDS指数は木曜日が30台で、金曜日はそれよりも高くなってますよ。今日のように下に窓を開けた寄り付きならば、完璧なDS指数によるダイバージェンスのトレードができるのではないですか」と言った。

それを聞いた途端、彼女の言っていることが正しいことはすぐに分かった。生徒が先生に指示を出している。ここで彼女の言うとおりにしなければ、教えている教師としての沽券にかかわるではないか。私は自分の決めているトレードルールに従う選択肢しかなかった。

「オーケー、買い戻しはしないでS&Pをさらに5枚空売りしてくれ。25枚のストップは全部、Cアップに置いて様子を見よう」

そこで起こったのが1987年の大暴落だった。3時間後、私はS&Pをすべて買い戻して大きな利益を得た。ものすごく大きかった、とだけ言っておこう。そのうえ、先生として生徒の助言を聞き入れたということもうれしかった。彼女はS&PのマーケットでDS指数によるダイバージェンスのトレードチャンスが広がっていることに気づき、早めの手仕舞いを止めてくれたのだ。

もちろんその日の取引が終わると、私は買い物依存症の女性社員を部屋に呼んだ。そして彼女のクレジットカードの請求書をすべて出させると、その場で私がすべてを支払った。

# 大きなトレードと巨漢トレーダー

10年ほど前に砂糖のビットで起こった出来事はよく覚えている。当時は、ニューヨークの綿花取引所と、ニューヨーク・コーヒー・砂糖・ココア取引所と、COMEX、NYMEXはすべてワールドトレードセンター第4ビルと同じ施設内にあった。NYMEXとCOMEXがワールド・フィナンシャル・センターに隣接した専用施設に移ったのは、1997年末になってからである（2001年の同時多発テロで第4ビルは破壊され、コーヒー・砂糖・ココア取引所と綿花取引所はロングアイランドシティのバックアップ施設への移転を余儀なくされた）。

私はニューヨークのすべてのビットでトレードできる金バッジを持っているが、実際はほとんどの時間を原油のビットで過ごしていた。ただ、同じフロアの別のマーケットにチャンスが見つかったとき、原油のマーケットが静かなら、迷わずそちらに行ってトレードする。ある日の午後、原油の動きは穏やかだったが、砂糖のトレンドは反転したばかりで、遅い時間帯でのC点ピボットのお膳立てになっていることに気がついた。そこで砂糖のビットに行ったのだが、正直言ってそのときのビットでの反応は大歓迎とは言い難いものだった。ACDシステムでシグナルが出ていなければ、砂糖のビットに私が行くことはほとんどないからだ。

当時、砂糖の取引は13時45分（東部標準時間）ごろ終了することになっていた。砂糖のビットには、トレード量も体型もLサイズのローカルズがいて、そのトレード量の多さと肉体的存在感でこのマーケットに常ににらみを利かせていた。私が砂糖のビットに行った12時30分ごろ、マーケットは午前中の良いAアップが反転し、その日のピボットレンジと3日ローリングピボットレンジを抜けてCダウン目前まで下げていた。私には、このときのリスクがわずかに15〜20ティック（D点まで）だと分かっていた。

目の前には素晴らしい低リスク・高リターンのトレードチャンスがころがっていたので、私は明日などないかのごとく売り始めた。200枚、400枚、そして最終的には700枚くらいになったと思う。いつものようにACDシステムでの指標があるおかげで、自信を持って多くの枚数を仕掛けることができたのだ。ところが、例の巨漢トレーダーの考えは逆だった。私が売るたびに彼は買ってきたが、マーケットはどんどん下げていった。すると彼がビットの向こうから私を罵倒し始めた。私は応戦するべきかどうか迷ったがやめておいた。私はこのビットではよそ者だし、彼の体格は私の16倍はありそうだったからだ。それに私は儲かっている、彼は壊滅的な損失を被っている。彼がわめいても叫んでも私には痛くもかゆくもない。

そして取引が終了する13時45分の2〜3分前に私は空売りのポジションを買い戻した。マーケットは私が仕掛けたあとも40〜50セントは下げていたため、巨漢トレーダーの損失は優に6桁に達したはずで、頭から湯気を立てんばかりに怒っていた。

この1時間ほど私に悪態をつき続けていた大男は、最後に下品な言葉と民族差別的な言葉を浴びせてきた。私もこれにはがまんの限界を超えたので、彼に罵詈雑言を浴びせ、ローマンハッタンで彼がコカイン取引をしていることを洗いざらいぶちまけてやった。

次の瞬間、彼はサイのごとく突進してきた。そして取引終了間際フロアは大混乱に陥り、マーケットは約30分間中断されることになった。猛獣がフロアブローカー数人の注文用紙の束（顧客の注文が書かれたトレードカードも含まれていた）をぶちまけてしまったからだ。

そのあと、われわれ2人は取引所の倫理監督委員会に呼ばれ、トレードマナーについて注意された。実は、これが結局どういうことだったのか、私にはよく分からない。砂糖のビットは大男のホームグラウンドで、私は完全によそ者だった。驚いたことに委員会は、私に対しては無礼な言葉遣いに対して罰金を課しただけで、トレーディングの権利を停止することはなかった。一方、「野生の王国」の敵のほうは、その日の損失に加えて私の2倍の罰金と3日間のトレード禁止処分を受ける羽目になった。結局、私がよそのビットで猛獣と対決することになった唯一の理由は、見過ごすわけにはいかないおいしいCピボットのチャンスがあったからだった。

## 道に迷ってみる

ACDのようなシステムでトレードする最善の方法は、少し迷ってみることだと思う。ニューヨークでもシカゴでもロサンゼルスでも、車で移動してはいるその街についての土地勘はつかめない。しかし、回り道をして、迷った揚げ句たどり着けば、市内の地理はよく頭に入る。トレーディングも同じことで、ビットでもコンピューターのディスプレイでも少ない枚数のトレードから始めてみてマーケットで迷い、混乱から抜け出せるかどうか試してみしてほしい。これらの初歩的な失敗にどう対処するかによって、自分がトレーディングの仕事で成功するために必要な不屈の精神と意欲を持っているかどうかを判断することができる。

良い例を紹介しよう。何年前かに父と息子のトレードチームが私の事務所に訪ねて来て、ある提案をしてきた。父親は、自分と私で彼の息子のNYMEXでの活動を応援したいと願っていた。少し話をしてみると、この息子にはトレーディングにたぐいまれな才能があることが分かり、私はこの提案を受け入れた。ところが、握手をしたあと突然父親の気が変わった。彼はイラだった様子で、私のようなおかしなヤツと手を組むわけにはいかないと言い出したのだ。それに加えて、私のことを商品トレード業界のクレージー・エディーとすら言い放ったのだ（クレージー・エディーとは家電量販店で、騒がしいセールスマンがまくしたてるテレビCMで有名）。

翌日、私は息子だけを事務所に呼んで、私が単独で彼を支援すると伝えた。彼には優れた才能があると思ったからだ。「お父さんには内緒で君にACDシステムの基本概念を教えよう。そのあとはビットで自分の道を切り開いていけばいい」

彼の道のりは、最初に想定したよりも多少高くつくことになった。というのも、原油トレードを始めて3日目、いくつかの不運が重なって午後に5万ドルの損失を出したのだ。そのうえ、彼のポジションはローカルズのポジションとは逆であったために、手仕舞う際に彼らにすっかり資金を巻き上げられてしまった。彼の父親が再びやってきて、「あんたに息子の面倒を見る気がないことはお見通しだよ」と言った。

私は、「この件はあなたに関係ないでしょう」と答えた。

彼は損失を重ねていたが、それでも素晴らしいビットでの技能と生まれ持った才能は際立っていた。今回のことは、彼の迷子の冒険がたまたま普通よりも少し高くついただけのことだと考えていた私は、父親に別の提案をした。6カ月間彼にトレードさせてみて、ネットで10万ドルの損失を出したら私が父親に10万ドルを支払い、10万ドル儲けたら父親が私に10万ドルを支払うという取引をもちかけたのだ。

父親がこれに同意しなかったのは幸運だった。息子はその後、原油のビットで最も成功したトレーダーのひとりに成長した。彼は現在、数百万ドル規模のヘッジファンドを立ち上げようとしており、資金が続々と集まってきている。

# ガートマンのルール

本書で紹介したエピソードは、感情や自分のエゴを抑えることや、過去の失敗から学ぶことなど、どれもトレーディングに関する価値ある教訓を含んでいる。読者もいくつかのエピソードに共感してもらえばうれしい。ACDシステムはトレーディングの手法に磨きをかけることはできるが、トレーダーに適した精神力をもって臨まないかぎり、トレーディングの成功はあり得ない。

ザ・ガートマン・レター (<http://www.thegartmanletter.com/>) で毎日マーケット解説を執筆しているデニス・ガートマンは、それとは別に毎年1〜2回「ガートマンのバカバカしいほど単純な20のトレーディングルール」も発行している。このルールは付録に全文を掲載してある。このなかのいくつかはきっと読者自身のトレーディングにも当てはまるだろう。私のお気に入りには、「トレードで成功するためには、ファンダメンタルズ派のように考え、テクニカル派のようにトレードする」「マーケットでは不合理な状態が予想以上に長く続く」「追証は、分析とポジションの建て方が間違っていたというマーケットからの警告」、そして最後に「テクニカルなシステムは単純にしておく」だ。

# 恐怖と強欲

数年前、私は**F&G**コモディティースという商品投資顧問業者（CTA）を設立した。このときみんなにFとGが何の略だと思うか聞いてみると、FはフィッシャーでGは別のだれかだとか、適当に文字を選んだだけだろうなどという答えが返ってきた。実はこの2文字はトレーダーには不可欠な要素で、正しい組み合わせで持ち合わせていなければ成功はできないもの、つまり恐怖（**fear**）と強欲（**greed**）の頭文字から取っている。

株でも先物でも通貨でもそれ以外の銘柄でも、トレードするときは恐怖心をもって臨まなければならない。これは、自分が参加するマーケットに健全な尊敬の念を持つということでもある。自分が常に正しいとかたくなに信じていると、特にマーケットが明らかに違うと示唆してくれているときは間違いなく破綻につながる。トレーダーは、テレビドラマの「OK捕虜収容所」に出てくる「私は何も知らない」が口癖のシュルツ軍曹にもならなければならない。ただ、恐怖だけでは十分ではない。トレーダーには健全な強欲も必要で、勝ちポジションは保有し続けて、たまにしかないチャンスに大きな利益に育てていく意欲と能力を持っていなければならない。このようなトレードを限界まで伸ばすために、ときには鉄の意志と相当な忍耐が必要となる。

湾岸戦争の最中の**1990**年、原油をトレードすることは危険な行為だった。もしマーケットの間違った側で意地を張って負けポジションに固執していたら、非常に高い授業料を支払うことになった。トラブルの最初の兆しで自分が何も知らなかったことを認め、できるだけ早く損切りしなければならない。当時、私のいた原油のピットのすぐ後ろには、大手の先物ブローカーが2人いた。彼らはいつも忙しくしていた。私はよく彼らの注文とは反対サイドで、ときには小さく、ときにはとても大きいトレードをしていた。

ある日、危機のさなかに原油は急騰して寄り付くと、すぐに下落に転じた。寄り付きは**35**ドル近辺で、すぐにその日のピボットレンジの下限を下回った。そのあとも原油は下げ続けたが、2人のブローカーは大きな売り注文を執行しようとしていた（ピットのほかの連中も同じようなことをしていた）。私が原油の買い板を出すたびに、彼らは必ずもっと大きな枚数でたいてきたが、私は買い注文を出し続けなかった。もし彼らが**100**枚の売り注文を出しても、私は**10～20**枚買ってすぐに彼らに合わせて売った。私に、この貨物列車のような連中の邪魔をする気はなかった。

この2人のブローカーは非常に仕事がよくでき、いつも冷静だった。しかし、この日は売りの波が次々と押し寄せてきて彼らは落ち着きを失っていった。その混沌としたなかで彼らのところに会社のランナーが注文票の束を届けに來た。それらが売りの逆指値注文で、これ以上下げたらすぐに執行しなければならないことは見なくても分かった。2人の顔に浮かぶパニックとイラ立ちを見て、私の全身は瞬時に強欲に支配された。マーケットがどんどん下げるなか、私は猛烈に売り始めた。彼らは何度も買い気配値を聞いてきたが、私は**10～20**枚しか買わない。いつもなら**100**枚、**200**枚、**300**枚と取引することを考えれば、非常に少ない枚数だ。2人は激しく買い気配値にぶつけて売るものはすべて売って、損切り注文をとつとと執行してこの悪夢を終わらせようと必死になっていた。

掲示板の価格を見ると、前回よりも**30**セント安くなっていた。ブローカーたちは注文を執行するときに掲示されている価格の最後の数字だけを叫ぶことが多い。もし原油が**32.85**ドルなら、ブローカーは「5」と叫び、**32.80**ドルなら「0」と叫ぶ。ところが、前回の価格が**33.10**ドルで現在が**32.80**ドルと両方とも「0」だったことから混乱が生じた。2人のうちのひとりが「0」と言って売ってきたが、私にはどの「0」のことか分からなかった。この時点で、私は**350**枚を空売りしていたが、窓を空けた日のピボットレンジは重要な支持線になることから、近いうちに支持線に達すると思っていたので、そろそろ買い戻すべきときだと感じていた。

ただ、ブローカーが売っている価格を確認しておく必要があった。そこで、彼のジャケットの襟をつかむと、「どの0で売るんだ」と叫んだ。

彼は汗をしたらせながらも、真顔で叫んだ。「どの0でも好きにしてくれ」。彼は本気だった。

私は空売りポジションの手仕舞いに入り、**32.80**ドルで買い戻した。マーケットはそのあともさらに下げたが、このエピソードの要点は私の利益がどのくらいだったかではなく、素晴らしいブローカーでも感情にのまることがあるということだ。そういうときはチャンスを最大限活用するため全力でアクセルを踏むということである。



## ハウス側になる

カジノでのギャンブルについて、人々は大変な誤解をしている。ブラックジャックでもクラップスでもカジノ側の統計的優位はわずか1～1.5%にもかかわらず、莫大な利益を生み出していると聞くと、たいていの人にはショックを受ける。そのうえ、大手のカジノは贅沢な出し物や異国風のホテルなどに何百万ドルという投資をしている。火山と、噴射する泉と、ニューヨークの摩天楼のレプリカと、エッフェル塔とベニスの運河が1カ所にあるのはラスベガスだけだろう。

トレーダーもACDシステムをきちんと理解して自分のトレード計画に組み込めば、マーケットでトレードするとき「ハウス側」になることができる。できれば、わずか1.5%の優位ではなく、エッジがスリッページと手数料は別に5%近くになるような状態にしておけば最高である。

もしカジノに行ったことがあれば、コンプという言葉聞いたことがあるだろう。これはカジノが提供している顧客サービスのひとつで、掛け金の額ではなくテーブルについていた時間の長さに応じて支払われるものだ。ハウス側は、ギャンブルをする時間が長くなればなるほど、統計的優位性が達成される確率が高まることを知っている。基本的にテーブルにいる時間が長くなれば、賭ける回数も増え、最後には負けてカジノをあとにする可能性も高くなるのだ（要するに悪名高いカジノバスの乗客のひとりになるということ）。

カジノとしては1回に10万ドル賭けて、勝っても負けてもすぐに立ち去る客はありがたくない。ブラックジャックやクラップスにはわずかに統計的優位性があるが、カードゲームのハンドやサイコロ投げは完全にランダムである。ハウスが望んでいるのはプレーを続けてくれることであり、時間の経過はカジノにとって最高の友で、プレーヤーにとっては最大の敵となる。

この概念をマーケットに応用すると、もし5%のエッジを得ることができれば、あとはカジノと同じように行動すればよい。ハウス側がブラックジャックで10回連続負けることはもちろんある。トレードだって10回連続で負けることはもちろんある。ただ、これらのトレードをそれぞれ独立した状況にして1回の負けを十分小さくしておけば、連敗が続いたとしても破産することはない。すべきことは、できるかぎりたくさんさんのACDシステムでのお膳立てを見つけて、仕掛けることだ。低リスク・高リターンのチャンスを見つければ、明日もトレードを続けられるため、結局は生き延びることができる。そしてこの業界では、生き残ることが成功につながるのだ。

有利なトレードシステムならば、枚数や株数を一定にして、損失を小さく抑えておけば、長期的には必ず勝てる。



# リスクの測定と観察

MBFで働く専属トレーダーは、自由裁量タイプとブラックボックスのシステムで運用するタイプの2つに分かれる。このうちブラックボックスタイプは管理しやすい。彼らのトレードには特定のお膳立てが必要で、リスク・リワードの条件も決まっているうえ、ポートフォリオ全体にも、各ポジションにも、損切りが設定されているからだ。それに比べて自由裁量タイプの管理は、対象がポジションではなくトレーダーの性格なので、大変難しい。

このグループは、エネルギーや貴金属のビットのフロアトレーダーのほかに、フロア以外のトレーダーや、短期専門、勘と経験に頼る者で構成されている。彼らにとって、トレードの時間枠は長期でも2〜3時間を超えることはないし、短期ならば5秒もあり得る。われわれの仕事はこのトレーダーが快適にトレードできるようにすることで、彼らのなかには、例えば天然ガスを一度に**50〜100枚**トレードできる心理状態と規律を持っているトレーダーもいれば、買い気配と売り気配の差で稼ぐのが快適だと思っているトレーダーもいる。

当社では、各トレーダーのポジションの限度を3つのトレードシナリオに基づいて設定している。

- 1．仕掛けから手仕舞うまでが秒単位で処理される「スキャルピング」か、もう少し長いか
- 2．サヤ取りか片張りか
- 3．その日の終わりまで手仕舞うか翌日まで持ち越すか

もちろん**100枚**で素早くトレードするのと、枚数は3分の1でも**10〜15分**くらい保有するトレードは同じリスクプロファイルに分類できる。一方、同じ枚数でも天然ガス**50枚**と原油**50枚**のトレードや、**IBM3000株**とヤフー**3000株**のリスクプロファイルは異なっている。

付録には、株用と商品用の日々のビボットシートが載せてある。「\$リスク」の列はすべての先物トレードや株式固有のリスクを当社が独自に測定した値を記している。これを見れば、**S&P10枚**のほうが天然ガス**10枚**よりもはるかにリスクが高いが、後者のリスクは**COMEXの金10枚**よりも高いことが分かる。また**S&P1枚**のリスクに相当する天然ガスの枚数を知りたい場合は、この\$リスクの値で見ると、**S&Pは6000**で天然ガスが**1000**となっているため、**S&P1枚**に対して天然ガス**6枚**がリスク的には同等のポジションということになる。

トレーダーの扱う枚数や株数にかかわらず、**MBF**では同じルールに基づいてリスクを管理している。トレーダーの大部分は目的が明確で競争心が強いタイプAの性格なので、われわれは月中の利益水準が一定水準に達したら大きな枚数でトレードしてもよいというインセンティブを与えている。こうすることで、トレーダーたちは連勝しているときにはさらにアクセルを踏むことができる。われわれは、好調なトレーダーには通常の枚数ではなく、その2倍、3倍と賭けてほしいが、反対にスランプに陥っているトレーダーにはポジションの枚数を減らしてもらいたい。抜け出すことのできないブラックホールに陥るのを防ぐために、枚数を2分の1か3分の2、ときには3分の1まで減らすこともある。負けが続いても生き延びた人こそが最後に成功する、ということ覚えておいてほしい。

私の会社では、月の半ばにトレードする枚数が増えたり減ったりした場合は黒板に書き込んである。ただ、月末にはそれを全部消して月初めからは通常の損失限度額でトレードを始める。勝ちが続いているトレーダーには、いずれ利益の大部分をマーケットに返すことになる前に冷静さを取り戻して、通常の枚数に戻しておきたいし、スランプに陥ったトレーダーは本人の基本的な能力に変化がない場合、あまり長い期間トレードする枚数を最小に抑えていては損失を取り戻すことができないからだ。

最後に、われわれはマーケットが活発でボラティリティが大きいときはトレーダーたちに枚数を増やすよう勧める。フロアトレーダーや短期トレーダーが自分の優位性を最大限生かせるのは、このような状況のときだからだ。ただ、ほとんどのトレーダーはこの正反対の行動をとってしまう。ボラティリティが高いと恐怖から枚数を減らし、動きがないときは枚数を増やしてしまうのだ。

# 絶対に起こらない

家族はスキーが好きだが、私は日光浴が好きだ。家族でコロラド州に旅行に行く目的は、一言で言えば「サタデー・ナイト・フィーバー」のテーマソングだった「ステイン・アライブ」、つまり生き延びるためと言ってよい。家族がスキーを楽しむ間、私はロッジでのんびりしたり、ゴンドラに乗ったりして楽しむ。ある日ぶらぶらしていると、ひとりの紳士と知り合いになった。彼はボストンにあるエネルギー系トレーディング会社のヘッドトレーダーで、当然話題はトレーディングのことになった。

彼の会社ではクラックトレード関連の戦略を用いていると言っていた。クラックとは、灯油やガソリンと原油とのサヤ取りのことを指す（灯油とガソリンは原油を精製して得られ、クラックはそのコスト）。彼らのトレード手法は単純で、クラックのスプレッドが割高だと思えば売り、割安だと思えば買うというものだった。

そこで彼に、「でも、もしクラックのスプレッドが20回に一度の割合で理由もなく拡大してしまったらどうするのですか。あるいはまれにしか起こらないような出来事が続いて、クラックが経済的な理由からは考えられないような天文学的水準まで広がってしまったらどうするのですか」と聞いてみた。

答えは、「それは絶対にあり得ません。うちの会社には東部の大手銀行2行がついていてマーケットが平常に戻るまでの間、異常事態に対するための銃弾が十分提供されますからね」ということだった。

知り合ったばかりの相手に反論したり助言したりする場面ではないと思い、私は黙っていた。ただ、ニューヨークに戻るとすぐにこの会社で働くブローカーのところに行き、スキーロッジでの話をして、彼の会社が破綻するのは時間の問題だから、新しい仕事先を探したほうがよいと助言した。そのとき彼は私の話を笑い飛ばしただけだった。

その次の冬、クラックのスプレッドは3ドルから10ドルに拡大し、私のノストラダムスの予言は現実のものとなった。このトレード会社は最悪のタイミングで手仕舞うことを余儀なくされ、知り合いのフロアブローカーにはトレーディングのことを何も知らない銀行幹部から3時間で6000組のクラックのスプレッドを手仕舞うよう指示が来た。もちろんこのとき、私はこのチャンスを逆に利用するためビットで待機していた。

このエピソードの教訓は、あなたに無尽蔵の資金があり、あなたがどれほど賢くても、マーケットはあなたの考えをはるかに上回り、出し抜いてくるということである。

また別のよい例は、かつてエネルギー市場で最大のプレーヤーだったメタルゲゼルシャフト（通称MG）の場合だろう。MGの問題は、マーケットが吸収できないほど多くの枚数を保有していることだった。マーケットで儲けたければ、自身がマーケットになつてはならないのだ。

みんながMGのポジションとそれを毎月ロールオーバーしていかなければならないことを知っていたため、MGはウォール街のエネルギートレード会社すべての標的になってしまった。本書で何度も繰り返しているように、トレードで成功するためには十分なボラティリティと流動性があるマーケットを選ばなければならない。MGのサイズはこの市場が吸収できる量の3倍に達していた。私はNYMEXのコンプライアンス部門に手紙を書き、MGが保有している株数とポジション管理の方法に対する懸念を表明した。言うまでもなくこの警告は無視され、手紙から1年もしないうちにMGは破綻した。

## 次！

「痛みなくして得るものなし」という言葉を聞いたことがあるはずだが、これはトレーディングで成功するためには、マーケットが課してくる感情的な苦しみと資金的な痛みを耐えて、負けポジションが勝ちに変わるまで待たなければならないということなのかもしれない。しかし、私に言わせればこれはまったくナンセンスだ。もし本書から学ぶことがあるとすれば、トレーディングで成功するということは素早く報酬を得られるということである。もし仕掛けてからすぐに有利な方向に動かなければ、即座に損切りしてほしい。

独身男性が出会いを求めてバーに行き、閉店まで4時間しかないとき、話しかけた女性と相性が合わないと分かったら、そこで時間を無駄にするだろうか。そんなことはしないはずだ。心のなかで「次だ、次」とつぶやいて別の出会いを探す。トレーディングでも同じことで、時間を無駄にしてはならない。マーケットから受ける大きな痛みやイライラに耐える必要はない。どうせそのような時間を過ごすならば、負けポジションを切るために使ってほしい。みんなが同じ水準で仕掛けたようなトレードがどれほどのものか、じっくり考えてみてほしい。

私はこれまでブローカーや外務員に「仕掛けたあとでマーケットが一定時間、例えば30分間動かないときに、顧客が損切りの注文を出してきたことがどのくらいあるのか」という質問を何回もしているが、もちろんいつも「そんなことは一度たりともない」という答えが返ってくる。多くのトレーダーは価格での損切りは置いても、時間での損切りは気にもかけていないようだ。彼らはある程度の痛みを耐えなければならないと思っているようだが、読者にはくれぐれもそんなことは思わないでいただきたい。

価格よりも時間のほうがずっと重要だということを、トレーディングの大事なルールとして覚えておいてほしい。

マーケットのボラティリティがあらゆるところで大変高くなっているときは、**ACDシステム**を利用できる。このようなときこそ機転を利かせて、自分とトレードをできるかぎり客観的に見てほしい。本書で紹介した**ACDシステム**の指標とアイデアは、最も自由裁量の部分が多いトレーダーにも何らかの体系的な基礎を提供できると思う。

心理面においては、**ACDシステム**を基本として使うとトレーダーは自分の成功に自信を深めることができると同時に、これまでうまくいかなかったのはひどいシステムのせいだったと思うことができる。

# 金銭感覚を失うことについて

成功すればトレーディングよりもはるかに大きな報酬を得られる仕事はたくさんある。ただ、トレーディングほど短期間でこれほどの利益や損失を出せる仕事は世界のどこを探してもないと思う。マーケットにかかわった人が直面する最大の危険は、金銭感覚を失ってしまうことにある。

夏休みのインターンプログラムでは、参加者の親にこの潜在的リスクについて注意を呼びかけている。トレーディングの現場で働くことは素晴らしい学びのチャンスである反面、インターンたちはお金に対するそれまでの価値観を失う可能性がある。インターンはそれぞれプロのトレーダーに付き添って事務処理を手伝うが、このときトレーダーがほんの数分で5000ドルとか1万ドルを稼ぐのを目の当たりにすることになる。その彼がその日の帰りにショッピングセンターに寄って29.99ドルと39.99ドルのTシャツを見たでしょう。彼がどれほど賢くてしっかりしていても、無意識のうちの頭のどこかで「10ドルなんて大した額ではない。ついさつき、バカなトレーダーが5秒で5000ドルの損をしたばかりじゃないか」という声が頭をよぎってしまうのだ。

私は、このことがトレーディングという仕事を始めるときの最大の問題だと考えている。どれほど賢くてしっかりしていても、価値観は損なわれる。それでもトレーディングで成功すればまだいいが、そうでないと金銭的な損失に苦しむのに加え、お金に対する価値観を修正して現実の世界に戻らなければならない。さらに、トレードで失敗した人は、自分が人生の落伍者になったと思うってしまう傾向がある。トレーディングでの成功は、その人の人生の成功したものの中のほんのわずかな部分でしかないと何度話して聞かせても、なかなか納得してもらえない。

## ひづめのハリー

ここで、非常に成功した投機家の例を紹介したい。名前は「ひづめのハリー」としておこう。彼は、家族とトレーディングと競馬に情熱を捧げていた。株式市場が絶好調だった**1999**年、彼が数百万ドルのポジションを建てるのは珍しいことではなかった。最高の年の最悪の日となったある日の午後、彼が取引時間後に私のところにやってきた。最初は、彼がソファーに寝転がってこの日の7桁の損失を嘆きたいのだろうと思っていたが、この日、彼の頭の中を占めていたのは失った**100**万ドルのことではなかった。彼はトレードの失敗ではなく、自分の事務所からアキダクト競馬場の中継が見られないことに怒っていたのだった。そのときの彼にとってお金の価値なんてほんのささいなことで、失った額などまったく気にしていなかった。それよりもサラブレッドが競馬場を走ることしか関心はなかったのだ。幸い、翌日になると彼の価値観と血圧は平常に戻っていた。

本章で紹介してきたエピソードから大事な教訓を得てくれただろうか。マーケットで利益を上げるのにアインシュタインの発見した高度な公式は必要ない。ただ、規律を守り、自分に自信を持っていなければならない。自分が大変優れたトレーダーだと思っていっても、マーケットはあなたを出し抜いて、その不屈の精神を試してくる。マーケットでの成功物語は、生き残った人たちによって作られるということを忘れないでほしい。

## 第8章 トレーダーへのインタビュー

### Trader Interviews

7章にわたって**ACD**システムについてと、この**ACD**システムがトレーディングのあらゆる時間枠（超短期から数週間、数カ月といった長期まで）に応用できるということを説明してきた。また、このシステムはピットトレードでもネットトレードでも利用できる。しかし、そうなると「実際に実践している人たちはどのように使っているのか」という疑問がわいてくるのではないだろうか。そこで本章では、**ACD**システムをトレード戦略に組み込んで実践しているトレーダーの話を紹介することにした。インタビューに応じてくれたのは私の同僚や私の会社のトレーダーたちで、みんなトレーディングによる収益という面においても、マーケットで生き残ってきたということにおいても成功している人たちである。

# ケーシー——間違ったらすぐ手仕舞い

ケーシーはNYMEX（ニューヨーク商品取引所）で原油先物トレードを始める前、AMEX（アメリカ株式取引所）でオプショントレーダーをしていた。一時は最年少のスペシャリストだった彼は、オプション市場でモトローラ（MOT）やデジタル・イクイップメント（DEC）のマーケットメーカーとして活躍していた。1987年の大暴落が起こったときもケーシーはトレーディングフロアにいた。ブラックマンデーの日のモトローラの終値は52ドルで、翌日は60ドルで寄り付いたが、30分後には30ドルに急落し、しばらくは買い気配がまったく途絶えたという。このような最前線での経験にもかかわらず、原油先物に移ってきたとき、彼はボラティリティが高くて混沌としたビットの環境でトレードする準備ができていなかった。古巣のオプション市場のように秩序正しいスペシャリスト制度が整っていなかったからだ。彼にはマーケットに対する優れた直感は備わっていたが、まったく異なった世界で新しいスキル（ACDシステムを含めて）を学んで計画を立て、実践し、トレーディングを管理していく必要があった。ビットトレーダーに転職した時期の様子とACDシステムがトレーディングにおいてどういう助けになったかを彼は次のように語った。

商品トレードは、オプショントレードとは大変違っていました。オプションのスペシャリストは顧客がだれかは分かっています。注文を送ってくるブローカーはモルガンやメリルなどの大手証券会社の社員で、特定のオプションの価格を聞いてくれば、相手の過去の取引から彼らが増し玉をしているのか、片張りをしようとしているのか、カバードコールやカバードプットをしようとしているのかは想像がつくのです。

商品先物市場ではオープントライアウトのビットに立ちます。ここでは同じブローカーでも15分後には別の顧客の注文の売買をしているなど変動の激しい環境です。原油トレードを始めたころはサヤ取りをしていました。期先限月でトレードをしていて、取引が活発な期近の2限月は無視していました。ある日、サヤ取りのために期先を20枚買ったため、期近を売らなければならなかったのです。このとき私はサヤ取りを成立させることばかりに気をとられていたため、そのときの売り気配値よりもはるかに安い価格を提示してしまいました。するとビットトレーダーのひとりにもすごく嫌な顔をされ、思わずトイレに駆け込んで泣きたくくなりました。

それでもマークは私を信じてくれました。彼は、私が優れたトレーダーだと分かってくれていて、7万5000ドルの損失を出して契約解除されるかと思ったときも応援してくれました。マークに出会う前から、私にはマーケットがどこに向かうのかがいつも分かっていました。トレーディングの本質はそういうことではなく、難しいのは何をすべきで、間違ったときはどう対応し、損失をどう限定するかということです。その意味で、私にとってACDシステムは世界一完璧なシステムと言えます。

メカニカルなシステムだけに頼ってトレードしていても成功できるとは思いません。トレーディングのかなりの部分は感情と直感によるからです。マークとほかのトレーダーとの違いは、徹底した規律と資金管理能力と間違ったときに感情的にならないことで、これらはすべてACDシステムに組み込まれています。マークは、私が負けることを気にしません。多くのトレーダーが正しいことをすることにこだわり、そのことばかりに集中していますが、私の関心事は利益を上げることです。

もし5人のトレーダーが同時に2つの違うポジションを持っているとすると、このうちの4人は勝ちポジションを早々に手仕舞い、負けポジションのほうは勝ちになるまでずっと待つでしょう。反対に、私なら2つのポジションのうちひとつが逆行しているならすぐに損切りします。このときの損失が7万5000ドルだったとしても関係ありません。すぐに損切りして次のトレードに備えるだけです。負けトレードにしがみついていると新しい勝ちトレードが仕掛けられないので、チャンスを無駄にしてしまうからです。

結局、正しいかどうかはどうでもよいことで、最終的に最小のリスクで最大の利益を稼ぐことができればよいのです。もし最初の5つのトレードで5連敗し、次のトレードでまた負けたとしても、どこで損切りするかが分かっているのです。それこそACDシステムのもっとも素晴らしい点です。

またACDシステムは、価格などというものはあつてないに等しいものだということも教えてくれました。1990年の

湾岸戦争のときマークが毎日原油のビットで買っていたのを見て、「原油はもう十分上がっているのになあ」と思っていました。しかし、そのときマーケットが上げるときはどこまでも上がるのだということを教わりました。もちろん反対に下がるときはどこまでも下がります。つまり、そういうときの価格はまったく意味のないものになってしまいうのです。

2000年初めのナスダックのエピソードもお話ししましょう。私はマーケットが暴落するとは感じていましたが、それだけではダメで大事なのはタイミングです。このとき私はナスダック先物を空売りしていて、価格は5000近辺でした。取引開始前にP&Gの収益予想が発表され、S&Pは5ポイントも上がりましたが、これが私には理解できませんでした。ナスダックも約60ポイント上がり、空売りしていた私の利益は約12万ドルも減りました。しかし、私はS&Pをさらに50枚空売りしました。現物株市場が開くとダウ平均は400ポイントくらい下がり、S&Pも30ポイント下げたため私はすぐにS&Pを買い戻したのですが、このとき愚かにもナスダック先物をさらに20枚空売りしました。この時点でナスダックは60ポイント下げていて、含み益は50万ドルか、もしかしたら60万ドルくらいになっていました。しかし、そのあとマーケットは反転して急騰したのです。結局、この日のナスダックは100ポイント上げて引け、私はそれまでに得た利益以上の負けを喫してしまいました。ここでの教訓も、トレーディングに価格などあつてなきがごとのものということです。マーケットが上げているときにはどんどん上がります。マークがいつも言っているように、「マーケットが上げていて、その理由が分からないときは、その理由が判明するまで買いポジションを保持しろ」ということでした。

トレーディングがギャンブルと同じものだと思っているのなら、それはバカげた考えです。トレーディングでは損失を減らし、利益を最大にすることができます。間違ったときに5～8セント失っても、正しいときにその1.5～2.5倍儲ければ、損をすることはなく、そうすれば勝ちの数が増える必要すらないのです。

もうひとつ、トレーディングで大事なのは一貫性で、これもACDシステムのルールに入っています。毎日トレードスタイルをコロコロ変えていては大きな利益を得ることはできません。

私は現在、ACDシステムで自分のアイデアが有効かどうかを確認したり、間違ったときに逃げ出すための損切りポイントをチェックしたりするために使っています。例えば、原油が良さそうだと思っているときにビボットよりも上で引けたら100枚買ってAダウンまでのリスクをとると決めたり、原油が強気だと思っているときに素晴らしいAアップやCアップが付けば、ACDシステムをストップとして使ったりします。ボラティリティが非常に高いマーケットでは、ACDシステムが非常にうまく機能してくれます。

ただ、ACDシステムは単にAアップやAダウンだけではなく、トレーディングにおける哲学そのものだと思っています。多くのトレーダーは買ったあとでマーケットが逆行してもいずれは順行すると信じて祈っていたり、ナンピンをしながらマーケットが順行するのを待ったりしています。私の場合は許容できる損失額は自分で決めますが、どれだけ儲かるかはマーケットに任せています。



# RN——システムを一から学ぶ

ACDシステムを一から学んだRNはMBFが雇った最初のインターンで、当時はまだ大学生だった。このとき、ACDシステムはまだ開発中で、彼の仕事は銀のビットで足元のチャートを手描きすることだった。彼は当時を振り返って、「初めて総合的にチャートを付けた経験から、私にはこのシステムがうまくいくことが分かっていました」と言っている。今日、RNはNYMEXの原油のトレードで、最も有力なローカルズのひとりになっている。RNはACDシステムとピボットの概念を自分用に調整して、毎日何千枚もの原油先物をトレードしている。

私は非常に活発なスキャルパーで取引直後からマーケットに参加するので、その日の強弱が分かる最初の20分間を待つということができません。そこで1分間のオープニングレンジを使っています。原油で基準にするのはノイズの多い当限ではなく2番限のオープニングレンジで、これなら起こっていることがよく分かります。また、AとCの値も通常の8セントと13セントではなく、15セントと20セントを用いています。

私のトレードスタイルでAの値を8～9ポイントにすると損切りにかかる頻度が多すぎてしまうため、もっと適正値を探す必要がありました。そこでAの値を15セントにしてオープニングレンジを1分間にしたら、信じられないほどうまくいくようになりました。

私はACDシステムのシグナルを待ってトレードするわけではありませんが、これを使って自分が正しいかどうかを判断しています。大きなスキャルピングのポジションを建てるかどうか判断したり、1日のスタンスを決めたりするときの参考にしてはいるのです。

例えば、場が始まる前に弱気だと確信していれば取引開始と同時に空売りします。そして、もしマーケットが下落してAダウンを付ければ、ACDシステムが最初に仕掛けたポジションを確認したということでさらに増し玉をしましょう。しかし、もし寄り付きで空売りしてもそのあとAアップを付ければ、意地を張らずに損切りして次に進みます。

私は1日に1000回くらいトレードすることもあり、素早いトレードを繰り返しています。もしオープニングレンジが25.90～26.00ドルで、マーケットが25.74ドルのAダウンを付けたときにすでに空売りしていて25.60ドルまで下げたら、私はおそらく買い戻したあとに上昇を期待して少し買うでしょう。そしてそれが当たって25.74ドルのAダウン近辺まで戻れば、買いポジションを手仕舞って再び空売りします。反対に、もしマーケットが25.60ドルで上昇しなければ、買いポジションをすべて手仕舞って損失が小さいうちに損切りします。

このように、私はACDシステムのA点をスキャルピングのツールとして仕掛けにも手仕舞いにも使っています。ただ、C点はあまり使いません。C点は1日の終わりがごろにならないと付かないことが多く、そのころにはある方向にポジションを建ててしまっているからです。もちろん取引終了が近くなってポジションがマルのときに良いCアップかCダウンが付けば、そのときはもちろん仕掛けます。

また、ピボットレンジもトレードの参考にしてはいます。例えば、マーケットが25.74ドルでAダウンを付け、ピボットレンジがそれよりも20セント下の25.54ドルだとします。もしそのときにピボットレンジ近くの25.58ドルまで下げたとすれば、買い戻して、この近辺でマーケットがどう動くかその動きを注視します。これは、ピボットレンジが支持線として持ち応えるかどうかのポイントになるからです。

私の経験では、ピボットレンジがその日の高値が安値になることが多いように思います。例えば、原油のオープニングレンジが25.15～25.20ドルで、その日のピボットレンジが25.22～25.28とします。マーケットが下落するという何らかの兆候を感じたら、リスクはピボットレンジの上限までの10ティック程度しかないので、すぐに空売りします。これはオープニングレンジがピボットレンジのすぐ下にある低リスクのトレードで、ピボットレンジがこの日の高値になることを期待して売ります。

ピボットレンジの概念は、フロアでトレードするときにも使います。2001年の感謝祭の連休の何日か前にナスダックを空売りしていたとき、ポジションを手仕舞うか保有し続けるかを決めなければならませんでした。ナスダック先物のこの日のピボットレンジは1622近辺で、寄り付きは1615近辺でした。もしこのような成り行きなら、ピボットレ

ンジがこの日の高値になるかもしれないと考え、空売りを続けることにしました。結局これは賢い判断で、予想どおりピボットレンジがその日の高値となり、最後はそれよりも**73.50**ポイントも下で引けました。**ACD**システムとピボットレンジは、私の自信を深めてくれたり、間違っていることを私に教えてくれたりします。

# スキャルパーのスピーディー

スピーディーにとって、トレーディングの2〜3分は永遠と感じるくらいの時間だ。元フロアブローカーで今は天然ガス先物のローカルズであるスピーディーは、トレーダー生活のすべてをNYMEXのフロアで送っている。瞬間的なマーケットのチャンスを利用して秒単位でスキャルピングを行っている彼にとって、ACDシステムは仕掛けと手仕舞いの基準となっている。超短期のトレードスタイルを確立しているスピーディーは、マイクロACD（A点〜D点）を使ってトレードの計画を立てている。

私は超短期のトレードをしているため、ACDシステムをマイクロベースで使っています。少し長めの指標もたくさん知っていますが、それらを自分のトレード計画に組み込もうとは思いません。私が長めのポジションを仕掛けるのは1年にせいぜい1〜2回でたいいはオプション関係のトレードです。ほとんどが短期トレードの私にとって、長期の指標はあまり意味がないのです。長期指標がシグナルを出すまでの間に、もしかしたら数百回もトレードしているかもしれません。

ビットでもネットトレードでもトレードするためには、自分がどのようなトレーダーであるかを知っておく必要があります。私はじつとマーケットを分析するのは嫌いで、自分の強みはビットで起こっていることを瞬時に理解し、瞬時に反応できることだと思っています。私はマーケットが強欲で割高になっているのか、それとも恐怖で割安になっているのかを感じ取ろうといつも努力しています。

それこそが私の技術であり、そのようなトレードで生計を立てています。2つの銘柄の関係を見てそれぞれが適正な価格かどうかを判断したり、大きな流れを見ながら1週間くらいかかるトレードを計画したりするトレーダーもいますが、私は違います。私は毎秒、みんながマーケットにどう反応するかを見極め、みんなよりも4分の1歩先を行くようにしています。

私はACDシステムを確認ツールとして使っています。自分の考えがACDシステムの示唆することと一致すると、とても安心します。自分の考えがすでにあって、それを確認するためにACDシステムを使うのは簡単です。むしろACDシステムが自分の考えと違うことを示唆したときに、ACDシステムをリスク管理ツールとして使うのは私にとって大変難しいです。1週間のうち数回はACDシステムが私の考えていることとは違う方向を示し、結局、最後には私が泣きを見ることになります。頭の中でマーケットが上がると思い込んでいて、実際には良いAダウンを付けたのに手仕舞わないで保有し続けて痛い目に遭ったときにそれに当たります。トレーディングで一番難しいのは、自分が間違っていたことを認めることです。私の場合、あとからACDシステムを基に見返した場合、ここで損切りしておけばよかったと思うことが、ACDシステムで勝ちトレードを確認するのと同じくらいあります。

ACDシステムは単独で使うブラックボックスではなく、ほかの短期指標と合わせて利用できることも素晴らしい点です。私も前週の高値と安値や1分間移動平均線などACDシステムとは関係ないさまざまな指標を使っています。

ACDシステムは自分が使っているシステムを補いながら使うことができるものです。

私はACDシステムの本家とも言えるMBFのトレーダーですが、もしわれわれみんなが同じ使い方をして同じトレードを仕掛けたら、天然ガスのビットにいる20人の損益はまったく同じになるはずですが、しかし、実際にはそうはなりません。われわれはそれぞれが自分の考えを持ち、ビットで言い合いになることもありますが、最終分析にはみんなACDシステムをそれぞれ独自の方法で使っています。私にとっては、トレードのリスク管理に使うのが最良の使い方だと思っています。

# リビ——ペナルティーボックスを避けるトレーダー

NYMEX最大の天然ガス先物トレーダーのリビは、異限月間の価格差を利用して儲けるサヤ取りを主に行っている。彼はACDシステムをサヤ取りの仕掛けや手仕舞いには使っていない。それよりもむしろ、片張りのときに含み損がどんどん増えていくのを防ぐために利用している。

ACDシステムは素晴らしいマネーマネジメントのシステムで、本当はもっと活用したいと思っています。私は問題が生じるとACDシステムの数字を見て（特にCアップとCダウン）、どこで手仕舞うべきかを調べます。

私の場合は90%がサヤ取りなので、毎日膨大な数のトレードを行っています。そのためほかのトレーダーほどACDシステムを使えません。ただ、片張りをしているとき、特にそのポジションが逆行したときはACDシステムでどれくらいまで悪くなるのかを調べます。A点やC点を付けそうなら、命取りになりそうかどうか分かるからです。

例えば、私が買いから入っているときにマーケットが下げてCダウンを付けそうなら、増し玉することはやめようと思いますし、規律を失っていないければ少なくともやめるべきだと分かります。もし本当にCダウンを付けてしまったら逆行していることを実感できますし、そのときマーケットの間違った側にいれば大変なショックでしょう。

ACDシステムは将来マーケットで何が起るかを教えてくれます。これはボートに装備してある突風探知システムのようなもので、これを使えば天気が悪くなるから港に戻ったほうがいいのか、それとも様子を見ていて大丈夫かを判断できます。同じように、ポジションを抱えて迷ったら（特に規律を失ってそうな場合は）、ACDシステムを見ればどれくらいマーケットが逆行しそうなかを教えてくれます。

もし規律を守り、ACDシステムをトレーディングに応用すれば、間違いなく利益が上がるようになると断言できます。失敗するのは規律を失ったときで、これが問題の90%を占めています。また、自分のポジションをどうすればよいか分からないとき、ACDシステムがどう処理すればよいかを教えてくれます。このパズルのカギはすべて規律で、それが守れる人ほどトレードもうまくいきます。

最高のトレーダーはポジションを建てているとき厳しい規律に従って損切りをしますが、これは多くのトレーダーにとって大変難しいことです。自分は上がると思っているのに、指標は下がると示唆している。そして指標に従ったあとに、マーケットが上がるようなことが1回でもあると、そのシステムを信用できなくなります。しかしそういうことを乗り越えてシステムに従っていくほうが最終的な結果は良くなります。

こういうことは私自身の課題でもあります。大きな損失が続いたら、少し休んで規律を回復させる方法を探す必要があります。トレードを一時的に禁止して、冷静さを取り戻させるようにするか、トレードからしばらく離れるべきだと思っています。トレーディングでは、ACDシステムのようなシステムを使うことと規律を守ることがうまくいく一番の秘訣です。

# バーノン——1日のスタンスを知る

商品と株式と通貨をフロアとフロア外の両方でトレードしているバーノンにとって、**ACDシステム**はデイトレードでも長期ポジションでも1日の方針を判断するための価値あるツールとなっている。ほかのトレーダーと同様、バーノンも**ACDシステム**を自分のトレードシステムに組み込んで自分の方針との一致を得るようにしている。

私は**ACDシステム**を使ってその日の方針を決めます。もしAアップを付ければその日は強気で、Aダウンなら弱気です。また、頻度は多くないですがC点が付けば、これは強力な指標です。こうなったときは、間違いなくどんどん仕掛けようと思います。

デイトレードのとき、**ACDシステム**はおおまかな方針を教えてください。Aアップを付けたときは押し目を狙って買っていきますし、Aダウンを付けたときは戻りを狙って売っていきます。この方針は、オープニングレンジを反対サイドに抜けるまで有効です。

長期トレードには別の種類のチャートや指標を使っていますが、**ACDシステム**は仕掛けるのにその日がどういう日かを教えてください。もしAダウンを付ければ、その日は買いません。自分のマーケットに対する思いとは関係なく、1日がどんな日なのか常に掌握しておきたいのです。その日がどんな日か分かるまでトレードは仕掛けません。

もし強気だと思っていても、Aダウンを付けて、さらに次のAダウンを付けるまでに2日かかるかもしれません。しかし、3日目にAアップを付ければ、そのときは買います。

**ACDシステム**のシグナルのなかでも最も利用したいのは1日の後半に出るものです。私がトレードしているマーケットでは遅い時間のシグナルが重要な場面につながるが多いからです。オープニングレンジ（A～D点を決める基準点）の時間枠はさまざま、私は長年**30分**を使ってきましたが、今では**20分**を採用しています。一貫していれば長さは関係ないので、自分に最も合う時間枠を見つけてそれを使い続けてほしいと思います。

# ドープ——ACDを組み込む

原油先物トレーダーのドープは、ビットトレードだけをしていたが、ビットとパソコンを通じてのトレードも併せて行うスタイルに転換しようとしていた。彼は長年かけて彼が**ACD**システム修正版と呼ぶ手法を確立し、オープニングレンジとビボットレンジをデイトレードとポジショントレード両方の指針として使っている。

私は長年**ACD**システムに従ってきました。最初はルールどおりに使っていましたが、年月をかけて自分のトレーディングに合うよう修正していきました。例えば、オープニングレンジの時間枠は**30分**を使っています。ほかのトレーダーは5分や**15分**や**20分**などを使っていると思いますが、少なくとも同時多発テロで原油市場が崩壊するまでは、私にとって最初の**30分**というのが完璧な時間枠でした。

オープニングレンジからは、その日だれがマーケットに参入しようとしているのかが分かります。もしファンドが何かもくろんでいれば彼らは最初の**30分**のうちに動くので、1日の高値や安値がその最初の**30分**に付けることが多いと思っています。そしてこの**30分**間のレンジをブレイクすれば、そのトレンドに乗ります。

例えば、ある日のオープニングレンジの高値が**30**で、安値が**15**とします。マーケットが**30**を上抜けば買います。その日の安値はオープニングレンジですでに付けているということになります。もし反対に、**15**を下抜けば空売りします。

それから、**ACD**システムのビボットレンジも使っています。これは前日のトレードの大部分が行われた値幅を示しています。例えば、この値幅が**25～60**でマーケットが**60**を下回ってれば、その日は値幅いっぱい動くと思えます。つまり、**60**で空売りして**55**で買い戻すようなことはせず、値幅内でもう少し下げるまで待つのです。私はスキャルパーの連中よりも少し長めのトレードをしています。

ビボットレンジとオープニングレンジには別の使い方もあります。もし窓を空けて前日の安値よりも安く寄り付いたあと、オープニングレンジの高値を上抜けば買います。マーケットが前日の値幅まで上昇すればその上昇はそのまま続き、前日のトレードの大部分が行われたビボットレンジまで達すると予想できるからです。

私が**MBF**で特に学んだことのひとつに規律があります。トレーディングは**30%**が技術で、**70%**が規律だと思っています。ときには自分のシステムが3日連続で負けることもあります。そんなときは「こんなシステムはもう使えない」と愚痴を言いたくなります。しかし、それでもずっと使い続けなければいけません。**ACD**システムが重視する点をひとつだけ挙げるとすれば、それは規律です。

# グラニテ——フロア外のトレーダー

グラニテは、エネルギー先物のトレードを取引所の上の階にある事務所でやっている。彼はここならビットに蔓延する感情や雑音や混乱を排除できるという。かつてウォール街の大手企業でエネルギーデスクのトレーダーをしていたグラニテは、ビットは超短期のスキュルピングには完璧な場所だが、システムを使ったデイトレードや数日間のポジショントレードにはビットから離れた事務所のほうが向いていると考えている。彼は自分のトレーディングシステムのなかで、オープニングレンジとピボットレンジを仕掛けとトレード管理の基準点として利用している。

オープニングレンジは、マーケットがこの水準でどう動くかを見極めるための基準になってくれます。例えば、多くのトレーダーが弱気で寄り付きから下げれば、オープニングレンジまで戻したところで大量に買い戻されます。このときもしオープニングレンジを上抜かなければ、再び下げると予想してレンジの上限付近では空売りします。しかし、もしオープニングレンジを上抜けば、悪いニュースでの良い反応という状況かもしれません。この場合は方針を変えて買います。

ピボットレンジもオープニングレンジと同じように使っています。基本的に両方とも私のトレードの基準となっております。

システムトレードは、ビットの外のほうが向いています。ビットでは周りの感情にとらわれてしまい、システムトレードを実行するのが難しいからです。ビットに出るときは、**ACD**システムを使って2〜3セント程度のスキュルピングをします。ビットでは注文の流れやこれからの展開を感じ取ることができますが、ビットでシステムを使うのは人間の摂理に反しているのでは不可能です。ビットでは周りの感情につられてどうしても早めに手仕舞ってしまいます。

私はデイトレードとポジショントレードのほぼすべてをフロア外で行っています。このとき、オープニングレンジの基準点とピボットレンジがポジション管理に役立っています。ときには自分のポジションの近くでデイトレードをしたり、ポジションを守ったりしなければならぬこともあります。そのときもこれらの基準点が助けになっています。

例えば、長期の空売りポジションを建てているときに強含む日があって、良いAアップを付けたとします。そのときは、短期の動きによって自分の長期展望には変化がないとしても、デイトレードでは買って長期の空売りポジションを守るようなことをします。

もう分かったと思うが、インタビューに応じてくれたすべてのトレーダーには2つの共通点がある。

1・彼らはみんなオープニングレンジとピボットレンジを基準点として利用している。みんな通常のトレードシステムとは別に、**ACD**システムを確認のためのツールや、マーケットの動きやセンチメントのバロメーターとして使っている。

2・全員が規律を重視している（2つ目の最も重要な特性）。登場したトレーダーのうち2人はかつて**MBF**で私と共に働いていた人だが、今では数百万ドルの蓄えを持って引退生活を送っている。このうちのひとり、だれよりも詳しく**ACD**システムの裏も表も知っている。もうひとは、私が出会ったなかで最も素早く最も上手なビットトレーダーだった。しかし2人ともまだ潜在能力を残したままトレードを引退してしまったのは、規律を失ったことで感情がコントロールできず、それがやめる直接のきっかけになったからである。短期のスキュルピングでもポジショントレードでも、フロアでもフロア外でも、成功するトレーダーは規律を持って、有利なときに仕掛けることができるだけでなく、何よりも間違ったときには損切りすることを熟知している。ケーシーも言っていたように、大事なものは正しいかどうかではなく、間違ったときにどう行動するかということなのだ。

表A.1 ACDシステム——商品

月の第一営業日——2001年12月3日（月曜日）								
商品	限月	高値	安値	終値	ビボット	±	ビボットレンジ	
原油	1月	2050	1938	2009	1999	5	1994	2004
原油	2月	2073	1965	2039	2026	7	2019	2033
天然ガス	1月	2690	2555	2634	2626	4	2622	2630
天然ガス	2月	2785	2670	2746	2734	6	2728	2740
ガソリン	1月	5670	5390	5602	5554	24	5530	5578
ガソリン	2月	5755	5505	5695	5652	22	5630	5674
灯油	1月	5690	5430	5577	5566	6	5560	5572
灯油	2月	5750	5510	5659	5640	10	5630	5650
S&P	12月	113600	112500	112950	113017	33	112984	113050
ナスダック	12月	159200	156300	156700	157400	350	157050	157750
金	2月	2787	2755	2779	2774	3	2771	2777
銀	3月	4250	4145	4227	4207	10	4197	4217
米国債	3月	10408	10319	10403	10331	1	10330	10400
砂糖	3月	768	751	764	761	2	759	763
コーヒー	3月	4700	4560	4610	4623	7	4616	4630

表A.2 商品——2001年1月の最初の2週間

銘柄	高値	日付	安値	日付	終値	日付	ビボットの下限	ビボットの上限
豪国債3月限	94695	1010103	94485	1010104	94610	1010112	94590	94603.3
トウモロコシ3月限	232	1010102	218.25	1010112	219.25	1010112	221.208	225.125
ココア3月限	870	1010112	752	1010103	860	1010112	811	843.667
CRB指数	23091	1010111	22411	1010103	22954	1010112	22751	22886.3
棉花3月限	6180	1010102	5910	1010105	6112	1010112	6045	6089.67
DAX指数	655694	1010104	617244	1010103	649405	1010112	636469	645093
独国債3月限	10978	1010105	10837	1010112	10850	1010112	10869.2	10907.5
独マルク3月限	4925	1010103	4760	1010103	4867	1010112	4842.5	4858.83
米ドル3月限	11040	1010103	10804	1010103	10932	1010112	10922	10928.7
ユーロ3月限	96150	1010105	92870	1010104	95190	1010112	94510	94963.3
ユーロドル3月限	94810	1010108	94135	1010102	94545	1010112	94472.5	94520.8
コーヒー3月限	6800	1010108	6200	1010109	6500	1010112	6500	6500
ブレント原油3月限	2572	1010105	2390	1010109	2556	1010112	2381	2531
木材3月限	22620	1010103	20960	1010110	21280	1010112	21450	21790
生牛3月限	8025	1010112	7605	1010109	7957	1010112	7815	7909.67
FTSE指数3月限	63035	1010102	60380	1010103	61860	1010112	61707.5	61809.2
英国債3月限	11666	1010103	11465	1010112	11481	1010112	11509.2	11565.5
生豚2月限	5775	1010105	5545	1010111	5670	1010112	5660	5666.67
ナスダック3月限	265000	1010103	210800	1010103	254000	1010112	237900	248633
オレングジュース3月限	8250	1010105	7490	1010104	7660	1010112	7730	7870
ボークベリー3月限	6830	1010102	6377	1010111	6612	1010112	6603.5	6609.17
英ポンド3月限	15100	1010103	14752	1010112	14786	1010112	14832.7	14922.6
原油2月限	3015	1010112	2665	1010102	3005	1010112	2840	2950
金2月限	2738	1010102	2639	1010111	2646	1010112	2660.17	2688.5
銅3月限	8440	1010112	8020	1010103	8415	1010112	8230	8353.33
灯油2月限	8900	1010102	8020	1010109	8421	1010112	8434	8460
ガソリン2月限	9050	1010112	7800	1010102	9008	1010112	8425	8813.67
日本円3月限	8907	1010103	8525	1010112	8533	1010112	8594	8716
天然ガス2月限	9870	1010109	8140	1010103	8472	1010112	8649.67	9005
ブラチナ4月限	6400	1010111	6045	1010102	6331	1010112	6222.5	6294.83
スイスフラン3月限	6304	1010103	6160	1010103	6204	1010112	6213.33	6232
銀3月限	4675	1010112	4535	1010103	4655	1010112	4605	4638.33
S&P3月限	137000	1010103	128750	1010108	133030	1010112	132875	132978
砂糖3月限	1049	1010109	996	1010112	1000	1010112	1007.5	1022.5
大豆3月限	510	1010102	477.25	1010112	482.5	1010112	486.208	493.625
米国債3月限	10620	1010103	10408	1010112	10414	1010112	10423	10514
小麦3月限	294.5	1010111	275	1010102	289	1010112	284.75	287.583



































表A.6 商品市場のトレンドの変化 (2001/12)

日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
2	3 材木 米国債 トウモロコシ ガソリン 灯油クラック	4 金 天然ガス	5 砂糖 生牛	6 S&P 綿花 銀	7 スイスフラン 円 オレンジジュース	8
9	10 豪ドル 灯油 ロンドン軽油 灯油とガソリン のサヤ取り	11 英ポンド 加ドル ブレント原油 ガソリンクラック	12 大豆 銅 ガソリン	13 生豚 原油 天然ガス	14 砂糖 米ドル 灯油クラック	15
16	17 ココア 綿花 小麦 オレンジジュース	18 S&P 米国債 金	19 円 トウモロコシ	20 銀 ボークベリー 灯油	21 加ドル ロンドン軽油 ガソリンクラック	22
23	24 生豚 大豆 灯油とガソリン のサヤ取り	25 豪ドル	26 小麦 オレンジジュース 生牛 米ドル	27 砂糖 ブレント原油	28 灯油クラック 天然ガス 銀 スイスフラン	29
30	31 灯油 原油 円 英ポンド ガソリンクラック S&P					



表A.7 エネルギー株のトレンドの変化（2001/12）

日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
2	3	4	5	6	7	8
	—	EPN	EE	BP	TOT DUK	
9	10	11	12	13	14	15
	XOM	ENE	ETR	RD EPN	SRE	
16	17	18	19	20	21	22
	—	—	DUK EE	—	—	
23	24	25	26	27	28	29
	—	XOM	RD EPG BP	TOT ETR	ENE EPN SRE	
30	31					
	—					



表A.9 エネルギー市場に関する日々の解説（2001/12/12用）

商品	限月	高値	安値	終値	ビボット	±	ビボットレンジ
原油	1月	1840	1792	1808	1813	3	1810 1816
原油	2月	1875	1832	1846	1851	3	1848 1854
天然ガス	1月	2820	2670	2803	2764	19	2745 2783
天然ガス	2月	2875	2750	2868	2831	19	2812 2850
ガソリン	1月	5140	4990	5061	5064	1	5063 5065
ガソリン	2月	5280	5150	5220	5217	2	5215 5219
灯油	1月	5070	4960	4999	5010	5	5005 5015
灯油	2月	5200	5090	5145	5145	0	5145 5145
S&P	12月	115200	113350	113650	114067	208	113859 114275
ナスダック	12月	169700	165300	165550	166850	650	166200 167500

### 天然ガス1月限に対する今日の理論的なアプローチ

昨日、天然ガスのトレーダーが移動平均線の形とダマシのブレイクアウトの可能性について書いた。昨日のほうが高かったこととそのあとの急落で、ACDシステムは混乱したマーケットであることを確認した。

今日は、AGA（米国ガス協会）の発表を控えて慎重策をとり、ポジションは軽めにしておく。発表後は3日ローリングビボットレンジ（2.655～2.675）の下限が今日の重要な支持線となる。

2週間前の11月28日（水曜日）はボラティリティが非常に高かった。その日に1月限が3.200を付けたあと、引けに向かって2.700まで下げた。日々のビボットレンジ（2.93～2.95）の上限が今日の重要な抵抗線となっている。

### 原油1月限に対する今日の理論的なアプローチ

この2～3日間、日々のビボットレンジはマーケットがこの先下げるから日中に空売りすべきだという洞察と基準点を示している。

今日の日々のビボットレンジは18.10～18.16となっている。マーケットが今日の重要な支持線（17.45～17.50）に向かって下げ、18.10よりも下にとどまっていればACDの売りシグナルを確認するかどうか観察する。警戒——過去のデータは、価格が明日の引けまでに17.12に急落すれば、今週末までにトレンドが変わると示唆している。

今週は、今日のカギとなる抵抗線（18.80～18.86）まで下落したため、「寄り付きからの反転」が機能することになるだろう。月曜日はビボットレンジの上限を抜かず価格も下落したが、今日のビボット水準はその月曜日の取引時間から変わっていない。

この情報は、信頼できると考えられる出所の情報をまとめたものだが、その正確さを保証するものではない。われわれは誤字、データ、データ入力などに関する責任を負わないものとする。

株式トレードや先物トレードには重大な損失リスクが伴う。この情報が特定の目的に適合するかどうかについては保証も、明示も、暗示もしない。

過去のパフォーマンスは将来の結果を保証するものではない。印刷された情報に依存したり投資したりする前に、独立したプロの投資顧問の助言を受けるべきである。当社が本書で提案したシナリオとは違うポジションを保有することもあり得る。





表A.11 株のデータ——2001年7月の最初の2週間

銘柄	高値	日付	安値	日付	終値	日付	ビボットの 下限	ビボットの 上限	Aの値	Aア ップ	Aダ ウン
ADBE	47.84	1010702	39.82	1010713	40.37	1010713	41.52	43.83	0.38	48.22	39.44
ADI	46.31	1010702	38.41	1010710	43.04	1010713	42.36	42.81	0.56	46.87	37.85
AIG	87.10	1010703	83.27	1010711	84.51	1010713	84.74	85.19	0.25	87.35	83.02
AMAT	51.13	1010703	42.16	1010711	46.36	1010713	46.46	46.65	0.43	51.56	41.73
AMR	37.94	1010713	35.01	1010706	37.94	1010713	36.48	37.45	0.24	38.18	34.77
AOL	53.30	1010702	47.63	1010711	49.81	1010713	50.03	50.47	0.29	53.59	47.34
AXP	40.06	1010703	36.60	1010711	39.36	1010713	38.33	39.02	0.22	40.28	36.38
BBY	69.22	1010712	64.09	1010711	68.17	1010713	66.66	67.67	0.50	69.72	63.59
CAT	52.69	1010713	48.77	1010710	52.48	1010713	50.73	51.90	0.32	53.01	48.45
CLS	50.50	1010702	39.90	1010711	45.45	1010713	45.20	45.37	0.56	51.06	39.34
CMVT	58.75	1010702	23.50	1010711	26.82	1010713	31.59	41.13	0.78	59.53	22.72
CPQ	15.50	1010705	13.73	1010711	15.22	1010713	14.62	15.02	0.15	15.65	13.58
DAL	45.89	1010712	42.57	1010706	45.70	1010713	44.23	45.21	0.28	46.17	42.29
DUK	42.30	1010711	38.83	1010703	41.36	1010713	40.57	41.10	0.20	42.50	38.63
ENE	51.50	1010706	47.50	1010702	48.78	1010713	49.02	49.50	0.37	51.87	47.13
ENZN	63.30	1010703	51.34	1010712	55.11	1010713	55.85	57.32	0.60	63.90	50.74
GE	50.20	1010702	44.30	1010711	47.45	1010713	47.25	47.38	0.31	50.51	43.99
HWP	29.16	1010702	25.01	1010711	27.98	1010713	27.09	27.68	0.26	29.42	24.75
IBM	115.40	1010702	101.56	1010711	108.53	1010713	108.48	108.51	0.62	116.02	100.94
IP	38.84	1010713	35.21	1010706	38.65	1010713	37.03	38.11	0.18	39.02	35.03
IR	44.70	1010713	40.63	1010702	44.42	1010713	42.67	43.84	0.28	44.98	40.35
JBL	30.15	1010702	23.08	1010711	27.13	1010713	26.62	26.96	0.40	30.55	22.68
INPR	32.85	1010702	24.01	1010711	27.44	1010713	27.77	28.43	0.53	33.38	23.48
KLAC	59.11	1010703	45.45	1010711	50.70	1010713	51.23	52.28	0.60	59.71	44.85
KO	46.14	1010713	44.29	1010711	46.01	1010713	45.22	45.75	0.21	46.35	44.08
LEH	77.00	1010705	68.44	1010711	75.19	1010713	72.72	74.37	0.50	77.50	67.94
LSI	20.50	1010702	17.05	1010711	19.19	1010713	18.78	19.05	0.23	20.73	16.82
MEDI	48.08	1010702	40.78	1010711	43.19	1010713	43.60	44.43	0.58	48.66	40.20
MER	59.85	1010703	51.50	1010711	54.50	1010713	54.89	55.68	0.41	60.26	51.09
MMM	117.50	1010703	109.25	1010702	112.23	1010713	112.61	113.38	0.67	118.17	108.58
MO	49.76	1010702	44.00	1010712	44.99	1010713	45.62	46.88	0.30	50.06	43.70
MRK	65.28	1010705	60.35	1010712	61.50	1010713	61.94	62.82	0.25	65.53	60.10
MSFT	73.82	1010703	64.20	1010711	71.34	1010713	69.01	70.56	0.54	74.36	63.66
NKE	45.99	1010712	40.33	1010710	45.13	1010713	43.16	44.47	0.36	46.35	39.97
NTAP	14.22	1010702	10.25	1010710	11.67	1010713	11.86	12.24	0.22	14.44	10.03
NXTL	17.50	1010702	14.30	1010711	17.02	1010713	15.90	16.65	0.23	17.73	14.07
PMCS	31.99	1010702	23.56	1010710	30.05	1010713	27.77	29.29	0.54	32.53	23.02
PSFT	49.35	1010702	39.75	1010711	43.91	1010713	44.12	44.55	0.54	49.89	39.21
QCOM	67.95	1010713	55.22	1010711	65.58	1010713	61.58	64.25	0.82	68.77	54.40
QLGC	65.67	1010702	46.68	1010711	53.06	1010713	54.10	56.18	0.83	66.50	45.85
SANM	24.00	1010702	19.00	1010711	22.14	1010713	21.50	21.93	0.33	24.33	18.67
SGP	37.63	1010710	34.50	1010712	36.89	1010713	36.07	36.62	0.21	37.84	34.29
SLB	54.65	1010706	48.70	1010711	50.45	1010713	50.86	51.68	0.46	55.11	48.24
SWY	49.70	1010705	40.75	1010712	43.05	1010713	43.78	45.23	0.35	50.05	40.40
TER	37.45	1010703	29.76	1010711	33.76	1010713	33.61	33.71	0.41	37.86	29.35
TLAB	19.35	1010702	14.47	1010711	16.98	1010713	16.91	16.96	0.26	19.61	14.21
UNH	65.99	1010713	61.00	1010705	65.79	1010713	63.50	65.03	0.28	66.27	60.72
VRSN	63.22	1010702	48.65	1010711	54.48	1010713	54.97	55.94	0.84	64.06	47.81
XLNX	42.48	1010702	35.08	1010710	40.90	1010713	38.78	40.19	0.50	42.98	34.58
YHOO	20.87	1010705	15.31	1010711	18.25	1010713	18.09	18.20	0.29	21.16	15.03











1. **トレードで成功するためには、ファンダメンタルズ派のように考え、テクニカル派のようにトレードしろ** ファンダメンタルズ派がどのようにトレードしているかを理解することは必須だが、テクニカルも理解しておく必要がある。それができてようやくトレードをすべきだし、そうしかできないはずだ。
2. **傭兵のようにトレードしろ** われわれの任務は勝ち組のために働くことなので、反対側が優勢になったことを察知したらすぐに姿勢を変えて資本（知力と資金の両方）をそちら側に配備する必要がある。2つの資本のなかでは知力のほうが重要で値打ちもある。
3. **安く買って高く売るのではなく、高く買ってさらに高く売れ** どの価格が安く、どの価格が高いのかは分からない。ただ、われわれにはトレンドを知り、それに従って行動するという控えめだが妥当なチャンスがある。
4. **強気相場では買うかマルしかないし、弱気相場では空売りかマルしかない** これは自明に見えるが、実際には違う。
5. **マーケットでは不合理な状態が予想以上に長く続く** 良き友人のA・ゲーリー・シリング博士はそう語った。賢いトレーダーは非効率性がマーケットを支配することがよくあることを知っている。学者がどう考えようとマーケットがきわめて非効率になることは多々あり、われわれがやむなく手仕舞うと即座に効率性を取り戻す。
6. **最も弱含んでいるマーケットで売り、最も強含んでいるマーケットで買い** 例えて言えば、弱気のときは濡れた紙袋に岩を入れれば簡単に破ける。強気相場では最強の風に乗れば……風がそれ以外の人たちより高い所まで連れて行ってくれる。
7. **コンセンサスに逆らったトレードは早く仕掛けすぎないように我慢する** コンセンサスは、主要な転換点では間違っているかもしれないが、大きな流れの途中では正しいし、正しい時期は長く続く。トレードを仕掛けようとするときは、短気にならず忍耐をもって臨むほうがずっとうまくいく。
8. **上でも下でも窓を空けた初日に仕掛ける**。窓は、激しくて新たな動きを示唆していることが多い。25年間マーケットを観察してきたなかで、「窓」には留意するようになった。ただし24時間トレードの世界になってからは、この重要性は多少薄れつつある（特に為替トレードでは）。それでも窓を空けたときは、特に株式市場では重要な意味を持つことも多い。
9. **トレーディングには周期があり、良いときもあるがたいていは悪い** うまくいっているときは大きく積極的にトレードし、不調のときは小さく控えめにトレードする。良いときは間違えても儲かるときがあるが、悪いときは十分調べたトレードでも失敗する。これはトレーディングの特質であり、受け入れるしかない。
10. **追証は、分析とポジションの建て方が間違っていたというマーケットからの警告** 追証を払うのではなく……損切る。
11. **どんな場合でもけっしてナンピンしない** 絶対にしない。これ以上言うことはなし、ナンピンするのはバカげている。
12. **強気相場や弱気相場が長く続いたあとのアウトサイドリバーサルは重視する** チャートの転換日は、それまでの強気相場や弱気相場が力尽きたというシグナルなので重視する。すぐにポジションを反転しなくても、少なくとも古いトレンドの方向に仕掛けるのはやめる。また、週足の転換日やそれよりまれな月足の転換日はさらに重要で、心して注視してほしい。
13. **テクニカルシステムは単純にしておく** 複雑なシステムは混乱を招き、単純なシステムは正確さを生む。

14. 価格がメジャートレンドに向かって押したり戻したりする標準的な割合は50～62%である 仕掛けられなかったときは辛抱強く押しや戻りを待つ。チャートの注目エリアに枠を描き入れ、そこにどれくらい頻繁に押したり戻したりするかを観察したうえで行動を起こす。
15. トレーディングや投資では、大衆心理を理解するほうが経済を理解するより重要だということを知っておけ 少なくともだいたいにおいてはそうだ。
16. 最初のポジションは、強気相場でも弱気相場でも逆行したあと、順行したときに仕掛ける そして、最初の増し玉も強含んでマーケットがトレンドの継続を示唆したときに行う。ただ、それ以降の増し玉は押したり戻したりしたときに行う。
17. 弱気相場は強気相場よりも激しい 押しや戻りにも同じことが言える。
18. 勝ちトレードには忍耐をもって臨み、負けトレードにはまったく我慢しない
19. マーケットは参加者全員の知識と知恵の総計だということを理解し、マーケットの知恵にはけっして逆らわない このことを知るだけでもかなり学んだことになる。
20. 最後に、すべてのルールは破られるためにある カギとなるのは、いつ、どれくらいまれにこのルールを思い出すかだ。
- 

許可を得て『ザ・ガートマン・レター』（ニュースレター）から転載











# 用語解説

**2方向スイングエリア（Two-way swing area）** 重要な支持線や抵抗線になる価格水準。2方向スイングエリアは、窓を空けてそれまでの重要な支持線を下回ったり、それまでの重要な抵抗線を上回ったりしたときにできる（第6章のナスダック総合指数のシナリオ参照）。

**3日間ローリングピボット（Three-day rolling pivot）** 数日間から長ければ数週間という中期的なトレード用のツールで、その名のとおり過去3日間の高値、安値、終値を使って算出する（「ピボットレンジ」参照）。

**ACDオープニングレンジ（ACD opening range）** 取引開始から一定時間内の価格。ACDシステムの基準点を算出するために不可欠で、その日の基準となる価格帯として取引終了まで使われる。

**ACDシステム（ACD system）** 本書の著者であるマーク・B・フィッシャーが開発したトレードシステムで、ほぼすべての商品、株式、通貨に適用できる。

**ACDシステムのダマシのトレード（System-failure trade）** このトレードはマーケットがちゃぶついて方向感がないときに適している。このような状況ではA点やC点を付ける可能性は低く、反転して損切りに達することが多い。ACDシステムのダマシのトレードはこれらの水準でダマシになったことを利用するもので、ピボット移動平均線が混乱しているとき（「混乱したマーケット」参照）に最もうまくいく。

**ACD理論（ACD methodology）** トレーダーに低リスク高リワードのトレードシナリオを提供する理論的な方法。マクロ、ミクロ両方の時間枠に適用できる。

**A アップ（A up）** オープニングレンジから対象の株や商品のAの値（「Aの値」参照）のティック分高い価格水準。買いを仕掛ける水準となる。

**A ダウン（A down）** オープニングレンジから対象の株や商品のAの値（「Aの値」参照）のティック分低い価格水準。空売りを仕掛ける水準となる。

**Aの値（A value）** A アップやA ダウンを決めるためのティック数。Aの値は商品や株式によって違う。

**B 点（Point B）** 姿勢が中立に変わる価格。A アップやA ダウンを付けたら、損切りを置くのはB点となる。B点は、A アップのときはオープニングレンジの下限、A ダウンのときはオープニングレンジの上限になる。

**C アップ（C up）** オープニングレンジの上限から対象の株や商品のCの値（「Cの値」参照）のティック分高い価格水準。買いを仕掛ける水準となる。C アップはその前にA ダウン（「A ダウン」参照）が確認されたあとにしか付かない。

**C ダウン（C down）** オープニングレンジの下限から対象の株や商品のCの値（「Cの値」参照）のティック分低い価格水準。空売りを仕掛ける水準となる。C ダウンはその前にA アップ（「A アップ」参照）が確認されたあとにしか付かない。

**Cの値（C values）** C アップやCダウンを決めるためのティック数。Cの値は商品や株式によって違う。商品の場合はCの値とAの値（「Aの値」参照）が違うが、株式の場合は同じ銘柄ならAとCの値は同じ。

**D点（Point D）** 姿勢が中立に変わる価格で、C点が付いたら損切りを置く場所。D点が付くと、多くのトレーダーはその日はもうトレードをやめようと思うほど十分痛い目に遭っている。

**アイランドリバーサル（Island Reversal Formation）** 突出高や突出安があり、上方に窓を開けた翌日に下方に窓を空ける（またはその逆）があると起こる。

**アウトサイドリバーサル週（Outside reversal week）** このACDシステムのお膳立ては、現在のトレード週と前週の関係を検証する。エンロンや1929年と1933年のダウ平均チャートの例で見たように（第6章）、このシナリオは主要な反転エリアで低リスクの基準点を示してくれる。

**頭にきたトレード（Mad as hell [MAH] trade）** ACDシステムの「頭にきてこれ以上我慢できないトレード」は、それまでのトレンドに抵抗し続けてきたトレーダーのイラ立ちが頂点に達し、いずれ降伏する状態を利用するトレードシナリオで、連休直後などに起こることが多い。トレーダーたちは休みの間に損失のことでやきもきした揚げ句、次の取引開始直後にすぐに手仕舞おうと決める。

**移動平均線（Moving Average）** 従来は終値で計算するが、ACDシステムではあまり意味のない終値ではなくピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）を使っている。

**移動平均線ダイバージェンストレード（Moving average divergence [MAD] trade）** マーケットの方向性にかかわる極端な動きを利用するテクニック。移動平均線ダイバージェンストレードはピボット移動平均線が混乱しているとき（方向が上、下、横ばいとばらばらになっている）が最適で、このようなときはトレンドがすぐに形成される可能性は低い。また、MADシナリオには明確な基準点があることも重要。さらに、仕掛けるときはマーケットの状況に応じて良いA点か付けることを失敗したA点、または良いC点か付けることを失敗したC点を確認する。理想的な移動平均線ダイバージェンストレードは、アイランドリバーサル（「アイランドリバーサル」参照）の概念が組み込まれている。

**移動平均線へのダマシのトレード（Moving average fake-out [MAF] trade）** ACDシステムのピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）を使ったトレード。すべてのピボット移動平均線の傾きが明らかに同じ方向を向いていなければならない。ピボット移動平均線の傾きの方向が大きく変わったあと、マーケットでは押しや戻りが始まり、最短期間のピボット移動平均線の上限か下限をブレイクする。ただ、この押しや戻りはそれ以外のピボット移動平均線をブレイクするには至らず、いずれは跳ね返って下のピボット移動平均線の傾きに戻る。この状態は、それまでのトレンドの方向に仕掛けるための明確な基準点を示してくれる。

**遅い時間帯でのC点ピボットトレード（Late-day Point C pivot trade）** ACDシステムトレードのなかでもロールスロイス級のシナリオで、成功率の高さと低リスクから非常に魅力的なお膳立て。1日の遅い時間に起こって投機家たちを追い詰め、取引終了までに手仕舞わなければならないと思わせるのが最もうまくいくパターン。

**カジノバスの乗客（Bus people）** マーケットにおいて未熟で情報を持たない初心者の中で、彼らの投資行動はほぼ百パーセント間違っている。

「ガートマンのバカバカしいほど単純な**20のトレードルール**」 ("**Gartman's 20 Ridiculously Simple Rules of Trading**") ガートマン・レーターを執筆しているデニス・ガートマンがすべてのトレーダーに贈る助言と名言（付録参照）。

**ローリングピボットレンジ（Rolling Pivot Range）** 通常3～6立会日にわたって仕掛けと手仕舞いの基準点となるレンジ。**ACDシステム**ではローリングピボットレンジを勝ちトレードのトレイリングストップに使っている。また、負けトレードから素早く逃げ出すための基準点にもなる。素晴らしい機能のひとつは勝ちトレードが負けトレードに変わるのを阻止してくれること。

**傾き（Slope）** ピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）を使うときには、これらの線の傾きの変化が重要。傾きの変化は、マーケット自体の変化率を測定している。

**基準点（Point of reference）** **ACDシステム**の土台となる概念で、間違ったときに手仕舞うところ。**ACDシステム**はトレーディングのリスクを最小限に抑えるために基準となる水準を示してくれる。

**窓のピボット（Pivot on gap）** ピボットレンジよりも上か下に窓を空けて寄り付き、それ以降一度もピボットレンジ内に行かなければ、このお膳立てが完成する。このときのピボットは、それ以降の重要な支持線や抵抗線になる。

**恐怖と強欲（Fear and greed）** トレーダーが成功するためのカギとなる要素で、これらを正しい組み合わせで持っていなければならない。恐怖とは、自分が参入しているマーケットに対する健全な敬意を意味している。ただ、トレーダーには勝ちトレードを推し進めてチャンスを最大限生かすための欲望も必要。

**規律（Discipline）** この概念の重要性はいくら強調しても足りない。自分を抑制する意欲がなければ、**ACDシステム**の概念もアイデアも手法も助けにはならない（第7章 **ACD版「ウソのような本当の話」**参照）。

**混乱したマーケット（Confused market）** 混乱したマーケットは、さまざまな時間枠のピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）の傾きがバラバラで、上向いたり、下向いたり、横ばいだったりしているとき起こる。

**時間の要素（Time factor）** トレーディングでは、価格よりも時間のほうが重要。良いAアップや良いAダウンを付けたかどうかの判断やどの価格に達したかよりも、その水準にどれだけの時間とどまったかのほうが重要。成功しないトレーダーは仕掛けたり手仕舞ったりするときに価格ばかりを気にして時間に十分な注意を払っていないことが多い。

**重要な時間枠（Significant time frames）** 短期のスクアルパーは長期の指標に注意する必要はないし、その反対も言える。成功するためには、トレーダーは自分のトレーディングスタイルに最適な指標を選び、それを一貫して使っていく必要がある。例えば、長期トレーダーならば1年間の最初の2週間の指標（図2.5の天然ガスの例参照）を重視することはあっても、短期トレーダーはまったく使わない。

**狭いピボットレンジ（Small pivot ranges）** 値幅は通常の大きさでもピボットレンジが非常に狭いとき、翌立会日は激しい展開になることが多い。

**センチメントのダイバージェンス（Sentiment divergence）** 価格とトレーダーたちのセンチメントの間で起こる

ダイバージェンスを利用したACDシステムのお膳立て。このトレードは、最近の価格の動きを信じないトレーダーや最近の値動きに対して向かっているトレーダーたちを探す。そして、このお膳立ては、もしマーケットがトレーダーの予想に反する方向に窓を空ければ、トレーダーに警告を発することにもなり、その後起こる不可避でパニック的な手仕舞いを利用する。

中立のマーケット（**Neutral market**）　さまざまな時間枠のピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）がすべて平行で横ばいのとき。このようなとき、ACDシステムでは一步下がってブレイクアウトを待つようにする。

次！（**Next!**）　この概念は、仕掛けたらすぐに利が乗るべきという前提に基づいている。ACDシステムは、負けポジションが勝ちポジションに変わるまでマーケットが課してくる感情的な苦痛や金銭的な痛みに耐えたりしなければ成功できないという「痛みなくして得るものなし」の考えには異議がある。仕掛けてから短時間でマーケットが望む方向に動かなければ、「次！」の概念ですぐに手仕舞って次のトレードに移る。

付けることに失敗したA点（**Failed Point A**）　次のいずれかのシナリオで起こる——①価格がA点に近づくがそこまで達しないで反転してオープニングレンジに戻る、②価格はA点に近づくか超えても、その水準にオープニングレンジの時間枠の半分の長さ以上とどまることができず反転してオープニングレンジに戻る。

付けることに失敗したC点（**Failed C**）　付けることに失敗したC点のお膳立ては、次のいずれかのシナリオで起こる——①価格がC点に近づくが達しないで反転してオープニングレンジに戻る、②価格はC点に近づくか超えても、その水準にオープニングレンジの時間枠の半分の長さ以上とどまることができず反転してオープニングレンジに戻る。

強気の時期のマーケット（**Bullish phase of the market**）　強気の時期（マーケットが着実に上げているとき）には、さまざまな時間枠のピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）の傾きがすべて上向きになっている。

手巻き寿司（**Sushi roll**）　ACDシステムでは、マーケットの方向が変わることを早期に知らせる指標を手巻き寿司と呼んでいる。手巻き寿司は、連続した5本の日足（短期トレードなら5本の10分足）を使い、直近の5本とその前の5本を比較してマーケットの方向が変わるかどうかを判断する。

統計的優位性（**Statistically significant**）　ACDシステムは、オープニングレンジが統計的優位であるという前提に立っている。素人の言葉で言えば、取引時間のなかでオープニングレンジはそれ以外の5分間や10分間とは違うということを意味している。むしろ、オープニングレンジは20%の確率でその日の高値や安値を付けることが多く（ボラティリティの高い日の場合）、立会日のなかで統計的優位性のある部分と言える。この概念は、ランダムウォーク理論（「ランダムウォーク理論」参照）にまっこうから反論している。

トレンドの転換（**Change in trend**）　ACDツールは独自のコンピューター処理を使ったパターン認識技術によって、長期のメジャートrendやそれ以外のトレンドが統計的に持続する平均期間を割り出す。さまざまなパターン認識の研究によって、ACDシステムのトレンドの変化を示す指標は向こう数週間にトレンドが転換する可能性があるポイントを予想する。統計分析は、主要な商品と株式の過去15年分の価格データを基にしている。

トレンドリバーサルトレード（**Trend reversal trade**）　マーケットが窓を開けて高値や安値を更新したあと、逆の方向でAアップかAダウンを付け、そのあとCアップやCダウンを付けることに失敗してからオープニングレンジまで戻れば、付けることに失敗したCアップやCダウンを利用して大きな反転をとらえるチャンスを探す。

**ナンバーライン値 (Number line)** 主な目的はこれから発展する可能性があるトレンドを探ること。トレンドは、通常マクロACD (「マクロACD」参照) の過去30立会日の合計が0から-9や+9になったとき起こり、その水準を2立会日連続して維持すれば重要な意味があるとみなされる。

**反転トレード (Reversal trade)** 過去2〜3年において明らかに最高のトレードシステム。ビットで叫ぶトレードでも画面でのトレードでも使える。これはほかの本やトレード関係の出版物に載っている反転トレードとは違う。

ACD反転トレードはダマシのパターンを探して大衆がパニックを起こす前に仕掛け、そのあとの展開を利用して利益を得る。

**日々のピボットレンジ (Daily pivot range)** 前立会日の高値、安値、終値に基づいて計算したレンジ。ACDシステムではこの価格レンジを前立会日の身の部分として認識している。

**日々のピボットレンジの公式 (Daily pivot range formula)** ACDシステムを使うときに必要な公式。

$(\text{高値} + \text{安値} + \text{終値}) \div 3 = \text{日々のピボット価格1}$

$(\text{高値} + \text{安値}) \div 2 = \text{日々のピボット価格2}$

日々のピボット価格1 - 日々のピボット価格2 = 日々のピボット差

$(\text{日々のピボット価格}) \pm (\text{ピボット差}) = \text{日々のピボットレンジ}$

**ピボットレンジ内の届かなかったA点 (Failed A against/within the pivot)** もしピボットレンジ (「ピボットレンジ」参照) が十分強力な支持線か抵抗線となってA点の近くでマーケットを止めることができれば、その結果がピボットレンジ内の届かなかったA点となる。例えば、ピボットレンジ内の届かなかったAアップはそのエリアに抵抗線があることの確認となり、その水準で空売りすれば成功する確率は高まる。反対に、ピボットレンジ内の届かなかったAダウンはそこに支持線があることを確認し、その水準で買えば成功する確率が高まる。

**ピボットレンジに対して付けることを失敗したC点 (Failed C against the pivot)** 別名「信用できないトレード」で、通常はボラティリティが非常に高いときに起こる。C点で姿勢が変わりそうになるがそのままピボットレンジ (前日の身の部分) に突入し、このエリアで輪ゴムのように跳ね返ってオープニングレンジに戻って付けることを失敗したC点は明確な仕掛けポイントになる。

**ピボットレンジをブレイクしたAダウン (Point A through the pivot)** もしマーケットがA点 (アップでもダウンでも) と日々のピボットレンジ (「日々のピボットレンジ」参照) の両方をブレイクすれば、A点が確認された方向に低リスクで仕掛けることができる。このときのリスクのとり方は、B点ではなくそれより近い日々のピボットレンジの反対側でよい。

**ピボットレンジをブレイクしたCダウン (Point C through the pivot)** マーケットがC点 (アップでもダウンでも) と日々のピボットレンジ (「日々のピボットレンジ」参照) の両方をブレイクすれば、C点が確認された方向に低リスクで仕掛けることができる。このときのリスクのとり方は、D点ではなくそれより近い日々のピボットレンジの反対側でよい。

**ピボット移動平均線 (Pivot moving average)** 終値ではなくピボットを使って算出した移動平均線。これは出来高のほとんどが売買された価格帯を網羅している。

**ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値（Pivot first hour highs and lows）** このお膳立てでは、日々のピボットレンジ内に最初の1時間の高値や安値があるかどうかを見る。もしあれば、そのあとAアップかAダウンを付けるかによって日中の姿勢を確認し、優れた低リスクの仕掛けポイントを示してくれる。

**プラス日（Plus day）** ACDシステムではプラス日を次の公式で定義している。

「オープニングレンジ<ピボットレンジ<終値」は「プラス日」

**ボラティリティ（Volatility）** 一定期間のマーケットの動きを測定した値。出来高は多くても日中に動きがなければ、ACDシステムを適用しても意味がない。

**枚数や株数は最大にしてリスクは最小にする（Maximize size, minimize risk）** 成功するトレード戦略の大切な要素。ACDシステムはこの概念を応用して、オープニングレンジやピボットレンジなどの低リスクエリアを使いトレードシナリオを探す。

**マイナス日（Minus day）** ACDシステムではマイナス日を次の公式で定義している。

「オープニングレンジ>ピボットレンジ>終値」は「マイナス日」

**マクロACD（Macro ACD）** ACDシステムは、短期のデイトレードやスキャルパーだけでなく、長期トレードにも応用できる。プラス日、マイナス日、ナンバーライン値、トレンドの変化、ローリングピボットレンジ、1年の最初の2週間、ピボット移動平均線の傾きなどACDシステムの指標を利用するトレーダーは、それぞれのマーケットでマクロのスタンスを導入している。

**ミクロACD（Micro ACD）** ACDシステムは、フロアトレーダーやデイトレーダーの超短期トレードにも効果的に使える。重要要素としてA点、C点、オープニングレンジ、日々のピボットレンジ、ピボットレンジ内における最初の1時間の高値と安値、B点、D点などがある。

**モメンタム（Momentum）** マクロACDの指標で、長期トレードを手仕舞う時期を見極める助けになるツール。ACDシステムにおいてモメンタムは特定期間の勝者と敗者を明確に示すために使われ、今日の終値と8日前の終値を比較して買いと売りのどちらが優勢かを判断する。

**良いニュースでの悪い反応（Good news/bad action）** トレーダーがACDシステムとマーケット心理を組み合わせる使える典型的なシナリオ。このお膳立てでは新しいファンダメンタルズの展開に基づいた方向性が予想されることが条件となる。しかし、そのうえで大部分のトレーダーには理解できない理由によってマーケットがニュースから理論的に予想される方向には反応しないケース。

**弱気の時期のマーケット（Bearish phase of the market）** 弱気の時期（マーケットが着実に下げているとき）には、さまざまな時間枠のピボット移動平均線（「ピボット移動平均線」参照）の傾きがすべて下向きになっている。

**ランダムウォーク理論（Random walk theory）** マーケットの動きはランダムで、まったく予想ができないとする理論。さらに、長期間で見ればマーケットのパフォーマンスを上回ることにはだれにもできないともしている。私は、ACDシステムがランダムウォーク理論に対する直接的な反証にあると思っている（「ACD理論」と「統計的優位性」参照）。

**流動性（Liquidity）** 買い気配値や売り気配値の差が十分小さくて、両サイドに適度な出来高があり、大きなスリッ

ページなしに仕掛けたり手仕舞ったりできること。**ACDシステム**では、特定の水準かその近くで仕掛けたり手仕舞ったりするため、十分な流動性があるマーケットで使うことが条件になっている。例えば、プラチナ先物は通常5枚でトレードしているトレーダーにとって十分な流動性があるが、**500枚単位**のスキヤルピングをしているトレーダーにとって市場としては「小さすぎる」。

## ■著者紹介

マーク・B・フィッシャー（Mark B. Fisher）

独立したトレーダーで、**NYMEX**最大の先物取次業者である**MBF**クリアリング・コープの創設者。フィッシャーは、彼が考案した**ACDシステム**というトレード手法を**5000人以上**の人たちに教えてきた。このなかには、トップヘッジファンドであるチューダー・インベストメンツに所属するトレーダーも多く含まれている。また、夏休みには**NYMEX**でインターンプログラムを主催し、さまざまな経歴の見習いトレーダーや大学生を受け入れている。フィッシャーは銀先物ビットで最年少のトレーダーになった**21歳**からトレードを続けている。ペンシルベニア大学ウォートン校を最優等で卒業、同大学院で金融と会計の修士号を修得。

## ■監修者紹介

長尾慎太郎（ながお・しんたろう）

東京大学工学部原子力工学科卒。日米の銀行、投資顧問会社、ヘッジファンドなどを経て、現在は大手運用会社勤務。訳書に『魔術師リンダ・ラリーの短期売買入門』『タートルズの秘密』『新マーケットの魔術師』『マーケットの魔術師【株式編】』（いずれもパンローリング、共訳）、監修に『ゲイリー・スミスの短期売買入門』『バーンスタインのデイトレード入門』『究極のトレーディングガイド』『マーケットのテクニカル秘録』『高勝率トレード学のススメ』『フルタイムトレーダー完全マニュアル』『新版 魔術師たちの心理学』『トレーディングエッジ入門』『スイングトレードの法則』『エリオット波動入門』『EVトレーダー』（いずれもパンローリング）など、多数。

## ■訳者紹介

井田京子（いだ・きょうこ）

翻訳者。主な訳書に『ワイルダーのテクニカル分析入門』『トゥモローズゴールド』『ヘッジファンドの売買技術』『投資家のためのリスクマネジメント』『トレーダーの心理学』『スペランデオのトレード実践講座』『投資苑3スタディガイド』『マーケットの魔術師【オーストラリア編】』『トレーディングエッジ入門』『デイリートレード入門』『千年投資の公理』『EVトレーダー』（いずれもパンローリング）などがある。

書籍発行日 2009年12月2日

電子版発行日 2013年8月1日

---

## ロジカルトレーダー

——オープンレンジブレイクアウト戦略の基本と応用

著 者 マーク・B・フィッシャー

監修者 長尾慎太郎

訳 者 井田京子

発行者 後藤康徳

発行所 パンローリング株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-9-18-6F

TEL 03-5386-7391 FAX 03-5386-7393

<http://www.panrolling.com/>

E-mail [info@panrolling.com](mailto:info@panrolling.com)

本書の全部、または一部を複写・複製・転載、および磁気・光記録媒体に入力することなどは、著作権法上の例外を除き禁じられています。

---

本文 (C)Kyoko Ida/図表 (C) PanRolling 2009 Printed in Japan

The Logical Trader : Applying a Method to the Madness

Copyright © 2002, Mark B. Fisher

All rights reserved

Japanese translation published by arrangement with John Wiley & Sons

International Rights, Inc.